評議員
文學博士 萩野由之
文學博士 黒板勝美
文學博士 松本愛重
文學士 笹川臨風
文學士 菊池謙二郎
文學博士 三宅米吉
（イロハ順）

黒川真道編

國史叢書

朝鮮征伐記 一

國史研究會藏版

解題

朝鮮征伐記　十三卷

本書は豐臣秀吉が、朝鮮征伐の始末を詳細に記したるものなり。

内容は本朝近代の兵亂の概略より筆を起し、明智光秀が織田信長を弑し、秀吉之れを討伐し、遂に兵馬の權を掌握し、本題に入りては文祿元年朝鮮征伐の軍を起し、兵船の準備、軍勢の備定、諸軍の招集、軍勢の渡海、釜山、登萊、慶州、忠州等の合戰、都攻め、國王都落ち、兩王子生擒、平壤合戰、明使來朝、結局慶長三年總軍引揚げに至るまでの筋道を記し、猶其の間に於ける、大政所の病氣、近衞信輔の名護屋來著、大友・波田の改易、瀨川釆女正の妻の消息、秀吉吉野の花見、同高野山參詣、京・伏見の大地震、大佛鑄造、秀吉薨去等の出來事をも併せて記載せり。

本書卷一に作者大關定祐の寛文五年の自序を揭げたれば、編纂時代は知らるべく、また卷十三の卷尾には、作者が本書編纂の動機を記し、三十一歲の時秀吉の廟安國社に參詣せし時、此の時はや時移り世變りて、社殿荒廢、神樂殿・拜殿の如きは既に傾きつゝありて、修繕するものなし、これを觀たる作者感慨止み難く、秀吉が大勳を建てたる事蹟を末世に知らしめ、且は其の恩化を尊ばしめむとて、本書編纂を企てたるなりと記されたり。

作者大關定祐は、上杉家の遺臣にして、曾祖は宇佐美駿河守といひ、祖父は宇佐美民部少輔といふ、共に世に知られたる武士なり。定祐は軍學に達し、又文筆を克くす。本書の外、川中島合戰辨論を著す。同書は予が別に編纂せる越後史集天の卷に採收す。惜むらくは傳記詳ならず。

本書同名異本あれば注意すべし。そは同名なる堀正意の九卷本と混ずればなり。堀正意の著せる朝鮮征伐記は、萬治二年の出版に依り、世に流布せられたり。大關氏の朝鮮征伐記は、寫本にて傳はれるを以て、世に稀なるものなり。されば予

が亡父眞頼本書の奥に記して云、

此の書全部十三卷朝鮮征伐記と題す、大閤定祐の所撰なり、是より先堀正意の所撰の朝鮮征伐記あり、全部九卷板本なり、名同じくして物異なり、因て是を大閤本と云ひ、彼を堀本と云ひて以て別つ。　黒川眞頼

と記して、注意せられたり。

本書黒川藏古寫本を以て採收す。

大正五年十二月

黒川眞道識

例言

一、原本十三卷なるも、本編には九卷迄を收め、十卷以下は之を後編に收む。

一、語尾を補うて、通讀の平易を計れることと前例の如しと雖も、特徵の文字と認むべきものは、原本の儘として改竄せず。

目次

朝鮮征伐記一

序 ……… 一

第一 ……… 三

本朝近代兵亂　明智合戰并秀吉公將軍に任ぜらる　北條氏政家傳并小田原籠城附朝鮮の三使來朝　奥州一揆蜂起佐沼城を攻む附蒲生氏鄉後詰一揆退治并一揆二度蜂起秀次家康御下向奥州靜謐　朝鮮陣起并肥前國名護屋城普請

第二 ……… 五三

朝鮮發向兵船仰付けらる并海陸御軍法　朝鮮進發軍勢備定　朝鮮國由來朝鮮人濫觴　秀吉公書翰を琉球國に贈る　朝鮮國御先駈の軍勢京都進發

秀吉公京都御進發幷嚴島御參詣附阿彌陀寺御一見

第三……………………………………八三

諸軍勢名護屋に集る　日本勢渡海朝鮮に攻入る幷釜山浦合戰　小西行長釜山浦登萊兩城を攻落す　宇喜多秀家拔駈け小西を助けらるゝ幷加藤清正熊川に著く　加藤清正慶州城を攻落す　黑田長政金保稷山城を攻取る　小西行長忠州城を攻落す　李昖皇常朝鮮都落　日本軍勢朝鮮の都に攻入る

第四……………………………………一三〇

加藤主計頭清正朝鮮兩王子を擒にす　加藤清正兀良哈に攻入る附兀良哈都燒拂　清正征東使伯寧將軍を擒にす附清正蝗衆に到り打入る人數　黑田長政先勢狼川軍　日本勢重ねて朝鮮に入る附伊達政宗船軍幷小早川隆景晉州合戰

第五……………………………………一九一

小西行長書翰を朝鮮王に贈る　朝鮮所々軍幷平壤安定館合戰史遊擊手討死　京都大政所殿御病惱に就いて秀吉公御上洛　秀吉公御船狙瀨に於て沈水幷

明石與次兵衛誅さる　將軍再び名護屋御下向　稷山水源所々軍并中川右衛門大夫秀政討死　小西行長と沈惟敬對面附大明日本和談扱之起　大明加勢李提督朝鮮に入る

第六……………………………………………二三七

將軍名護屋に於て御越年并秀吉公御能稽古附角之坊　水源稷山合戰　小西行長大明の提督李如松と合戰　小西行長敗軍　碧蹄館軍提督李如松敗軍　備前秀家名護屋使節　安南府將軍日本勢敗軍　近衞信輔公名護屋御見舞

第七……………………………………………二八八

加藤清正大明使勅對面　兀良哈人朝鮮人橘州城攻附加藤清正後卷　晉州城合戰日本勢敗軍　傳奏館合戰　安南府城加藤主計頭攻落并廉貴討死　大明日本和談　日本諸軍勢都表陣拂　淺野彈正黑田如水朝鮮渡海　熊谷内藏助水野理左衞門朝鮮渡海　大明兩使名護屋著船　秀吉公明使御對面附明使名護浦詩賦并御船遊　明使歸帆　豐後大友并波田等御改易　朝鮮城郭

日本勢之を守る
第八……………………………………三六
朝鮮兩王子書翰を加藤淸正に賜ふ　瀨川采女正妻女艶書　晉州落城丼牧使王僧璘討死　閑山島船軍丼來島出雲守通泰討死　大明加勢諸大將王城を守護す　將軍名護屋に於て瓜畑御遊覽附提督李如松大明へ歸る
第九……………………………………四〇八
將軍秀吉公朝鮮在陣中御書を給ふ附薩摩國梅北謀叛　梅花宮内左衞門最後丼薩州勢敗軍　將軍御歸洛附諸大名上洛　安康府合戰　日本の使小西如安大明禁中に入りて筆談　伏見城取立御普請　將軍秀吉公吉野の花御遊覽美濃部四郎三郎山城小才次朝鮮渡海

目次終

朝鮮征伐記

序

夫明君舍近而取遠。故下盡力全功。是匪然知大器者、安能取遠乎。魯論所謂以知人、爲始終意、止哉。君主之樹功也、要不外此。漢祖之於子房也、玄德之於孔明也、豈非賢之識賢者乎。信長以殊絕之眼、而拔秀吉於奴隸之中、雖同比於古賢、未爲之愧焉。秀吉屢鑛臺、升挾萬乘、獨步于古今、盈溢於異域之功、除秀吉而爲亦誰乎。歷觀近代傳記著述也、惜乎彼之成功、衆諸將士之戰忠、或蹉跎于前後、或漏失於楮上、舊所某行之記錄、卒多刪略、豈可不慨乎。僕（定賴）不慚陋質、竊悲秀吉公之寬大奇策諸弗彰、而澤手稽顙、恭以錄雞林征討之一端焉。蓋令後世尙公之大才、欲使且知德澤於當時而益於蒸民耳。含氣之類、一關公之大勳者、魏乎後來之人主。武將、不可不尊。方今僕（定賴）嘗憚精竭慮、冀摸擬將吏士卒之戰功、且其一二六而未得全備也。然晦庵之智才、而未免闕疑於楚辭。矧其餘者乎。遂不憚誹、以起毫端。是咸据君子之嘲而已。口寬文二巳八月日、大關左助藤原（定賴）書于雞助齋。

朝鮮征伐記第一

本朝近代兵亂

保元平治承久の亂

夫久堅の天開け、荒壊(あらがね)の地、始りてより爾來、朝廷の政は、正木のかつら絶えず、良臣の勤は、松の葉の散失せざるが如し。文武竝び立ちて、四海の波靜かなりしかば、萬民、始祖の業を樂めり、然るに中頃、後白河院御治世の初より、本朝の綱紀、大に亂れ、兵革續き起り、保元に崇德院讃州に遷幸、平治に信賴・義朝、元曆に義仲・宗盛、承久に隱岐院。其以後、正慶年中に、北條一類滅亡し、相續いで新田・足利、天下を爭ひ、終に南朝・北朝と別れ立ち、兵亂止む事なし。至若(しかのみならず)、明德に、山名氏淸謀叛、應永に大内義弘叛逆、永享年中に、鎌倉持氏生害、嘉吉に赤松滿祐逆心、亨德に畠山政長・義就家督相論。竝に鎌倉にて、成氏より上杉憲敏伏誅、關東大亂、寬正に畠山義就嶽山

合戰。文正年中に、斯波義敏・同義廉、武衛の家督爭、應仁に山名持豊・細川勝元矛盾により、洛中大亂に及ぶ事十一年。同じ頃上杉顯定と同定政合戰。長享に佐々木六角高頼謀叛、明應年中に、河州の正覺寺合戰、畠山尚長討死。永正に細川澄元・同高國兄弟合戰。同船岡山紫野合戰、細川政賢討死。大永に桂川合戰、享祿に公方萬松院義晴公朽木落。同細川晴元上洛、攝州舎利寺合戰。細川高國切腹、次に晴國・藤賢・氏綱等、泉州にて蜂起、皆相續いで起りしかば、狼烟立去る日もなく、旌旗靡かざる日もなし。一人百官、其位を安んぜず、四海萬民戈を擔ひ、糧を齎に隙なし。朝憲上に廢れ、武威下に失へり。就中等持院尊氏公十二代の公方萬松院義晴公の時に至つて、壞亂爰に極り、諸侯互に威を爭ふ。東には今川上總介義元・上杉兵部大輔憲政・千葉介國胤・結城下野守晴朝・伊達陸奧守輝宗・宇都宮彌三郎國綱・蘆名彈正少弼盛高・山形出羽介義光・里見左馬助義堯・北條左京大夫氏康・武田信濃守入道信玄・佐竹右京大夫義重・村上伊豆守義晴・小笠原大膳大夫長時・木曾左馬助義高・諏訪刑部頼茂・斯波長張右兵衛佐義友・並に家人織田一類・土岐彈正少弼頼藝・齋藤利政入道道三・伊勢國

司北畠源中納言具教・佐々木六角義賢入道承禎・京極近江守高成、並に家臣淺井一類、何れも國々に、武威を逞しうして、互に隙を窺ひ、謀を廻す。 北國には、上杉彈正少弼輝虎入道謙信・畠山修理大夫義則・朝倉左衛門大夫義景・武田大膳大夫義統・神保長澄・椎名・遊佐等、隣國を侵奪、猛威を顯せり。西國には、島津修理大夫義久・大友豐後守義鎮・龍造寺肥前守隆信・阿蘇大宮司惟行・菊池肥後守武常・相良宮內少輔・義于・戸次・立花・宗像・五島・大村の者共、黨を結び攻戰ふ。 中國には、大內助義隆・尼子右衛門尉晴久・毛利右馬頭元就・山名伊豆守豐國・宇喜多和泉守直家・浦上美作守則景・赤松兵部少輔義祐・小寺相模守識隆等、國々に蜂起し、動亂止む時なし。 四國に、河野對馬守通泰・三村・上得・井が一類・長曾我部元親・三好・香川・羽床・長尾・十河・安宅・一之宮・井澤等、城郭を構へ、弓箭を取りて臂を張る。 五畿內には、畠山尾張守種長入道・嫡男右衛門督高政・其子尾張守昭高・畠山上總介在氏・細川右馬頭藤賢・同右京大夫氏綱、並に家人三好修理大夫長慶・安宅攝津守冬康・三好豐前之長入道實休・十河民部大夫一存・木澤大和守長正・松永彈正少弼久秀等、皆君臣の禮を忘れ、互に逆威を振ふ事、恰

も戰國の七雄にも越えたり。爰に斯波武衞家の老臣織田備後守敏信が曾孫、三郎信秀が孫、織田上總介信長、勇才の大器たるにより、公方靈陽院義昭公を取立て奉り、主城に安坐し參らせ、諸國大方討隨へ、幾内遠境漸く平均に近かりし所に、公方義昭公、武田信玄・上杉輝虎に仰付けられ、信長を誅せんと御企あり。立所に顯れ、公方義昭公、藝州の毛利を御賴ありて、京都を御開ありしかば、京都又大亂となりにける。然とは雖も、信長、天才傑出せし人なれば、一兩年に、悉く幾內を討治め、右大臣に經上り、征夷將軍に任ぜられけるこそ勇ましけれ。抑此信長公と申すは、代代尾張國大守斯波右兵衞佐が家臣たりしに、永祿元年の春、斯波右兵衞佐義忠は、今川義元・吉良義諦に相議し、信長を誅せんと謀りしが、却て武衞方討負け、同十月信長大軍にて、清洲の城を攻落しける。武衞義忠、命計り助かり、長島に落行き、幾程もなく病死し給ひける。寔に尊氏將軍の時、尾張守高經入道道朝、越前・尾張を領知せられしより以來、代々相續、此義忠に至つて、武衞に任ぜらる。柳營の股肱たりしに、一時に亡失、永く其家絕えにけり。然るに依つて、信長威勢夥しくなりて、至若

清洲城沒落

斯波義忠討死

義昭將軍を、天下の家督に居ゑ奉り、權柄を公儀に備へて、終に公方を追出し參らせ、其身、大樹に居り給ふ。然りとは雖も、天道盈つるを虧く故に、天正十年の夏、明智日向守光秀謀叛を起し、京都にて、信長父子、御切腹ありて、四海又大亂とぞなりにける。爰に信長公、取立て給ふ寵臣多しと雖も、運を兩端に窺ひて、未だ明智を討たんずる人ぞなかりける。

明智合戰并秀吉公將軍に任ぜらる

秀吉毛利と對陣

然るに、信長公寵臣に、羽柴筑前守秀吉といふ人あり。元來下賤の中より起りて、系連無氏の輩たりと雖も、將軍並なく寵愛し給ふ。中國一圓に下し給はり、毛利家退治の先手として、備中國高松表にて、輝元と對陣して、居られける所に、信長公御切腹の註進ありければ、秀吉哀悼の涙、驚歎の心極りなし。然れども秀吉、大剛無雙の大將なれば、少も是に褄まず、高松の城を攻落し、城主等殘らず首を刎ね、其上にて、毛利家と和談せしめ、六月六日巳刻に、秀吉備中表を引拂ひ、播州へ歸陣せら

秀吉播州歸陣

山崎寶寺合戰

れけるに、折節、大雨・大風、數箇所の大河洪水夥しかりけるを、秀吉、處々の大河洪水・風雨を凌ぎ、夜晝の境もなく、人馬の息を續がず、攝州尼崎に著陣せられける。爰にて三七信孝・丹羽長秀・池田勝入・中川淸秀・高山等が勢を合せ、同十三日、山崎寶寺表へ押出さる。明智光秀も、二萬餘にて段々に備へて、待懸けし所に、秀吉一世の浮沈、此時なり。將軍の御弔ひ合戰、追善の太刀を打つ事、今日に極る上は、秀吉、馬符を押立て、諸軍を勇し、軍勢三筋に分れ、山の手・川の手・中筋、一度に箕手に押廻し、矢柄も怺らず押入り、追崩しければ、明智、身近侍三千許り敗軍して、靑龍寺城へ逃入りけるを、秀吉息を續がず、追詰め給ひしに、明智怺へず、坂本の城を、心懸け落行き、小栗栖にて一揆に逢ひ、討たれける。秀吉は、明智が首を取り、殘黨殘りなく誅伐せしめ、主君の敵を目前に討平げ、帝都平均に屬しけるぞゆゝしける。

明智光秀討たる

至若柴田勝家が一類、島津紀州の一揆、四國の徒黨、關東・北國の凶徒、五六箇年に討平げられければ、夫より秀吉の威勢、飛龍天にあるが如し。其勢、恰も洪水の瀧鳴つて漲るに似たり。諸國の群雄を來服し、終に天下を舒卷せられしかば、內野に一

秀吉の威振ふ

秀吉四海一統

の城を構へ、聚樂の亭と號し、絶えて久しき行幸を成らせ奉り、卽闕の雲を履み、忝くも人臣の位を極め、萬乘を翼戴し、天下に令して、不臣の輩を懲し、百官を從へて、北面を司り給ひければ、四海一統に歸し、萬國卒に服せずといふ事なし。德川大納言家康・上杉宰相景勝・毛利宰相輝元を始め、都鄙の大名・小名、皆秀吉公の幕下に屬し、蓮府槐門の風に隨ひて、手を束ね、膝を屈せずといふ者なし。其勢、只一國より六國を靡かせし秦威に似たり。誠に熟と考ふるに、足利公方八代、東山慈照院義政公御代、應仁元年より天下亂立ちて、五畿・七道、悉く修羅の巷となる。彼を討ち之を隨へんと、互に猛威を震ひ、攻戰ふ。事、天正年中迄、旣に二百餘年に及びける所に、秀吉公智才勇猛、古今輝きける大樹なれば、十箇年の內外に、天下の逆亂を靜め、四海・九州の末迄も打治め、日本數代の兵亂、此時に一統せしかば、禁裏・仙洞も、古の風に立ち歸らせ給ひ、三公・九卿も、位階其次第を正して、上一人より下萬民に至る迄、秀吉公の武勇の威光を仰ぎ、其恩澤を蒙りけるこそゆゝしかりけれ。然りと雖も、爰に關東の押領北條左京大夫氏政・子息新九郎氏直、未だ上洛せず、每事京都の下知に、

従はざりければ、富田左近將監政春を御使に下され、氏政上洛仕り、朝家を重じ奉るべく、嚴密に御教書下されけれども、第一遠國を賴み、第二に富士川・箱根山の切所を、鐵の栫と思ひ、氏政父子、嘲笑つて、上意違背の體、疑ひなければ、秀吉大に怒り給ひ、此上は天下の士卒を勞する事、不便なれども、逆臣を赦し置く事、朝儀の廢れたるに似たり。自身來春、出陣すべしと、觸を口せ、天正十七年十月、先手として織田内大臣信雄・蒲生飛驒守氏郷、兩勢二萬三千にて打下り、伊豆國沼津を圍む。家康は東海道五箇國の城々明けて、借り給ふとの仰により、同御下りありて、道々の城々宿々の館を構へ給へば、小田原征伐も近き内にぞ極りける。

北條氏政家傳并小田原落城附朝鮮の三使來朝

抑此北條氏政といふは、北條時政が嫡孫相模守高時入道が末孫にはあらず。其先祖を尋ぬるに、平將軍貞盛より十代、伊勢豐前守後繼が末孫、伊勢備前守盛定が嫡孫なり。然るに伊勢備前守盛定が嫡子伊勢新九郎盛時といふ者より。公方常德院

義尙公の御勘氣を蒙り、長享元年九月に、江川釣の御陣を逃出し、駿河國の守護今川上總介義忠は、己が姊壻たるにより、之を賴み、駿州に落下りしが、義忠は、去る文明十八年三月、遠江國鹽買坂にて、橫地勝俣井の八郎と合戰して討死し、其子今川五郎氏親、幼少なれば、伊勢新九郎、幸に存じ、甥の氏親が名代として、今川家を進退し、何事も己が意に任せ、富士の根方與國寺の城に居住せり。其頃、關東管領は、香勝院從三位左兵衞督政知と申して、尊氏將軍より、五代の孫、卽ち東山殿慈照院義政公の御弟たり。去る文明三年に、古河公方成氏退治の爲め、伊豆國堀越に御在城なりけるが、延德三年四月五日に、俄に逝去し給ひけるを、彼伊勢新九郎聞付け、天の與ふる所と悅び、明くる六日の夜、大勢を引率し、兵船に乘連れ、伊豆に押渡り、急に堀越の御所へ亂入せしに、思ひも寄らざる砌なれば、政知の若君茶々丸御曹子、一戰にも及はず、相模國三浦介時高が許へと志し、僅かに七八十騎にて落ち給ふ。伊勢新九郎盛時、勝凱を作懸け〳〵追懸け奉り、已に討たれ給はんとせしに、上杉民部大輔顯定より、當國守護代に置かれける宇佐美能登守定興入道道盛と

いふ者、公方御逝去の御弔の爲め、今宵堀越へ參り過ひ居たりしが、若君危く見え給ひしかば、能登入道引返し、宇佐美能登守定興と名乘懸け、七八騎にて踏止り、半時計り防戰ふ。爰にて討死せし其隙に、若君は三浦へ落ち給ふ。新九郎は、堀越殿を燒拂ひ、直に宇佐美の城へ發向せしに、城主能登入道道盛討死せしかば、二日相支へ、宇佐美の城も落ちにけり。此旨、伊豆國守護管領上杉顯定居城武州の鉢形に聞えければ、顯定、大に驚き、能登入道弟宇佐美越中守孝忠を大將にて、後國洋張越・上田の軍勢八千餘、伊豆國へ發向せしむ。宇佐美越中守攻入る旨、聞えければ、伊豆國侍も、過半越中守に馳加る。越後勢彌、力を得、國中に亂入す。伊勢新九郎盛時、此由を聞きて、宇佐美の庄の内戶股山に出張して、上杉が勢を待懸けたり。宇佐美越中守、之を聞き、伊豆國侍を一手に合せ、戶股山へ押寄せ、四方を燒立て攻懸る。新九郎も段々に備へつゝ、數刻防戰ふと雖も、上杉が軍兵共、鑓打入れ／＼喚き叫んで攻めければ、伊勢新九郎打負けて、北條へ引退く。宇佐美越中守、勝つに乘つて、北條へ押寄せ、息をも續がせず攻戰ふ。新九郎も爰を先途と防戰ひ、勝負區々な

關戸城沒落

りける所に、越後勢の後に控へたる伊豆國侍松平三郎左衞門・山本太郎左衞門・富永・梅原・佐藤・上村・高橋・村田の者共、俄に心替し、新九郎に一味し、後より切懸りしかば、上杉が味方に賴切つたる關戸播磨守吉信が陣、一番に破れて、關戸城へ引退く。宇佐美越中守孝忠、精兵二千餘にて、懸破り／＼防戰ひけれども、大敵前後を圍みしかば、終に叶はず、總敗軍に及ぶ。宇佐美越中守も、數箇所創を蒙り、散々に防戰ひ、取返し／＼切立て、漸く早川尻迄引退きしかば、新九郎彌〻力を得、關戸の城へ押寄せ、十餘日攻めければ、關戸の城攻落され、大將播磨守吉信父子、五人討たれけり。新九郎、卽ち北條に居城を構へ、古河公方政氏の御味方をぞ申しける。さて古河殿へ申上げ、昔の北條の家、斷絕仕候間、某平氏一類たる上は、彼の名字を續ぎたき旨、頻に申上げけるに、北條の名字は、足利敵對の家、當代不吉の前表なりと思はれけれども、味方一人も、所望の〔なき脫カ〕砌なれば、北條の名字、御免ある上、公方政氏御名字の一字を下されければ、伊勢新九郎、大に悅び、北條新九郎氏茂とぞ名乘りける。扨鱗形の旗を打立て、相模入道高時が次男相模二郎時行五代の孫と號し、國中

足利長氏自害

北條早雲

秀吉北條征伐

を打隨へ、一國平均になりしかば、明應三年九月廿三日に、相模國三浦介が居城三浦の館を攻落し、時高を討つのみならず、堀越殿の著君茶々丸御曹子、其時は足利左馬助長氏とて、十八歳になり給ひけるを、腹を切らせ參らせ、夫より大庭の城へ發向し、上杉朝興が目代齋藤藏人利忠を攻落し、翌年二月には、小田原の城を乘取り、大森筑前守憲頼を討亡し、小田原に居住す。爰にて新九郎、入道して北條早雲とぞ申しける。早雲が子氏綱、其子氏康・今の氏政、氏直迄、都合五代、榮耀に誇り、武命を輕んじ、代々小田原に在城して、關東を押領しける。去程に、北條氏政・同氏直、彌ゝ上洛仕るまじき旨、申切るに依つて、秀吉公大に怒り給ひ、普天の下、王土にあらずといふ事なく、率土の濱、王民にあらずといふ事なし。氏直儀、家康所緣たりと雖も、逆臣たる條、誅伐せずんばあるべからずとて、天正十八年庚寅三月朔日に、秀吉公、御首途と聞えければ、正月上旬より、御先勢毎日引きも切らず、都を立ちて、五畿内・西國・中國・四國・南海道・北陸・中仙道の軍勢、都合廿六萬の著到とぞ聞えける。秀吉公は、北條征伐として、禁中に奏聞ましまし、錦の御旗を申下し、陣

の座にて、軍禮を行はれ、公卿僉議ありて、節刀を賜ひければ、秀吉公、博陸の衣冠を脫ぎ、忽に戎衣となり、錦の直垂を召され、鎧を著し、節刀・錦の御旗を賜ふ。其儀式の爲體、魏々として亦堂々たり。三月朔日に、秀吉公、帝都を御立あり。其勢、雲霞の如くなりければ、見物の貴賤、目を驚かさずといふ事なし。同廿八日に、沼津の城に著き給ふ。秀吉公、自身五百騎計りにて、箱根山へ登り給ひ、山中の城涯近所にて、四方を見廻し、軍勢の手合を定め、硯を取り寄せ、自身書付け、諸手へ觸れられ、明くる廿九日早天に、秀吉公、三島の上山へ御登りありて、金の瓢箪を立て給へば、御先手木下美作守・一柳伊豆守直末・堀尾帶刀吉晴・中村式部少輔一氏、諸口揉合ひて弓・鐵炮を放立て、関聲山谷に響き渡り、喚き叫んで攻登る。山中の城にも、北條左衞門大夫氏勝・間宮豊前守好高・松田兵衞尉重弘・朝倉能登守元春等、防戰すと雖も、中村式部少輔、先登して、塀涯にひた〳〵と著きしかば、一氏が兵河毛惣左衞門・藪内匠・渡部勘兵衞、眞先に乘込みけるに、諸手、揉立て攻入り、間宮好高・松田兵衞尉、一足も退かず討死す。氏勝・朝倉能登守は、搦手より落行き、卽時に山中の城を攻落

し、韮山城北條美濃守氏規をば、近江中納言秀秋を大將にて、四國勢を加へて攻圍む。總軍は、箱根山を登り、小田原の城へ押詰る。北條氏政も、豫てより手分して、宮城野へ松田尾張守康遠・上田上野介憲宗・原式部丞清高を差向け、湯本口へは千葉新助直重、竹浦口へは北條陸奥守氏照・成田下總守氏成・壬峯上總介治時・皆川山城守廣照を遣し、固めけるに、三箇所の役所を、上方勢事ともせず、峯より嶺を傳ひ、谷より岡に出で、廿六萬の勢鬨聲を揚げ、響渡つて、平等に越えければ、三箇所の氏政が勢、一支も支へず、捨鞭を打つて、小田原へ逃入りしかば、秀吉公は松山に御本城を居かれ、小田原城を取卷き、晝夜仕寄りを付け、攻めさせらる。關東國々城々へは、淺野彈正少弼長吉・木村常陸介盛方・本多中務大輔忠勝を遣し、忍・岩槻を攻落す。廿縄の城〔守脱カ〕北條左衛門大夫氏勝をば、井伊兵部少輔直政・榊原式部大輔康政を差向けられ、北國口よりは、上杉宰相景勝・加賀宰相利家・毛利河内守・眞田源五郎、數萬にて上野國へ亂入、松枝・松山・安中・厩橋・八王子等の城々攻落し、小田原表へ打出づる。八州悉く平げ、奥州迄其餘威に服し、殘らず旗本に屬し奉る。關東の城々防

北條氏政氏照自盡小田原城沒落

朝鮮使節來る

朝鮮王の書翰

守する事なく、皆掻楯を下り、降參しければ、今は小田原一國一城になり、助の兵もなく、剰へ城中にて、松田尾張守・成田等、叛逆を企て、皆川山城守・和田等は、己が役所に火を懸け、寄手の陣へ走込みければ、怺へ兼ね降參し、北條氏政・同氏照兄弟切腹し、城中の男女を助け、城を渡す。卽ち關東の固めには、家康を江戸の城に居置き、七箇國を領知せしめ、奥州白河迄、秀吉公御出馬ありて、會津を蒲生氏鄉、葛西・大崎を木村伊勢守に下さる。九月朔日に、聚樂へ歸城し給ひけり。誠に天下一統に歸し、四夷・八蠻、靡き隨ふ事、疾風の草を吹くが如し。されば秀吉公の威風、異域に及びしかば、朝鮮王李昖、三使を奉り、其機嫌を伺ふ。正使は黄允吉、副使は金誠一・許箴之なり。三使衣冠を掻い繕ひ、聚樂の御所に出仕せり。秀吉公、朝鮮使に御對面なされ、朝鮮王の書翰を披かせらるゝに、其詞に云、

朝鮮國王李昭朱印奉書

日本國王關白殿下

春候和煦動靜佳勝遠傳

大王一統六十餘州、雖欲遣信修睦、以敦隣好、恐道路湮晦、使臣行李有淹滯之憂歟。是以多年思而止矣。今命與貴所遣黄允吉・金誠一・許筬之三使、以致賀辭。自今以往、隣好出于他土幸甚。仍不腆土宜錄有別幅、庶幾笑留。餘貢序。

珍嗇不宣

萬曆十八年庚寅三月日

別幅

良馬二頭	大鷹子十五連	鞍子二面精緻具
黒麻布三十匹	白綿紬五十匹	青斜皮十張
人參一百斤	豹皮二十張	虎皮廿五張
彩花席十匹	紅綿紬十匹	淸蜜十一碩
海松子六碩	豹皮心兒虎皮邊	貂皮裏闊多介一座

以上

とぞ書きたりける。秀吉公は、書翰・方物等、御披見ありて、即ち返牒を遣されける。

其上、朝鮮の三使に、仰含められけるは、朝鮮より大明へ、使者を遣し、前代の如く、日本勘合の船を、渡すべき儀を調ふべし。大明若し異議に及ばゝ、朝鮮王、先づ八ヶ道の兵を催し、大明へ先驅すべし。秀吉、續いて攻入りつゝ、大明四百餘州を切從へ、自ら北京の皇帝になるべき條、謹んで其旨、存ずべき條、仰渡さる。即ち朝鮮返翰の詞に云、

秀吉の返翰

大日本國關白豐臣秀吉朱印報

朝鮮國王閣下

雁書謹讀、卷舒再三、抑本朝雖爲六十餘州、通歲諸國分崩離所、兵革不止、亂國綱廢世禮、而不聽朝政。故予不勝感慨、不過數年之間、伐逆臣討賊徒、及異域遠島、悉歸掌握、宇內既清夷矣。夫予固甕牖繩樞之周餘也。然慈母、夢日輪入懷中、而吾以降誕。時有相士曰、日之所照臨、莫不祇屬、後來其有蓋世之氣、不可疑焉。依有此奇異、故吾常自負、一旦乘時運、而龍飛東略、西征・南伐・北討、戰則無不勝、攻則靡不取。大功之速成也、誠如太陽一昇、萬物皆無不照焉。既天下大

治、撫育百姓、憐愍孤獨。故民富財足、土貢萬倍于古矣。本朝開闢以來、朝廷盛事、洛陽之壯麗、莫如今日也。吾想人生不滿百。豈壹鬱于一方、以費日乎。是以吾促大兵、將入大明、而使一劍霜滿四百州之天。唯是之願耳。貴國先馳而入大明。是有遠慮無近憂者乎。遠邦小島在海中者、後進之輩一不可佐許容也。予赴大明之日、彌與貴國結隣盟也。予志無宅。唯欲顯佳名於三國而已。方物如目錄。領納珍重。保嗇不宣。

天正十八年九月日

とぞ書かれける。朝鮮の三使、此御返簡を請取り、朝鮮に歸り、禁裏に之を奉りけれども、朝鮮王、曾て驚き給はず。「今日本倭國の力を以て、大明を攻めん事、誠に蟷臂を頼んで、奔車に向ふが如しと、敢て返牒の沙汰なし。朝野掌を拍つて、嘲哢せり。

奥州一揆蜂起佐沼城を攻む附蒲生氏郷後詰一揆退治并一揆二度蜂起、秀次・家康御下向、奥州靜謐

將軍秀吉公は、大明征伐の事、朝鮮王へ申送り、其返牒の來るを待ち給ふ所に、十月下旬に、奧州侍南部大膳大夫信直方より、加賀宰相利家迄、早馬を以て、註進仕りけるは、木村伊勢守が領分佐沼表、一揆夥く蜂起して、佐沼城を取卷く所に、木村伊勢守、之を聞き、佐沼城主成合平左衛門は木村家老なれば、後卷の爲め、伊勢守は、葛西の豐間の城を立ち、嫡子彌右衛門は、大崎の古川を出で、父子一手になりて、押出す所に、後にて一揆起りて、豐間・古河兩城を、乘取るに付き、伊勢守手を失ひ、家老成合平左衛門が籠る所の城へ逃入り、一揆彌、大事になりて、彼要害を取卷き落去る。近日の體には、會津より蒲生飛驒守氏郷、僅に六千餘にて、十月初に打出で、大風・大雪を凌ぎ、後卷に佐沼城へ押出し候由、風聞候へども、始終小勢にて、叶ふべからず候間、御加勢然るべき旨、註進す。利家、大に驚き、此旨早馬にて、京都へ申上げられければ、秀吉公、大きに怒り給ひて、淺野彈正少弼長吉・石田治部少輔三成、御名代として、結城宰相秀康並に家康家老榊原式部大夫康政、急ぎ罷下るべき旨、仰出されけり。

奧州一揆佐沼城を攻む

一揆蜂起の由來

抑今度一揆蜂起の由來を尋ぬるに、米澤城主伊達二郎政宗が勸にて、一揆を

起しけるとぞ聞えける。政宗、此企ありける濫觴は、昔より代々會津を領しける蘆名の盛重と、伊達政宗が父輝宗と、數年合戰し、勝負區々なりしに、彼蘆名盛重は、元來佐竹右京大夫義宣の弟の子にて、蘆名の養子たり。兩國數年の軍あるに付き、天正十七年三月上旬、蘆名盛重家老二本松右京進義次を使として、伊達輝宗方へ遣し、和睦の扱あり。此二本松右京進先祖は、管家の一流畠山上野介泰國が嫡流なり。伊達輝宗も、和談を悦び爼柳といふ所にて、二本松右京に對面す。野際に帷幕を張り、其内にて獻盃の祝儀ありけるに、蘆名の使者二本松義次は、大力なりければ、伊達輝宗を引捕へ、是非生捕にして、大勢引包み、二本松の城へぞ歸りける。伊達が兵共多しと雖も、詮方盡果て呆れて、此旨城へ註進しければ、輝宗が嫡子次郎政宗、生年廿三になりけれども、剛兵一の兵なれば、物具取つて、肩に搔懸け、手勢二千餘にて、二本松を追懸けたり。右京進義次も、揉に揉んで急ぎけれども、政宗に追付かれ返合せ、散々に戰ひ、輝宗を刺殺し、其身も自害して失せにけり。政宗は、二本松が首、並に父輝宗の死骸を持たせ、城へ歸り、同年四月に、二萬餘騎を催し、會津を

金神忠數奮死

指して、押寄する。二本松の城にては、政宗寄すると聞き、右京が後室は、八歳と五歳になる二人の子供を、大將にして、二人數を集め、其身、女性たりと雖も、自ら冑・具足さし固め、弓・鐵炮を矢間配して、政宗を待懸けたり。政宗之を聞き、窮寇をば迫むべからずとて、閑道を經て、萬代山〔盤梯カ〕の麓摺上原へ押出す。蘆名盛重、之を聞き、政宗に少も足をためさせじと、二萬五千餘、金神周防守忠數を先手にして、平田・松本・佐世・富田・四天王の侍共、段々に備へて打出づる。政宗も伊達阿波守郡左衛門尉・片倉小十郎先駈にて、挑戰ふ所に、蘆名の家老富田大膳・平田佐世、俄に別心して、後より切懸り、政宗と一手になりしかば、金神周防守、四方八面に渡合ひ、比類なき討死してんげり。松本太郎、十八歳なりけれども、無雙の大力、剛强の兵にて、蘆名家にて八萬石を領し、第一の家老たりしが、平田・富田・佐世が、別心せしを見て、政宗に構はず、眞直に三人の陣へ懸合ひ、松本太郎、是に在りと呼んで、鐵の棒を持つて、前後左右を打伏せ、手下に七八人討取り、富田大膳に組まんと、懸入り〱戰ひけれども、政宗が大軍、競ひ來りければ叶はず、終に討死す。大將蘆名盛重も、只十騎計り

に討ちなされ、會津の城へも歸り入らず、常陸國江戸崎指して、落ち給ふ。さて政宗は、會津を一圓に領知せり。其頃婦翁の田村の淸顯も病死にて、其子なかりければ、他人に隨はんよりは、增なれば主君と仰がんとて、田村が家人殘らず政宗に著き、伊達、彌〻大身になり、威勢を振ふ事斜ならず。明くる天正十八年には、秀吉公、小田原へ寄せ給ひければ、佐竹右京大夫義宣、小田原に著陣し、政宗狼藉に依つて、須賀川蘆名盛重沒落仕候間、御太刀影を以て、盛重還住の本望を達し度旨、頻に訴訟をぞ致されける。斯りける所に、五月上旬に、政宗は會津を立ちて、越後へ廻り、甲州を經て、箱根を越えつゝ、小田原に參る。秀吉公、石田治部少輔三成・富田左近將監政春・津田隼人佐敏實を以て、仰出されけるは、今度秀吉、大軍を催し、朝家の綸命を受けて、北條を征伐する事、天下に隱れなし。是全く秀吉、自分の怨にあらず、主上の勅命にて、朝敵征伐する所なり。故に勅諚を重ね奉り、上杉景勝、使者を奉り、佐竹義宣・宇都宮彌三郎國綱・結城晴朝・田賀屋左近大夫・水谷伊勢守・佐野天德寺、悉く御陣に馳參りて、官軍の下知に、隨ひ奉る所に、政宗一人左樣にあらず。只今に至つ

て、遲參仕る條、奇怪なり。無禮なり。是を以て將軍御對面を許されず。然れば去年、押領仕りし會津・仙道、殘らず公儀へ差上ぐべし。若し異議を存せば、御成敗仰付けらるゝ事、掌にあり。但し政宗事、遲參仕ると雖も、小勢にて當地へ參る所、是にて御成敗候へば、籠鳥を殺すに同じ。武威の不足に似たれば、今度は御助なさるゝ間、早々奧州へ罷歸り、軍兵を催し、御下向を待懸くべし。秀吉追付け、北條を誅伐せしめ、關東を打靡け、奧州に到りて、御旗を進められ、鑓先を以て、踏頽し、政宗が頭を刎ねらるべき條、早々罷歸るべしと、仰出さる。政宗承り、畏つて申上げけるは、某獨身にて、御陣に馳參る上は、御誅伐仰付けらるゝとも、異議を存じ奉らず、矧んや拜領の地は、只今差上げ申候と、御請申上げければ、御前別儀なく、御暇下され、政宗は奧州へ下る。内々諸人囁きけるは、政宗、虎狼の嗕徒なれば、只今に大逆を致すべし。然れば彼を宥し、還す事、千里の野に虎を放つに似たりと。きけれども、奧州・出羽の者共は、政宗を無事に御返しありて、追付け奧州へ御動坐なされ、鑓先にて御成敗なさるべき旨の上意を承る。扨は、今は敵對なし難し。少し

も早く御手に附き、忠節致すべしと、思はぬ者はなかりける。七月十一日、北條氏政・同氏照、切腹仕り、小田原落城しければ、同十七日、將軍、小田原御立なされ、八月中旬、奥州會津・白河迄御著陣なさる。政宗は、小姓四五人にて、下野國那須野迄、御迎に罷出づる。南部信直も、同じく參向す。御先手は、蒲生飛驒守氏鄕なれば、奥郡さして出張す。秀吉公は、細川越中守忠興を召され、政宗が差上ぐる會津領百萬石、下し置かるべきの旨、仰付けらる。細川、畏つて御仕置の儀にて、忠興差置かれ候事ならば、畏く承り候。若し御恩賞と思召し候はゞ、小國にても、願はくば西國にて拜領仕り度き旨、御訴訟申上げらる。將軍、聞召し分けられ、八月十五日に、先陣より蒲生飛驒守氏鄕を召還され、會津・仙道白河都合百萬石を下されける處、爰に葛西・大崎といふ所あり。葛西は賴朝公御時より、葛西の三郎代々領知して、豐間の城に居住す。大崎は、足利尾張守高經の嫡子、斯波三郎家長が所領たり。然るに北畠源中納言顯家卿、建武三年に上洛の砌、鎌倉を攻められける時、斯波三郎家長、杉本合戰にて、討死せし忠功により、今に至る迄、代々此所を領知し、大崎の古川の城に居住せ

[illegible]
并一揆二度蜂起[illegible]御下向奥州御仕置

り。秀吉公、兩所共に召上げられ、葛西・大崎六十萬石を、木村伊勢守に下されける。此伊勢守は、丹波龜山城下の町人なり。先年、明智日向守光秀、龜山在城にて、丹波國侍久下・長澤・波多野等と合戰、數日に及びける砌、彼木村、朱烏帽子を著て、每度手柄を顯しゝかば、明智、召抱へ、四千石の所領を充行ひ、木村彌一右衞門とぞ申しける。明智合戰の後、龜山の城持堅固に、防ぎ守りけるを、秀吉公、色々謀を運らされ、龜山の城を請取り、伊勢守と改名させ、攝州にて四千石下されけるが、今度六十萬石の御加恩を拜領し、面目身に餘りてぞ覺えける。伊勢守は豐間城、嫡彌一右衞門は、古川に在城す。蒲生氏鄕へ仰聞かされけるは、木村伊勢守事、子の如く、家人の如く、不便に仕るべし。木村も亦氏鄕を親の如く、主君の如く存ずべしとて、政宗が所領を、眞中に立狹み、氏鄕・木村をぞ置かれける。扨奥侍には、最上領主山縣出羽介義光・戶津〔澤カ〕・津輕・南部・相馬秋田城之介・岩城、幷伊達政宗、悉く御手に屬しければ、殘らず本領安堵を給り、出羽・奥州の檢地を、淺野彈正・石田治部少輔に仰付けられ、御歸洛の砌、氏鄕申上げられけるは、我等は勢州松が島にて、十五萬石、木村伊勢守

は、本知四千石より、氏郷は百萬石、伊勢守は、六十萬石に罷成り、殊更東蕃の西地に差置かれ候に、手前人數不足にて、何とも罷成らざる旨、申上げらる。秀吉公、尤なりとて、暫く御思案ありて、兩人に侍を抱へさせらるべき手段、手の內にありと仰せらる。増田右衛門尉長盛を召され、制札二三十枚仰付けらる。今度氏郷・木村兩人、大身に仰付けらると雖も、當分侍に事缺き申候間、天下の諸大名の家人等、其主人に恨不足あるの輩は、皆々氏郷・木村方へ驅込むべし。若し當主人相構へ候はゞ、秀吉、相手になさるべく候間、其旨を存じ、危氣なく、兩人へ走込み、奉公仕るべき者なりと遊ばされ　辻々に立てられければ、日本國中末々迄相聞え、先づ家康卿より鳥居四郎左衛門・筧龍之助・曾根下野守を始め、氏郷へ附き、中村式部大輔一氏より成合平左衛門、一番に立退き、木村方へ出でければ、伊勢守悅んで、平左衛門事、度度譽の中、先年和泉國古木川にて、一氏と紀州勢一戰の時、彼平左衛門一番鑓を仕り、比類なき働、其以後度々の挊すぐれたればとて、伊勢守、一の家老として、佐沼の城主に爲し、三萬石を充行ひければ、櫻井內藏助も走込み、程なく侍其大勢召抱

佐沼一揆

蒲生氏郷佐沼城後詰

へ、豊間・古川に在城せり。八月中旬に入部して、漸く住宅の用意半の所に、九月中旬より、木村家老成合平左衛門が居城佐沼より、一揆一萬計り蜂起して、佐沼の城を取圍み、晝夜の境もなく攻戰ふ。成合平左衛門、勇士たりと雖も、在城程なければ、萬事に自由ならず、難儀に及ぶ由、聞えければ、木村伊勢守、大に驚き、佐沼の城の後卷として、豊間の城を立ち、子息彌一右衛門も、古川の城を出で父子一手に成りて、佐沼の城へ押出づる所に、路にて一揆二三萬起りて、豊岡・古川兩城を乘取りしかば、伊勢守父子手を失ひて、佐沼城へ逃入り、成合と一手になり、一揆彌ゝ大軍になりて、十重二十重圍みつゝ、揉に揉んで攻近附き、城中兵糧乏しくして、上下窮困斜ならず。已に落去に及びければ、此旨、會津へ註進し、援の兵を乞ふ事、引きも切らず、氏郷聞きも敢へず、佐沼の體、さぞあらん、一刻も早く、後卷すべしとて、犇(ひしめ)きければ、家老蒲生源左衛門・同四郎兵衛・谷崎忠右衛門等、足長に御出で候はゞ、後にて一揆起るべく候間、是非思召止り候へと諫むれども、木村を攻殺させては、將軍の御前、何と申すべき。其上助くべきを助けざるは、弓矢の永き瑕たれば、是非に

後卷おなくしとて、會津にも大軍を殘し置き。氏郷。僅に六千餘、十月五日に會津を立つ。雪國大寒にて、通路難儀に及ぶ。氏郷が老臣共、申しけるは、小勢と申し、殊に上方者にて、案内をも知らず、大雪馴れず、大極寒時分に長途を經ては、上策にあらずと諫むれども、氏郷思切たれば聞入れず。米澤領に著きしかば、政宗へ使を立て、佐沼の城後卷の爲め、氏郷奥へ罷通り候。通路不案内に候間、指南の爲め、政宗先陣仕らるべき旨、數度申入れられければ、政宗仔細に及ばず、一萬五千にて、氏郷に先立ち、押して行き、大雪といひ、切所の長途といひ、殊更政宗觸にて、一揆を起させたる事なれば、政宗が領内を、氏郷押通るに、宿等の不自由に、地下人の不馳走なる事斜ならず。氏郷が軍兵、上下共に憤りけれども、詮方なし。同十七日には、氏郷・政宗、相俱に前野・黒川にぞ著きたりける。政宗は、我持の城なれば、黒川城に入り、氏郷は古城の跡に陣を取懸くる所へ、政宗より使を立て、是迄は、某領分なりと雖も、明日よりは、敵地にて候間、武者押の定め、相談仕るべし。其上、時分柄、異體には候へども、今夜城中にて、茶を進めたく候間、追付け、御出を忝うすべしと申されける。

奥州一揆蜂起佐沼城を攻む附蒲生氏郷後詰一揆退治
廿一揆二度蜂起秀次家康卿下向奥州靜謐

是は數寄屋にて、討果すべしとの謀なり。氏鄉家老共色々止めけれども、政宗め何事かあるべきとて、參るべき旨、返事なり。扨氏鄉は、人數六千を、黑川城の門前に立備へ、氏鄉も武具して、蒲生源左衞門・谷崎忠右衞門・蒲生四郎兵衞・町野左近・關庄藏・亘八右衞門・岡部玄蕃・松浦左兵衞、八人の兵共相從へて、城中に入り、會席は書院にて出で、茶は數寄屋にて、政宗自身點ぜらる。扨氏鄉、數寄屋へ通らるゝ時に、政宗、露地迄迎に出で、氏鄉一人を通し、あとの戶を閉ぢんとする時に、八人の兵共、何時にても候へ、公方家の御茶にも、吾等共相伴にはづれたる事なしとて、鎧・甲・太刀帶きながら、六疊敷の數寄屋へ入込み、政宗を眞中に取圍んで、茶の會事終り、扨書院へ出で、軍評諚あり。其時、政宗勝手へ立ちたる時、片倉小十郎諫めけるは、只今氏鄉御討ち候事、思召止り候へ。其仔細は、今味方は、一萬五千なれども、地侍なれば、事難儀に及んでは、必ず逃げ散ずる事、安かるべし。氏鄉が六千は、上方者にて、百里四方に味方なければ、上下迚も遁れぬ所を知つて、氏鄉は討ち濟すとも、殘六千を討果し難し。其上、味方一萬五千に、氏鄉が六千對揚にも過ぎて、覺え候間、爰

をば御待ち候ひて、奥郡へ入る時、內々の支度の如く、一揆共に揉合ひ、後先より討果すべしと、諫むる故、其場の事は、延びにけり。扨氏郷は、政宗に向つて、佐沼城より此方に、敵の城は、之なきかと、尋ねらる。政宗、申さるゝは、田舍道三十里此方に、高淸水と申して、只城一箇所候とあり。氏郷、さ候はゞ、先づ之を攻め申すべしと定め、氏郷は本陣へ歸られ、明くれば、十八日に、氏郷は古城より打出で、六千を眞丸に立て、政宗へ使を越し、前々の如く、先へ押行かるべしと、申遣す所に、政宗、黑川城より出で、氏郷陣に向ひつゝ、備を眞丸に立つる、すはや政宗が懸るはとて、氏郷軍兵共、手鑓押取り〳〵、色めき渡る所に、政宗は備を疊みつゝ、何事なく先へ押行きぬ。氏郷も續いて押して行く。其夜は中新田に著く。一揆共、城を明け退きたれば、氏郷は城に陣取り、政宗は大寺に宿陣せり。其夜の亥の刻に、政宗より使を越し、吾等事、俄に蟲氣指發り散々にて候間、明日御先を參る事、罷成るまじと申越す。氏郷聞きて、彼奴め、後より討果すべき爲めにぞ、さはいふらんとて、明くる十八日の早天に、手勢を二つに分け、五手組一備と、六手組一備と七手組一備、後に下りて、

後陣を討たせ、政宗に心あて、先陣には、蒲生源左衞門・蒲生四郎兵衞・谷崎忠右衞門・町野左近、四備を押立て、扨打立つ砌に、政宗へ使を越し、御所勞如何御座候や、御養生專一なり。氏鄕は、御先へ參り候と、申捨て、中新田を立ち、高淸水を志し、押行く所に、高淸水より此方に、妙城・岩手・澤松・山林とて、四つの敵城あり、妙城手先なれば、城主濱田河內守三千餘にて張出し、足輕を駈引き、弓・鐵炮を雨の降る如く、打懸けたり。氏鄕が先陣、四備の兵共、事急なれば、本陣氏鄕へ窺ふに及ばず。源左衞門・四郞兵衞・町野・谷崎等、足輕を左右に開かせ、鬨を揚ぐると均しく、屈强の兵共輴(しころ)を傾け、鑓先を竝べ、一度に嗺と突いて懸る。塵烟天を掠めて攻戰ふ。一揆方突立てられ、大將濱田河內守も鑓下にて討たれければ、殘勢は、吾先と妙城へ逃入りけるを、氏鄕が先手の大將共、敵に息な次がせそ、附入にせよや者共とて、北ぐるを追うて、引付けて入込みければ、三の丸乘破り、二の丸の塀下に、ひた〳〵と付き、先登を競ひ攻戰ふ。氏鄕は、之をば夢にも知らずして、押行く所に、先陣に當て、鐵炮の音事々しく鳴出で、馬烟天に覆うて見えければ、先手敵に取付きたりと覺えるぞ。誰かある、見

て參れと、下知せらるゝ所に、其頃韓なき達者なる池野作右衛門といふ歩侍、馳行きて、妙城へ驅付け、先手二の丸へ付く所へ馳付て、則ち首一つ討取つて、卽時に馳せ歸り、御先手、城を乘り候由、申しければ、氏鄕聞き敢ず、銀の鯰尾五尺ある首を取つて著つゝ、騎馬に鞭を進むれば、相從ふ兵共、揉に揉で驅付け、先手の兵共、上手になり、氏鄕後詰をするぞ、進めや兵共とて、自身、金の三蓋笠印を押取り、白沫を嚙んで下知せられければ、岡左内・寺村半左衛門・志賀與惣右衛門、小性には名越山三郎、先登に進み攻入りつゝ、何れも高名にしてんげれば、殘る兵共、吾劣らじと、關庄藏・佃又右衛門等、先を先に攻入り、本丸を乘取つて、追付追廻し攻戰ふ。氏鄕も甲の鞆・鐙の綿髮に、矢三筋受留め、自身太刀折して、首二つ討取られければ、相從ふ兵共、思ひ〳〵の働、色々の分捕、高名樣々して、本丸を燒立つる所へ、政宗一萬五千にて、黑烟を踏み立て、馳來る。是氏鄕、妙城を攻懸り居ば、立狹んで討果すべき行にて、息も續がず、馳せ來りけれ共、氏鄕運命強くして、妙城を一時に乘崩しければ、政宗、案に相違して、本望を達せず、殘る敵の城々岩手・澤松・山林、三つの城も、妙城の落

城を見て、自焚して明け退きけり。政宗、手を失ひて、氏郷へ使を越申しけるは、城御攻め候はゞ、吾等にも一方仰付けらるべき所に、此方へ御左右も之なく、如是御座候處、將軍の御前、何と申分くべくや。近頃迷惑に存ずる旨、仔細に述べければ、氏郷、御尤に候。去ながら、此城攻め候事、吾等にも知らせず、先手の者共、踏潰し候間、其段兎角に及ばず。貴殿は、先へ御通り候て、高清水城を御攻め然るべしとて、政宗をば先へ通し、氏郷は妙城の口々、丈夫に普請し、即ち是に陣取りつゝ、將軍の御下知を待つ。政宗、已に、高清水を取卷くとも、氏郷は軍兵疲るゝ由にて、加勢なさず。十九日の夜に入り、妙城の大手の城戸を敲く者あり。誰ぞと尋ぬるに、政宗が家人隅田伯耆守なり。開けて入り給へとて、内に入る。其先祖三代迄、追腹仕る所に、今度何の仔細も之なきに、一所懸命の所領を、取上げられ候處、無念に存候に付、心變して參り候。今度一揆蜂起仕る事、皆政宗下知にて候由、隱謀の次第、一一に告げたりければ、左あるべしとこそ、豫てより思ひつれとて、彌〻油斷なく見えたりける。政宗、之を聞きて、大に迷惑し、色々の仔細を盡し、樣々陳ぶれども、氏

郷曾て取合はず。其御申分の段々は、氏構郷にござる事共なり。最前、京都へ申上候間、將軍の御下知相待ち候。先づ其方には、高清水の城を御攻落し候へ。若し御人數草臥れ候はゞ、氏郷援け申すべきなりと、返答ありければ、政宗、兎角思案し、三十日餘り扣へける内に、此事、京都へ聞えつゝ、政宗退治として、淺野彈正少弼長吉・結城宰相秀康・榊原式部大輔康政、大軍にて、氏郷が家老蒲生源左衛門が居城二本松に著き、石田治部少輔三成も大勢にて、岩城に著く。扨又氏郷は、妙城に陣取り、佐沼城に楯籠り、木村伊勢守父子を、如何なる謀を廻しても、助けたく思へども、大軍四方に充滿ちたれば叶はず。木村父子も、氏郷が妙城迄、出張するを聞きて、日月の如く之を賴み、命に懸けて居たりける。初め伊勢守、佐沼城へ逃入りし時、大崎領主斯波右京大夫經長の家老黑澤豐前守昌任、濱田河內守が人質二人を、漸に取放さずして、城へ入れしかば、黑澤が人質は、童子丸とて、八歳になる、男子なり。濱田が人質は、娘の幼少なり。此兩人を、質に持つ故、寄手も之を氣遣ひ、さのみ佐沼城を攻めざれば、木村伊勢守も、此人質を暗夜の燈の〔如く／皎か〕思ひ居けるが、よく〳〵

思案するに、此城無人數にて、兵糧乏しければ、落城近日たるべし。さあらば、吾等捨つとも、此人質を取返されては、將軍の御爲め然るべからずと、思惟しつゝ、濱田河内守は、妙城にて討たるれば、其詮なし。黑澤豐前守人質童子丸をば、潛に妙城へ送り、此人質取放し給ふなと、氏鄕へ細々と申越さる。黑澤豐前守呂任といふは、安倍貞任が末孫、奥方第一の剛兵なれども、此由を傳へ聞き、淚を流し、上方の者共は、情あるに似て情なし。無慚無愧と承れば、吾子の童子丸をば、何とか手痛く致すらんと、天に仰ぎ悲み泣く。相從ふ兵共、心弱き事を宣ふ物かな。天下の爲にする者は、身を顧みず、是程の大事を思立ち、如何でか未練を思はるやと、諫むれども、豐前守は、聞入れず、餘りに爲方なき儘に、道の通路、常の人は成さざれば、食人癩病人を語らひ、氏鄕へ文を越しけるは、吾等愛子、其許へ御取なさる由、承り及び候。餘に不便に候間、其子を御返し、其上、佐沼城を一揆中へ下され候はゞ、木村伊勢守始め城中の士卒、一人も恙なく、其御城へ送り渡し申すべき旨、仔細の書狀詳なれば、氏鄕、大に悅び、其旨、少も別儀あらじ。早々木村父子を送り渡し候へと、書狀

政宗米澤に退去

懇に到來す。黒澤、喜悅の眉を開き、一揆中へ色々此旨打歎き、佐沼城を請取り、黒澤豐前守千五百餘、木村父子を守護しつゝ、士卒一人も恙なくして、十一月廿六日に、氏鄕が陣妙城へぞ著きたりける。氏鄕よりも迎を出し、人質童子丸には、小袖・太刀、引出物して、黒澤方へ渡し、木村伊勢守父子をば、氏鄕方へ請取りける。去程に今度の一揆の事伊達が所爲なりと、上聞に達し、政宗退治の爲め、將軍の御人數大軍にて二本松岩城に、著く由聞えければ、政宗は怺へ兼ね、高清水の城を解し、十二月二日の早天に、居城米澤指して逃げ歸る。氏鄕、聞くよりも、任他政宗め、妙城を通らば、押寄せて打殺さんとて、上帶締め、馬の腹帶を固め、待たれける。政宗も、之を聞き、山路に懸り、米澤へ歸りけり。斯くて年も暮れ、天正十九年正月にもなりぬ。氏鄕は、妙城に陣して、上方勢を待つ所に、政宗は伯父重實、片倉小十郎、其外小性一人、上下四五人の體にて、二本松に陣取りたる淺野彈正の所へ馳込み、今度一揆の次第、吾等隱謀の旨、氏鄕申上ぐる條、全く其儀にあらずと、歎を申達し、彈正を賴んで、將軍へ申譯せんとす。氏鄕は、之をば知らすして、上方口をば、今下りの軍

勢に押へさせ、幸に後なれば、此方より政宗を取詰むべしとて、妙城に陣取る。淺野彈正は、其謂を知らず、氏郷が、政宗領分を通る事を氣遣して、妙城より歸り申さずと存じ、政宗が伯父伊達重實を人質として、妙城へ指越え、之を召連れて、氣遣なく政宗領分を通り、早々會津へ引取らるべしと、書狀を越す。氏郷披見せらるゝに、人質二人とありて、重實一人來れば、氏郷大に怒り、政宗人質二人と、御紙面に候へども、重實一人ならで參らず候。其上政宗が領分通り候事、氏郷が恐れて、是に滯留仕る事にてなし。重實は返し候とて、返し遣し、其後より氏郷は、六千餘にて、妙城を立ち、政宗領を通るに、無禮を仕る者をば、町人・百姓・僧俗を論ぜず、討捨にして通られければ、恐るゝ事斜ならず。氏郷、會津に歸著せられ、兎に角に政宗事は、將軍御前にて、申譯然るべしとあるに付、政宗上洛ありければ、氏郷も同じく上京せらる。木村伊勢守事、將軍御愼深うして、流罪に仰付けらるべき所を、氏郷色々申上げければ、伊勢守所領六十萬石を召上げられ、其身をば、氏郷に下されければ、即ち福島城五萬石添へて相渡し、伊勢守を氏郷與力にぞ仕りける。政宗事は、最前上

洛の召文を下さるゝ時、諸人沙汰しけるは、政宗、誠に陰謀あれば、必ず上洛仕る事あるべからず。若し叛逆の心なくんば、上京仕るべしと、申合ひけゝ所へ、政宗、小勢にて上洛、殊更今度讒言により、御誅伐あるべく承り及び、金銀にて濃たる礎柱二本、馬の先へ押立て上りければ、秀吉公も御機嫌なり。富田左近大夫政春を召し、政宗京著の段、仰せられければ、富田畏つて、先年君未だ筑前守にて御座候時、播州御在國の砌、御謀叛の旨、支へ申上げければ、總見院殿、御疑ありて、召狀を下され、秀吉若し謀叛を思立たば、必ず上洛仕るべからず。先づ試に召上せんと御座候時、君御心に障りなければ、早速御上洛ありしにより、御貞心明らかに知られ、事故なかりしが、今度伊達が上洛恐ながら君の昔を存出し候と、申上げければ、此頃、氏鄕・政宗中惡しき故、氏鄕色々申上ぐると雖も、政宗滯りなく御上洛仕るは、謀叛は虛說たりしと仰せられ、殊更御前へ召出され、本領安堵を仰出でらる。氏鄕、之を聞きて、富田を恨み、是より中惡くなりけれども、元來富田には、氏鄕と入魂にて不慮に政宗が事を申上げ、心ならず伊達贔屓の樣になりければ、後は氏鄕も別條はなかりしと

再び奥州一揆

氏鄕會津歸陣

かや。其年は、共に在京ありけるに、同六月、奥州九戸城主九戸左近大夫政實は、南部大膳大夫信直と、一門たりと雖も、所領の事に付き、不快になり、九戸の城へ楯籠り、佐沼・葛西・大崎の一揆と、一つになりて、五萬餘にて蜂起仕る旨、早馬京著仕りければ、秀吉公怒り給ひ、氏鄕には早々御暇下され、出羽・奥州の侍共、氏鄕下知に付き、一揆退治仕るべしと、仰出され、政宗をば京に置め置き、氏鄕は急ぎ會津へ歸城せらる。御名代として、近江中納言秀次卿を大將にて、江戶大納言家康・上杉中納言景勝・淺野彈正少弼長吉・石田治部少輔三成・堀尾帶刀吉晴、六萬餘にて發向す。七月廿四日、蒲生飛驒守氏鄕、先懸にて、出羽・奥州の軍兵共會津を立ち、上杉中納言景勝は、越後・佐渡の軍兵を率し、續いて奥州へ發向す。淺野彈正・井伊兵部少輔直政も、口々より亂入る。家康は、三峽に陣取り給へば、秀次卿は、岩手澤に御本陣なり。政宗名代として、伊達阿波守、一萬計にて、是も同じく出張す。路次の敵の城々攻落し、九月朔日に、氏鄕、已に根剃・穴太江、兩城を取詰むる。淺野彈正も、氏鄕に加はりて押寄せたり。先づ根剃城をば、關・田丸を手當て、氏鄕は穴太江城を攻落す

所へ、根剃城より一揆共三千餘、宍太江の城を攻めさせじと打出でたり。押の氏郷が兵、關長門守一政・田丸中書、得たり賢しと、東西より引包んで、餘さじと攻戰ふ、淺野彈正の陣より、淺野右近備を崩し、鑓衾を作つて、横合に突懸けしかば、關・田丸終に打勝ちて、追崩し附入るに、根剃城に乘入り、火を懸けて燒立つる。高清水城は、政宗名代伊達阿波守宗繁、一手にて攻落し、一戸城は之を見て、自焚して明け退き、七戸二箇所の城には、奥方にて名ある侍共五千餘籠りつゝ、地の利宜しき要害たるにより、是へは上杉景勝向けられける。本庄越前守重長・直江山城守兼續・杉原常陸介親憲・隅田相模守・安田上總介・鐵尻高は、東尾城へ押寄すれば、南尾城へは、景勝旗本にて取詰められ、紺地に日の丸の旗は、景勝旗本を見知りたれば、城中には爰を最後と、弓・鐵炮を竝べ、散々に防戰ふ。上杉先手松本内匠・甘糟備後守・武田三寶寺等、是に構はず、堀涯に備を立て、旗本の相圖を待つ。東尾城より突いて出でけるを、杉原常陸・安田上總は、中筋より懸り、直江・本庄は、左右を廻り、引包まんとしければ、敵怺へず引入る所を、ひた〳〵と乘込み〳〵、退く時に攻落し、勝鬨をぞ揚げた

りける。南尾城へは、景勝旗本四千餘にて、堀涯に押詰め、くる〱と引包み、平攻に攻め、乘入りける。城中にも信夫・柳澤・田村・犬尾を始め、屈強の兵共、追手・搦手共に、突いて出で、黑烟を立てゝ挑戰ふ。景勝は、床几に懸け、毗の字の白旗・日の丸旗、只二本打立て、手廻り三百許りにて、小高き所に備へて、見物せられければ、上杉先手の兵共、千坂・對馬・長權四郎・齋藤・甘糟・色邊・下條等、甲を傾け、手負・死人を踏越え踏越え、先陣を爭ひ攻戰ひ、矢倉に火を懸けたり。折節、北風烈しくして、猛火城中に吹敷きたり。敵の兵共、迚も遁がれぬ所ぞ、一足も退くなと防戰ふ。甘糟・千坂等、先を先に乘入れしに、一揆の强兵等、景勝馬印淺黃の扇を見知つて、旗本へ切懸りけるを、鐵炮にて打竦め、漾所を得たり賢しと、本庄重長・直江・齋藤等、横合に馬を入れ、四方八面に追廻し、悉く切崩し、首取る。風彌〻强うして、城中一時に燃上り、栖籠る所の上下、二千餘燒死して、城は卽時に乘取りける。越後勢、手柄高名樣樣なりけるを、高所より景勝、見物せられければ、晴ならずといふ事なし。七戸二箇所の城、卽時に攻落し、卽ち爰に陣取り、人馬の息を休められける。九月二日に

七戸二箇所の城沒落

は、氏郷、先手にて九戸の本城糠部指して、押寄する所を、堀尾帯刀吉晴は、上の御検使にて、毎日後陣に控へ、軍に逢はざる事を無念に思ひ、本陣を未明に忍出で、九戸指して駈付くる。　氏郷が先手蒲生左門・蒲生千世壽丸・横山備中守・北川土佐守・小倉作左衛門等、糠部の城を取巻く所へ、堀尾帯刀二千計りにて押著、先へ張出でんと仕られけるを、氏郷が先手、大將分の者共、今度の先陣は、氏郷一人承り候處に、狼藉なる御振舞、軍法を破られ候とて、遮り止めけるに、堀尾、大音揚げ、秀次の御下知にて、今日の先驅、吉晴承りたり、己等如何でか存ずべきや。　其處退候へと呼んで、蒲生が先備を押破りて、塀下へひた〳〵と付、蒲生が勢、なじかは怺ふべき、堀尾に先をさせじと、鬨の聲を揚げ、一度に瞳と攻懸る。　城中より目の下に見下し、差詰め引詰め射立てゝ手負・死人數を知らず、寄手攻呻んで見えける所へ、氏郷、銀の鯰尾の甲に、黒の馬に乘り、只一騎乘廻り、指麾を振つて、何とて軍法を破り候ぞ。　一國一城の城攻に、人損じては、不覺の至りなり。　堀尾も擧げられ候へと怒りければ、堀尾も氏郷先手も、攻口をくつろげ、柵・竹策を付け、兵糧詰にせんと觸廻し、遠卷にぞ

したりける。九月六日、上杉景勝も一萬計りにて、糠部城へ詰められければ、氏郷の軍兵共、先を先に仕寄りける。明くれば七日に、諸口の寄手牒し合ひ、二の丸を攻取らんと押寄する。先日、本望を達せざる事を、無念に思ひければ、堀尾吉晴、旗を押立て、無二無三に懸りて、二の丸へ乘入りたり。城中の兵共、少も騷がず、三方の矢倉より指取り引詰め、弓・鐵炮を調へ、雨の降る如く、筒先を並べて、散々に射立てければ、堀尾が兵共、多く射伏せられ、痿む所を本丸より三方の門を開き混甲二十計り拔き連れて、切つて出でたるに、堀尾、なじかは怺ふべき、賴み切つたる郎等共、數十人討たせ、殘る兵共は、大將堀尾諸共に、門外へ追出され、黑雲の風に、渦卷く如く、一二町餘り敗軍しけるに、敵も追すがりてぞ出でたりける。家康家老井伊兵部少輔直政は、一色の亦備にて、門脇半町半に控へたるが、此有樣を見て、直政、蠅取の馬印を振はずば、懸れ兵共と、眞先に喚んでかく。木役土佐守・川手向坂、之を〔脫アルカ〕主を討たせじと進む所に、何とかしたりけん。菅沼江左衞門と名乘りて、一番に鑓を入れたれば、殘兵共なじかは痿えし。續いて鑓を入れ、煙塵を立てゝ攻戰ふ。

堀尾吉晴の武勇

九戸落城
奥陣靜謐

左は越後勢、高所に立て見下し、右は氏郷が本陣にて、後數の前の晴軍、互に引くなと罵る所へ、堀尾帶刀精兵七百餘にて、取つて返し、雲霞の如くなる敵を、南方へ駈破り、脇をも見ず、二の丸へ乘入らんとす。城中の軍勢共、鑓・長刀の切先を揃へ、待懸け、二の丸の一番乘堀尾帶刀が兵何某と名乘りて、乘上げ〳〵する所を、突き落し切拂ひすと雖も、大將帶刀、大の眼を瞋らし、四方を下知して、眞先に飛入りしかば、相從ふ兵共、呼んで攻入りたり、氏郷が先手、並に井伊直政が備、吾劣らじと乘入りしかば、七日の午の刻に、難なく二の丸を乘取りける。今日の働、堀尾に如くはなしと、諸手一同に稱歎せり。斯くて、本丸計りになりけれども、城中矢間配丈夫にして、寄手も攻め草臥れ、三十日餘、竹策攻にして居たるに、九戸權之丞返忠して、城主左近は、兄たりと雖も、討果て、左近首を持ち、降參に出でければ、九戸城は落ちにけり。然れども九戸權之丞をば、秀次卿、御成敗なされ、奥州則ち靜謐す。扨上使として、石田治部三成罷下り、政宗が本領米澤領を召上げられ、今度の戰功莫大なりとて、氏郷に加増として下されけり、葛西・大崎をば、替地として、政宗に

下さる。扨米澤城には、蒲生四郎兵衞居住せり。秀次・家康へも、將軍より御朱印の御書を遣され、景勝へも御褒美として、御直書に、正宗の御太刀一腰、山鳳といふ名馬一匹、瓢簞の御茶入を下されけり。斯かりける所に、其年の霜月、政宗は在京しながら、大和田八兵衞・牛起惣兵衞といふ者に、一揆起すべき由の廻文を持たせ、米澤領へ廻しける所に、二人の使心變して、其狀を持ち、會津の城へ駈込みけるに、氏鄕、此廻文を京都へ差上げられければ、秀吉公、御憤深く、政宗が首を刎ねらるべき所に、政宗陳じけるは、大和田八兵衞事は、某右筆にて候故、謀書仕候と覺え候。其仔細は、吾等判形の鶺鴒には、心覺の爲め、幽に眼を仕候。此觸狀の鶺鴒判には、眼無之候間、謀判の所を聞召し、開かれ下され候へと申上ぐる。實もとて方々より政宗が狀共、數十通召上げられ、御覺あるに、彼仁が申す所に、少も疑ひなかりければ、相違なく召出され、政宗は鰐の口を遁れたる心地して、大息次きてぞ居たりける。されば政宗廿五歲、雛若たりと雖、東夷に生立ちて、謀策に長じ、狡黠多く、佞殆んど安祿山が後を追ひしかば、度々の奸謀、皆中拔き、氏鄕が忠功・貞心、常に讒人の

謀ありけるこそうたてけれ。斯かりしかば、出羽・奥州、悉く靜謐し、今は日本國中に、頭を上ぐる者なかりけり。されば妙・九戸兩年〔填ヵ〕の合戰、事故なく、大利を得し事は、皆蒲生が武勇より出でたりとて、氏郷が猛威の程を恐れぬ者はなかりける。

朝鮮蜂起并肥前國名護屋城普請

秀吉公、已に登龍の運に乘じ、汗馬の骨を積み給ひしかば、東南に雲治り、西北に風靜なり。故に萬乘を狹みて、四海を鎭撫し給ひしかば、靡かざる國もなく、隨はざる所もなし。然りと雖も、年六十に近付き給ふ迄、若君なかりしかば、愁歎し給ひし所に、故淺井備前守長政の娘に、淀の御方、其頃天下第一の美人の聞えありしが、此御腹に御懷妊ありて、天正十九年辛卯四月七日に御産如何にも容易にして、然も男子にてまし〱ける。桑の弓・蓬の矢、玉葉の慶賀、天下に偏く、當家も他家も押並べて、御賀申されければ、門前恰も市の如し。諸大名御馬廻の人々、鎧・甲・太刀・長刀・馬鞍・小袖・金銀の捧物、諸寺・諸山より御祈禱の卷數、殿中庭上・門前に充滿たり。將

鶴松丸誕生

軍、悦び思召し、若君御名をば鶴松丸と名付け參らせ、寵愛日々に盛なり。禁中より忝くも勅使として、中山大納言親綱卿、聚樂へ參らる。上も下も押並べてさゞめき渡りてぞ悦びける。かゝる目出度き折節、御舍弟大和大納言秀長卿は、久しく病の床に臥し給ひ、針・藥驗なうして、其夏の頃、薨逝し給ふ。大和・紀伊・伊賀三箇國の主として、殿下に輔佐し給ふ。國家の柱石と思召しける上、只一人の連枝にて、千年の春を契らんと、思し準ひ給ひしに、誘ふ嵐の烈しさは、棠棣の片枝散りぬれば、殘る梢も寂しく、歎きの中に危ありて、悲歎の涙、未だ乾かざるに、若君鶴松丸、假初に惱み給ひしが、色々の養生治術を盡されけれども叶はず、七月初方忽に早世し給ひけり。

鶴松丸逝去

秀吉公の御歎、申すも中々愚なり。今歲如何なる年なれば、國家の輔佐と、賴み思召しける大和大納言失せ給ひぬ。一人の若君に後れ、天に仰ぎ歎き宣ひけるは、總角の昔より、同胞の情句深く、浮沈を倶に定め、或時は山野に帷幕を低れ、露霜に甲を晒し、或時は矢石の中に、兄弟共に死命を助け、互に心を一にし、四海の逆浪を靜め治め、苦難を弓馬の道に經て、百人の紅にも彌、增したる弟を先立て、又は五

十の春過ぎて、思寄らざる優曇華の、花待ち得たる綠子を、朝の霜と見なせし事、こはそも如何なる事どもぞやと、悶え悲しみ給ひけり。歎きても返らぬ別の習なれば、五山の僧衆を供養し、滅罪生善の御弔、色々の御追善ありけれども、秀吉公の御思繼綣もなき、胸の雲晴るゝ間もなき淚の雨、餘所の袖迄干しあへず、若しや、せめて慰めと、庭前の花を詠むれば、いとゞ無常の悲みを增し、南樓の月に嘯けば、忘れぬ思猶ほ深し。餘りに詮方なさに、淸水寺に詣で給ひ、三日の御逗留にて、一つは若君亡魂の御弔の爲め、又は歎の深さを、若し忘れ給はんかとの事なれば、公家・武家御供申しつゝ、南坂・北坂に宿札を打ち、色々の幕を打廻しければ、東山の麓、時ならず春に遇へり。秀吉公は、公家・武家の人々、諸道の達者を召され、淸水寺に於て、色々御慰ありけれども、子を思ふ心の闇は晴れやらで、袖は淚の港川、堰止むべき樣ぞなき。斯かる處に、秀吉公屹と思慮を廻し、よしや只思の炎に、身を徒になさんより、先年よりの念願を遂げ、朝鮮國を切隨へ、夫より大明へ打入り、四百餘州の皇帝とならんと、俄に思立ち給ひ、諸大名を召集め、秀吉公宣ひけるは、

秀吉關白を秀次に讓る
朝鮮征伐

古より異國の日本を攻むる事七度なり。然れども本朝より、異國を攻めし事、神功皇后より以來、其例を聞かず。千載の間寥々たり。然るに秀吉、下賤の中より出で、武勇の名譽長ぜるに依つて、一天四海を掌に握り、忝も三台槐門の上に昇る。然りとは雖も、六十に臨める身にて、たまさかに待ち得たる一子を失ひ、掌の中の珠、碎けて返らず、泉下の璧埋れて見えず。悲の思ひ胸に滿てり。多からぬ餘齡爰に極り、明日の命も知り難し。然れども弓矢の長者、四海の鎭撫の身として、此難に命を亡はん事、口惜き次第なり。今猶子にてある秀次に、關白の職を讓り、帝都の守護に殘し止め、本朝の政務を渡し、秀吉は大明に攻入り、四百餘州を手に入れんと思ふなり。去年朝鮮の使に便り、大明征伐の事を告ぐる處に、今に至る迄、兎角の返事なし。是咎むべき第一なれば、先づ朝鮮を征服し、朝鮮吾に隨はゞ、彼を以て先手とし、大明を初、天竺・韃靼・紅夷・交趾・暹羅・呂宋・南蠻に至る迄も、悉く切隨へんと思ふなり。諸大名在國の輩は、早々上洛仕るべしとぞ仰せける。こは如何なる事ぞと思ひながら、御諚尤と同じ、誠に珍しき御沙汰にてものかなと、異口同音に申上げ

けれは、秀吉公、御機嫌大方ならず、御酒宴初て萬歳楽を歌ふ聲隆々たり。即ち加藤主計頭清正を召出され、來春、朝鮮陣思召し立つにより、肥前國名護屋に御馬を立てらるべし。主計は、早々筑紫に罷下り、名護屋御城、夜を日に續ぎ、普請成就仕るべき旨仰付けられ、御盃を下されければ、清正謹みて、之を頂戴しける時に、加賀の大守宰相利家、進み出でられ、人多き中に、今度手初の御城普請の事、主計頭承り候。冥加に叶ひ候と、左右に揖して申されけるは、清正身に餘りてぞ覺えける。翌日早天に、清正は京都を罷立ち、筑紫へ下りつゝ、九州の總人數を集め、夜を日に續ぎて、名護屋の城御普請を急ぎける。十月中旬には、奥州退治の大將秀次・家康・景勝・氏郷、大軍を引連れ、九戸一揆大將分の首共、酒に浸し持たせつゝ、皆々京著せられければ、將軍感悦斜ならず。即ち御對面なされ、各々御感の御諚淺からず。十二月中旬には、名護屋御城も、普請きらびやかに出來せしかば、清正以下の筑紫大名達、皆越年の爲に、上洛ありければ、秀吉公早速の成功をぞ感じ給ひける。されば天下を、秀次に渡すべしとて、十二月廿八日、俄に關白を讓り給ひ、秀吉公をば太閤とぞ

申しける。斯くて來春、朝鮮國御進發の陣觸あり、内々人々つぶやきけるは、太閤御愁歎の餘り、狂人となり給ふかや。近年、兵亂打續き、一月の間も甲冑を放さず、去年の夏、東夷して、北條退治の後、奥州に凶徒殘りて、去年といひ今年といひ、動亂ありしかども、此頃已に一統に治り、天下に敵といふ者なかりしかば、今は早や劍戟を箱物とし、弓を韜に納めつゝ、數年の苦勞を忘れんと、豫て有增に樂みしに、今又思寄らず、高麗・唐土に到りなば、上下の費、人民の歎き、申すも中々疎なるべし。漢の武帝の武を黷の謗り、隋の煬帝の征伐を好みし禍、只今到りなんと、心ある人は眉を顰め、又氣早なる人々は、扨も屈せざる志かな、弓矢に携ふる輩は、靜かなる境界にて暮すべき事、本意にあらず、誠に將軍は、あの氣にてこそ、天下は取り給ひたれ。あはれ武士の手本、心地よき人かなと、譽むるもあり。兎角知れぬ人なりとて、嘲笑も多かりける。

朝鮮征伐記第一　終

朝鮮征伐記第二

朝鮮發向兵船仰付けらる并海陸御軍法

朝鮮退治の儀、諸臣の衆議一同なりければ、秀吉公大に悦び給ひ、天下へ觸を廻し、先兵船を造るべしとて、船大將九鬼大隅守嘉隆に仰せて、伊勢浦・紀州浦にて、大船數百艘造られける。其中に第一の大船あり。名を日本丸とぞ號しける。其外、大あたけ・大關・小關・兵船・小早・目盲船、色々の船共の夥しさ、耳目を驚かさずといふ者なし。船檣・水主隱・矢切・鐵炮挾間・船張頭・物見窻、金銀の彫物、家々の定紋、種々の繪樣を盡しければ、彼の晉の王濬が吳の孫皓を攻めし時、兵術を極めし弘舸巨艦も、斯くやと思ふ計りなり。其外中國・西國・九州、船便よき大名共、渡海の爲め大船を造り、兵糧を蓄へ、軍勢を促し、來年壬辰正月に先手を遣し、二月・三月には、殘ら

秀吉兵船の定

ず渡海すべしと仰出され、其定に云、

一、東は常陸より、南海を經て四國・九州に至て、海に沿ひたる國々、北は秋田・坂田より中國に至て、其國々の高十萬石に付て、大船二艘づつ用意可ㇾ有事。

一、水手の事、浦々家百軒に付て、十人づつ出させ、其手々の大船に用可ㇾ申候。若有餘の水手は至二大坂一可二相越一事。

一、藏入は高十萬石に付、大船三艘・中船五艘づつ造り可ㇾ申事。

一、船の入用大方勘へ合候て、半分の通算用、奉行方より請取可ㇾ申候。相殘る分は、船出來次第請取可ㇾ申事。

一、船頭は、見計次第、給米等相定可ㇾ申事。

一、水手一人に扶持方二人分、此外妻子の扶持遣し可ㇾ申事。

一、陣中小者・中間以下女扶持、其者の宿々へ遣し可ㇾ申候。是は今度、高麗・名護屋へ立申者、不ㇾ殘如ㇾ是可ㇾ遣之事。

右條々無二相違一令二用意一、天正二十年の春、攝州・播州・泉州の浦々に令二著岸一、一左右

朝鮮陣軍役の定

可有之者也。

天正十九年九月廿日　　秀吉朱印

朝鮮陣軍役之定

一、四國・九州は高一萬石に付て　六百人

一、中國・紀州邊は　五百人

一、五畿內　四百人

一、江州・尾張・美濃、伊勢四箇國は　三百五十人

一、遠江・參河・駿河・伊豆を始めて東は何茂　二百人

一、若州より能登迄は　三百人

一、越中・越後・出羽　二百人

右之分、當年極月に至て、大坂へ可致參著候。出勢の日限、重て可被仰出候。守其旨、宿陣不指合樣に、其意を成可申者也。

天正十九年九月廿日　　秀吉朱印

朝鮮陣に就く掟

就二朝鮮陣一掟條々

一、人數押の事、六里を一日の武者押と定。乍レ去在所之遠近、六里の内外、奉行計次第たるべし。卽宿奉行定の條、無二相論一萬順路に可レ有事。

一、旅宿の宿賃は、出し申間敷候。薪・秣等の代は、宿主と相對し出し可レ申事。

一、津々浦々番等に有レ之者、屋賃の儀出し可レ申候。鐵炮の者などの儀は、其主人出し可レ申事。

一、宿泊にて扶持方、馬の飼料可レ行レ之事。

一、押買・狼藉・追立夫。其外萬非儀有間敷事。

一、泊々宿々に於て、理不盡之儀仕出す者は、當座に咎かゝり、口論に及間敷事。其主人の假名・實名能々記置、其上を以可二相斷一事。

一、於二何方に一も、徒者一揆の徒黨がましき樣子、潜に可二告知一、一廉御褒美可レ下事。

一、里々に早道二人宛置候て、名護屋と大坂との用所、早速相叶樣に可レ有レ之事。

右條々堅可二相守一、若違背之儀有者、奉行迄可二告知一者也。

天正十九年九月廿日　　秀吉朱印

倭寇を八幡と號する由來

斯くの如く二三通相認め、御陣觸ありけるは、來年正月に先陣の軍兵、早く渊仙に進み、二月・三月には、諸軍勢悉く渡海致すべし。東國の軍兵は、船手に便宜あらざる間、名護屋の御本陣に在陣仕るべし。南海・西海は船手なれば、其國々の住人を皆、朝鮮へ渡海さすべし。大坂御留守並に京都守護には、當關白秀次公、洛中の仕置は、古田兵部少輔種長なり。倩〻舊記を考ふるに、足利公方等持院尊氏公、天下草創の後、四海大に亂れしに依つて、筑紫には南朝の帝、吉野殿より、征西將軍宮懷良親王を置き給ひしに依りて、親王より、年々に軍兵を遣し、大元・高麗を奪ひ、近年は周防國大内助義興・同義隆が兵共、又は九州の一揆共、年々に大明へ渡り、官廨を掻擾り、津泊を侵奪し、其蹟、昔日神功后皇三韓退治の佳例を追ひつゝ、旗の紋には八幡と書き附けたり。是に依りて大明人、日本の兵船をば八幡の倭寇と號す。是よりして、海賊をば押並べて、八幡とは呼びけるなり。さる程に、將軍秀吉公は、家康・景勝・利家を召集め、評議ありけるは、先朝鮮へ使者を遣し、去年の御返事を申上げざるを咎

め、彼が心を窺ひ量り、大明へも使節を遣し、其左右により、秀吉自身渡海あるべしとて、丹波國住人内藤飛驒守如安、其頃文學の譽あれば、是を大明の使節と定め、小西攝津守行長に差添へて遣さる。行長は遠く己が聲名を播めん爲に、内藤を改め、小西と稱し遣しける。小西飛驒守如安は、先立ちて渡海し、朝鮮王へ書翰を付け、夫より朝鮮の案内者を乞ひ、大明へ入らんとぞ進みける。

内藤如安大明に使す

朝鮮進發軍勢備定

先年は二備に分つべしと議定ありて、一方の先手には、小西攝津守行長を大將にて、宗對馬守義智・松浦刑部卿法印鎭信・有馬修理大夫・大村新八郎・宇久大和守等、其勢一萬八千七百人、一方の先手には、加藤主計頭淸正を大將にて、龍造寺又八郎正家・同家來鍋島加賀守直茂・相良宮内少輔義次を初、二萬二千八百餘人、小西一組と鬮取にて、二日代りに先を懸け、三番は黑田甲斐守長政・大友豐後守義統、其勢一萬二千餘、四番は島津薩摩守義弘を大將にて、毛利壹岐守・高橋九郎・秋月三郎・伊東民部

船手の軍兵

丞・島津又七を先として、其勢一萬七千餘、五番は福島左衛門大夫正則・戸田民部少輔吉俊・長曾我部土佐守元親、其勢合せて一萬二千三百人、六番は蜂須賀阿波守家政・生駒雅樂頭正俊、其勢合せて一萬二千七百人、七番は小早川筑前守隆景を大將にて、毛利久留米侍從秀包・立花左近將監宗茂・高橋主膳正・筑紫上野介等、相集めて二萬千七百人、八番は毛利安藝宰相輝元・宇喜多備前宰相秀家、其勢合せて四萬五千人なり。船手には九鬼大隅守嘉隆・藤堂佐渡守高虎・脇坂中務大輔安治・加藤左馬助嘉明・來島出雲守通泰・菅平右衛門尉有長・桑山小藤太兄弟・堀内安房守氏常・杉若傳三郎等を大將にて一萬餘、海陸の軍勢都合廿五萬四百餘人の著到なり。右の定の如く、早々罷越すべし。但し順風なく候はゞ、一日に獨々見屆け、島傳ひに罷越すべし。自然日和惡しきに渡り候て、馬一匹・人一人なりとも、取落し候はゞ、曲事たるべし。日和能く候に油斷して罷越さゞるは、越度たるべし。次に書付の人數の外は、悉く名護屋に在陣仕るべし。一人にても渡海仕候はゞ、曲事たるべき事。次に、今度御陣は、船肝要に候間、船數用意一分の手柄に候間、諸勢船著に急ぎ、船奉行共をして

割符請取らしめ、渡海の衆次第に繰越し申すべく候。朝鮮の地へ相越候はゞ、手負の船共、其主人として奉行を一人相著け、對馬へ差戻し、組々人數能越すべし。次に日本へ出仕の儀、朝鮮王御請を申さば、右定の次第繰に渡海せしむべし。自然御請申さず、異議に及ぶに於ては、朝鮮近き島々へ、人數悉く移し、船揃仕候て申談じ、朝鮮の浦々へ一度に著岸せしめ、陣取を堅くして、普請丈夫に申付くべし。然らば則ち九州・西國・中國の人數は申すに及ばず、淡路衆九鬼以下、右同前に一度に罷越すべきものなりと、一々に仰出されける。扨又、將軍御本陣肥前國名護屋在陣の人々には、江戸大納言家康・大和中納言秀俊・加賀宰相利家・上杉宰相景勝・織田内府信雄・入道常眞・同津の上野中將信兼・結城參河少將秀康・蒲生會津少將氏鄕・佐竹常陸侍從義宣・伊達陸奥侍從政宗・最上出羽守義光・森右近大夫忠政・丹羽五郎左衛門長重・京極大津侍從高次・里見安房守義堯等を初とし、宗徒の大名・小名百廿三人、都合十萬五千四百十五人とぞ註しける。

名護屋在陣

朝鮮國由來

抑〻朝鮮國と申すは、古の箕子が封國なり。周の武王、殷を亡して後に、洪範の書を箕子に受け、即ち箕子を朝鮮に封じ、八條の約を施す。此故に淫盗なく、門を夜扃さず、文條を省簡して信義を用ひ、聖賢の作法厚きを得て、柔謹風をなす。秦には遼東の外徼に屬し、漢の時には郡縣の如くにす、五鳳元年に蘇代公といふ者あり、大なる卵を蘿林に得たり。此卵かへりて嬰兒と成り、長じて聖德あり。六村之を異として、立てて崇とし、主君と仰ぐ。時に閼英氏に一の井水あり。神龍、其井の中より顯れて、右の脇より一人の女子を生ず。又聖德あり。人之を二聖といふ。高麗・百濟〔新羅脫か〕鼎の如く峙ちて、三韓に王たり。唐の高宗皇帝の時に至りて、新羅強大にして、高麗・百濟を幷せて持つ。其後五十五世を經て、衰微して高麗の王建に降る。是れ即ち、海梁貞明六年なり。王氏三十三世迄高麗を持つ所に、三十二代の王顓無道なり。國相李仁人謀叛を起し、之を弑しつゝ辛氏の禑と昌とを立てゝ主君としけ

李成桂朝鮮王となる

るが、程なく皆廢せり。國民、前の亡君王氏を慕ひて、國君を定め、王瑤を立つ。未だ一年もせざるに、門下侍郎李成桂、其君王瑤を廢して、自立して王となり、初て高麗の國號を改めて朝鮮と號す。之れ明の大祖洪武廿五年の事なり。李成桂終に明朝へ朝貢を奉り、年號正朔を受けて、今に子孫相續いで、當今を李昖王といふ。朝鮮に八道あり。京畿道といふは、卽ち漢陽城の居中なり。江原道・咸鏡道、是れ何れも北國の兩道なり。平安道・黃海道、卽ち平壤筋にて、東道の二道なり。忠淸道・慶尙道、卽海の東南にあり。全羅道は海の西南にあり。以上海道八箇道、其北は女眞國に隣り、東北は兀良哈に連り、其末は蝦夷と一つにして、日本の奥州と相對せり。朝鮮の西北は、鴨綠江といふ、入海に到る。之れ卽ち大明の境なり。東西二千里・南北四千里、大明の遼東の東南にあり。三面は濱海にして、日本と遙に對す。只一海を隔てたり。釜山海は、朝鮮の海口、日本人の到る津なり。對馬より其渡四十八里、一日にして渡るなり。

朝鮮陣濫觴

秀吉松原瀬一戰に於ける軍功

今度、朝鮮退治の事、將軍俄に思召立つと雖も、其志一朝一夕の故にあらず。秀吉公未だ猿若と申せし時、初て信長公へ召出され、小者・中間並の奉公たり。信長公も其頃は、上總介とて、尾張の國主尾張左衛門佐義忠家老にて、隣國の敵と挑み戰ふ最中なれば、秀吉公も方々御陣の供し給ふ。此後へと勞功を積み給ひしかば、信長も他に異に思召して、木下藤吉と改名させ、五十石の所領を下し給ひ、初て侍並にぞなされける。是れ秀吉廿五歳の時とかや。其翌年永祿五年の秋、美濃國松原瀬にて、齋藤龍興と信長合戰ありし時、敵方勝に乘り、味方危く見えし時、秀吉立悚へ、諸人の目を驚す程の鑓を、一時の中に兩度合せ、大敵を突退け給ふに、味方大利を得、秀吉も鑓疵二箇所負はれしかば、信長深く感じ給ひ、二百石の所領加恩し給ひけり。夫より晝夜粉骨を盡し、永祿九年九月に、秀吉三十歳にて、初て洲股川の取出預り、武功を以て美濃の地を切取りしかば、信長痛く御感ありて、其切取地三

千石ありしを、殘らず下されける。是より程なく、美濃一箇國、信長切隨へ給ひて、功臣の恩賞を行はれけるに、一番に秀吉に三萬石を下され、爾來次第々々に經上り、江州横山の城主となり、六萬石を領せられけるぞ目出たけれ。秀吉の氣象、第一飽迄大膽不敵にして、忠義の志厚く、常に古人に馴昵みて、戰場の物語を聞く事を甚だ以て好まる。其嗜眞實にして、何事も大爽に、渡世の營みには、極めて愚鈍なれ共、軍の道には、十を悟れる才智、不學して道を知る事、孫子・呉子が術に叶ひ、懸引自由を得たりける。去れば信長の好み給ひし器量は、第一、勇才兼ね備り、國家の助にもなるべき人、第二、名士にはあらざれども、忠義の志厚く、武勇にはたはりありて、人數を安く押廻すべき力逞しく、駈引圖を脱れざる人、第三、自身手柄度々に顯く、萬事の吟味素直にして、贔屓偏頗なく、戰場にて諸人の目符となるべき人、之をぞ本に好み給ひしかば、秀吉の素性などかは信長の御目に入らざるべき。日々寵愛彌々増しゝかば、穰苴も晏嬰の薦を得ず、孔明も徐庶の智に及ばず。戰功重りつゝ、程なく大名の列に加はり、羽柴筑前守に任じ、西國退治の大將として遣されし時、信長公、

常にさゝせ給ひし采幣並に茜の御小袖を発下され、中國十四箇國一圓に下し給はり、早速毛利を退治仕り、其時に九州を退治あるべし。後より御人數追々下さるべしとぞ仰出されける。其勢、只韓信・張良が高祖に仕へしに異ならず。秀吉心早き人なり。殊に此時、寵遇傍人に勝れ、御幸を発し下さる上は、早速中國を討ちて、毛利・宇喜多・浦上・赤松等一々に退治せしめ、勝を瞬目の中に得つゝ、天下の一統、五年に過ぐべからずと、聞くも冷しく申上げられければ、御前伺候の人々も、皆快然の氣をぞ催されける。信長公、誠に顔色打解け給ひ、御酒宴始まりて、數盃の興を添へられければ、秀吉頭を地に付けて、恐多き儀にて御座候へども、此上は先手にての賞罰・駈引の下知を、秀吉次第と仰付けられ下さるべく候。其仔細は、秀吉敵地に討入ると雖も、駈引の是非・士卒の忠否・戰場甲乙の所、一々安土迄註進し、度々の品品、皆御下知を伺ひ奉るは、道遠くして其時刻延び、又士卒等秀吉が下知を輕んじ、大功必らず立つべからず。去れば軍陣の事に於て、駈引・挑戰・所待に利を得、進みて勝を決し、退きて後を全する所、一々に直に見計ひ、又は軍兵共の剛臆を吟味し、

賞罰を行ひ、萬事の沙汰、秀吉自分に支配仕らば、諸人皆軍法を重じて、大功速にな
り候はん事、韓信が眞王の印を得て、齊國立所に治まりしに異なるべからず。是れ
誠に將も能くして、君不御者勝と、孫子が示す所らずや。今秀吉、身不肖なりと雖
も、大將の號を発せられ、朱の御傘を下し給ふ上は、彌〻先手の賞罰、我儘に申沙汰
し候樣に、御免しなされ候はゞ、降參の者をば、卽ち是を赦宥し、從はざる者をば、立
所に攻め亡し、機に臨み變に應じて、自由に征伐仕度候。今御旗下に吾と肩を並ぶ
る大名を算へ候に、柴田修理亮勝家を始め十三人あり。然れども彼等を差置れつ
つ、此秀吉に西國退治の大將を仰付けらるゝ事、天運の至りとは申しながら、併君
の御鴻恩の所、勝げ計るべからず。只今御側に近習仕る野々村三十郎・福富平左衞
門・菅谷九右衞門・森庄藏・矢部善七等は、一手の大將仕るべき者なり。されども彼等
を人持になされ、御先手へ遣され候はゞ、旗本手薄くなり候に付き、少身にして奉
公の功を積ませ、中國御手に入りなば、日本國中誰か敵對仕るべき、彼近習の輩に一
箇國宛下され、大名に取立て給はゞ、忠賞は後輩の義信を勸め、大功は日ならざるに

速成たるべし。さ候はゞ、秀吉は夫より九州を切隨へ、大友・島津・阿蘇・龍造寺・菊池・戸次・松浦・大村・有馬等を手に属くべし。扨筑紫九箇國の一年の所務を下され候はば、爰にて勢を揃へ、一箇國に一萬の勢積にして、九州にて九萬なれば、兵糧を蓄へ大船を造りつゝ、高麗へ攻め入るべし。秀吉が戰功の恩賞と思召し、朝鮮を切取りに仕るべき旨、一通りの御朱印を下さるべし。御裁書なくしては、朝鮮に入るとも、八幡か叛逆かと咎あるべければ、御朱印を先立てゝ、君の御太刀の光を以て、朝鮮を切隨へば軍に名ありて、人民悉隨ふべし。朝鮮全く手に入らば、多くある若者の中、御一人大將として渡海させ申し、大明へ切込むべし。四百餘州とは申すとも文學長袖の國なれば、討隨へん事容易かるべし。片端に切伏せ、四百餘州の大王、北京の皇帝を生捕り、日本に引渡し、六條河原に面縛し、君の御勇武を震旦に顯して、夫より五天竺に攻入り、馬の通ふ・舟の通だに候はゞ、地獄・極樂迄も切入り、昔に聞ゆる閻魔大王をも、日本へ御歸降申上げさせ、牛頭・馬頭の鬼共をも日本に渡しつゝ、一一に頭を刎ね三國一統に打治め候べしと、憚る所なく申上げられければ、御前伺候

秀吉中國表の軍功

の人々之を聞き、皆興を醒して驚きあへり。信長公も彼が大膽を甚だ感じ、大に笑はせ給ひて、西國成敗の事は、安土へ註進するに及ばず、如何樣にも計り侍れと、直に免し給ふ。見る人聞く人、押並べて舌を振はぬはなかりけり。去るは秀吉の天性、智謀・雄略人間の及ぶ所にあらず。孫子・李靖が難とする軍術、成らずといふ事なく、郭子儀・李良器が大功も、今を恥づる計りなれば、先づ播州にては、佐用・上月を退治し、三木の別所・神告〔吉イ〕・志方・高砂・野口・淡川・波志谷の城々、三年の内に攻落し、宇野聞島を切隨へ、因幡にては、鳥取城を取詰め、山名豐國を手に付け、吉川隆久・中村春次・森本等が首を取り、備中表にて、巣蛛塚・冠の城・河屋・高松等の要害を攻落し、山崎・寶寺にて、明智と合戰、江北柳が瀨にて、柴田に切勝ち、加賀に小山、越中に礪山、四國には長曾我部・安宅・十河・道前・道後・村上・得井を手に付け、西國島津、東國には小田原の北條一類、奥州會津・白河迄、十年の内外に切平げ、六十餘州を一統し、信長公の御前にて、申されける廣言に少も違はず、只今朝鮮征伐し給ふぞ勇々しき。信長公、元來猜疑の心ありて、功ある智臣を忌み給ふ。秀吉早く推量し、日本にては恩賞を受く

まに、高祖を關東に下さるべしと申上げし事、韓信・彭越が曾て知らざる所にて、張良のみ獨知る所なり。高祖の寛仁大度なるさへ、猜疑起して韓彭葅醢たりき、矧や中人以下の主君に仕ふる輩、高鳥盡良弓藏、敵國亡謀臣亡といふ事を知らざるべけんや。されば秀吉公、丁固の如く、荒木攝津守村重・佐久間信盛・林佐渡守光長・水野下野守信元・伊賀守仲重等、忠功ある大臣數輩、身を亡し、信長公も明智が爲に亡び給ひしこそ、功成り名遂げて、身退くは天の道とは知られける。誠に秀吉公は、物ごと眞實を本とし、少も偽心なく、今迄敵對の者共も、咎を謝して降參し、一度頼と見給ひては、末代迄變らざる吾心を、天下の人の胸腹に置き、少も疑心なく、第一無欲にして國郡を割與へ、金銀を配ち施し給へば、東國にては家康・里見義堯・千葉國胤・宇都宮・佐野・結城晴朝を初、北國にては、上杉景勝・佐々成政、西國にては、島津・大友、皆悉く上洛し、秀吉公を尊敬し、親昵する事、日々に盛に時々に増しかば、帝都の繁昌四海の泰平、此時にありしこそ目出度けれ。誠に秀吉公賤しき人なるにより、或時は民百姓の好となり、或時は小者・歩走の雜人となり、淺ましき有樣たりと雖

も、第一は信長といふ明君を主と頼み、第二に秀吉慷慨の大志ありて、才智大剛無雙なりしにより、年を追ひ月を逐ひて、次第に經上り、攝政關白の訓禮を極め、一天四海を掌に握り、天竺・震旦迄威光を輝し、終に位正一位に至り、豐國大明神と祀られ給ひしも、只大方の事にあらじと、渇仰の頭を傾けざるはなかりける。

秀吉公書翰を琉球國に贈る

朝鮮國征伐の事、彌〻定りしかば、大坂の城在番衆・京都在番衆も夫々に上洛し、面々請取の處へ集る。東國・北國の軍勢も、毎日引も切らず京都に上り集る。國々にての船用意、在々所々にての支度、中々夥しき事共なり。洛中の繁昌、大坂・堺・大津の賑、言語を絶する計りなりしかば、所々の富貴津々として泊り、商賈人時を得たりとぞ見えたりける。秀吉公宣ひけるは、琉球國は、大明と日本の間にありと雖も、去る天正十一年癸未の秋、日本へ使を渡し、自今以後、毎年貢を入れつゝ、日本へ隨ふべしと和睦を乞ひしが、其後終に其沙汰なし。今度能き序なれば、一通の書翰を遣し、

秀吉の琉球國王に送れる書翰

其不信を責むべしとて、一書を遣はされける。其詞曰、

大日本國關白秀吉朱印下　　琉球國

夫吾邦百餘年、群國爭雄、車書不同軌文。予也降誕之時、以有可治天下之奇瑞、勃興于蓬茨、顯武威之運、不經十年而不遺彈丸黑子之地、國中悉一統也。六十餘州既入掌中、故殊域遐方來庭者不少、吾今起百萬大兵、將征大明也。蓋非吾所爲、天所授也。爰備琉球未通聘帛、故先雖欲使群卒討其地、原田孫七郎以商舶之有利故、屢往來于其地、頃日俾近臣達告吾曰、速赴琉球、說本朝征明國之旨、則可解辯獻贄而來享者不可疑焉云々。不出帷幄而决〔決イ〕勝千里者、古人至言也。故聽褐夫言而暫宥之、來春可營九州肥前、不移時日可偃降幡而來服。若佃匐膝行遲滯、則其必遣大兵、燒琉球國內、鏖其島民而斬國王、懸頭於闕下者、如指于掌、汝勿悔、不詳。

天正十九年

と書認めて、琉球へ遣されければ、琉球王中山尚寧大に驚き、貢臣の鄭迵を使とし

て、秀吉の書簡を齊へて、大明國へ遣し、福建の巡撫使趙參魯を以て、日本倭寇大軍にて、朝鮮と大明へ入寇せんといふ由を、朝廷へ奏聞し、諸臣に觸れ送る。又閩人丘福旺は、近年薩摩に行きて、許儀と名を變じて醫者をしけるが、日本より朝鮮を伐つて、大明へ直に入寇せんといふ事を、慥に聞いて驚きしに、目のあたり日本の諸將・士卒等が、甲冑を輯め、大船を調ふを見て、大に騷ぎつゝ、急ぎ大明に歸り、同郷の朱均旺と相談し、福建の守臣に依つて、九月には日本入寇すべしと告げ知らす。守臣之を以て朝廷へ奏聞しけれども、明帝未だ曾て恐れ給はず、諸大臣も之を事とせず。只海邊の兵士に勅して、番船を調へ用心する計りにて、さまで驚く事なければ、琉球も嘲笑ふ計りにて、況して日本へ仔細の返事もなかりけり。

朝鮮國御先驅の軍勢京都進發

年光矢の如くなれば、天正十九年も暮れ、新玉の春に立歸り、明れば文祿元年正月朔、在京の大名・小名出仕の儀式を調へ、太閤、御殿並に當關白秀次公御所へ出仕あ

秀吉小西行長加藤清正に制札を與ふ

り。同じく元三の祝も兎や角と事濟みければ、正月五日、加藤主計頭清正・小西攝津守行長を召出され、今度、朝鮮國征伐の御先驅仰付られ候。清正には、鍋島・相良を相添へられ、行長には、宗對馬守・松浦・有馬・大村・宇久を相副へられ候間、早々筑紫に罷下り、三月上旬に朝鮮國に攻入るべき旨、秀吉公直に仰出され、清正には、朝鮮國にての制札、並に軍書一卷に南無妙法蓮華經の御旗を下し給ふ。此御旗は、秀吉公、中國拜領の時、信長公より免し給ふ吉例に任せ、下し給ふ。行長にも、制札並に軍書一卷、其頃日本無雙と聞えたる大黑の御馬に、梨子地の鞍置きて下し給ふ。兩人面目色に顯れてぞ見えたりける。清正申上げられけるは、御當家吉例の御旗を下され候事、一世の名聞何事か之に如かざらんや。御旗を差し、猛威を天竺・震旦に顯し、御威光を以て、名を異國に耀し候はん事は、武家の本望、只此一儀にありと申上げられ、行長と同じく、御前を退出し、妙法の御旗を押張りて、京都を立ち、行長は小西の家の符なれば、紙の藥袋に朱の丸を書きて馬印と爲し、大黑の御馬を眞先に引かせ、正月五日に、同じく京都を打立ちければ、二組の軍勢四萬餘騎も、同日に京

諸軍勢京都出發

家康等秀吉を諫む

を打立ちける。其行列の勇々しさ、見物の上下目を驚せり。清正・行長等、已に先立ちて下りければ、黒田甲斐守長政・大友豐後侍從義統・島津兵庫頭義弘・毛利壹岐守・高橋九郎・秋月・伊東・島津又七郎・福島左衞門大夫正則・戶田民部少輔吉繁・長曾我部元親・蜂須賀阿岐守家政・生駒雅樂頭正俊・小早川侍從隆景・立花・久曾以下の大名・小名押續きて、毎日引も切らず、京都を立ちて打續く、其勢の夥さ、肝を消す計りなり。吾朝は申すに及ばず、唐土・天竺・韃靼・南蠻も未だ是程の大軍を起す事、有難かりし事なりと、思はぬ者こそなかりけれ。斯くて鬧しきに紛れて、正月も經ち如月(きさらぎ)にもなりぬ。二月には、當關白秀次公の聚樂城へ行幸あり、三日の御帶座、色々の御遊觀ありしかば、太閤秀吉公も日々に行在に參り給ひて、天氣を伺ひ奉り、事故なく還御なされしかば、上下太平の風雅に、千秋萬歲を祝ひ參らせける。秀吉公、近日京都御進發に定りける砌、家康・輝元・秀家等御前に參り、申上げられけるは、殿下は名護屋に御馬を立てられ、遠く朝鮮の御下知あらん時に、大明・朝鮮より書翰の往來あらん事必定なり。されば文學の才ある輩を、召連れられずば、此儀に迷惑なる

べしと申上げられければ、秀吉公聞も敢ず、大明・朝鮮兩國へも、吾朝のいろは字を知らせば、書狀の往來其分宜しかるべし。何ぞ足輕に物書・筆者を召連るべきやと宣ひて、更に御承引なかりしが、其夜熟々と思案ありて、相國寺の承兌長老・南禪寺の靈三長老・東福寺の永哲長老三人を選出し、名護屋御供とぞ仰出されける。京都御進發は、三月廿六日と仰出されける所に、陰陽頭・天文の輩諫言を奉りけるは、來る廿六日は、四箇の惡日と申して、此日出づる輩歸る事なしと、舊記に載せ候處、證據分明なりと、頻に支へ申しければ、秀吉公聞召し、吾西國に赴くには、其道船路なれば、船中の吉兆に出でて、發らぬこそは目出度けれ。彌〻廿六日に御出馬あるべしとて、大に打笑ひ給ひ、敢て御承引の體なかりける。去は傳へ聞く、齊の公子心は、慧星の妖を恐れず、宋武帝は往亡の日に出でて、吾行きて彼亡ぶと宣ひつゝ、大利を得給ひし昔の後に異ならず。天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かずと、大賢亞聖の名言、時千載を隔つと雖も、古今一途の良將なりと、傳へ聞く輩迄も感涙を流さぬはなかりける。誠に凡人の癖として、陰陽向背の日取にかゝはりつゝ、時至るを取

らずして利を失ふ事、尋常なるに、偕も潔き將軍かなと、心あるもなきも手を拍つて稱歎せり。

秀吉公京都御進發并嚴島御參詣附阿彌陀寺御一見

秀吉名護屋へ出發

文祿元年二月朔日より、先陣小西攝津守・加藤主計頭を先として、國々を立ち、毎日怠る間もなく押詰め、其軍勢の夥しき事、言語を絶つ計りなり。海道筋は、大軍引も切らず通りけれども、軍法正しければ、聊かの爭論もなく、次第を打守りたりける。漸く先勢も名護屋へ押集ひぬと註進ありければ、三月廿六日、將軍秀吉公、都を立ちて打たせ給ふ。行列の法度正しき體、古今あるまじき事に、見物の老若罵る聲々、岐に滿ち〳〵たり。秀吉其日の御裝束には、梨地緋絨の御著背長、鍬形打つたる星甲、赤地の錦の御直垂に長光の御太刀、竝に四尺八寸の金熨斗付の木太刀に、紅の腕貫打ちて、二振帶び給ひ、熊の皮の作り鬚にかね黑なり。壺胡祿に朱滋籐の御弓眞中握り、華やかに出で立ち給ふ。八寸に餘たる月毛の御馬に、鳥毛の馬鐙紅の大總懸け

名護屋の古跡

秀吉嚴島參詣

てぞ召されける。御伽衆・御側衆などはいふに及ばず、異形なる出立ち、花やかなる裝束、金銀の旗指物・朝日に映じて耀き渡り、奇麗の壯觀目を驚せり。御前備の弓・鐵炮・御長柄、段々に行儀を守りて押行く。御馬印金の瓢簞日の光に耀きつゝ、ゆるぎ近付く有樣は、滿月の山の端を出づるに異ならず。洛中の人々は申すに及ばず、奈良・堺の津・大津・大坂・尼崎などより、見物に上り集ひ、棧敷を打ちて充滿たれば、東寺・四塚・造道・鳥羽・横大路・水垂・淀・赤井・大渡迄、見物の輩彌が上に群集して、人は顧る事を得ず、馬車は所狹く立ち兼ねたり。見物の群集を御覽ありて、秀吉公御機嫌斜ならず。其夜は、攝津國茨木に御宿なり。廿七日より、後備の勢日々に打續き、卯月五日・六日頃に漸く行き滿ちぬ。肥前國名護屋を御居城と定められ、九州勢として祗侍りぬ。抑〻名護屋と申すは、昔日大友の挾手彦が遣唐使にて、松浦潟より船に乘り、漕出でたりしに、夫の別を悲みつゝ、松浦佐世姫が領巾麾の嶺に上りつゝ、唐土船を慕ひ添ふとかや。秀吉公は、藝州廣島に御登りなされ、二三日御逗留ありて、又宮島へ御參詣ありて、朝なぎ靜なる海上を、嚴島指して漕出でぬ。數百艘の船共、艫

拍子を踏み揃へ、船歌事々しく謡ひ出し、さゞめき渡りて、宮島へ上り給ふ。社僧・神主威儀を制へ、容顔美々しき内侍共、假粧に眉作り、行文長き黒髪いみじく結下げ、耀く計りなる出立にて、船場へ御迎に罷出で、様々御祝儀申上げければ、秀吉公廻廊へ登り給ふ。げに神慮も納受ましますにや、天晴れ昇る日影も長閑に、海上浪平かなる眺め、浦々・島々霞渡り、心も空になりぬ。當社の景氣を拜し給ふに、後は翠嶺高くして松風塵埃の垢を淸め、前には巨海浪靜にして、晩汐弘誓の趣を示せり。月海上に浮んでは、汀の砂照渡り、珠を撒くが如し。和光同塵の利益は、様々なりと雖も、跡を海畔に垂れ、鱗を助け給ひし因縁、誠に有り難し。參詣・禮拜の輩迄も、八相成道の結縁は賴もしくして覺えける。此御社と申すは、推古天皇の御宇に、内舍人佐伯の鞍職に神託のありて、此所に現れ給ふとかや。秀吉公、様々の法施・色々の寄進を奉り給ひ、夫より長門の國府に渡り給ふ。仲哀天皇・神功皇后の御社を拜み給ひ、赤間ヶ關を越し、阿彌陀寺に詣で給ふ。寺の體を御覽ずるに、山水木立何となく物舊り、垣に苔むし、瓦に松生ひたり。香煙窗を出でて、心細き鉦の聲、上品の臺

も日のあたりに、來迎の三尊、九重の蓮の上に最貴く並びおはします、苔若人跡もなく、寺門の内の塔婆朽つるものあれば、又新しく立添ひて、げに無常は數添ふ世の慣、老少不定の有樣を示せり。禪場塵なうして、夕の嵐老いたる松に響き、梵刹人稀にして、夜の月舊りたる扉に事問ふ寺院、年經にけりと覺えて、誠に殊勝にぞ覺え給ひける。當寺は、元暦年中より草創たれば、安德天皇の御影・平家一門の畫像を一覽ありける折節、浪の音高く聞えければ、秀吉公取敢ず、

浪の花散りにしあとの事問はゞ昔ながらも濡るゝ袖かな

寺中の老僧罷出で、佛殿より世々の歌人の短册數多取出し、御目に懸け奉りければ、御機嫌一方ならず。細川藤孝入道玄旨・山名禪高・木下半助など御緣に伺候し、折に觸れたる御物語申上げ、紹巴・昌叱など、當座仕りければ、一入の詠に夏の日も短き心地せさせ給ひ、暮にかゝり御立ちあり。其外道中の古跡・名所共殘らず立寄り、御見物なされ、四月十六日に名護屋城に著き給ふ。在名護屋の大名・小名、家康卿・景勝・利家を始め、若やかに出立ち、美麗なる小性二三人宛召連れ、御迎に出でられ、色々御

祝儀申上げられければ、上も下もさゞめき渡りて、名護屋の御城へ入らせ給ひけり。遠國・近隣の人々、諸寺・諸山の神官・僧侶・社人等、又長崎・博多・唐津・小倉の名ある町人等、雲霞の如く色々の進物を捧げ參集す。御著陣目出度き旨、御悦申上げしかば、庭上門前に充滿ちて、奏者の取次も仕敢ず、御城廻市の如し。御後備、日々に著きければ、總軍勢人馬の扶持・水手・楫取に至る迄、四十八萬人の兵糧、每日懈怠なく充行ひし事、誠に漢の蕭何が古も思出されけり。

朝鮮征伐記第二終

朝鮮征伐記第三

諸軍勢名護屋に集る

諸軍勢名護屋に集合

文祿元年三月廿六日に、將軍秀吉公、帝都を打立ち給ひしと、兼々觸れられければ、二月朔日より、諸軍勢、己が國々を立ち、肥前國名護屋に著く事、毎日引きも切らず。今年は、例に替り、餘寒早く去つて、山々の雪も消え、谷川の氷も解けしかば、人馬通路、容易にして、軍勢、悦ぶ事斜ならず。海上も日並を追ひて靜に、浦々の氣色も長閑なれば、兵船も悦びて、順風に帆を揚げて、筑紫灘を日に懸け、或は名に負ふ須磨・明石・大物の浦より、纜を解き、或は紀の地・和歌・吹上・吹井谷・輪納・島崎・洲本・武島の沖を經て、片帆に走る船の數、幾千萬といふ數を知らず。遠山に懸る白雲は、殘の雪かと疑れ、澗谷の鶯舌聲舊びて、初音ゆかしき郭公、旅寐の夢をや覺すらん。霞

渡れる難波潟、住吉・天王寺を後に見て、一谷・摩耶の沖・堺の浦・木津の海、長閑に見ゆ。大坂の城天主樓の闕、天に峙ち、軒を連ぬる家々は、尼崎まで打續き、西は鳴戸・雪の湊、月落ちかゝる淡路島、げに音高き名所かなと、船中の兵共も、面白き詠に、故郷の名殘も忘れけり。去程に、魁の軍勢、悉く名護屋に集りければ、御定の如く、陸路・海手兩方に分つ。陸の勢は、小西攝津守・加藤主計頭を魁として、續く勢は廿五萬餘、船手は九鬼大隅守嘉隆・脇坂中務大輔安治・加藤左馬助嘉明・藤堂佐渡守高虎・來島出雲守通泰・其外都合三萬餘騎、船手の目附は、福原右馬助淸成・熊谷内藏助直盛・毛利民部大輔正次・寬和泉守宗俊、其勢六千。海陸の手分の事、涤軍評定の事は、名護屋にて相定むべしとの儀なれば、文祿元年三月十日、悉く彼地に著岸せり。九鬼は昔より、事舊りたる船大將なれば、嘉隆、船へ各〻寄集め、軍評諚互に理を責め、談合極りしかば、其堅の爲めに、誓文を書認む。其趣は、第一に、船軍の儀多分に付て、其理に隨ふべし。第二に、互に難儀の時、見殺すべからず。尤も加勢すべし。第三に、敵方の沙汰聞き次第、互に申談ずべし。第四に、武功働の善惡、有體（ありてい）に申上ぐべし。

第五に、他人の功を盗み、己が手柄となすべからず。第六に、大將一人より、物見揃二艘より外は出すべからず。第七に、名護屋御本陣への註進、奉行・御目附加判にて、申上ぐべしと定めて、神下、事々しき血判事濟みければ、福原右馬助申しけるは、評定相調ひ、互に目出度き事なり。されば酒を出し、船祝せんとて、折に合ひ、大樽三荷出しければ、皆々悦びて、九鬼も脇坂・藤堂・加藤左馬も、肴一種づつ出し、後には亂酒になり、上下入交り、千秋樂の音融々たり。脇坂中書も加藤左馬も、數盃の興に、夜の更くるも知らざりけるを、藤堂高虎、つと立ちて、扇を颯と開き、萬歳樂には、命を延ぶ。相生の松風、颯々の聲を樂むと、舞ひつゝ、皆々座敷を立ちにけり。　陸路の軍勢も殘らず、宇喜多秀家の宿所に集り、軍令・諸式の法度、船中の雜用の沙汰、滯なき樣にと、京都より石田治部少輔三成を上使として、下されしかば、家康・景勝・淺野彈正等、皆々秀家の宿所に集り、數刻相談の上にて、一組々々の軍勢に申渡す。　海上・陸路諸々の評定・軍法、殘らず事濟みつゝ、三月十二日辰刻、總軍勢、名護屋湊より打立つべしと、陣々へ觸れけり。

日本勢渡海朝鮮に攻入る并釜山陣合戦

諸軍勢朝鮮に向ふ

先駈の兵には、小西攝津守行長を大將にて、宗對馬守・松浦・大村・有馬・五島等、其勢二萬。續く勢には、加藤主計頭淸正を大將にて、鍋島・相良等、其勢二萬五千餘。二番に黑田甲斐守長政・大友豐後侍從義統、兩勢合せて二萬餘。三番に島津薩摩侍從義弘を大將にて、毛利・高橋・秋月・伊藤等、其勢二萬、其外都合廿五萬餘。文祿元年壬辰三月十二日辰刻に、名護屋の浦より、一同に船を出す。大筒・石火矢を放ち立て、鬨の聲を揚げ纜解き、數千船の帆柱を押立て、やさ聲を揚げ、口々に罵り呼ばはる音、天地を動す計りにて、順風に帆をぞ揚げたりける。烟波渺々たる海の面、廿四里の間、船端を軋じ、舳艫を連ねたる有樣は、あな夥しや、晋・呉、天下を爭ひし江陵の戰、隋文、陳を亡せし建康兵も、斯くやと思ふ計なり。名護屋の浦を遥に出でて、後先を見渡せば、多くの大船・小船の數々に、家々の紋畫きたる幕を走らかし、思ひ〳〵の旗・麾・幡にて飾立て、金銀の指物・馬印、日に映じて耀きける。其下には、甲の星を耀し、

鐙の袖を列べて、屋形の內に並居たれば、吉野山の春を海上に移し、龍田川の秋の氣色を爰に浮べ出したるが如し。欵乃歌棹の歌に準へ、船歌の聲麗しく謠ひ出で、船中を勇しゝかば、實に心も空になりにけり。順風快く吹出で、名護屋より七里の渡なれば、何れも壹岐の風本の湊にぞ著きたりける。斯かる所に、風變り浪に向ひつつ逗留せし程、二十日餘り風本の湊に居たりける。旅泊の月、松なみの風、興を催さずといふ事なし。洲崎の千鳥音信れて、寄せ來る浪も高ければ、目馴れぬ節の詠に、いとゞ興をぞ催しける。同廿五日の曉方より、風少し吹弱り、空の氣色もいさゝか直りたり。然も名殘の浪荒くして、海上未だ穩ならず。小西行長、獨り思ふ樣、海上靜になりなば、何れも船を出すべし。向風にてあらばこそ、いざ渡して見んとて、夜半の頃より、潛に風本の湊を出でて、對島を指して馳せたりける。明くる廿六日午の刻に、小西一組の艦共、皆々恙なく、四十八里を渡りつゝ、對州豐崎の湊に著きぬ。扨又壹岐の風本湊にては、小西が船の見えざるに驚き、檝急に催す內に、日も早や亭午に及びぬ。漸く船を出し、海上五六里出でける所に、又向風になりしか

ば、渡海叶はじとて、清正・長政を始めて、皆風本の湊へ吹戻されてけり。加藤・黒田も、怨悶えて、飛立つ計りに早やりけれ共、逆浪天に漲り、馬だにも通ふは詮方なし。小西も、豐崎に著きし甲斐もなく、逆風に留められ、心を雞林に馳せ、思を焦しけるに、風又少し吹弱り、雲の脚重く、空掻曇り、大雨車軸を流すが如く降來り、北風は靜んで、南風烈しく吹出でたり。木を折り砂を上ぐ。白浪海上に充滿ちたり。小西は、風能く直り、急ぎ船共出だせといふ。水主、楫取等、是れ程の大風には、船出す事、音にも聞えず候。風少し弱りてこそといふ。小西、大に怒りて、日和も能く、風も靜ならば、加藤・黒田・島津等も續き來るべし。さあらば何を以て、稀代の高名を抽んで、名譽を日本に傳へんや。疾々此船共出せ、異議をいふ奴原は、一々首を刎ねよと怒りつゝ、將軍より給りつる一文字の大長刀の鞘はづし、舳艫に廻りて罵りければ、船子共色を失ひ、如何すべきといふ所に、よしや爰にて誅せられんも、沖にて海に沈まんも、同じ事なり。いざ船出さんとて、犇めきたり。小西、莞爾と打笑ひ、門出はよきぞと悦び、使番の早船を廻し、與力せし宗對馬・大村・有馬等が船へ觸れけ

るは、風能くなり候間、行長、船を出し候。皆々御出船あるべしとて、早や貝を吹出でければ、劣らじ負けじと、檣を立て、船用意相濟しつゝ、同廿八日の酉刻に、豐崎の湊を押出す。吹く風、人家を顚し、立つ浪山の如し。水手等、船中にて吹倒されて、足を踏立つるに及ばざりけれども、屈強の船子共にて、聲を揚げ、互に力を合せて、船を乘直し〳〵喚き呼はる。小西行長、下知しけるは、難風の船を馳するには、數多の大事あり。舳艫に艫を立て、脇楫を以て、船を丁と挾み立て、雨蹕の船足には、引碇を引かせ、帆をば檣华に持たせ、油斷なく帆の手を取りて、風を逈せ、船子は申すに及ばず。侍も下人原も、大聲を懸けて、浪風を追ふべし。旗・指物、風にしぶかば横手を拔きて、竿に卷付けよ。幕をも絞り、風をすいて、母衣をば絹を疊みて、風に取らるゝな。夜に入らば、舳にて篝を焚き、風上には蔀の板を立て、艫先にて、大太鼓を打つべし。行長が船を取り、初船として、各々馳せ給へ。船子共、此時ぞ精を出せと、口脇より白沫を吐き、大音揚げて下知をなす。船頭共、心得候とて、帆を檣华に持たせたれ共、風彌々強く當りければ、帆を下さんとすれども、風強うして下し得ず。船

中周章て騷ぐ。行長、大の眼を瞋し、何とうろたへたるぞ、日來の用意爰なり。鎌・熊手にて、打廻の本を引懸け、一同に引下せ。それにも叶はずば、侍共十文字に綱切り、鎌・鑓にて、帆の紐を目懸切つて、風を通せと怒りければ、兵共承り候とて、帆を三所半より引き破り、兩方へ結び分けて、風を通し、大綱二筋十丈計りに縒りて、下碇三つ四つ、下し引かせたり。風開けば面に乘懸り、追手になれば、中に乘直り、隙透間なく、垢をかへ出でたり。宗對馬・大村・有馬・松浦等が船共も、少しも後れず、馳來り、竝走る船を見るに、浪の上に揚ぐる時は、梶尻海を離れて、瀧を流し、浪間に入る時は、檣の半隱れて見えざる事多ければ、見る人肝を消し、舳先へ打つ浪碎けて、彌〻帆を洗ひ、艫へかゝる浪、越えて舳へ通る。船腹を打ち、大浪の響に驚きつゝ、船底に立てる數千匹の馬共、一同に嘶き騷ぐ事夥し。行長は、船櫓に登り、自ら太鼓を打鳴し、漕げや者共、油斷すな。淸正・黑田も、續き來るべし。此時、抽んでたる手柄なくんば、何の面目かあるべきと、身を揉みて罵りつゝ、吾身も大音揚げて、浪を追ひしかば、二萬計りの兵共、數百艘の船共より、聲々に浪風を追ふ事夥し。小西

諸軍勢釜山浦に著く

は船頭を呼びて、路へ何程來りたるぞ、夜は何時にかなるべしと尋ねければ、船頭承り、空曇り北斗星見えず候間、確に時分は知れ申さず候へども、夜は早や子刻前かと覺え候。宵より卅八九里も走り候ひつらんといふ。行長聞きて、扨は高麗へは、今十里計りぞ、艫を入れて押せとて、通夜漕ぎ渡す程に、浪風も靜り、夜はほの〴〵と明渡り、何くとも知らぬ山睢の湊近く、漕ぎ寄せたり。見渡せば、甍を並べて、家數千軒、并に城郭は、山を形取る旗共、四五十本立並びたり。行長が船にありける通辭、見仰ぎて、高麗の釜山浦の湊なりといひければ、行長聞きも敢ず、嬉ばしくも著きたる者かな。敵、此浦を固めたりと見えたり。旗・指物張りて、各々物具し給へ。船に搖られて、立湊みたる馬共なり。左右なく下りて過すな。沖より追下りて、船に引付け〳〵泳げよ。馬の足立たば、船より鞍を置き、口捕は飛び漬り、腹帶をして轡を食せよ。其隙に物具・指物差し、船より馬に乘り移れ、日本異國、手合の軍ぞ。急げや人々と、下知して、行長、眞先に鐙ひつゝ、馬を海に追下し追下し、船に引付け〳〵泳ぎたり。相從ふ人々、宗對馬・有馬・松浦・五島・大村以下の人々、甲の緒を縮め、色め

き渡りて、吾先き〳〵と、船を乘り傾け〳〵、先陣を爭ひ、喚き叫ぶ有樣は、如何なる天魔波旬も、面を向くべしとは見えざりける。朝鮮にては、日本人、大軍にて寄來る旨、先立ちて聞えければ、李雄・孟明伯を大將にて、剛兵二萬餘騎にて、釜山浦を固めたりしが、此有樣を見て、倭寇已に寄せたりとて、上を下へ騷動し、海涯に下重りて犇めきたり。小西行長、之を見て、大音揚げて下知しけるは、渡せ人々、後るゝな。馬の足立たば、船より乘移れ。海中にて弓・鐵炮打つべからず。甲の鉢を傾け、前輪に平みて、鐙を常に搖り合せよ。馬にも人にも力を添へよ。吾が渡すと見るならば、敵は半弓を集めて射んずらん。敵は射るとも射返すな。相ためして綢射らるゝな。いとう傾きて甲天邊射らるゝな。曳々聲を一同して、眞黑になりて、懸るべしとて、馬の足立は、ひた〳〵と打乘せ、行長、眞先に進んで、白旄を振り、手勢七千餘ひらめかして渡れば、宗對馬・大村・松浦等の兵共、千騎・二千騎、一群々々乘連れ、雲霞の如く、混甲都合二萬餘り、鹽花蹴立てつゝ、驀進に打つて、釜山浦の濱へ打上りたり。李雄弟の李一雲・孟明伯等、騎射二萬餘騎、矢衾作つて雨降る如く、散々に射る。五島

釜山浦合戰

若狹守・松浦刑部卿法印眼を瞋らし、左右に下知を爲し、鐵炮を物陰に引付け、能くためて打立てよと、馬の上にて踊上り〳〵罵りければ、足輕大將共、承り候とて、五六間に引請け、一同に放立てけるに、朝鮮の先驅の兵百騎計り、ばら〳〵と打落され、色めき立ち、松浦・大村、之を見て、透間なく鐵炮にて、打竦め、曳々聲を揚げたるに、朝鮮の備、旗色亂れて、しどろになる所を、得たり賢し、すは懸れと下知して、行長、眞先に喚いて懸入る。木戸作右衛門・南條元宅・小西若狹守等、之を見て、主を討せじと拔連れて、眞先に懸りけるに、陣に續きたる宗對馬守義智、之を見て、家老柳川豐前守調信と、只二人横樣にまくり立て、自身鑓を入れ、黑煙を立て丶挑戰ふ。有馬修理大夫は、白母衣に大鍬形甲を著け、黑の馬に乘り、孟明伯が本陣へ、喚きて馬を入れたりけるに、三人の兵共なじかは怺ふべき。手先をまくり、眞先を破らんと、屈强の兵共二萬餘、一同に噇と驅入りたり。朝鮮の軍勢共、爰を先途と防戰ふと雖も、日本勢、急に揉立てしかば、副將李一雲を始め、能兵七八人、鑓下に討たれければ、殘勢支へ兼ね、替鞭打つて引退く。行長・有馬・松浦・大村等、勝ちに乘り、追すがうて、地

煙を立てゝ追懸けたり。宗對馬は、手勢五千餘、先を切らんと廻りしかば、朝鮮の兵七百餘人討たれ、町中へ取込み兼ねたりし所に、副總兵の孟明伯、湜兵八百人面も振らず、取つて返し、釜山浦の町口、碧巖寺の樓門を楯に取つて、火出づる程、防戰ひける故に、敗軍の朝鮮勢、辛うじて命助りつゝ、釜山城へ北入り、門の關木差固め、扱こそ付入に城を取られざりけりと、孟明伯が戰功を、城中擧つて悦びけり。行長は、手合の軍に打勝ちて、城外の町屋燒立て、小高き所に打登り、暫く息をぞ續ぎたりける。

小西行長釜山浦・登萊兩城を攻落す

朝鮮東洋の馬武者李雄・孟明伯は、初度の軍を仕損せし上に、日本勢、雲霞の如く馳來りければ、防ぐに及ばず、釜山城へ引籠りぬ。釜山浦の民共は、最前より日本と通じ、商賈往來せしかば、婚姻を結ぶ日本人、多く此浦に住宅す。之を名付けて儷倭といふ。此儷倭の日本人共、行長の著岸を悦びつゝ、酒肴を持運び祝儀を申す輩、市の如し。是等を案內者として、小西一組の諸勢、盡く釜山浦に打上る。朝鮮國は、

泰昌平日久しうして、風俗昔に替り、帝王李昖、位に在る事、已に久しく、政道廢れ、亂婬の業日夜に盛にして、萬事の仕置、皆女謀より出でしかば、綱紀大に亂る。此故に、賢臣勇士は退けられ、小人黨輩、時を得しかば、邪臣李龍・柳承・李德馨等、諂諛の言を飾り、忠直の人を疎み憎みしに依つて、武將の征東使伯尊牧・使の王僧璘を始め、威勢皆奪はれ、閑廢日久しく、部曲の士卒等過半離散せり。世治國靜なれば、萬年を經とも、兵亂といふ者無しと油斷する事、愚なる世の習なれば、國家も兵を知らず、萬民戰を忘れ、武士共も、軍法をば夢にも知らざる事なれば、日本の大兵著洋するを聞きて、朝鮮の君臣手を束ね、周章迷ひて途方にくれ、百姓は山谷に逃げ走り、昔よりなき事の、俄に起りたる樣に、上下色を失ひ、片唾を吞み、上を下へもて返す。上暗下諛・淫亂・酒宴・貪欲心、竝に盛なれば、人怨み兵廢れ、召すに應ずる兵なし。偶〻馳集りたる者共も、近年、天下靜謐なれば、鑓の著樣だにも知らず。其上、王の出頭人柳承、利欲の深き者にて、士にも百姓にも、別に課役をかけ、せぶり取りしかば、秩祿千石を取る者は、過半公儀に取上げられ、名は千石の知行にて、實は五百石を

漸く領する事なれば、弓鑓の直なるをも持たずして、百里の外へ働くべき蓄なし。されども釜山浦を守らせ、爰にて防がずば、卽時に王城を破らるべしとて、李雄兄弟孟明伯を差向けられつれども、行長が猛勢に摧かれ、皆城に引籠れり。行長は、敵を城へ追入み、小塚の上に、弓杖つき、仰向になりて、控へたりしが、宗對島守を呼び、初度の軍に、味方、大利は得たりつれども、城を其儘差置きし事、心長き攝津守かなと、諸人の思はんも口惜し。敵は負けて追込められし事なれば、さぞ氣を失ひて居たるらん。臆病神の覺めぬ內に、取駈けんと思ふは、如何あるべきといふ。對州聞いて、吾々もさこそ存ずれ。されば打立て人々とて、釜山の城へ押寄する。此城、大手は堀丈夫にして、石壁高く聳えたり。後は高山險阻を賴みて、防勢は一人も置かず、二方は山の尾傳に柵をふり、要害とせり。行長は、儼倭共を呼び、城の構を聞屆けつゝ、大村・宗・有馬・松浦・五島をば、三方へ差向け、大手口を取卷かせ、小西は後の高山に攀ぢ登り、嵩より城中を見下し、數千丁の鐵炮を以て、雨の降る如く、散散に打ち、城中沓の子を打ちたる如く、充滿たる朝鮮人共なれば、丸一つにて、二人・

三人は打拔けども、浮矢は一つもなかりける。大手は、大村・五島・松浦の人々、圍を作つて攻懸る。城中、やはか怺ふべき。上を下へ騒ぎ亂るゝ所を、大手の口・門脇の塀より、行長が弟小西主殿亮長統、十六節の枝蔓(きづる)に、金の切割付きたる指物差し、眞先に塀へ乘上り、一番乘小西主殿亮、後陣の人々見たるかと呼ばはる所に、五島半右衛門・太田善太夫、續いて乘込み、二番乘と名乘るや、均しく同勢ひた／＼と乘込み、吾先々々と亂入り、城中の兵共、西門指して、落行かんとする所を、行長、七千餘眞下りに落驅け、縱横に揉立てしかば、總兵の李雄は馬に鞭打つて、熊川指して落ちて行く。副總兵の孟明伯は、大音聲を揚げ、國家士卒を養ふ事、今日の爲なり、身を以て國を御する者、豈難を見て遁れんやと、士卒を勵し、踏止りて戰ふ所を、小西が兵吉川三太夫、馳並びて、馬の上にて引組んでどうと落つ。孟明伯、大力にて、三太夫を取つて押へ、首搔切つて立上る所を、小西與七郎落合ひて、孟明伯が首を取る。大將此の如くなれば、士卒如何でか怺ふべき、皆一つになつて落ちけるを、追付・追廻し討取り、首數を算ふるに、三千五百七十三、生捕二百十二人にして、三月廿九日の巳

孟明伯討死

釜山浦城沒落

刻に、釜山浦城をぞ乘取りける。殘る所の朝鮮人共、弓矢をかなぐり捨て、鎧甲を脱ぎ捨て、只命計り助からんと、吾先々々と、逃げ行けば、釜山浦の口、一番に破り、近邊の老若男女、恐れ悲み、思ひ〳〵に逃げ散る事、只風に木の葉の散るが如し。行長は、手合に打勝つて、心地よしとて、踊上り〳〵、母衣をこすりて悦びける。暫く息を續ぎて、秋鞮を呼び、近邊の事を尋ねけるに、通辭共申しけるは、是より三十里、〔日本道六里〕乾に當つて、登萊と申す城御座候。李元翼兄弟と、牛翼といふ大將、一萬二千餘騎にて、固め候といふ。行長、聞きて宗對馬守修理大夫に向つて、今朝、粉骨を盡し、比類なき働、甚だ以て大功なり。然る間、今夜は是に陣取り、人馬を相休むべく候へども、釜山浦破れぬと聞え、登萊にも聞き驚き、さぞ周章て騷ぐらん。日數經ば、必ず用心密に致すべしとて、他の勢に渡すべき事にあらず、いざ登萊をも攻取り、名譽を鴻寅に播し、多くの首數を日本に渡し、將軍の御感に預らんと勇みければ、宗・有馬、何れも一同に、尤然るべしとぞ同じける。されば下人共、其用意せよと、相觸れしに、兵糧を仕り、馬に物飼ひしかば、日も漸く未の初なり。諸軍勇み進み

登萊城を攻む

つゝ、汗馬を早め、急ぎしかば、日本道六里なれば、二時半に打つて、酉の刻に登萊に押寄せたり。此城にも、朝鮮人一萬二千餘にて在城せし所に、小西七千餘、續勢一萬五千餘、小西に追ひすがうて、三方より鬨を作懸け、町を打破りしかば、釜山浦の落足に、諸人を撫切にせしに、聞き驚き大に恐懼れて、大將牛翼、先立ちて落行きしかば、李元翼兄弟も、續いて城を落ちてんげり、行長が舍弟小西主殿助長統、竝に木戸作右衛門尉直重、手勢引連れ追懸けたり。朝鮮の兵共攻立てられ、返合す者は、切つて落され、北ぐる者は追倒され、右往左往に敗軍す。主殿助・作右衛門等、先を取切り後を絕て、喚き叫んで追討ちける程に、屈強の敵九百七十五人討取り、終に登萊城をぞ乘取りける。

登萊城沒落

心地よき合戰、兩度して卽ち爰に陣取つて、大篝火山の如く焚きて、人馬の息を休する。行長、通辭を呼び、是より又いづかたに敵ありやと、尋ねしに、是より都への南道に、城々多く候。中にも此處を去る事五百四十五里(日本道九十里餘)奥に、忠州といふ名城あり。險阻第一の要害にて、牧使の王僧璋と成光門兄弟、竝に防ぎ、御使の權應珠と、右兵使の金應瑞・京畿道都體察使の柳成龍を大將にて、軍

兵七萬餘、精兵の射手數千人、兵糧以下飽く迄入れ置き、王城にも此城を專類に仕候、是へは九日路御座候と、答へければ、去れば此所に陣取り、後陣の續くを待つべしとて、小西一組は、登萊城に陣を取り、後陣勢を待ちたりける。

宇喜多秀家拔駈け小西を助けらる
幷加藤淸正熊川に著く

小西行長は、總軍勢に先立つ事、拔群にして、釜山・登萊の兩城を攻落し、其勢竹を破るが如し。猛威を震ふ事、恰も項羽が咸陽に入るに似たり。爰に備前宰相秀家は、武者押八番目なりしが、小西が先陣に進みしを、心許なく思ひ給ふ。家老戶川肥後守・長船紀伊守・明石掃部・岡・花房を呼び宣ひけるは、小西攝津守事、先陣拔群なり。彌々深入して、討死などせば、日本の弱りといひ、不便の次第といひ、旁以て殘多き事なるべし。然れば吾に於ては、行列の次第を破り、先へ押拔き、行長を助くべしと宣ひければ、花房助兵衛・岡越前守・長船・戶川・明石、何れも承り、誠に攝津事は、君の御寄

宇喜多秀家釜山浦に著く

子にて、年頃御芳情他に異なる儀に候へば、御加勢尤も然るべきなり。幸ひ今宵は、浪風も靜かなり。御出船候べしと申しければ、秀家、斜ならずに悦び、船奉行を召集め、潛に此湊を忍出でて、釜山浦へ急ぎ候へと、其軍法、懇に相定る。三月廿九日の晩景に、壹岐の風本湊を出でしに、地嵐の風、快く吹出でつゝ、對馬の國をば右に見て、九十六里の渡を走過ぎ、四月二日の陵晨に、釜山浦へぞ著き給ひける。小西が兵結城彌平次・吉田平内、此濱にありしが、急ぎ出迎へ、御渡海目出度く存じ奉る旨、申達しけるに、先づ攝州働の樣子、具に語り候へとて、ありの儘に語らせ聞きて、秀家感涙を流し、比類なき働、此表は第一の忠節たるべし。吾等加へに、渡海の旨、飛脚を言上すべき旨、堂内右筆達へ候へとて、一通の状を、京都へ言上されける。其詞に曰、

吾等事、達石對致渡海候儀、貴殿手前無心許存候、今朝令着岸釜山浦候。今度、宮表無比類御手柄、實可爲御當家無二之忠功候。四月二日、其許令參陣、萬事可申談候。恐々謹言。

四月二日　　備前宰相秀家

小西攝津守殿

行長は、此狀を披見し、斜ならずに悅び、喜悅の眉を開き、寔に千騎・萬騎の力を得たりとて、勢を振はずといふ事なし。去程に、加藤主計頭清正は、小西に先陣を越されし事を、口惜しく思ひ、攝津守が進みし後を打たんも、心憂き事に存じ、四月朔日に、釜山浦の外洋より、熊川へ船を着け、陸に上り、小西が事を問へば、今度の手柄事々しく語りけり。清正、大に怒り、牙を嚙みて、無念なり、今日よりは先陣人にはさせまじき者をと、獨言して、少しも休息せず、釜山浦を右に見て、梁山(やくさん)海道に懸り、揉に揉んで急ぎけり。

加藤清正慶州城を攻落す

主計頭清正は、小西に先をせられし事を、心憂く思ひしが、如何なる事をもして、無念を散せんと、汗馬の息をも續がず、押して行く。七十八里(日本道十三里)道なるに、四月朔日の暮合に熊川を出で、同二日の辰の刻に、乘付けたり。爰にて見渡せば、家數二三

萬軒もあらんと覺えけるに、城郭實に聳えたり。通辭に問へば、慶州と申して、昔高麗の王達が住みし古き都なりと答へける。清正踴上り、如何樣にも攻破るべしと、悦び行く所に、慶州の東五町餘りに、二里計り續きたる松原あり。其陰より、旗首流螺譟して、勢の程四五萬もあらんと覺えたる敵勢、馬煙を立てゝ押出でたり。主計頭、備を目に懸けて、次第々々に懸來り、清正、馬を控へて、通辭を呼びて尋ぬるに、此日の營主權慄・李福男・權應長・鄭起龍・高彥伯五人を大將にて、四萬餘にて待ち候〔答ふ〕と問ふ。清正が先手加藤清兵衞・庄林隼人等、早備を立直し、弓・鐵炮を、放懸けたり。鍋島加賀守直茂が先備成岡十右衞門・鍋島平五郎、五千餘にて、左の川を渡り、松原の端を、町口へ押入らんと志し、只今馬煙を立て、驅來る敵の備をば、右に見て、押組りける所を、朝鮮の高彥伯、隙もなき同勢なれば、手勢一萬餘、半弓を雨の降る如く射懸け、拔き連れて喚と懸る。鍋島平五郎・成岡等、射立てられ、漂ふ所を眞黑になりて懸入りしかば、鍋島、先手一支支ふるとぞ見えしが、追立てられ、川を渡り、五町餘り、人卒顏をついて崩れ行く。朝鮮勢勝つに乘つて、勝鬨を作り、驅けく追來り、

主計頭が左手先の備加藤右馬助・九鬼四郎兵衛廣隆等、弓・鐵炮を以て、陰に開き陽に閉ぢて、矢種・丸藥を惜まず、雨の降る如く散々に射けれ共、朝鮮勢、馬上の達者共なれば、打て共射れ共事共せず、眞黑になつて來りけるを、加藤清兵衛、茜の切割しないの指物にて、馬より飛んで下り、十文字の手鑓提げ、只一人眞先に駈出し、味方討すな者共とて、面も振らず走行く。追うて來る朝鮮勢を弓手に爲し、馳違る馬の胸懸掻抓み、二重皮・四足・半首・障泥の下突いては突居ゑ、懸けては懸け居ゑ、落つる敵をば刺殺し、手向ふ者をば、鎧も小手も懸けず堪へず突通るは、十文字穂先に廻り、人馬の助かる者は稀なりける。庄林隼人、之を見て、丹頂の立鶴かきたる白紙子の羽織に、糟毛の馬に打乘り、手勢二十騎計、眞丸になり、雲霞の如く控へたる敵の眞中へ、會釋もなく、眞一文字に諸鐙を合せて駈入たり。朝鮮方二方へ颯と分かれて、半弓を射る事、雨の降る如し。されども庄林隼人は、大剛の兵なれば、少も揍まず、大將の高彥伯を目に懸け、組んで討たんと志し、縱横に乘破り〳〵戰ひける程に、强に近く寄合ひたり。隼人、馬をあをつて、彼を妻手(めて)に受け、高彥伯とむずと組み、雨

高彥佾討死

馬の間にどうと落ち、上を下へ返しけるを見て、一町餘に控へたる山口與總右衛門・大木土佐守・加藤與左衛門三千餘、一度に瞳と驅入る所に、大將清正なじかは猶ふべき、指麾をば股にかけ、馬上に大長刀押取り、本兵千餘騎、主を討せじと、喚いてこそは懸りける。汗血地を擁翻し、天地を響かし攻戰ふ。斯かりける所に、庄林隼人は、終に上に成り、高彥佾を組伏せ、首を取つて差上げしかば、加藤清兵衛、馬引寄せ打乘り、隼人と一所に打連れて、爰をば打捨て、清正が驅合する同勢の敵に向つて、横鑓に突懸りしかば、敵の大將鄧起龍、左右を下知して、防戰ふと雖も、清正採立て攻懸り、終に追崩し、先を先に追うて行く。相良宮內少輔も八百餘にて、擽標が手を切崩し、直に清正が手に馳加り、北ぐるを追ひて進みける。鍋島が先手も是に氣を直し、取つて返し切懸る。加賀守も旗本を押立て、黑煙を立てゝ進行く。慶州の町口にて、樸殿長・李福男、一萬計りにて踏怺へ、半弓數百人家の上へ上せ、兩方より差合ひ、矢尻を支へ、散々に射る。加藤與左衛門・吉村吉左衛門二千餘、面も振はず進みつゝ、鐵炮を先立て打倭みひるむ所を得たりやとて、加藤與左衛門、眞先

に駈入り、鑓を打入れ、大音揚げ攻戰ひ、大將、此の如き上は、其手の兵、爭でか怺ふべき。一度に鬨を傾けて、噇と突いて懸りける。互に喚き叫ぶ音、山彥答へ、地煙を立てゝ挑戰ふ。芥塵天を掠め、汗血地に溢る、淸正は馬藺の馬印ぞ。虎口の兵共の鑓の石付にさはる程に、押詰め大音揚げて、淸正爰に續くぞ、引くな進め者共。鑓を取延べ、頭より叩き立てよや者共と、眼を瞋し、白沫嚙んで罵りければ、主計頭に勵され、死を一擧に輕うして、鑓の柄を取延べ、曳や聲を出して、叩き立てしかば、李福男・樸殿長、一萬計り突立てられて、大手の門際迄、七八町の間、足をもためずまくり付けられ、吾先々と城へ北げ入り、上を下へと持返す。橋より落つる者、數を知らず。淸正が兵共、雲霞の如く攻懸りしかば、樸殿長も李福男も、防ぐに及ばず、這々城へ取込み、門をも閉ぢ得ず、矢間配もせず、途方に暮れ、周章て騷ぐ。淸正之を見て、艮の角矢倉へ、雨の降る如く火矢を射懸けたり。折節、魔風烈しく吹きかけ、炎雲を捲きて燒上る。城中の兵共、東西に迷ふ。只吾先々と西門より北げ出づる事、堤の切れて水の出づるが如し。大將樸殿長も鄧起龍も、李福男・權慄も、駿馬に乘り

鄂起龍討死　慶州城沒落

たるは、乘拔き乘拔き落ちつて、終に落延びしが、鄂起龍は懸隔され、左の山へ志し落ちけるを、相良が家老犬童兵部少輔、押竝びて引組んで落重り、上を下へ返し、組合せけれども、鄂起龍大力にて、終に上になり、兵部は下に組敷かれ、一尺ありける正宗の脇差を拔き、鄂起龍が鎧のはつてはづれをしたゝかに刺し、刺されて痿む所を、兵部、下より□返し、鄂起龍が首を取つて差し上げたり。討ち取る首數都合一千五百五十二なり。城中・城外、悉く燒上り、三萬軒に餘りし家數、一日一夜に、殘らず炎上してければ、淸正は總軍をまとひ、山取して陣を居ゑ、人馬の息を休めける、即ち日本へ註進申上ぐべしとて、家人庄林喜右衞門を歸朝させけるに、喜右衞門は急ぎ釜山浦へ出でて、早船にて日本へ歸朝し、京都指して馳上る所に、筑前國姪濱にて、秀吉公、名護屋へ押〔寄ノ一字脫カ〕せ給ふに、行過ひ奉る。即ち路次にて、淸正の書狀を差上ぐる所へ、小西行長方よりも、小西平左衞門を使として、釜山・登萊兩城、乘取り候旨、申上げければ、秀吉公御感悅斜ならず、兩人の使者には、御羽織一つづつ下されれ、小西攝津守、今度の働、比類なき次第なりとて、御感狀に定利の御太刀・栗毛の馬

一匹、相添へ下し給ふ。清正へは、大體の御書に神妙なりとの御文言なり。扨又清正は、慶州より密陽・大丘を經、全義館へ打立ち、忠清道を平げ、押に王城へ攻入らんとぞ急ぎける。

黑田長政金保稷山城を攻取る

金保城を攻む

三番備黑田甲斐守長政は、小西・加藤が後を押しゝかば、珍しき事にも遇はず、無念類なかりける。如何にもして、敵に出合ひ、高名を抽でんと思ふ所に、登萊の北に當つて、金保城といふ處あり。朝鮮兵馬使伯子顏大將にて、楯籠る由聞えければ、願ふ所の幸なりと悦び、其勢二萬餘、金保へ押寄する。先手は栗山後前守利安なり。栗山隱なき兵なれば、金保へ押寄すと均しく、町を押破り、風上より火を懸けたり。城中よりも突いて出で、防ぎ戰ふ。栗山が組村山彥右衞門など、鑓を打入れしかば、敵も爰を先途と防ぎしを、終に追崩し、北ぐるを追ひて進行き、二の丸迄込入り、卽時に乘取り、城中悉く燒立てゝ、大將伯子顏を始め、千四十三人が首を取り、終に金保を

金保城没落

乗取りける。今日、粟山備後守粉骨して、此城を攻落しけるに、粟山が甲の枇杷葉の立物、両方共に、矢二筋・三筋射立てさせ、折懸けたれば、其有様勇々しくぞ見えける。即ち首をば鼻をそぎ、酒に浸し、日本へ渡しければ、太閤御感ありて、行長・清正、同前に首数到来、大慶に思召すとの御書をなし下され、御褒美少からず。長政は即ち金保二陣を取り、人馬の息を休めける所に、粟山備後守を呼び、其方組村上彦右衛門と、後藤又兵衛正次が與力の内能島を召連れ、船にて川上へ働き、川につづいたる在々所々、焼拂らはせ然るべしと、長政いはれければ、備前守尤にて候と領掌しければ、即ち村上彦右衛門を呼び、長政、其段申付け遣しけり。彦右衛門は、手の者並に與力と、後藤が組能島と、彼是四百計りにて船に乗り、四月五日に押出し、川を上りに働きける。在々所々焼拂ひける所に、川の西に沿ひ、一つの砦の城見えたり。通辭を以て、所の者に問へば、稷山城と申し、金保城よりの落人も、皆是に籠る由いひければ、彦右衛門下知して、鐵炮足輕を大手へ差向け、一同に放し

稷山城を攻む

懸く。彦右衛門は與力・手の者引連れ、搦手より攻入りしに、中々防ぐにも及ばず、

北ぐるを追討にして、首三百計り討取り、城を乗取りける。彦右衛門は城に其儘陣取りつゝ、足早き者を遣し、城より一里ある川下に高札を立て、稷山城を黒田甲斐守内村上彦右衛門乗取り、籠罷ありと書付けけるに、黒田が物見の兵、此札を見付け取つて歸り、見せければ、長政大に悦ぶ。去ながら小勢なれば、心許なしとて、長政、夜通(よどうし)に駈付け、稷山へ著陣し、感悦斜ならず。栗山備後守下知して、稷山城に放火し、長政又金保へ引取りければ、村上も供して引取りけり。斯くて一兩日、人馬の息を休めける所に、島津薩摩守義弘・福島左衛門大夫正則・戸田民部少輔等も、今明日の内に、著陣すべき由聞えければ、長政も金保を打立つて、都へ向つて攻入りける。加藤・小西に追散されたる敵の軍兵も、蒙霧山といふ山に楯籠り、松の木の繁みに便り、待懸けたり。長政が靈原へ一里計り續きたる松原を過ぎ、押行く所に、蒙霧山より一枚楯引側(そば)めたる半弓の者共、二三千出でて、散々に射る。長政先手は栗山備後守利安なりしが取合ひ、鐵炮にて打合ひ、少し滞ふ所を、栗山指揮を振り懸りしに、村上彦右衛門・後藤又兵衛・黒田次郎兵衛・眞先に駈入り、敵も相支へ防戰

ふ所を、栗山備後守手廻り五百餘、一丸になりて、敵の同勢へ鑓を入れしかば、敵一支もせず、先陣・後陣一つになりて崩行く。後藤・村上等追懸け、前を遮り後を横切つて、追討に首六百餘討取りけり。二陣に控へたる黒田美作守も、山の尾筋を取切り、首數多討取りぬ。今は足手にさはる敵もなかりければ、後より續く味方の大軍に追付かれぬ内に急ぐべし。都表の合戰心許なしとて、長政も大友義統も、晝夜油斷なく汗馬を早め、行長・清正が後を追つて、王城指して攻入りけり。

小西行長忠州城を攻落す

加藤清正・黒田長政・大友義統・島津義弘等を始め、日本勢大略渡海せし由、登萊へ註進ありければ、小西攝津守思ふ樣、後陣續きなば打込の軍にて、さのみ高名あるまじ。忠州城をも攻落し、偏に大功を抽んでんと志し、四月二日の午の刻に、登萊を打立ち、夜を日に繼いで急ぎける程に、五百四十里（日本道九十里）を、五日に押して、同月六日の夜の丑の刻に、忠州の城へ著きにけり。此城と申すは、忠州府を去る事三十里なり。

（日本道五里）。是は登萊より押來り、日本人の眞直に府中に押入らん事を恐れて、要害の地たれば、爰に城郭を構へたり。此は、四月六日の夜の事なれば、月は宵より入りにけり。目指すとも知れぬ闇夜に、案内を先立てて、汗馬に鞭を進めし程に、鷄の聲々打頻り、銀漢も早や山の端に傾き、時拍つ鼓の音幽なり。小西は城の東門に押寄せ、先づ手分を仕たりける。宗對馬、其勢五千餘は、城の巽の田の中を廻り、南の山に付いて、細道ありけるを傳ひて、南の木戸へ向ひたり。松浦鎭信法印、三千餘を率ゐ、城の艮の小川を渡り、菖蒲林を五町程渉りて、城の北門に著く。此城朝鮮の京を去る事僅か二百八十里（日本道卅八里）なれば、行程三日路、君皇城より後卷あらんやと考へつゝ、有馬修理大夫治里・大村新八郎與茂・五島若狹守親政、三千七百餘は、城の西門より十町餘り張出し、府中に向つて備へたり。行長は手勢七千餘、大手に向つて押寄せたり。さる程に、手分定りしかば、大手・搦手引廻し、鬨を作り、太鼓を鳴らし、法螺を吹立て、木の本萱の本を打ち鳴動き（はためき）、棒火矢・大筒を射上げて、轟き懸りければ、山彦響きて、幾千萬の勢とも覺えず。宗對馬、すはや追手は寄せたりけるは、鬨の聲を合せよと

て、手々に炬を燃し、南の木戸へ攻懸る。松浦黨三千餘、鬨を合せ、喚き叫んで、北の門へ押寄する。前後一萬七千が鬨の聲と弓・鐵炮の音にて、山も崩れ岩も摧けんと夥し。道は狭し、進む兵は吾先々と競ひ、人馬共に塵に押されて、矢をはぎ鐵炮を打つに及ばず。打物は鞘をはづし兼ねたり。追手は搦手押押合はんと攻上ぐる。搦手は、追手と成合はんと喚き叫べば、天地も覆る樣にぞ覺えける。城中にては、七萬餘勢なりければ、第一人數を頼み、又金山浦より、五百四十里、其道十日路計りなれば、路の遠きを頼みとし、聊か油斷したりければ、此音に驚き、こは如何せんと、東西を失ひ、周章騒ぐ。弓捕る者は矢を知らず、戈を忘れ劍を捨てて、親をも子をも顧みず、只吾先々と競出でて落行く。大將牧使王僧璘並に柳成龍・金應瑞・成允門等、鎧計りにて取合ふ。此城、皇都の警衛、朝廷の候頓たるに、是の如く騒動して、一戰に利を失はゞ、何の面目ありてか、再び人に面を向けんや。張巡が忠節の爰に致さゞるは、賈似道が汚名、昔のみにあらず、身を以て殉ずる事、今日にありと、義を勵みて闘ひけれども、搦手、雲霞の如くなり、追手いやが上に攻重りければ、城中の男女

老若、堀壓共いはず、ころげまろびて、上を下へ混亂してぞ落行きける。小西が兵、日比左近右衛門、赤段々の輪拔の指物にて、櫓下より乘上り、日比の某一番乘ぞ、續けやく\と名乘つて、飛乘り飛込みしかば、小西が兵共、吾劣らじと込入りける。依つて三の丸をば乘取りける。城中の兵共、吾先々と落行きける中に、成允門が弟成義門と、柳成龍が嫡子柳廷等混兵五六千、弓を取合ひ、鑓・長刀を以て防戰ふ事、甚だ以て夥しく、引組んで首を取るもあり、取らるゝもあり。此處にては鑓にて迫合ひ、彼處てには太刀討し、勝負區々なり。大將小西行長は、緋革の鎧に、銀にて鶯の裾金物打つたるを、革摺長に搖下し、鍬形打つたる唐の頭の甲を著け、銀の天月出したる白母衣かけ、將軍より給ひたる大黑の馬に、白沫かませ、矢面に進み、弓杖に縋り下知しけるは、敵も思切つたる上は、急度勝負あるべからず。行長、分別するに、先年、江州賤ヶ嶽にて、佐久間玄蕃允盛政が謀にて、神戸兵右衛門を遣し、庭戸山城根小屋を燒き立てしかば、中川・高山敗北し、殊に中川淸秀を討取りしぞかしとて、伊賀の忍百人の內五十人引分けて、搦手へ廻し、城下の家に火を懸けたり。折節、風烈し

小西行長勇戰

くて、猛火天を掠めて燒上る。餘煙、城中に亂入り、谷風炎を吹敷きたり。朝鮮の兵共、後を顧みる度に迷ひ、早や過半落行き、後がはらになりしかば、小西手づから馬印を振りつゝ、采を揉めや兵共とて、早貝を吹立てしかば、三方より寄手の軍兵、いやが上に攻重る。成義門・柳廷等、混甲七八百人口切りて、行長を目に懸け馳懸け馳懸け戰ひけれども、終に打負け、先陣・後陣一つになりて、爭ひ落つる有樣は、喩へん方もなかりける。成義門、劒を按じ、吾れ苟も國の股肱たり。命を受け、任を授かるは、只今日の爲なりとて踏止り、四方八面に渡合ひ、死狂せし所を、小西が兵、竹內吉兵衞懸馳り、終に切伏せ、成義門を討取りけり。

柳廷自害

柳廷、之を見て、もはや是迄なり、遊擊の任に居て、敵の手に死すべからずとて、錦袍を脫捨て、自害して失せにけり。從弟の柳石虎・蘇源も、鞭を打つて落行きけるが、大村新八郎が勢にやり止められ、二人ながら討たれにけり。

忠州城沒落

殘る大將共は、皆皇城指して落ちけるに、牧使の王僧狷一人は、大敵の中を乘拔け、晉州の城へぞ入りにける。討取る首數都合九千二百十なりとぞ、註しける。小西一組にも、手負・死人數百人とぞ聞えける。さる程に、加藤

主計頭淸正は、密陽大丘府を押して、全義館へ出で、忠州府に到りて、四月七日に著きたりけるが、皆明退きければ、殘りたる落人共、生捕らる。是より奥へ、日本勢通りたるやと尋ねけるに、未だ一人も通らずと答ふ。されば爰に陣取り、後陣を待つべしとて、忠州府に兩日逗留せられけるに、同八日の晩景に、小西行長一組、忠州城を出でて、府中に押著きて、淸正と一手になり合ひける。小西が勢共、三箇所にて亂妨取ると見えつゝ、布・木綿數千端、牛馬に負はせて來りけるを、淸正、見咎め、大の眼を以て、小西をはつたと睨み、流石人多き中より選ばれ出で、異國の先手仰付けられし貴殿の軍勢共、かゝる見苦しき有様やあるべき。都に入りたらば、綾羅・錦繡・金銀・財寶、充滿ちたるべし。夫を分捕せばせよかし。斯様の布・木綿、何の用に立つべきぞ。第一、押前の妨にて、道の果敢行くまじ。楚の項羽が鉅鹿の戰にて、船を沈め、釜甑を破り、廬舍を燒き、士卒に必死を示してこそ、戰勝ちて王離を擒にしたりと、史記にも見えて候へ。今、征伐の首途に、亂妨を先立てられん事、甚だ以て然るべからざる旨、皆々殘らず燒棄てられよと怒りければ、行長、理に詰められ、汗を流し赤面

し、二萬計りの兵共、路次中の亂妨物一つも殘らず、山の如く積置き、一時に燒捨てければ、小西一組の士卒、身輕くなりて、無念なる事して、清正に笑はれたる者かなと、内々つぶやかぬはなかりしとかや。去程に、清正・行長は、忠州府に集りつゝ、旗・指物立並べ、雲霞の如く陣取りつゝ、後陣の續くを待つ所に、黒田甲斐守長政を始め、後陣の勢、八日の暮合に、大半忠州に著きければ、後勢も夜通に引きも切らず、續き來る事、雲霞の如く、頓時に、朝鮮の平安・黄海・忠清の三道、已に破れぬ。慶尙・全羅の二道も、危き事、旦夕にあり。朝鮮八道の貴賤老若、上を下へぞ返しける。慶尙・全羅の二道も、城を開き、過半落失せければ、殘る城とては、十分が一もなかりける。此儘、慶尙・全羅二道に押入れば、一城も拘まじきを、清正・行長以下の倭將共、先づ王城を取るべしとて、釜山浦より道筋を、平押に押して進ましける。

李昖皇帝朝鮮都落

倭將小西行長・加藤清正等、數萬の軍を率して、平安・黄海・忠清の三道を拔き、勝つに

乘じて、兵を引きて西下して、過る所殘らず滅せずといふ事なし。城邑皆風を望みて奔潰る。朝鮮一州の貴賤老若、荷物を運び蔀・遣戸を放取り、上を下へ入亂れ、思ひ〳〵に北げ散ずる事、引きも切らず。雲峯城に楯籠りたる將官の朴弘長、鳥嶺を固めたる忠淸道節度使李時言も、行長・淸正が大軍、已に寄せ來ると告げければ、一防せんといふ心もなく、皆城々を打捨てゝ引退きしかば、全義館へ向はんとて、召寄せられたる四道の元帥、征東使の伯寧も、黃海道の破られしを聞き、江原道・咸鏡道の兵を催し、一合戰せんとて馳せけるが、兩道も過半、城々落ちければ、蝗秉といふ城に引籠りしかども、淸正が大軍、此道筋へ押來るべしといふ雜說を聞き、下々に騷げば、伯寧、恢へずして、長橋を兀良哈へ落ちにけり。全義館・忠州等の諸城、皆攻落され、近國・遠境殘らず北げ散ずる由、追々に都へ聞えければ、李元翼・柳承・李寵等、大に恐れ騷ぎ、皇帝の宣旨を以て、國々の兵共を召し、急ぎ入衞して、都を固むべしと、櫛の齒を引く如く、催しけれども、天子の淫亂、日來の奢、彌增しぬ。柳承等が課役を掛け、士卒を絞り取りしに、恨を含み、國々より兵一人も參らず。年頃、君

臣共、酒宴・邪淫のみに、心を入れしかば、何事も内縁を以て、女中の引を頼み、上も下も作法違ひ、萬民疎じ果てたれば、軍兵の催促、曾て手に廻らず。去れば太平にも武を忘れずといふ古賢の言を知りながら、千秋萬歳とのみ心得て、世の中は未來永々迄治まりつゝ、萬々年の果て迄も、兵亂といふ事はあるまじと、心得る程の不覺悟にて、なにかは仰天せざるべき。軍勢共は一人も催促に隨はず。已に倭將清正・行長等、百萬騎にて、忠州迄寄來れりと、天地も打返す樣に句り騷ぎ、雜説衢に充滿ちたり。月頃日頃侍をば、道路の乞食同前に、強顏(つれなく)あたりし奢の報、眼の前に來りしかば、天子を始め奉り、諸大臣皆鉛色になり、氣を失ひ、足手をあがき、如何はせんと、途方を失ふ。日來蓄集せし後宮の美人・女郎共を、先づ一大事に先立て、何方へか落し給はんと、談合評定ある内に、日本の諸大將等、已に從山水源迄亂入の旨、註進ありければ、此所王都より、僅か二百里(六町一里)計りなり。敵の近付かざる以前に、重器を除き、其後禁闕に火を懸け、煙の紛れに、何方へも落ちさせ給ふべしと、諸大臣・公卿、僉議定あつゝ、皇帝は、鳳輦に扶乘せられ、取る物も取合へず、都を落ち、

李寵・柳承計りぞ、衣冠にては供奉しけれ。其外の諸王・千官・元妃・皇后・椒房・嬪・御女官・美婦人も、羅穀の裳を引摺り、容顏美麗なる面をも隱さず、玉の笄をも打捨て、互に手に手を引合ひつゝ、歩跣なる有樣にて、住み馴れし花の都を、名殘惜くも顧みず、天子の後を慕ひ參らせ、洛門を指して、爭ひ出で、泣き悲みて、落ち給ふ。矧や、諸王・大臣以下の妻子・從類は、譬ふるに物なし。哀れなる次第、目も當てられぬ有樣なり。己が樣々に立出づる袖の涙、心の悲み思ひやるこそ哀れなれ。年頃、君臣、奢を極め、女緣ある者、才勘ある者計り取立て、大臣執政に召仕はれしかば、民苦み、下恨みしに依つて、此弊に、賤しき奴原、時を得て、百人・二百人づつ、黨を結び、洛中の家々に亂入り、天子の御道具を初て奪取り、美しき上臈・若き女房達をば、後をも大臣家の妻妾をも憚らず、奪取りしかば、泣き悲む音に、家々騷ぐ音に相交り、物いふ分も聞かず。子は親の手を引き、稚子を負ひ、妻女を扶け、財寶を荷ひ、何くを限りとも知らず、蛛の子を散すが如く、吾先々と北げ出づる。斯くて殿將李時言等踏止り、內裏に火を懸けたりけれども、時節到らざりけるにや、燒けざりけり。皇

后、竝に太子臨海君李珒と、二男の順和君李𤣰は、咸鏡道にかゝり、兀良哈の境なる法同谷指して、落ち給へば、天子は義州指して落ち給ふ。天上の榮華、早く去つて、五衰退殁の雲となり、華清宮の花凋みて、驪山の月光を隱せり。盛者必衰、目の前に顯れ、會者定離、身の上に至りぬ。鴛鴦の契、春の夢と覺め、同穴の情は、梨花の露となり、床定まらぬ旅寐の宿、朧に霞む尾上の月、涙や吾と友ならん。思ひ〳〵に分れ行き、吾も〳〵と落つる有樣、霓裳羽衣の曲の中に、漁陽の鼙、地を動かして至りけん。唐の玄宗の昔も、斯くやと思ひ知られたり。

日本軍勢朝鮮の都に攻入る

加藤清正・小西行長・黒田長政・島津義弘等、何れも日本の諸大將、忠州の巽五松原といふ廣野に陣を取つて、都入の評定をなす所、清正と行長、先陣を爭ひ、已に同士軍せんと犇きけるを、鍋島加賀守、兩人を靜め、南大門・東大門兩口の內、二手に分けて攻入るべきに極りし時、小西申しけるは、南大門は、路の遠き事、百五十里、（日本道廿五里）、大

河ありと聞ゆ。東大門は、其道百八十里、日本道三十里、大山はあれども大河なし。何れにても、清正望に攻入るべしといふ。鍋島加賀守直茂、進み出て、攝州の申さるゝ所、宜敷儀にて候。此通にてこそ物の評議は定りけんと、會釋しける時、清正、機嫌を直し、去れば吾々は大河ありとも、道の近き方よりこそ攻入るべしといひければ、諸大將も、皆此議に一定す。誠には東大門は道近し、南大門は遠けれ共、加藤を欺いて、此の如く談合す。小西は清正を欺き誘ひ濟したりと、心中の悦は、躍上る程こそ思ひけれ。清正は、之をば夢にも知らず、己が陣へ歸り、森本義太夫を使者にて、宗對馬守義智方へ、南大門の海道、都迄の案内者・通辭を、一人給ふべしと、申し遣しける所に、對州は、小西と縁者にて、内々清正を惡みければ、承り候ひぬ。卽ち通辭一人、差越し候と、返答して、寒澁德右衞門といふ通辭、未だ都へ行きたる事もなき奴を、選出してぞ差越しける。之を知らずして、清正、二萬五千餘にて、四月九日の子の刻に、忠州を立ち、諸鐙を合せ、身を揉んで急ぎける。小西行長も、宵より忠州を立ちけるが、今度釜山浦にて虜にせし朝鮮人、二百計りの內、山川に馴れたる都表の案內

小西行長朝鮮の都へ著陣

者、五十餘人勘置かれしかば、豫て能く勢りければ、萬づの自由よくしからず。此內、水練の達者を、廿二人選出し、淸正が向ひたる南大門の路へ遣し、毛嶋川といふ大河の渡に、此方の岸の船共、一艘も置かず、切捨てゝ流しける。是は主計頭を渡すまじき爲めなり。斯くは、行長は主計頭を謀りすまし、獨咲みて、二萬餘の勢を、心靜に押しつゝ、百八十里を二夜一日に押付け、四月十日の辰の刻に、朝鮮の都東大門の前へ押寄せたり。爰にて皇城の有樣を見るに、玉樓金殿、甍を並べ、外郭曠々として、結構美を盡せり。數千萬軒の町、戶棟を竝べ、富貴なる爲體、言語に絕する計りなり。然れども、防戰はんとする兵も見えず、門戶堅く閉して、其內寂寞たり。行長、鎧踏張り立上り、何方よりか入るべしと見るに、四方の石垣高うして、門の高さも十間餘り、鐵を以て包みたれば、左右なく打破つて入るべき樣こそなかりけれ。行長、左右を顧み、如何せんというてける所に、日比左近右衞門進み出で、門の脇なる水門より、先づ五十人も百人も入つて見給へといふ。行長、悅んで人を水門より入れんとするに、五尺四方に鐵を以て、格子に組みて、たゝかしに拵へたれば、詮方なし。

行長白沫を噛み、兎やせん角やせんと、身を揉み、口々に罵りけるに、木戸作右衛門憲重、仕様こそ思出したれとて、馬より飛んで下り、甲を脱ぎ、指物を中間に持たせ走りより、鐵炮の臺を削り、筒を以て、鐵格子に差入れ、曳や〳〵とこぢ上げたり。侍共四五騎計り、馬より飛下り〳〵、助棒を入れはねたるに、さしもしたゝかなる鐵格子も、難なく折れて、水門は安々と開きたり。夫より人を入れつゝ、大門の門をはづし、扉を開きければ、小西一組二萬餘、段々に都に入りにける。行長、眞先に進みつゝ、大の眼を瞋らし、拔駈け、亂妨仕るべからず、酒屋・店屋に入るべからず、若し相背く輩は、討捨てらるべしと、下知をなし、軍法の次第、堅く示し、靜り返つて、徐々と王城へ入らんとしける。其有樣、晉の鄧艾が成都に入り、唐の李晟が長安に入りしも、角やらんと、譽めぬ者こそなかりけれ。誠に行長、泉州堺津の生藥商人小西屋の如淸が子なり。若年より船に乘り、隣國へ駈廻り、備前國守喜多和泉守直家に奉公し、後、子息八郎秀家に至りて、武道の忠節、度重りしを秀吉公聞召され、直參に及び召仕はれ、程なく肥州宇土城主に仰付けられ、廿四萬石を下し給ひき。元來

町人下賤の輩たりと雖も、軍法其圖に當り、駈引き其術に叶ひ、武勇を異國に輝しけるこそ、人を取るに系圖を選ばずといふ事、尤なるかなと、知られける。斯くて行長は、洛中の體を見るに、人更になし。內裏に入りて見れば、宮殿空しうして、四門徒に開けたり。是れこそ殿閣を熟と見るに、城門雲に聳え、樓臺玉を瑩め、其綺麗なる有樣、秦宮の壯麗を摸し、艮嶽の景趣にも過たも石〔脱字アルカ〕の堞山の如し。樓門の閫には、鐵の柱・銅の扉、瑠璃星を飾り、瓦の縫めは、玉虎風に嘯き、金龍雲に吟ず。百工心を碎き、丹青手を盡せば、華麗眼を奪へり、百司禮儀を調へ、前殿には、萬乘の寶衣、捨置かれ、美人顏色を飾り、後宮には齊扮の運取散じ、瑠璃の臺上には、長粧の鏡、空しく殘れり。蘭麝の香は、局の外迄薰じ、住みにし跡はそれながら、枕の閨しき玉の床儘と、諸か留めけん。諸寮俱に開き、監士、宮門を守らずば、何方も物哀れなり。心なき荒夷、さしもに猛き小西も、天子の御座を拜し奉り、神さび舊びたる氣色に催され、兩眼に淚を浮べしかば、宗對馬・有馬・大村も、坐に淚を催しける。行長は、先づ外朝にありて、宮門並に外郭の四門を堅め、こそ〳〵に人數を配置し、番

等堅く沙汰し、若し返攻もやあるべしとて、洛中を引退き、東大門北なる峯に、山取して、陣の固後陣の續くを待ちたりける。加藤主計頭淸正は、南大門の海道に懸り、宗對馬が差越しける通辭德右衞門を、馬に乘つて先へ立て、夜を日に續いで急ぐ程に、同十一日の午の刻に、毛谿川といふ大河に著きけるに、廣き事五町餘り、瀨枕大に瀧鳴りて、逆卷く水の早き事、龍門三級の如し。浪烈しく風寒く、渦卷水の湧き返れば、馬も恐れて尻込みし、只も止まず狂ひけり。若し船やあると尋ねけれども、小西が謀にて、切流したる事なれば、此方の岸には、一艘もなし。加藤與左衞門・長野三郎左衞門・山口與惣右衞門、先手なれば、此旨本陣へ註進す。淸正、急ぎ乘付け見渡せば、中々夥しき大河なり。向の方には、數千軒の家々を連ね、棟を竝べ、富貴なる所と見え、岸には數百艘の船を繫ぎ置きたり。通辭德右衞門を呼びて、渡瀨を尋ぬれば、彼は塞溢にて、然も此道不案内なり。淸正、怒悶えて、人を走らし、川の上下三里が間、早馬の若武者共、馳廻り尋ぬれば、船といふ物は一艘もなし。淸正、大の眼より淚をはら〳〵と流し、天道盡き果てたる仕合かな。無念を堪へんより、

川へ乘込み、水に入り、死せんとのみ怒りける所、紀伊國湊の住人貴志左助といふ者、進出で、某游ぎて參り、見申すべしといふ。清正、大に悦びて、疾々と申しけるに、貴志は、鎧脱置き裸になり、川へ飛入り游ぎける所に、瀬頭にて息切れつゝ、篭面形に押流され、浮びつ沈みつ見えけるが、三町程下へ流著き、半死半生にて、此方の岸へ戻りけり。皆々爲方なく、手に汗を握り、清正も口脇より白沫を流し怒りけれども甲斐ぞなき。斯かりける所に、越中國礪波の住人に、曾根平兵衛が嫡子孫六といふ者、生年十八歳になりけるが罷出で、某游ぎて渡し申すべく候。本國越中の礪波川は、是より早く候へども、幼少より一息に游ぎ渡り候。殊更古主川田豐前守は、上杉景勝家老にて、越後春日山城へ、節々參り候時も、某十三の時より供仕り、越中・越後の境川、山姥の出でたる姫早川四十八が瀬往下し、川は八十八川の落つる川なり。信濃國篠戸川神立が淵をも、心安く游ぎ候へば、是程の小川は、越後の方の溝にて候と、いひも敢ず、具足を脱置き、裸になり、下帶計りに刀をば背に負ひ、川へ飛込みつゝ、逆卷く水を一文字に游ぎて、向の岸へ打上り、大なる家のある（寄ノ一字脱カ）へ

走入りたれば、人は北げてなし。捨置きたる飯・酒、思の儘に支度し、小船一艘に打乘り、北國者の習にて、艫は上手なり、卽時に漕ぎ渡しゝかば、淸正躍上り〳〵悅びつゝ、是見よや、上杉家中の武勇の嗜、其心懸の深き事よとて、卽座に知行五百石、折紙添へ、肩白の具足・甲一縮に、夕霧といふ名馬のさび月毛なるに、螺鈿の鞍置きて、孫六にこそ與へける。扨彼小船に人を乘せ、向へ渡り、數百艘乘寄せ、一萬餘の手勢、殘なく渡しけり。鍋島・相良も、皆々川を渡りける所に、先番の物見大村又藏、馬を早めて乘戾り、都は程なく、是にて候。數萬軒の家々、手に取る樣に見え渡し、其内に內裏と思しき所は、少し高くして、火を燒き見え申候。艮の方山には、小西攝州の御旗共、夥しく見え候と告げたりければ、淸正、聞きも敢ず、先手の者共、急ぎて押行き、吾先へ通るべしとて、母衣の者阿波伊兵衞・島川九兵衞、右筆に下川兵太夫案內に、木村又藏召連れ、小西に先ぜられぬ內に、馳付けよ。但都へ切込まんは、又一重の大事ぞ。夫こそ誠の先駈なれ。馬を早めよ、旗さし急げと、いふ程こそありけれ。松原を乘拔き、南大門へ十町程近付く時、淸正、母衣の者貴田孫兵衞

鍋島直茂清正を諫む

を呼び、注進状渡しつゝ、日本へ歸朝し、名護屋へ參り主計、都の一番入仕候と、申上候へとて、後へ戻し、清正が先手庄林隼人・加藤清兵衛が勢進み來て、南大門を明けんと犇めきけるに、門櫓より、兵二人顏を差出し、是は小西攝津守、昨日十日の辰刻に、此都を乘取り、門々固めて、罷あるなり。誰の御人數にて御渡り候ぞ。用の事あらば、五三人は入れ申すべしといふ。清正、大に色を損じ、扨ゝ口惜しき次第かな。如何はせんと悶えけれども、爲方なし。清正、餘に怒つて、帝王は落ちさせ給ふ由なれば、只今より打立ち追懸けて、帝王を擒へ奉らんと犇めきけるを、鍋島加賀守直茂馳來り、是は物の付きて狂ひ給ふか。都入の先陣をせざれば、外に手柄する道はなく候か、能く分別して見給へ。何を指南に、何方へ帝王を追懸け候はんや。甚以て然るべからず。今度、朝鮮へ渡る所の日本勢、二十萬騎を以て、釜山浦より此都迄、其道一千二百里の間に、緋の城々を取つて、分配は是へ過半人數引きつゝ、此都に在陣の味方、僅に四五萬には過ぐべからず。然るを其考なく、虛空に方々へ働出では、洛中彌ゝ小勢にて、若し大明より、大軍出では、防ぐ兵少くして、即時に都を

取られ、危き事目前たるべし。先づ只今の日本勢は、殘らず洛中を守護しつゝ、重て日本より、御加勢を乞ひ、洛中も大軍になり、夫々の城をも固め、氣遣のなき時、帝王の行在所をも聞き極め、大勢一同に寄せ懸け候はゞ、大功一時に全かるべし。小恨を忍ばずして、大事を破る者は私なり。君子は以て、私を害せず。公故に、進むまじきを見て、進まざるは、良將の旨なり。是を以て、白起は、杜郵の自盡を賜はり、王忠嗣は、萬人の命を一官に易からずといひて、終に石堡を攻めざりき。昔の良將、皆以て是の如し。必ず早く給ふべからず。日本より重ねて、御人數著くを相待たるべし。扨其後は、帝王の行在へも寄せ給へと、義を先立て、諫められければ、淸正も理に詰められ、心服し怒れる面に淚を流し、無念を押へて止りける。明くる十二日より、後勢の軍兵、黑田甲斐守長政・大友豐後侍從義統・島津薩摩守義弘・禰島左衞門大夫正則・戶田民部少輔吉繁・長曾我部土佐守元親・小早川侍從隆景を始めとし、四國・中國・九州の軍勢共、每日々々朝鮮の都に著きしかば、行長・淸正諸共に、此王城へ打入り、方々の備を爲し、後陣の續來を待ちて、四月十一日より、同月廿日過ぎ迄、何方へも働

かず、人馬の勞を休めけり。此時、洛中の日本勢、全羅・慶尙へ働き入り、直に平壤へ打つて出で、鴨綠江を渡り、遼東へ入らず、徑に山海關に入り、大明の四鎭を亂らば、東陽沼海へ容易く討取るべし。左あらば、遼東危急にして、明京震動し、大に功をなすべきを、洛中の日本勢、さまで大軍にてなければ、爲方なくして、後陣の續くを待ち居たり。

朝鮮征伐記第三 終

朝鮮征伐記第四

加藤主計頭淸正、朝鮮兩王子を擒にす

小西加藤の註進名護屋に到著

吁實なる哉、年光停まらず、下流の水の如くなる事を。歲改まり節追うて、文祿元年の春も、事繁きに早や立ち卯月も半ば過ぎぬと、罰出でぬ。御本陣肥前國名護屋にては、秀吉公、日夜家康・利家を召集め給ひ、朝鮮表の合戰心許なし、如何あらんと宣ひつゝ、御坐しける所に、四月廿八日、小西行長・加藤淸正等、朝鮮の帝都を攻取るの由、註進ありければ、斜ならずに悅び給ひ、小西が使小西平左衛門、加藤が使貴田孫兵衛を御前へ召され、皆御對面あつて、都入の次第、一々御尋ねなさる。兩人の使者、畏つて申上げけるは、日本の御太刀影に恐れ、帝王、先立つて、王城を落ち給へば、都入の時に於ては、別に粉骨の儀御坐なく候。只帝王を取り北し候とて、擄

行長[illegible]嶺村に陣す

津守・主計も無念がり、是非とも後陣の續き次第、大明・天竺・震旦の果迄も、追ひ懸け候て、帝王御父子を擒へ申すべしと、日夜評定仕り候と申上げければ、將軍御感あつて、兩人が思ふ所さぞあらん。去り乍ら、高麗・大明をさへ切隨ふれば、帝王は自ら出でらるべき間、必ず深入して、越度を取るべからずと、再三申聞かすべしとて、御感狀を遣され、兩人の使にも、鞍置馬一匹づつ下されける。斯る程に、朝鮮にては、日本勢段々に王城へ著きしかば、諸大將評定あつて、帝王を生捕るべしとて、諸口の追手をぞ定めける。先づ大明國への道筋平安道へは、小西攝津守行長一組、黄海道へは、大友侍從義統・黒田甲斐守長政、咸鏡道へは、加藤主計頭清正一組、江原道へは、島津義弘一組ぞ向ひける。文祿元年四月二十日に、平安道への先手小西行長一組・黒田・大友等、陣を立ち、其の日は、開城府川の端、[illegible]嶺村に陣取りける。明くれば廿一日に、開城府川を渡らんとて、小西が先手日比左近右衛門・小西若狹守、二陣大村喜八・宗對馬守、段々に押行きける所に、朝鮮の舟師李純信、番船を川中に懸け並べ置き、其の勢五千餘騎、廿一日の曉、川を渡り、小西が先手へ朝駈に押寄する所に、

加藤・[illegible]

之をば夢にも知らずして、行長が先勢共、李統制に覿面に行き當る。李統制が兵も、指詰め引詰め散々に射る。小西が先手一支もせず射立てられ、二陣の宗・大村が勢に、北げ懸る。新八・對馬が勢も、不意の事に遽え騷ぎ、一度に嗟と崩れけり。三陣の五島・松浦も押立てられ、はし〴〵になりて引く。行長も先備、皆々亂れ崩れければ、驪嶺村の南の出口、椿山といふ山の麓に馬を立て、此處にてもり返さんと待ち懸けたり。李統制は、行長が先備を追ひ崩し、勝つに乘じて、北ぐるを追ひ來る所に、後陣に控へたる黑田甲斐守長政、生年廿五歲、氣逸物なる若武者なりしかば、聞くや怺ふべき。旗を龍粧に進ませて、小西が旗本を妻手に見なし、眞黑になりつゝ押出す。黑田が先手栗山備後守・黑田美作守・後藤又兵衞、五千餘り喚き叫んで駈出でける。李統制も、追ひ白んで控へける所へ、黑田が先手より、後藤又兵衞・村上彥右衞門、眞先に駈入りしかば、黑田美作・栗山備後守、押續いて切り懸り、煙を立てゝ攻戰ひ、難なく追崩し、大河の邊迄、追討に討ちけるに、敵又返し來りしかば、後藤・村上、後陣に引下り、靜々と殿して引取り、椿山へ打入りけり。此時後藤又兵衞、

清正龍村に進軍

手にかなふ所、其の外手痛く働きて、分捕高名せる者多かりける。斯くては川を渡すこと、如何あるべけんと、評定ありし所に、李統制は、青南城へ引入り、平安の通路開けたり。去れども大船の番船數十艘、開城府川にありしかば、之を攻取るべき評定をなす。黒田長政、若大將なれば、進出でて、今朝の軍に敵に一番付け候へば、長政が者共差遣し、番船切取り申すべしとて、船手の功者なればとて、村上彦右衛門尉義清・衣笠久右衛門尉佐範を押向く。村上・衣笠等、其の日の暮合より船拵し、明くる廿二日の未明に、大河の眞中に懸け並べたる番船へ懸りけるに、眞先の船は、防矢射るにも及ばず、明け退きしかば、即ちそれに乗り移り、三町餘に控へたる十艘計りの番船の中へ、面も振らず乗り懸る。敵も此處を破られじと、散々に防ぎけるを、村上彦右衛門、大音揚げ鐵炮にて打渡の、十文字打鎗にて引寄せ〳〵、大船二艘乗取り、敵兵數多川中へ切浸しければ、殘る番船は、押切つて開城府指して北げ上りぬ。今は通路の妨なしとて、諸軍打渡りぬ。同廿三日、加藤清正も都を立ち、開城府に到り、夫より打連れ、三里押して龍村に著く。此の處平安・咸鏡兩道の街なれ

ば、行長竝に長政と暇乞ひ行き別れ、小西・黑田・大友は、平安道指して押行きぬ。淸正は、是より引違ひ、艮の方に向つて、咸鏡道指して急ぎける。帝王父子の間、何れにても擒ふべしと、思ひ詰めたることなれば、汗馬の鞭隙もなく、都を出でて十三日目五月五日の晩景に、咸鏡道の入口蝗乘といふ處に著きたりける。爰にて十日逗留し、鍋島を待つ所に、加賀守直茂も一萬二千餘にて著きしかば、五月十六日に、淸正・直茂打連れて、蝗乘をこそ打立ちける。同十八日の午の刻に、長橋といふ所に押し著きしに、町口に一つの高札あり。淸正、馬を止めて、簑部金太夫に、此の札を讀ませらるゝ。其の詞に曰く、

指示　　倭將主計頭淸正將軍麾下　　　　　　　　金　貫　之

臨海・順和兩府君、執二斯路一而潛二遁入于兀良哈一也。公等躡蹤、莫二敢懈止一焉。余示二倭者非一レ他。只求二全二線縷之身命一耳。亮察珍重。

とぞ書きたりける。淸正、之を聞き、躍上り悅びつゝ、王子を擒へ奉ること、掌にありとて、馬上にて、遙に日本の方を伏し拜み、是偏に本朝の靈神八幡三所、淸正が

丹誠無二を擢み給ひ、斯かる奇瑞を爲し給ふとて、斜ならずに悅びける所に、鍋島加賀守直茂、馬を打寄せて申されけるは、異國の習、斯樣に遠路の大切所へ、僞り引入れ候て、此方を容易に、生捕るべしとの謀を以て、此の高札を立てたると覺え候なり。　之を實儀と思ひ給ひ、追ひ過ぎて深入せば、越度を取らん事、目の前なり。第一直茂が軍勢共は、都を出でて十六日路、此の炎天に、大險の切所を押來り候へば、人馬疲れ苦んで、人心地も候はず。　其上、百里而爭レ利、則擒二三將軍一。故不レ知二諸侯之謀一者、不レ能二豫交一。不レ知二山林險阻沮澤之形一者、不レ能レ行レ軍。不レ用二鄕導一者、不レ能レ得二地利一。是以從レ綏不レ過二三舍一とこそ、古人の申し置きては候へ。　此處は兵糧・水草の便、宜しく見え候間、爰許に逗留し給ひ、王城へ註進仕り、一左右次第に都へ引取り、人數を打入れ給へと、理を盡し諫められければ、清正が軍兵等も、鍋島の申さるゝ處、尤至極なりと、思はぬ者は無かりける。　清正大に氣色を損じ、鍋島をはつたと睨み、何を宣ふぞ、加賀守。　抑此の高札を、朝鮮人の立てたると思はれ候はんこと、全く以て僻事なり。　是即ち、本朝の宗廟天照大神宮・八幡大菩薩の、遠く西戎の地に立翔

り給ひ、淸正が丹忠の志を憐み、擁護の手を垂れさせ給ひ、武勇に神力を添へさせ給ふなり。淸正に於ては、神慮に任せ奉り、陸は馬の通はん處、海は楫の及ぶ迄、尋ね搜して、帝王を生擒らずば、歸るべからず。賀州は、御人數草臥れ候はゞ、此の長橋府に殘り留り、淸正が歸を心永く待ち給へとて、甲を締直し、駿馬に鞭を中てゝ進みければ、鍋島も興を覺まし、かゝる狂人と合爲して、不祥を聞くことの奇怪さよと、世に無興氣なる氣色にて、さらば直茂は、是に殘り申すべく候。相構へて能く御分別候うて、不覺取り給ふなとて、町外れ迄送りけれども、淸正は物もいはず。況して暇乞にも及ばず、手負ひたる猪の怒る如くにて、一萬餘を引連れ、後をも見ずして押行きぬ。鍋島は、長橋城に陣を張り、近邊の兵糧を運び入れ、用心密しくせられける。淸正は鍋島に別れ、足手纏の弱者は、中々殘し置きたるぞ、心地はよきと獨言して、咸鏡道を艮に向つて、いづくを限りともなく押して行く。未だ音にも聞かざる道なれば、所の者を生擒り、案內者に先立てて、問ひ〳〵山路を越えて行く。其道の程、中々語るに言もなし。峨々たる山を登る時は、高峯の雲に身を任せ、苔の筵

に宿を借り、岩漏る水に渇を忍んで、朽ちたる橋に肝を消し、雲龍めたる峡の道、向上げば萬仞の巌は刃を竝ぶるが如く、見下せば千丈の潭は、藍を湛へて底もなし。山路素より雨なうして、空翠常に衣を濕せば、石壁四面に高くして、青苔上に厚く蒸し、蔦木枝を交へては、舊草道を閉ぢ塞げり。谷川渡る時もあり、高峯を傳ふ折もあり。又は渺々たる濱路に出で、潮風寒き海原を、そこと知らず眺めやり、山には懸かる白雲の、幾重ともなく掩ひ來て、過ぎ來し峯も見え分かず、山中に日暮れぬれば、樵歌牧笛の音もなし。沙頭に夜を明せば、白浪高く寄せ來り、磯の松風颯々たり。巴峡秋に入りぬれば、梢の猿の音すごく、劍閣に天も近くして、月故郷の影を分てり。岩木を結ばぬ人なれば、日本を離れる數千里、古郷を出でて月日遙なれば、清正が兵も心細きこと、中々いはん方もなし。夜を明かし日を暮らし、足に任せて行く程に、朝鮮の都を出でて六十八日、鍋島に別れて五十二日と申すに、七月十二日の暮、前兀良哈の境なる法悶谷の城より、廿四里（日本道四里）隔てたる東泉城にぞ著きたりける。人馬、炎天に暑を（[illegible]）朝鮮王城より、五千里（六十一里）に餘りし道を押來りしかば、悉

く疲れ果てぬ。清正も東泉に逗留して、王子の在所を尋ね奉るべしとて、十日餘り陣取つて居られける。頃は文祿元年七月中旬の事なれば、吾古郷の靈祭る頃を思ひ遣り、梢に弱る蟬の聲、庭の夏草色古りて、折知り顏の白露は、置き餘る計りに亂れつゝ、枕に近き尾上の嵐、早や夜寒にも成りしかば、垣根にすだく蟋蟀、蟲の怨も哀れなり。清正も、他郷の空に秋の月を眺め、遙々と分け來し路を思ひ連ね、彼の在五中將にはあらねども、遠くも來つるもの哉と、吾身ながらも怪みぬ。抑清正が著陣せし東泉より廿四里（日本道四里）隔て、法固谷といふ所は、日本の八丈島・硫黃島・土佐畑と同じくして、朝鮮一州の流人を置く配所なるが、十八里四方の廣野あり。其の中に山あるを、石垣を築きて、城を架へ、都よりの流罪人幾多ともなく籠め置きたり。彼の流人共、四邊の野を田畑に耕し、粟・稗を種ゑ置き、月日を送る。子孫繁昌して、數百人に餘れり。之を法固谷人といひ、此所を管領せり。痛はしや朝鮮兩王子は、後より倭將清正が、追ひ來と聞き給ひ、路なき山へ懸りつゝ、法固城の下へ、七月廿三日の午の刻、夢の心地にて落付き給ふ所、法固谷の流人共、此の由を聞くよ

りも、此の兩王子と申すは、吾人先祖の仇に非ずやと、此の時、王子を擒にしつゝ、日本人へ相渡し、先祖の怨を晴すべしと談合し、王子の許へ使を立て、奏聞申上げけるは、法岡谷の住人等、此の時、忠勤を抽んづべく候間、先づ城中へ入らせ給ひ、御休息あるべし。譬ひ日本人寄せ來るとも、防ぎ戰て、追ひ退くべき事掌にあり、と申上げければ、臨海君・順和君、數日飢に及び給ひ、立つ足もなき有樣なれば、明日の命も知らずして、兩王子打連れ給ひ、左丞相李芳薫・右丞相範眞祖を先とし、高官の朝臣廿四人、兩王子の后の宮、其更衣・嬪御・女官廿四人、都合二百十二人瘦せ衰へたる有樣にて、片息になりつゝ、這々城へ入り給ひぬ。爰に長橋にて、高札を立てたる金貫之といふ奴、事の仔細を述べつゝ、路次にて清正に馳せ加はり、此の所迄來りけるが、案內は知りたり、方々馳廻り、王子を尋ね參らせける處に、法岡谷の住人を得たり。幸と悅び、金貫之を使にて、兩王子を生捕る旨、東泉へ註進せり。清正は、東泉城に於て、色々謀を運らし、王子を擒へん工夫を凝しける處へ、此の註進ありければ、斜ならず悅び、急ぎ手水嗽して、遂に日本の方に向つて、是只事に

非ず。偏に伊勢・石淸水を始め奉り、日本大小の神祇、冥道感應の御胙を垂れ給ふ故なりとて、感涙を流し、伏拜み給ひける心の中、躍り上る程にぞ悦びける。淸正は、庄林隼人佐一心を呼び、明日法囮谷へ押寄すべき間、此の中勞り置きたる日本の馬共を、悉く支度させ、段々の備も入らず、只一騎駈に押行くべしと、總陣中へ觸れよと、下知しければ、一心承り候とて、總陣中へ觸れ廻し、下々武具差固め、夜の明くるをぞ待ちたりける。去程に、金鷄三度唱へて、梢に白む山の端に、横雲漸く靉きければ、時分能くなりぬとて、早貝を吹かせ、打立ちけり。淸正は、木綿單の肌衣に、縫延の胴丸・草摺長にさゞめかし、銀の長烏帽子の甲の緒をしめ、大菊光の太刀を佩き、羽月毛と名付けたる沓入らずの名馬に乘り、妙法の旗を朝風に吹かせつつ、東泉城を打出でける。大手の門にて、馬より下り、眼を塞ぎ掌を合せ、心中に祈念しけるは、歸命頂禮八幡大菩薩、總じて日本國中の大小の神祇、弓箭の冥加あつて、淸正を再び日本へ歸朝させんとの神慮ならば、朝鮮の兩王子を生捕らせ給へ。弓箭の運も極まり、家の果報も盡くべくば、只諸天善神の御憐を以て、今日大敵に

清正法囮谷城に向ふ

合せ、討死を遂げさせたび給へと、涙を流し斷念しける、心の中こそ哀なれ。清正、手勢八千餘、廿四里（日本道四里）を二時に押して、七月廿四日の辰の刻に、法闘谷城へ著きにけり。然れども、木戸を打つて城へは入れず。使を以て申しけるは、王子をも、城の外にて相渡すべし。城中へは一人も入るゝ事はなるまじと申しければ、清正、案に相違し、思ひけるは、如何樣にも不審なり。若し王子に非ざる者を、僞つて出すべきか、旁以て心許なし。如何にもして、城中へ入つて、王子かまた贋物か、實否を決したく思へども、城中三千餘なれば、城の構はよし、進退煩ひ居たりけるに、宮田平七、進み出で、吾れ大將の眞似仕り、城中へ入り候はゞ、清正は、士卒へ御紛あつて、城中へ入り給へと申しければ、尤なりと同ぜられ、宮田平七を大將軍に作り立て、床几に腰を懸けさせ、右筆の小田原半助・仙齋といふ文者二人を使にて、門際へ遣し、日本の太上宮主計頭清正、兵糧を仕り給ふにも、城の外には家なし。少しの間、城の構を貸し給へ。小性兩人膳部の役人計り、内へ入るべき由、申し遣しければ、法闘谷人承り、小勢にて入り給へとて、即ち小門を開きけり。宮田平七大將になり、眞先

に入りければ、膳部の道具乃至少しの品々迄も、屈强の兵共に持たせ、役人なりと號して、四十五人内へ入る。淸正も續いて入りつゝ、其の門開けと、下知すれば、今は制すとも叶はずとや思ひけん。大門を開きつゝ、五千餘の兵も、城中へ打入りけり。法圀人は、元來別儀なければ、一人も手向はず、淸正は、王子の居給ふ館を取り卷き、簔部金太夫を以て、申上げられけるは、倭將淸正と申す者、王子を追駈け參り候。とても逃し申すまじく候間、只此の方の陣へ入らせ給へと、奏聞しけるに、王子の寵臣李遇夫出で向ひ、日本の大將、若王子を助け奉らば、御出あるべし、弑し奉るべくば、内にて御自害此れあるべき旨、申し聞くべしとなり。金太夫申上げけるは、淸正、苟も業を箕裘に受け、名を扶桑に顯せり。然りとは雖も、殺さゞるを以て本とし、敢て辜なきを殺さず。今度兵を起す事、只先年の書翰に、返簡なきを咎むるの外他事なし。只今殿下、臣が軍門に臨幸あらば、懇に日本國王關白秀吉に申達し、必ず御命を全う仕るべきなり。其の上朝鮮と會盟し、好を修し、契を結ばん事、往古の如くなるべし。若、關白、怒を止めずして、御命を奪はんと致し候とも、淸正、今

度の偉業に申し代へ、御命を助け奉るべく、其の儀、毫髪も僞譲に非ず。天の照鑒に任すと、申上げければ、王子悦び給ふこと斜ならず。さらば對面あるべしとて、廣さ六十間、長さは八町ありける馬場の中を掃へ、搗臼を二つ取寄せ、其の上に、門の扉を敷き、東方を王子の玉座と定め、西方に疊を敷き、日本清正が座と定む。王子出御ありければ、相從ふ大臣、左右に並んで威儀をなす。清正は、例の大菊光を鳴尻に佩きなし、加藤與左衛門・同清兵衛以下數十人、左右に召連れ座に著けば、王子禮を成し給ふ。清正が士卒、陣列して主を佐けて、威儀嚴重なり。清正、三度禮拜し、拜答の儀式相濟み、供御を王子に供へ奉り、諸大臣、殘らず之を饗應す。酒已に三獻に及びける時、清正が兵、斧を出さんと走り廻るを見、王子近從の輩、俄に騒ぎ立ちて、すはや謀りて、王子を殺し奉るぞと心得て、半弓取つて打番ひ、主計頭が胸板に押當て、已に射殺さんとす。清正、大に驚き、こはいかにと制し止めけれども、言は通せず、聲々に呼ばはる程に、尚ほ進み寄りける所を、清正急度思案し、傳へ聞く、異國には印章を與へて、約をなすといふことあり。是こそ大事の所なりとて、腰に

清正朝鮮兩王子を擒にす

著けたる巾著より、印判を取出し、鼻紙に押しつゝ、王子の近臣に、一枚宛與へければ、朝鮮の從臣等、是に靜まり、各〻矢をはづして、本の座に歸りけり。危しとも中々喩へん方はなかりける。清正、虎口の死を遁れ、吾本朝にて、數度の軍に遇ふと雖も、斯程に辛き目に遇はず。武勇の家に生れ、朝夕軍に隙なけれども、學問を勵んで、仕りけるによれり。會盟に印章を與ふる事を知らずば、今日は犬死すべしと自讚して、己が郎等共に向つて、才覺の程を語り誇りけり。主計頭は、太子臨海君・次男の王子順和君を守護し、從官竝に后達迄二百餘人、請取り奉り、隨分勞り奉るべしとて、四守久太夫・前野助兵衞を大將にて、精兵千五百付けつゝ、東泉城へ入れ奉り、用心嚴しく勗めけれども、兩王子の后達、諸從事官をば、心の儘に慰めつゝ、萬づ自由に持てなしければ、王子を始め奉り、清正が情を感じ給ひ、此頃の疲を休め給ふ。主計頭は、歩の者百人の内、道の達者辯舌なるを五人勝出（すぐりいだ）し、飛脚に申付け、日本名護屋へ遣し、兩王子を擒へ奉れる旨、申上ぐる。其の狀に曰、

謹致言上候。去四月廿三日、朝鮮王城を罷立、咸鏡道を艮に向て、六十八日押詰、

王子御兄弟并后の宮・女官、其外從事官二百餘人生捕申候。帝王は、大明國へ御退出の由、王子被ㇾ仰候。二六時中、帝王御父子を擒可ㇾ申と、心懸候に付て、神慮に叶、御威光を以、如ㇾ是に御坐候。高麗、手弱き國故に、今迄手痛く合戰に不ㇾ及。因ㇾ之、上意にては無二御坐一候へ共、法同兀良哈程近候間、彼表へ働、日本の御弓矢の風儀見せ可ㇾ申と存、明日法良偶を罷立、兀良哈へ切込申候。彌〻可ㇾ抽二忠戰一候。王子官人の書付、別紙に差上候。右の趣、宜ㇾ預二御披露一候。恐惶謹言。

七月廿五日　　加藤主計頭　清正

淺野彈正少弼殿

右の飛脚五人、共に恙なく、九月末に高麗の都へ出で、十月下旬に、日本へ渡海し、十一月十日に、名護屋へ著きければ、折節、秀吉公御前に、家康・景勝・利家を始め、大勢伺候仕られける處に、右の註進の狀、淺野彈正差上げければ、秀吉公披見し給ひ、御手を拍ち、何れも此の狀見られ候へ。朝鮮の王子兩人迄、主計頭擒りたり。扨も手柄を致せりとて、大に悦び給ひければ、御前の大名・小名、皆一同にぞ感じける。秀

吉公、御感斜ならず、御感狀自筆に遊ばされ、吉光の御脇差并黃金五千兩添へて、清正に下されける。

加藤清正、兀良哈に攻入る附兀良哈都燒拂

去程に、主計頭清正は、八月中、法圖谷に逗留あり。今は殘念なし。是にて聞けば、兀良哈の者共は、弓の達者にて武勇に長じたりと云へば、彼の國へ働くべし。日本の弓矢を見せ、夷共に一鹽付けんと思ふなり。道はいか程あると尋ぬるに、法圖谷人承り、是より廿六里（日本道四里半）程、行き候へば、鳥踏村といふ在家あり。夫より六里（日本道一里）過ぎて、十三箇所城郭あり。是則ち兀良哈の境目なり。そこより六十五里（日本道十一里）過ぎて、兀良哈の都なりと答へければ、されば法圖谷人に案內させよ。但し味方討なき樣にとて、三千の法圖谷人に、南無妙法蓮華經の五文字を布に書きて、鎧にも笠にも付けさせ、九月十日に、法圖谷を打立ちける。其の道の有樣は二抱計りの檜の木も、十里計りが間は、森々と生ひ茂り、木の本は野も山も、皆木賊といふ草な

りける。斯くて十日の晩に、意井城の南高弥といふ所に著き、爰にて通辭を呼び、甚平を尋ね、明くる十一日に、意井城を攻取るべしとて、軍評定ありける所に、森本儀太夫と貴田孫兵衛と、先陣を爭ひ、已に同士軍に及びけるを、清正扱ひつゝ、南方を静めけるは、流石の侍共とも覺えぬ事を、振舞ふ者哉。今宵同士軍して、討果つべき其命を、清正に預け置き、夜明くれば、意井城へ取懸るべき間、あれにて甲乙を極めよと怒られければ、南方共に静まり、皆陣所へぞ歸りける。中にも儀太夫は、己が陣所へ歸るとひとしく、兵糧を仕り、即ち出立をぞ仕りたりける。鎧物具取附け、腰兵糧迄調へて、本陣をば未だ宵に打立ちつゝ、意井城の堀際迄押寄せて、夜の明くるを待ちたりける。夜半の頃の事にて、松の梢も吟をなし、谷の小川の流れ、若しも貴田にてやあらんと、雲透にためらひて、夜白まば、乘込むべしと、手を振り牙を噛み、東の白みを待ち居たり。夜深更に及べども、木綿附鳥の音もせず、明け行く鐘の聲もなし。十日の月、西の山に傾なるに、秋の哀れを催して、蟲の聲々恨みつゝ、流石に猛き者共も、心細くぞ覺えける。去程に、夜もほのぼのと明け行けば、

清正意丹城へ押寄す

清正、八千餘、意丹城へ押寄する。其中にも、貴田孫兵衛は、森本に先立たんと志し、紅下濃(すそご)の具足に、鐵形打ちたる唐の頭の甲を、猪首に着なし、鯖の尾出したる赤母衣懸け只一騎、諸軍に三町程先立ちて、意丹城へ馳來る。朝霧の晴間より、城の方を見渡せば、黑具足、同毛の筋甲着て、猩々緋の羽織、金の戻竹に孔雀尾附けたる腰指仕りたる武者、糟毛の馬に乘り、只一騎堀際にぞ控へける。貴田孫兵衛、馬打寄せて、之を見れば、森本儀太夫なり。儀太夫、貴田を見付けて、只今來たる後者は、貴田孫兵衛と見るは僻目か、先陣を爭ふ程の侍が、夜明けて來るをかしさよと、高聲に呼ばはれば、孫兵衛、聞くよりも、遲早は入るべからず、勝負にて極むべしと進む處に、言の下より、森本、馬より飛びて下り、已に先をせらるべくや、優(やさし)の男やとて、意丹城大手の木戸へ走り入る。城中には、類頼といふ大將にて、兀良哈の兵三千計り楯籠りたれば、森本が懸るを看て、屈强の兵卅餘人、門を開きて散々に射る。去とも、儀太夫、少しも痿まず、門口へ驅入り、鐵木舌といふ兀良哈人と押竝んで、むずと組み、上を下へ驛返(ひつかへ)し、組合ひけるに、兀良哈人は大力なり、森本は極めて小男なりけ

れば、組みしかれける所を、儀太夫、心早き兵にて、兼氏の妻手指を抜き、敵の鎧の透間を一突突きて、くつたりけるに、さしもの大力も叶はずして、弱々となりけるを、儀太夫下より跳返し、押して首を取りたりける。貴田孫兵衛も、森本に續いて駈入りける所に、牧々賀といふ兀良哈人、其の長八尺に餘りつゝ、二王の如くなる大男、喚き叫んで出でたるを、孫兵衛、押並び引組んで、どうと伏し、背にかけたる母衣串も押潰れ、上になり下になり、組み合せける所に、孫兵衛が甲に懸けたる唐の頭を、兀良哈人に抓まれ、押付けられければ、孫兵衛も、今は叶はじとや思ひけん。敵の上帶を摑み寄せ、脇差を抜けども、一尺六寸の脇差にて、寸延びたれば、中々に組み合ふ内に抜けざりけり。今は爲方なく、甲の唐の髮毛を抓れたるを、振放たんとや、聲を上げて、二三度組み合ひけれども、敵は大力なり、少しも放さず、唐の髮毛を取つて、押付け／＼住りければ、終に叶はず、下になり、脇指は抜きたれども、眞中より折れたりければ、終に敵の劍に突かれ、念佛高聲に申しつゝ、三十六歳にて討死しけることこそ無慙なれ。清正が先手加藤清兵衛・田口與三右衛門は、貴田が討たるゝを

見て、あれ討たすな、續けやとて、馬を乘り放ち〳〵、手鑓提げ門口へ喚いて懸入る。敵も叐を破られじと、劍を持つて下り、火花を散して戰ひたり。大將淸正は、馬を乘り放ち、木戸より東の塀下へ、只一人付けられけるを、母衣の者阿波伊兵衞・島川九兵衞、打見て、こはいかに越されけるはといふ儘に、一度にばつと走り上る。淸正きつと見て、何條汝等に越さるべきぞ。此城の一番乘加藤主計頭淸正なり。後日に諂ふなと罵りて、塀へ乘り上る處を、內より鑓・長刀の切先を揃へ、突落し切拂ひければ、淸正も二三度突落されけれども、塀の腕木を放たず、又取付きて乘上り、一番乘主計頭と、頻に名乘りける所に、阿波・島川も乘上りしかば、箕部金太夫・大木土佐守、續いて乘入り、同勢𢌞と攻入りしかば、城主類頻相叶はず、搦手指して落ちて行く。淸正が兵共勝つに乘じて追懸け、兀良哈人七百三十二首を取つて、城中を燒立て、勝鬨をぞ上げたりける。味方にも討死侍七人・雜兵廿七人なり。此の外、端城十二箇所ありけるを、押寄せ〳〵攻めけるに、此の國の習、前は堅固に防ぎ守ると雖も、後は險難石垣を賴み、防ぐ人數一人もなければ、法悧谷人を差向け、淸正は後

の高山へ攀登り、城中を目下に見下し、常々五十人・三十人にても、容易に動かし難き大石を、鐵梃にて跳起し、峯より城中へ十計り突落し懸けしかば、只、轉貫下つて、山を平ぐるが如し。 城中周章騒ぐ所を、大筒・鐵炮を揃へて、目の下に見下し、散々に打立てければ、一支も支へずして、吾先々と落ちて行く。九月十一日の卯の刻より酉の刻迄に、城十三箇所攻落し、其夜は川下に野陣を取り、方々の塞々に侍伏せ、物聞き段々に置き、大寨山の如くに燒かせつゝ、用心嚴しくせられける。 清正は、森本儀太夫を呼び、今日、意丹城にて先陣を仕り、殊に一番高名組討に仕りたる段、神妙の至なりとて、五百石の加増をぞ充行れける。 儀太夫申しけるは、貴田孫兵衛事、吾等と一度に門口へ付、屈強の敵に渡合ひ、組合ひ申す處に、甲に懸けたる唐の髮毛を、敵に掴まれ、振り放さんと仕り候へども、大力の敵にて、少しも放さず、押付け押付け仕り候故、脇差を拔かんと致候へども、大脇差故、武具の上にて拔かれず。 然る内に、息切れ候や、終に組みしかれ、討死仕り候。 是も某と、前背に目論仕り候故、無理なる討死を仕り候事、不便なる次第にて候へ。 某も助け申したく候ひつれども、

敵に押し阻てられ叶はず、眼前に討たるゝ傍輩を見捨て、生甲斐なき仕合にて候とて、涙をはら〳〵と流しければ、清正、聞きも敢ず、孫兵衞が思入、さもこそあらんと思ひつれ、不便なる次第なり。今は歎くとも返らざることなれども、せめて死骸なりとも、一目見んとて、歩侍十人計り遣し、意丹城大手より、孫兵衞が死骸を搔寄せて、清正の膝の上へ、孫兵衞が空しき頭を枕させ、軍亂の事なれば、討死せしも知らずして、今迄暇乞せざりしことの悔さよ。軍の習、討死せしは尋常なれども、今度、高麗の都入の時、日本へ註進の使に、汝を申付けたりしに、都表の合戰こそ、一大事とは存候へ。御使の事は、誰にても聶め申すべく候間、某は都入の御供仕るべくと、頻に申しけるを、吾色々認め、將軍への註進なれば、勇士の殊更辯舌よく、公界馴れたる者にてなければ、御前の首尾惡しき間、夫故其方を遣すと、色々理を碎き申せしにより、是非に及ばず、恨めしき氣色にて、日本へ歸朝し、夜を日に繼いで名護屋へ參り、御註進申上げ、七十に餘る母の古鄉肥後の熊本にあるへも、使計り遣つて、直に此方へ渡海し、夜通に道を急ぎ、今度、清正、蝗秉に逗留せし內に駈付

け、精氣なる有様にて、殿の御前途を見ん爲に、老いたる母が許へも、人計り差越し、大事の物前にて候へば、御使に、歸朝仕り候へども、夫へは寄り申さす候とて、申送り候ひつれば、母にて候者、杖にすがり、使の奴を門外迄送り、相構へて、孫兵衞に、老いたる母が不便なりとて、殿の御大事を見逃すべからず、弓矢の家に生るゝ者は、名を惜みて、命を惜まず。死ぬる所にて死ぬれば、一門の面目なるぞ。相構へて古里戀しとて、未練を働くべからず。明日をも知らぬ母が身なれば、是のみぞ心許なく思ひける。去り乍ら、只二人ある子なれば、名殘は惜しきぞとて、門外にて泣き候ひつると、使の奴歸つて語り候。哀れ武士程、世に藝なき者は候まじ、去り乍ら、母が申せし如く、名こそ惜しく候へと、清正が前なれば、さも涼しく語りつれども、母が事を思ひ出せしや、涙ぐみたりしを、今の様に覺ゆるぞやとて、清正、涙を流しければ、相從ふ兵共も、皆鎧の袖をぞ濡しける。扨あるべきにあらざれば、死體を灰になし、遺骨を古郷へ持遣はされ、孫兵衞なければ、弟を呼越し、兄の所領を與へ、其の跡目にぞせられける。傳へ聞く、唐の太宗は、鬚を切つて、李勣に給はり、

亡卒の遺骸をば、帛を散じて收めたりき。今の清正も、戰士を重く寵愛せしに依り、名譽を三國に播すと、心ある人々は、稱歎せぬはなかりける。扨清正、母衣の者を以て、兀良哈の都程近く候間、一定今夜は夜討あるべく候。諸手より頻物見・聞次を出し、外聞の鐵炮、油斷あるべからずと、總軍へぞ觸れたりける。案の如く、九月十一日の夜半許りに、兀良哈人、三千餘にて押寄せ、大鼓を打ち、鬨を作り、雨の降る如くに、矢尻を支へて、散々に射る。清正が方には、待懸けたる兵共、すはや敵よといふ程こそありけれ。三宅角左衞門・坂川忠兵衞・小關平助・赤星太郎兵衞連れて、突いて出で、鐵炮を左右へ廻し、打痿め挑戰ふ所へ、清正が執事、肥後の佐敷城主加藤與左衞門、黑革縅の腹卷を、中二段紫絲にて縅したるに、大袖附一尺九寸の菊一文字の長刀を、右の脇に引き、側手勢二百餘、敵の後を取切らんと喚いてこそ懸りけれ。兀良哈の兵共、與左衞門が廻るを見て、後を切られ、叶ふまじとや思ひけん、捨鞭を打つて、ばつと引く。三宅・坂川・小關・赤星等、勝つに乘じて追懸けたり。兀良哈の勢の中に、月綵子といふ兵、大力の剛の者なるが、大身の鑓を提げ、返合ひ防ぎ

ける所を、加藤與左衛門渡合ひ、一文字の長刀にて、暫し戰ふとぞ見えし。互に入れて踏込み、相突に突きたるに、與左衛門が長刀にて、月綠子が内甲を撞きければ、月綠子が鑓は、與左衛門が具足の鼻紙入の傍に中りたり。去れども具足強くして、疵になる程裏かゝず、月綠子は内甲を撞かれて、犬居にどうと伏したりける。與左衛門、長刀を取直し、持つて開いて丁と切り、左の高股半過切つて、のけに返す所を、郎等共走り寄り、押して首を取りたりける。殘る敵は、右往左往に崩れ行く。三宅角左衛門・赤星太郎兵衛は、山手を押廻り、小關半助・坂川忠兵衛は、川に沿ひて引包み、兀良哈人二百卅一人計り取りけり。加藤與左衛門・大木土佐守乘り來り、長追仕るべからず。最早引揚げ候へと、再三下知して除けければ、追行く兵共も、勝鬨を噇と作り、本陣へ引入りけり。主計頭、諸手の物頭共に下知しけるは、人數の多少を、敵に見透されては叶ふまじき間、やがて此方より、逆寄に寄すべき間、其の旨、觸れ廻せとて、總軍へ下知をなす。頃は文祿元年九月十一日の夜半過に、意丹を立ち、夜の中に二十里（日本道三里餘）を過ぎ、汗馬を早め押す程に、明くる十二日の卯刻に、定案

兀良哈城を攻む

といふ山へ攀上り、兀良哈の王城を目下に見下したり。其の王城の夥しさ、言語を絶ゆる計りなり。家數の多き事、日本の都に五倍も増しつらんと覺ゆ。金殿紫閣軒を爭ひ、富貴の有様目を驚かせり。清正弓杖に縋り下知しけるは、存の外なる所哉、此の體にては、敵の勢、定めて大軍たるべし。勢のありさま見透させて、越度を取らん事必定なり。鐵炮を放ち懸け、鬨を揚げよと、下知しければ、承り候とて、總て鐵炮を、一同に山の上より放ち懸け、大貝を吹立て〳〵、曳々聲を上げて、鬨を噇とぞ作りける。一萬餘りの勢なれば、山彦に響渡り、谷巔一同に震動せり。兀良哈の帝王鐵木睚單于、是に驚き給ひ、すはや日本人寄せたるは、定めて大軍にてぞあらんずらんとて、鳳輦に乘り給ひ、后・妃・王子を先立て、吾先と内裏を出で給へば、洛中の貴賤・男女・老若、取る物も取敢ず、子は親の後を尋ね、兄弟をも忘れ、妻子を失ひ、是は是はと計りにて、北げ落つる有様は、中々語るに言もなし。庄林隼人佐、一心に進み出で、天子、都を落ち給ふと、通辭の者申し候間、他に任せ、追駈け申さんと、馬を乘り浮べ、勇みけるを、主計頭、聞きも敢す小人數にて、大軍を追ふ事、智才の足らざ

る所なり。後陣の勢も續かず、一旦の勢にて、足長に踏込み、日本の弓矢をば、其の威逞しく、彼に見せたり。此の上は追ふべからず、少しも早く放火せよとて、諸軍勢を手分して、先づ內裏に火を懸け、方々一同に燒立つる烟、明方の雲と亂れ合ひて、空は霧の海となり、朝日の光も朧なり。洛中の男女・老若、貴となく賤となく、東より西・南より北、思ひ〳〵に迷ひ行く。其の有様、哀を催さずといふことなし。清正の先備、段々に立並び、洛中の大廈高樓、殘なく一度に燒立てしかば、煙、宇宙に滿々として、空に知られぬ雲霧の、幾重ともなく掩ひ來りて、野も山も、皆常闇となりにける。清正、母衣の者を遣し、此の煙の紛に、早々人數を纏め、足早に引取るべしと、追々に下知すれば、軍兵共段々に備を立て、繰除に都を出でつゝ、三十里（日本道五里）引退き、星隣山といふ山の上に上り、山取して人馬の息を休めける處に、都を燒かれ、口惜しくや思ひけん。兀良哈の將軍、不骨木といふ者、大將にて半弓五千張、眞先に押立て、同勢五萬餘、胡角を吹き、大鼓を鳴らし、半弓を雨の降る樣に射懸け、劒戟の刀を揃へ、狼の鳴く樣に、聲を上げて馳來る。谷・嶺・平等に導き渡り、八尺・九尺

に餘る大男共、野も山も一面になつて、懸り來る事、洪水の漲り來るに異ならず。清正が勢、之を見て、今は最後と思切つて、迚も逃れぬ所なり、一足も退くなとて、先づ手分をぞ仕たりける。先手は加藤與左衛門を大將にて、永野三郎左衛門・原田五郎右衛門・天野助左衛門、其の勢二千にて備へたり。敵懸くるをば、眞先に突崩さんと、獅子の齒咀して、鑓を小膝に載せ、敵陣を睨んで控へたり。二の切は、加藤清兵衛にて、小代下總守・近藤四郎右衛門・安田善助、其の勢千五百餘、馬を後に引立てさせ、先手崩れば、此方より入り代り、一捲り二捲り落さんと、甲の鉢を並べつゝ、靜り返つて備へたり。左の尾崎には、山口與惣右衛門・齋藤立本・大脇右衛門、二千餘、横矢に敵を射立てんと、鐵炮に火繩を挾み、射手は弓絃喰しめし矢筈を取つて、待懸けたり。三陣は、清正旗本なれば、妙法の旗を、山風に吹靡かせ、銀の馬藺の馬印、日に輝かして、押立て、清正は銀の長烏帽子の甲の緒を縮め、例の大兼光の太刀を佩び、音に聞えたる片鎌の鑓を、妻手（めて）の脇に引付けさせ、床机に腰を懸けて控へたるに、屈強の侍二百計り、下り立たせ、鑓を持たせて、左右に折敷かせ、旗本の弓・鐵炮

を、南の手先に立並べたれば、彼の常山の蛇陣も、斯くやと思ふ計りなり。其程に、兀良哈人五萬餘、眞黒に寄來り、先手の大將加藤與左衞門、麾を振つて、洪間合人は、右の尾崎より旗を以て打立つべし、總人數は、眞丸に取合ふべからず、只指麾き次第に、鎗を入れよと、其の身も手鎗提げ潔やかになつて、下知しける處に、早や左の尾崎より、齋藤・山口大助等、弓・鐵炮を放ち立つる。敵打たれ疲え、洋所を、清正自身馬蘭を振り、時分は能きぞ、すは懸れ。首を取るまじ、眞黒に鎗を入れよ〳〵と、囗りしかば、首の下より、加藤與左衞門が備より、和田備中守・井上大九郎・大木土佐守、只三人一番に走り出で、大敵の眞中へ、一度に鎗を入れしかば、大將與左衞門、身を揉んで、あれ討たすな、續けやとて、混甲二千餘り、一同に噇とぞ懸りける。互に火花を散らしつゝ、揉に揉んで攻戰ふ。馬煙虚空に廻つて、雲霞を吹立てたるが如し。暫し防ぎ戰ふと雖も、清正が兵共、押立て〳〵攻めしかば、兀良哈人討負けて、北の方の田の中へ、人雪頽をつかせて崩れ込む。討たるゝ者數を知らず。されども、敵は大軍なれば、又取つて返し、足をも亂さず、攀り來る。清正が先勢も、戰疲

れ見えければ、二の切加藤清兵衞が勢、入り代らんとする處に、日本の大小の神祇冥助の手をや、垂れ給ひけん。天俄に掻曇り、辰巳の方より、黑雲一村掩ひ來り、見る中に、天地俄に震動し、雷電夥しく鳴り出で、大風烈しく吹き出で、霰交りの雨降ること、車軸を流すが如し。在家は遠し、日は暮れかゝる。兀良哈の大軍も、是に恐れ慴きて、此處彼處の木陰に立寄りけるに、電天地に閃いて、雷大に鳴霆く。清正が兵も、是に利を得て、一陣・二陣一手に合せ、大山の崩るゝ如く、一度に喧とぞ懸りける。兀良哈の大軍共、山より下へまくり落され、人馬、彌が上に落重なり、壓しに押され、踏殺され死傷する者、數を知らず。是より總軍亂れ立ちて、吾先々と、捨鞭を打つて、落行きけるを、加藤清兵衞、馬を横に立切つて、一人も追ふべからず。若し長追する輩は、後より鐵炮にて打殺せと、眼に角を立て、下知しければ、流石に物馴れたる兵共にて、承り候とて、總軍を眞丸に立て、本陣の山へ引上げたり。今日の軍に、討捨てたる敵の數九百七十三人、深田・大河へ落入つて、溺れて死したる者も、千人に餘れり。味方も手負・死人多かりければ、其の夜は、山上に大篝焚きて、陣取り

つゝ、人馬の息を休めける。今日、山取して陣取る故、大事の合戰に討勝ちしぞや。若し山に陣取らず、其の上大雨・大風せずば、味方一人も助かるまじ。諸天善神の影向あつて、今日の風雨を起し給ひ、清正に力を合せ給へと、甲を脱ぎて、遙に日本の方をぞ伏拜みける。明くれば九月十三日に、星降山を立つて、朝鮮國へ歸陣せんと、用意せし所に、又兀良哈人一萬計りにて、大鼓を打ち、半弓を用備け、一文字に懸り來る由、遠見の者より註進に及ぶ。清正備を立てゝ、今日の殿は大事ぞや。吾を殿して除(しりぞ)くべしとて、二百挺の鐵炮を備へ、左右に歩立の侍二百人、鑓を持たせ折敷かせ、徐に繰引に引きけるに、兀良哈の先驅、蓮綿といふ大將軍は、清正の出立を見、半弓を七百張、段々に押立て、矢尻を支へ、散々に射る。清正少しも騷がず、敵合三十間程、間を引寄せ、百挺づつ鐵炮を放させ、時分はよきぞ、鑓を入れよと下知すれば、阿波伊兵衛・出田宮內少輔・森本儀太夫、眞先に抽んで、噇と鑓を入れしかば、殘兵共一同に懸りける。兀良哈人一萬餘、昨日の働にや手懲しけん、暫し支ふるとぞ見えし。吾先々と崩れ立つて、前後一つになつて敗北せしかば、清正、馬藺の馬印を振

り、追ひ行く人數を纏め、手負を先に立てつゝ、徐々と引取る。明くる十四日には、兀良哈の國境を出で、朝鮮咸鏡道劇城といふ處迄、人數を打入れける。人馬意外に草臥れ、清正も事々しく疲れければ、劇城に二十日逗留し、人馬の息をぞ休めける。

清正征東使伯寧將軍を擒にす
附 清正蝗秉に到り打入る人數

清正甄兪浦出陣

爰に、朝鮮四道の元帥、征東使伯寧といふ者は、日本人と初度の軍を仕損じ、此の道へ落ち來り、劇城より五日路、東甄兪浦といふ處に、隱れ居る旨、清正に告げたりければ、主計頭は、天の與ふる所なりと、悦びつゝ、九月廿六日に、劇城を打立ち、十月朔日に、甄兪浦へ著陣す。所の者を召捕へ、案内者に先立てゝ、鵜平次・井上大九郎・小代下總守に、鐵炮二百挺相添へ、彼の征東使が籠りたる砦の嵩鷄谿といふ山へ指向け、清正は、自身百挺の鐵炮を先へ押立て、二百騎の侍に下立たせて、鑓を持たせて、殘る勢は、鷄谿の二方を取圍み、一度に鬨を作り懸り、鐵炮を打入れたるに、征東

伯寧を擒にす

使も、軍兵共を下知して、矢・鐵炮を打出し防戰ふ。清正白旄を振り、時分は能きぞ、只平攻に乘り入れよと、下知を爲し、塀を二三間踏み破り、喚き叫んで押込みたり。征東使、今は叶はずして、劒を打振り〱、斬拔け〱、鷄籍の方へ北げ出しゝを、小代下總守・鶴平次・井上大九郎下り合せ、終に征東使伯寧將軍を擒へけり。高手・小手に禁め、清正前に面縛せり。身の長六尺五寸、糟尾鬚にて大の男、年は五十四歳なり。清正斜ならずに悅び、討取る首共實檢し、人馬の息を續ぎける所に、生捕の中に、後藤といふ通辭一人あり。此の者、日本松前の者なりしが、獵船に乘り、風に放たれ、此の甁愈浦へ著き、已に二十餘年、此の處に住居せしかば、兀良哈・朝鮮國の言を使ひ、最上一の通辭なり。清正、大に悅び、次郎と名を附け、方々の案內者にせられける。抑此の甁愈浦といふ處は、日本より艮に當り、雲晴れ日和の能き時は、駿河の富士山、坤に當りて近々と見え渡る。松前より北にて、日本の東北たり。家を葺くにも食事にも、皆昆布にてぞありける。清正は、朝鮮王城より、六十八日路、其の道四千九百廿餘里（六町一里）なれば、今は人馬を疲勞せんも、其詮なし。最早人數を引取る

べきに極りつゝ、十月五日に、瓶兪浦を立ち、王子を籠め置き奉りける。東泉城迄急ぐべしとて、通辭後藤を呼び、案内者に先立ちて、初の道は九日路なるに、瓶兪浦より三里戻り、横道方より五日路あり。近路を押立ててぞ通りける。其の道、沙塞といふ大河に沿うて上りし處に、川の向は、兀良哈の地なり。其所に后虹といふ家四五百軒あり。一の村里あり。其の村より二三百人立出でつゝ、清正一萬餘にて、さゞめき渡つて、海道を押通るを、見物に出でたりしが、其内より三人罷出で、清正が方を招き、尻を捲り叩きつゝ、一度に譁と笑ひたり。清正、大に腹を立て、あの奴射落せと下知すれば、馬上の侍十騎計り下り立ちて、鐵炮を打懸けしかども、其の間遙なれば、丸一つも當らず、清正腹を居ゑ兼ね、通辭後藤を呼び、此の川に、渡瀬はなきかとありし時、さん候。一町下に渡瀬の御坐候。然も瀬廣くして、渡り能く候と答ふ。さらば渡せ者共とて、取つて戻し、馬強なる若武者共、眞先に乘込み乘込み總軍、鬨を揚げ、一度に河をぞ渡しける。此の有樣を見るよりも、二三百人の兀良哈人、蛛の子を散らす如く、后虹村へ北げ入りければ、清正は、堤の上に馬を

立て、通辭役藤を以て、村中へ申しければ、此の兀良哈といふ國は、日本にては昔にも聞かざる所なり。然れども朝鮮國にて、聞き候へば、此國弓の上手にて、武勇勝れたりといふに依り、日本の弓矢の風を、此の國に知らせん爲め、是迄攻めて來りたり。兀良哈の帝都を去る九月十二日に、悉く燒拂ひ、宣川城を攻崩し、數度の合戰に打勝ち、只今歸國に赴く所なり。是全く日本國王の勅命にも非ず。只清正が所存により、此の如くなれば、別に其地に於て、少しの意趣・遺恨なきに、何とて今日、川向を押通すに、其の方共數百人罷出で、尻を捲り嘲笑ひしや、甚だ以て心得ず。其内、張本の奴三人あり。此の者共を召捕へ、急度此方へ相渡すべし。若し違背に及ばゝ、是より十日・二十日路が間を、縱横に攻め靡け、在々所々一字も殘さず燒き拂ふべし。理至極仕候間、彼の狼藉者三人は、卽ち詮議仕り候とて、彼の三人を縛りつゝ、清正の前へ引出し、大なる俎に、彼の奴原が首を當て、鐵刀を以て頸に屆へ、槌を振上げ打ちたるに、首は一度に離れつゝ、一間計り飛びたりける。卽ち一村の老者數十人、清正の前へ罷り出で、羊の皮百枚・貂の皮百枚進上して、手を合せて禮をな

せり。清正、大に機嫌を直し、心地よしと悦びつゝ、又川を打渡り、本道にかゝり急ぎけり。十月九日の晩景に、法圓谷を打過ぎ、東泉城へ歸り付きしかば、田守久太夫・前野助兵衛、迎に出で、死したる人の蘇生したる如く、悦ぶ事限なし。清正は、湯浴髮洗旅の疲れを治し、朝鮮兩王子へ、御目見に罷出で、兀良哈表の働、竝に征東使伯寧を擒へたる旨、委細に申上げ、やがて征東使を引立てゝ、王子の御前へ參りけり。兩王子は、上壇の間に御坐す。其の中壇には、左丞相李芳薰、下壇には清正竝に郎黨ども數十人伺候せり。兩王子、御簾を捲かせ、遙に叡覽ありければ、征東使は、白洲にひれ伏し、緣迄も上り得ず、頭を地に付け、涙を流し、通辭に向つて、色々に口說きつゝ、額を砂に打付くれば、眉間より血流れたり。清正、通辭を以て、自害すべき爲めかと、尋ねられければ、征東使、涙を押へ、抑臣伯寧は、元來庸愚鹵莽の徒、亡頼纖芥の卑賤たりき。然るを王子殿下の御父、當今天子の御目利(めきゝ)を以て、大國を下し給ひ、武官を授かり、皇都より南、京畿・忠淸・慶尙・全羅の四道の將軍は、按使判官王僧璘に仰付けられ、京より北、江原・黃海・平安・咸鏡の大將には、吾等を仰付けられしに、

其鴻恩の甲斐もなく、一戰にも及ばずして、天子蒙塵の巷に落ち、剩へ太子・后宮を、安々と敵の手に渡し、吾身さへ囚の如きの縲絏の苦を受け、禁闕の内に押籠められ、再び龍顏を拜し奉る事、骸の上の恥、黄泉地下迄の忘念、何事か是に勝らんや。倭寇、今少しも遲く寄せたらましかば、國々へ觸遣し、人數を集め、一戰に及ばゝ、斯程に脆くは負くまじきを、行長・清正の倭將共、透間なく取懸りしかば、斯かる淺ましきことになり、生々世々の遺恨たり。せめて討死したりせば、此の恥辱には及ぶまじ。今は斯かる身となれば、自害せんも心に任せず、口惜しき事共なりと、聲を上げて泣き悲しめば、兩王子も聞召し、御衣の袂を御顏に當て給ひ、御涙に咽び、大臣李芳薫も、清正を始め、郎黨共も、征東使が申す所、理至極せりとて、涙を流さぬはなかりける。斯かる哀れなる中にも、阿波伊兵衞・九鬼四郎兵衞二人は、さらぬ體にてありければ、傍の人に爪彈され、さればよ、あの兩人は、無道至極なる荒夷にて、物の哀れを知らざる故、終に涙を流す事なし。無慙無愧なる事かなと誹れば、又傍より左様にて宜ふぞ。此の兩人も、心中にはさこそ哀れに存ずべけれども、狼眼といふ

物にて、淚は出でざる生付なり。總べて朝鮮在陣にも、哀れなる事三度ありて、淸正も淚せきあへざりしに、彼の兩人は、少しも泣かず。さては人の申せし如く、狼眼にてありしやと、若き人々は怺へかね、笑はぬ者はなかりける。去程に、十月十二日に、淸正は兩王子並に后宮・女官・侍女・諸大臣・征東使を始め、二百餘人を警固して、王城近き橋州へ歸著し、蓮下といふ所に宿陣せり。斯かる所に、漢南大將梅天といふ者、二萬餘にて、梁養山に出取して、外に一萬の勢を以て、淸正が歸陣の道を、遮つて陣を取り、待ち懸くる旨、聞えければ、淸正が軍勢共、長旅には疲れたり、所々の軍に手負は多し。如何せんとありし所に、淸正、少しも痿まず、明朝の合戰には、吾等旗本にて、先手をすべし。横鑓は、吉村吉左衞門・出田宮內少輔・森本儀太夫仕るべし。二番備は、加藤淸兵衞・山口惣右衞門・加藤美作守・長尾安右衞門・片岡右馬助・庄林隼人佐、三陣は小代下總守・佐々平左衞門、其の外は、兩王子を警固仕るべしと、委細に軍法を定めける所に、吉村吉右衞門進み出で、明日の御先を御自身なさるべしとの儀、尤には存候へども、昔より大將軍の荒ごなし、承りたる事もなく

候。其の上、輕々しき働あつて、若し討たれ給ふならば、日本の御弱り、旁以て然るべからず。先手の内に加はり給ひ、御下知はなされ候とも、必ず粗忽の御振舞は、勿體なき事どもなり。明日の先手、吾等に仰付けられ候へ。さなく候はゞ、軍神八幡大菩薩も御照覽候へ。只今腹掻き切り、御前にて骸を曝すべしと、思ひ切つたる有樣なり。清正、興を醒し、此の上は是非に及ばず、忠村、先手を仕るべし。去り乍ら小勢なれば、肥前守を加ふべしとて、夜中に備を分け定め、人馬に兵糧支度させ、明くれば十月二十日の辰の刻、梁養山の道筋へ向つて、楠州指して押出す。案の如く漢南の梅天は、二萬餘を引率し、一萬をば山下へ下し、援兵の爲に控へさせ、孟武伯といふ者に、一萬を付けつゝ、道筋に立て置きたり。孟武伯は、一萬を三隊に頒ち、旗を振り、半弓を千張程先立てゝ射懸けさせ、馬の鼻を一面に並べて、足も亂さず懸り來る。主計頭先手吉村が一備、何れも馬より下り立ちて、鑓を持ち折敷き、鐵炮を手先へ張出し、一同に放ち懸る。矢・鐵炮は、雨の降る如く、敵味方の喚く聲は、天地も裂くるかとぞ覺えける。半時計り射合ひしに、漢南の孟武伯が備、吉村が鐵

炮に打立てられ、引色に見えし所を、淸正は、吉村備に居りければ、團扇を振り、自ら眞先に乘出し、鑓を入れよ〳〵と、下知をなす。先手吉村一備、面も振らず、眞丸になり、一度に鑓を入れたりける。南兵一萬餘、暫く支へ戰ふと雖も、吉村が兵共、四武の陣を魚鱗に合せ、百戰の力を出し、黑煙を踏立て戰ひければ、南兵、終に打負けて、一度に噇とぞ逃げたりける。餘すな討止めよと、淸正、大音揚げて訇れば、勝ち誇りたる主計が兵、鬨を作り追懸け〳〵行く中にも、吉村吉左衞門は、漢南人山春といふ者と渡り合ひ、馬上より組合ひ落ちし所を、阿岐伊兵衞、透間なく落ち合ひ、山春が首を取る。然る所に、梅天が二萬騎、山の尾より打下し、大鼓を打つて懸り來る。横合に控へたる山岡肥前・森本儀太夫・出田宮內、之を見て、すわ〳〵敵はかゝるは、近々と引受けて、一度に突いて懸るべしと、打物を鑓脇に立て、弓・鐵炮を手先へ出し、鬨を作つて射立て打立て、鑓衾を作つて、横合に突いて懸る。二の切に控へたる加藤淸兵衞・庄林・山口・長尾、なじかは怺ふべき。混甲に二千餘、一度に轠を傾けて、手強く鑓を入れたりければ、梅天が二萬餘、手を碎きて防ぎ戰へども、

終に追ひ立てられ、鐵下にて數輩討たれ、右往左往に見えけるを、吉村吉左衞門、備を立直し揉合ひ、梅天が二萬餘を梁養山へ追ひ上げたり。主計頭が勢、喚き叫んで攻上げんと仕たりける。清正、堅く制し、荒手の加藤與左衞門備と、天野助左衞門・原田・片岡備を、殿に立てさせ、靜々と物離して、橘州城へ取込み、其の夜は爰に一宿しける處に、長橋府に殘り留まりし鍋島加賀守直茂・相良宮內少輔、一萬五千にて、清正迎として、橘州まで二十日以前に出張したりしが、之を聞いて喜悅の眉を開き、清正陣へ參陣し、互に手を取組み、先づ淚を流しける。鍋島申しけるは、御身、長橋を立ち給ひしより、四箇月が間は、行方も知れず、音信も聞かず。扨は討たれ給ひたるかと、明暮是のみ案じ煩ひし處に、法圀谷にて王子擒にし給ひし旨、日本へ御註進の使を承り、誠に安堵仕り候ひき。今度彼の表の御粉骨、言語の及ぶ所に非ず。誠に仙家に入りし王質が昔も、今更思ひ出され候と、悅ぶ事限りなし。清正も顏色打解けて、加賀守・宮內少輔にも、兩王子を拜謁させ、兀良哈表の働、昨日梁養山にて、梅天と一戰せし始終の次第を語りければ、鍋島・相良も、舌を振へり。鍋島

清正蝗秉人數配置

申しけるは、御身を入れ參らすべき爲め、橘州の內に出城を構へ置き候間、是へ今居住し給へとありしに、清正も悅びつゝ、此の砦へ入城し、十日計り休息して、長途の辛苦を慰めけり。扨橘州は、富貴自由なる所にて、洛陽にも劣らざる所なればとて、此の處を端城とし、蝗秉迄十三日路は、清正所領として、年貢は運送仕るべく、其の外は莫大なれば、打捨つべしと相議し、所々に人數を分け置く。先づ橘州城には、加藤淸兵衞・片岡右馬助・加藤傳藏・永野三郎左衞門・原田五郎右衞門・天野助左衞門・山口與惣右衞門、七人を大將にて、千五百人入れ置きたり。藏床には、近藤四郎右衞門・岡田善右衞門・佐々平左衞門、五百餘にて入れ置き、銀山には加藤與左衞門・出田宮內少輔・井上大九郎五百餘、律靑には小代下總守・大脇次郎右衞門・長尾安右衞門竝に組の弓三十張、鳳井には、吉村吉左衞門・堤權右衞門、坂下には多田茂左衞門籠め置き、同十一月朔日に、鍋島・相良打連れ、清正は、橘州を立ち、同十日、鍋島居城長橋に付き、爰にて鍋島一萬五千にて殘し置きければ、加賀守も勢を分ち、鍋島平五郎・成隅十右衞門・龍造寺七郎右衞門を、三日路の間に配り置き、龍造寺政家をも、二

箇所要害を構へ入れ置き、加賀守は、前々の通り長陽に在城す。清正は、相良宮内少輔相伴ひ、同十三日に、蝗乘に着く。此の地王城を去る事十三日路、所も宜しく地の利全き所なれば、城郭堅固に構へつゝ、清正爰に在城す。蝗乘より四十八里、江原道の境保浦といふ所に、坂川忠兵衛・和田備中・大木土佐守に、小田原半助・木戸清助を副へ置きつゝ、明くる文祿二年二月下旬迄、清正は、蝗乘に在城して、日本の御下知を待ち居たり。扨も清正、小軍を以て、大敵を破り、朝鮮王城より五千里の道を攻入り、兩王子を生捕り、兀良哈の都を放火し、道中數度の合戰、一度の越度なく、武勇を震ひ、名譽を擔く事、人間の業に非ず。只鬼神の所業たるべしとて、名を振ひ、恐惶かぬはなかりける。傳へ聞く、漢の韓信は刑徒の中より選出され、眞王の印を得て、齊國を打治め、唐の李勣は、群盜より起りて、唐朝の良將となる。是れ皆、高祖の眼力、太宗の聰明にて、疑心なかりしによりき。吾朝の清正は、尾州の孤獨たりと雖も、名青雲九天の上に揚り、譽を紫宸三台の稱歎に傳へたり。誠に秀吉公の方寸の勇才、天地に溢れし故に、取立て給ふ。諸大將、何れも愚なるは無かりしと、今

の世迄も、感歎せぬはなかりける。

黒田長政先勢狼川軍

長政先勢狼川出陣

小西攝津守行長は、帝王の行方を尋ね、大明國の境鴨綠江迄攻入り、近邊を尋ね捜し、若し帝王を擒へ得ずば、江を渡り、直に大明へ働くべしとて、後の同勢の續き來るを待つ。黒田甲斐守長政は、大友義統を先に押立て、小西が後を追うて、押入りけるが、小西は、鴨綠江に陣取る由、聞えければ、大友は平壤に屯し、黒田長政は葛原に陣を居ゑ、互に援勢をなす。長政が先勢栗山備後守利安・後藤又兵衛正次・衣笠因幡守、其の勢二千七百餘にて、狼川といふ處に陣を張り、大友との絆をなして、急に臨む時は、助け合ふべしと約束せり。其頃朝鮮國王は、義州に御坐しけるが、忠淸道の節度使季時言を大將にて、平安・咸鏡兩道の兵を屬し、都合四萬五千餘にて打つて出で、狼川に屯したる黒田長政が先勢を、襲取らんとす。六月二十日の夜に川を越え、明くる二十一日の曙に、老翁山を打越えて、長政が先勢の陣取りたる狼川指して

押寄する。長政が部將栗山・後藤には、之をば夢にも知らずしてありける所に、遠見の者走り來つて、敵こそ寄せ來り候へと、叫り呼ばはる。是に驚いて見渡せば、爰を去る事二三里計りにて、李時言が勢四五萬もあらんと覺えて、段々に備へて、只今懸らん樣の氣色なり。長政が先勢、是に驚いて、周章騷動ぎ、評定區々なり。然れども味方の勢、纔に二千七百餘にて、四方の大敵に、懸合ふべき樣なし。長政へ注意せよとて、黑田惣右衞門・毛利但馬守・後藤又兵衞・衣笠因幡守申し合せ、連狀を以て相調へ、早道五人勝り出し、草臥れ候者は殘り、五調なる者計り、此の狀を持參せよとて、狀を書認め、連判を居うる所に、栗山備後守利安は、中にも大剛の侍大將なれば、連狀の場へは出でず、備配・合戰の次第下知して居ける所へ、註進狀相調へ候。備後守、判取に持ち來る。備後守披見するに、其の狀に曰、

急度致ㇾ註進ㇾ候。敵夜中に川を越え、此方陣所へ取懸申候間、早々御人數被ㇾ出、御後詰可ㇾ被ㇾ遊候。恐々謹言。

と書きたり。栗山いひけるは、文言惡しく候間、書き直され候へ。さ候はゞ判形仕

るべしとて、彼の狀を返しければ、後藤・衣笠申し越しけるは、何れも談合の上にて、相極め候間、此方にて、書き直すに及ばず。其の許にて、いか樣にも書き直され候へとありしかば、栗山、床几に腰を懸けながら、筆を取つて書き直す。其詞に曰、

急度申上候。敵夜中に川を越し、此方へ取懸申候。於二手前一は、可二御心安一候。恐惶謹言。

と書き止め、栗山・後藤・毛利・衣笠等連判して、葛原へ遣しけり。栗山・後藤等、僅に二千七百餘にて、李時言が四萬餘に馳け向ふ。萬一つも對揚すべき勢に非れば、皆討死と思ひ切りてければ、中々涼しくぞ覺えける。栗山、下知して曰、敵向ふの大河を越し候と見ば、鐵炮を一放つゝ打懸け、其儘太刀打に仕れ。とても遁れぬ處ぞ、心を靜め、討死せよと、士卒を勵まし、待懸けたり。李時言が四萬餘騎、栗山・後藤を、小勢と、見課(みおほ)せて、なじかは□るべき。前後の手分もせず、吾先々と川へ乘込み、流を偃ぎて、渡り來る。栗山・後藤・毛利・衣笠・黑田等、僅に三千計り、只一手に眞丸に立て備へ、敵の勢半分、川を越え來る所を、一度に噇と突いて懸る。李時言が

大軍も、鬨を揚け、鐘を打合せ、黒旗を踏立てゝ挑戦ふ。粟山備後・後藤又兵衛・黒田・衣笠・毛利以下の兵も、面も振らず駈入り、東西を拂ひ南北へ追廻し、駈抜け駈入り、交合ひ、彼に露れ此に隠れ、火を散じてぞ戦ひける。聚散離合の有様は、須臾に變化して、前にあるかとすれば、忽焉として後にあり、此方かと思へば、乾として敵なり。十方に分身して、萬卒に同じく相當りしかば、李時言が大軍も、馬の足を立て兼ねたり。射違ふ矢・鐵炮は、夕立の軒端を、過ぐる音よりも、猶ほ繁く、打合ふ鐘が鳴る音は、空に答ふる山彦の、鳴り止む隙はなかりける。李時言が兵共、武者立を見て、能き敵なりと思ひければ、取籠めて、是を討たんとしけれども、粟山備後・後藤又兵衛、東より西へ破つて通り、北より南へ追靡け、能き敵と見るをば、馳せ竝んで、組んで落ちては、首を取り、合はぬ敵と思ふをば、一太刀打つて駈散らす。粟山と後藤と、三所にあつて、八方に分る。其心偏に大將に渡り合ひ、組んで討たんと思ふにあり。黒田惣右衛門・衣笠因幡・毛利但馬守等、手先を捲り、弓手・妻手に駈分れ、電光の激する如く、七八度が程當りしかば、李時言が大軍、魚鱗にも進み得ず、虎韜に

栗山後藤等の高名

も集まらず、此に馳散らされ、彼に辟易して、已に引色になりしを、栗山・後藤・黒田・衣笠等、又喚きて馳入りしかば、李時言が大軍打負けて、大河へ追ひ浸され、浮きぬ沈みぬ流れ行く。偶々助かる者も、馬・物具を捨てゝ、主・郎等を知らず、親を捨て子を顧みず、吾先々と落ち行きしかば、討たるゝ者、數を知らず。栗山・後藤、勝つに乘つて、鬨を作り馳けたり。衣笠・黒田・毛利が兵共、前を馳立て、左右を從り攻めければ、李時言も、返合はすに及ばず、辛き命助かつて、北げ延びけり。栗山指揮を振つて、大敵の逃げ行くをば、長追すべからず。必ず越度を取るべしと、馬を立て、乘入れ〳〵下知して、追ひ行く勢を、止めければ流石物馴れたる兵なれば、北ぐる敵を追ひ捨て、颯と物離して、本の陣へ引取りぬ。今日の合戰、大敵といひ、異國といひ、續く同勢はなし、萬死一生の大事たりしを、栗山・後藤・衣笠・毛利・黒田、自ら手を碎き相働き、大敵に打勝つ事、比類なき手柄なりと、稱歎せぬはなかりける。栗山・備後も、左の高股・右の小胴先・内甲四箇所手負ひたり。後藤又兵衞も、射向の腕・太刀懸のはづれ、三箇所迄手負ひたり。其の外、軍兵共手負・討死數多なり。長政は、葛原に有

りしが、註進を聞くと均しく、其の勢一萬五千にて、驅付けしかども、早や合戰事過ぎ、味方打勝つて、本の陣へ引取りし所へ著陣し、喜悦の眉を開き、勝利の段限りなく感じつゝ、長政、直に栗山備後守、小屋へ行きて、栗山に向つて、何とて卒爾に、合戰を始め候やと、申されければ、栗山は數箇所手負ひ、俵に寄懸りありしが、眼を怒らし、主の長政をはつたと睨み、敵が取懸り候に付、合戰仕り候と、荒らかに返答し、餘りに不興したる體なりけるに、長政そこにて涙を流し、左樣に腹立仕る所尤なれども、去り乍ら、卒爾の合戰仕出し、其方などを討たせては、長政が男を立て候事も成らず。まして生甲斐もなければ、先の如くにはいひたるなり。四萬に餘る大敵を、二千餘の小勢にて、打勝ちたる武勇の刃鋒、今に始めぬ事ながら、比類なき手柄なり。必ず長政が先の言を、心にはかくるなとて、手負どもの小屋毎を、一偏に見廻り、夫々に褒美し、又栗山が小屋へ歸られし所に、黑田惣右衞門申しけるは、一刻も急ぎ註進申上げたく候所に、註進狀の文言を、吟味致し候に付、延引に罷成り候といひけるに、栗山聲をいらゝげ、其の文言は、此の備後が吟味仕り候ぞ。其の

故は、註進の狀とは存せず、只書置の遺言狀と、存じ候に付、念を入れでは候へ。其の仔細、別の儀に非ず、四萬に餘る大敵へ、吾等二千の人數にて、只今合戰に及び候に、早々御人數出さるべしと、申上げ候でも、此方より御陣所萬原は、九里の道を行き、御人數出され、又九里の道を、御驅付候へば、行還十八里の道にて、何の手筈に合ひ候はんや。定て打負くるは必定なり。去れども討死したる後にても、長政先手の者共、隨分手を碎き、相働き候とは見候へども、大敵に僅の小勢なれば、力に及ばず、負くる者にて候はんと、取沙汰候は、將軍の御前、長政の御爲め、惡しかるまじと存じたれば、申上ぐる紙面にも、手前に於ては、御心安かるべしとは、書直し候なり。只今、敵に取付き、合戰に及び候期に、十八里の行還の道を阻てゝ、君の御後卷、何の手筈に合ひ候はんや。とても死ぬべき命を、加勢頼むと人にいはれんより、只一途に死を極め、右の如く申上げ候なりと、少しも殘らず申しければ、長政を始め、之を聞ける兵共、皆感涙を流しける。今日、栗山が家人山本甚太夫・津田才藏・栗山甚太郎・池田久兵衞・非和八郎兵衞・竹井何左衞門・加弓彌左衞門・安田安曇・日野・小林・

追田・大場等、手柄を致し、何れも手負ひぬ。後藤又兵衛が手にも、吉澤・金馬以下、高名を抽でしかば、夫々に褒美を加へられ、今日の働、諸手上下共に、手を碎き、力を出しける故に、四萬に餘る大敵に、一戰にて切勝ちけるとて、稱歎せぬはなかりける。

日本勢重ねて朝鮮に入る附伊達政宗船軍
並小早川隆景晉州合戰

去程に、朝鮮都表にては、小西攝津守行長・黑田甲斐守長政・大友豐後守義統は、大明國へ働くべしとて、平安道へ押入り、加藤主計頭清正は、咸鏡道指して押込みつゝ、其の行方の使もなし。殘る軍勢共は、王城に在つて、重ねて日本の加勢渡海するを待ち居たり。當年四月中旬、小西行長は、東大門より攻入り、加藤清正は、南大門より亂れ入りしかば、兩人の軍功、諸將の上に冠たり。中にも清正は、仁恩深き大將にて、都表在陣の間、咸鏡を順すと雖も、民屋に煩をなさず。萬事に禮を厚くし、百姓共を撫でしかば、近國・遠境も、其の勢に服せずといふ事なかりき。清正、咸鏡道

へ押込みし後、日本勢後より都に入り、朝鮮帝王、先祖代々の墓を發き破りしかば、朝鮮國八箇道の諸人、愁歎せずといふ事なし。去る程に、日本名護屋にては、秀吉公朝鮮國已に破るゝ由聞召し、當三月相渡す所の日本勢、二十萬ありと雖も、定めて大軍にて來るべければ、若し難儀なる事もあるべしとの仰に依りて、重ねて六萬餘をぞ遣されける。王城の制法の爲め、三奉行三成・長盛・吉隆をも差渡さる。即ち三奉行は、朝鮮表在陣の諸大將へ、下さる御朱印を請取る。其の詞に曰、

人數押は、當春如レ被二仰出一也。

右先駈の儀は、三組の者一日代に、被二仰出一候間、可レ成二其意一候。其次の備は、如レ書二立次第々々一、無二油斷一相働、大明國可レ成程可二申付一候。猶以二渡海の人數一、追々可二相詰一旨、被二仰出一候。皆々共多勢にて、大明長袖の國へ、先駈仕候間、無二御心許一も、不レ被二思召一候。早速可二申付一事、肝要に候。石田治部少輔三成・增田右衞門尉長盛・大谷刑部少輔吉隆、可レ申候也。

文祿元年壬辰六月三日　秀　吉朱印

とぞ書かれける。今度、渡海の人數惣大將は、備前宰相秀家なり。是は當四月に、高麗へ渡られ、釜山浦へ在城し給ふ故、此の人を大將軍にて、王城へ入るべしとの御定なれば、六月三日に、名護屋を打立ちける。人々には、增田右衛門尉長盛・石田治部少輔三成・大谷刑部少輔吉隆・前野但馬守長康・加藤遠江守・淺野左京大夫幸長・宮部兵部少輔・南條左衛門尉・木下備中守・垣屋隱岐守・齋村左兵衛尉・明石左近・別所豐後守・中川右衛門大夫秀政・郡上侍從・一柳右近大夫・竹中源助・谷出羽守・服部采女正・石川備後守・池田三左衛門尉輝政・細川備中守忠興・堀左衛門督秀治・木村常陸介・小野木縫殿助・牧村兵部大輔・岡本下野守・稻谷內膳正・片桐市正直盛・同主膳正・高田豐後守・藤懸參河守・太田飛驒守・新庄新三郎・早川主馬頭・毛利兵部丞・龜井武藏守、都合其の勢六萬餘、六月三日に名護屋浦より出で、順風に帆を上げしかば、追手いと快く吹出で、同九日に釜山浦へ十里隔てたる孟津の沖を過ぎ、彼の浦指して走りける。斯かりける處に、朝鮮の舟師に、元均といふ兵、番船七八百艘にて、閑山島に控へたり。日本淺野彈正長吉も、別して御下知を承り、後より渡海仕りしかば、子息左京大

政宗勇戰

夫幸長も、對馬にて父霜臺を待付け、打連れて朝鮮に渡りける所に、前洋にて朝鮮の船大將元均等、船を乘り浮べ〳〵、大筒・石火矢を放ち掛け、已に日本勢、不意の手段に遭ひたれば、彈正父子、其の外諸軍勢、周章て騷ぎ、悉く負色になりて見えける。元均勝つに乘つて、大鐵炮を打捼め、驀進にぞ驅かりける。日本の兵船も、周章てふためき、前後左右へ漕ぎ散つて、算を亂すが如し。斯かりける所に、伊達次郎政宗は、今度、淺野彈正に附き、渡海仕りたき旨申上げ、此度、相伴ひ渡海したりけるが、此の有樣を見るよりも、大音聲を揚げ、何とて人々は、不覺に見え給ふぞ、戰場に赴く身が、斯樣の時の考なく、俄に事の出來たる樣にこそ、周章て給ふぞ心得ね、いで政宗、一合戰仕り、各〻御目に懸くべしとて、眞先にぞ進みける。元均が兵船も、雨の降る如く、打立てけれども、政宗、少しも痿まず、手船五十餘艘、鳥の飛ぶが如くに押切つて、敵船の眞中を乘り破り、又取つて戻し、二揉三揉揉み立て、船十艘計り乘取りしかば、殘る朝鮮船共、立足もなく打負け、閑山島を南へ向けて、押立て〳〵北げたりける。政宗は快き船軍して、勝鬨を揚げたりければ、淺野彈正父子、其の外、

諸軍勢恙なくして、釜山浦へ著岸す。今日、政宗死を決して戰はずば、味方敗北疑なかりける。此の旨、秀吉公へ聞召し及ばれ、今度、釜山浦にて、淺野彈正父子、其の外諸軍勢、難儀に及ぶ所に助け合ひ、大利を得候事、日本國中沙汰に及ばず、三國比類なき前代未聞の働、且つは其の身の名譽、且つは秀吉御目利相叶ひ候との御感狀を、政宗に下され、御懇意少からず。先年、妙・九戸南部の奸謀も、是にて申し開き、諸大名も今度の働を感じ、政宗が膽略を稱歎せり。後詰の日本勢、大軍にて王城に著きしかば、洛中大勢にぞなりにける。各、人馬の息を休め、勢を直しける所に、敕使王信璘、晉州の城より指出で、釜山浦へ働くべしと聞えければ、先づ之を攻め平げよと、總大將毛利輝元申し渡され、日附として糟谷内膳正・新庄新三郎・太田飛驒守、差遣へられ、小早川隆景に申付けられけり。是に依りて、晉州表退治として、小早川隆景・立花左近將監宗茂・久留米侍從秀包・高橋筑紫、二萬五千餘、糟谷・新庄・太田が勢を、一所に合せて、梁山海道より、昌原を經て、晉州指して攻入りける。此筋の百姓も、殘らず退散して、在々所々閑退きければ、道筋を悉く放火してんげり。七月十

しに、粟屋四郎兵衛も、初合戰に打負け、追立てられたるを無念に思ひ、主從六七騎にて、牧使に組まんと、懸りけるに依り、彼が旗本、色めき立つて、山の北腹へ、一度に噇とぞ崩れける。井上大音揚げ、眞先に駈入り、追立てければ、なじかは怺ふべき、捨鞭を打つて引退く。粟屋四郎兵衛も、牧使を心懸けしかども、大軍に押阻てられ、本望を遂せず、東の嶺筋に、百人計りかたまりて、朝鮮人共退き行くを、四郎兵衛打見て、若し牧使にてやあるべき。よき仕りぞ。續けや若共といふ儘に、二尺八寸の備前兼光の太刀を拔きて、鐙の射向の袖を差翳し、敵の打怺いて控へたる眞中へ駈入り、敵二人切落したるに、若黨共六騎、馬の鼻を竝べて乘込み、六人共によき首取りてけり。隆景、少しも行列を亂さず、備なりに押立て、山腰を金山の峯へ、押上げられしに依つて、敵に打負け、晉州指して引退く。北ぐるまゝ攻入るべしと、皆々申しけれども、隆景、智深き老將なれば、少しも早まらず、大險を經て、絕地に入る事は、實否の合戰には尤なれども、大事の勝負を前に抱へ、座に深入して、味方を疲からし、大山を經て、小利を貪る事、上策に非ずと宣ひて、山取して陣を固め、晉州

の樣體を聞き極め、重ねて寄せんとて、控へられける所に、晉州にも、大軍にて用心嚴しき由、聞えければ、近邊を日々に放火して、陣を堅固に構へ、互に對陣して居られける。然る所に、都へ罷越すべき旨、仰出されしかば、晉州表を引拂ひ、七月下旬に、王城に著かれけり。即ち秀家三奉行下知にて、王城より五里隔てたる所に、開城府といふ府中あり。是に初より、戸田民部少輔・在城にて候を、入替り申すべきに付、隆景は開城府を請取り、民部少輔は、左に付く開城府川の傍に沿ひて、三所に要害を構へて、方々の一揆を靜め、先驅小西が一左右次第、段々に押込むべしと待ち居たり。扨又、日本名護屋にては、大軍重ねて差遣さるゝ上は、朝鮮平均疑ふべからず。今は心許なき事なしとて、秀吉公御慰の爲め、名護屋の濱に、數十間の假屋を作り、種々の風流を盡し、料理調味の膳部、殘りなく調へ置き、近邊の漁父千五百人、地引手繰の大網數百帖にて、海上にて網を引き、魚を取らせらる。扨彼の假屋へ、家康・景勝・利家以下在陣大名・小名・御馬廻、殘りなく召集められ、庖人等伺候仕り、彼の魚共を調味し、膳部權々しき料理下され、軍兵を慰め給ひ、大判千枚・鹽付に仰付けら

れ、早船を以て、京都へ上せ、禁中へ奉り給ふ。其の外、攝家・淸華殘らず遣されけり。右の假屋にて、秀吉公も軍卒と打交り、終日自身も魚ども調味し、軍中の勞を慰め給ひ、越王の簞醪、任公が若魚、偏に此時にありと、士卒も、感を促し讃歎せり。

朝鮮征伐記第四 終

朝鮮征伐記第五

小西行長書翰を朝鮮王に贈る

小西行長の意見

諸大將評議

小西攝津守行長は、數度の軍功を彰し、名を雞林に揚ぐと雖も、帝王を擒らざる事を恨み、平安道を西に向つて攻入り、大明の境目の鴨緑江といふ所迄、二十日路計り働きけれど、此筋へは、帝王落ち給はず、手を失つて、平壤の古都に引返し、大村・五島の人々に向ひて申しけるは、大明の軍兵寄來るをば、一戰して打ち勝ち、名を四百餘州に揚ぐか、又太刀・刀の續く程、合戰して討死するか、二の中を出づべからずとて、使者を王城の諸大將へ遣し申しけるは、鴨緑江を渡り、直に大明へ入らん事、尤も容易の次第なり。其許、在陣の人々後詰し給へば、行長魁して、大明へ攻入るべしと、頻に申遣しけり。都表在陣の諸大將評議して、慶尙・全羅の兩道、固く守

りて降らず。後に大敵を置き乍ら、輕々しく鴨綠江を渡海し、大明に入らん事、上策にあらず。先づ帷幄の謀を運らし、船と陸と兩方にて、全羅道を攻め取るべしとて、敢て承引せざりける。行長思ふ所叶はざるを、大に恨み怒りけれども、流石吾手勢計りにて、鴨綠江を渡り、明國へ入らん事もなり難ければ、詮方なくて嗒然たり。さり乍ら、餘りに殘多し。せめての事に、朝鮮帝王へ書翰を遣し、一と威おどさんとて、朝鮮の僧玄蘇西堂を以て、一通の書を認めさせ、朝鮮王の行在所、義州の城へ贈り奉る。其詞に云、

行長の書狀

日本與二大明一動二干戈一、是九牛一毛、大海一粟也。雖レ然、以レ難レ違二國命一、要レ借二路於朝鮮一。(吾イ)五國一統已來、國富民豐、無レ貪レ奪レ國、又無レ意レ掠レ賊。只以レ欲レ復レ怨也。朝鮮介二於兩國之際一、路經レ入二大明一則除二朝鮮一外又何國乎。是故到二朝鮮一、則所々構二城郭一塞二道路一、是以戰者戮レ之、降者容レ之。遂無二玉之當一レ鋒、而自二釜山一到二平壤一、不レ過二一月一。加之、(先イ)遣二豐臣清正於二咸鏡道一、到二豆滿江邊一、舉レ歸二一握一、承前欲レ屯二陣於鴨綠江一、衢レ是數日、呈二書於禮曹判書李公一、待二章送於平壤一、吾鳴レ鼓、而攻二明國一在レ近

朝鮮王明に救を乞ふ

耳。不敢慶也。亮察。

此檄文、朝鮮王へ來りければ、帝王大に驚き給ひ、急を大明に告げ、救の兵を乞ふ事、夜晝絡繹して引も切らず。大明、此表報を聞きて、天子も群臣も、皆々大に驚き騒ぎ、倭朝鮮を犯し、中華を窺ふ事、此二百餘年以來、終に聞かざる所なり。義を看て爲さゞるは勇なし、急ぎ援兵を出して、急を救ふべしと、朝廷の群議相極まり、軍兵を催されける。然れども、大明も北方の韃靼亂れて、軍兵を遣し、西南の夷の都蠻、〔叶番カ〕亂を起し、其上、南方の揚應龍起りて、是を征伐すべしと、多く軍勢を遣し、人民轉傳に苦み、兵を鈍らし、師を減らす故に、募るべき軍兵もなければ、如何はせんと、僉議區々なる折節、暹羅の使者、北京にありけるが、奏聞申しけるは、願くは兵を出し、倭を殺さんと望む。朝廷、皆此議に同じける所に、巡撫の口彥流が云、暹羅は極めて西方なり。濱南と相對す。相去る事一萬千餘里、其間に安南・占城・滿喇咖・呂宋・琉球等の國あり。多く人の國を經て、中國の爲に力を出さん事、甚だなり難し。其上、中國の南方一道を、多くの舟師通りなば、浦々近國、盡く疲れ苦むべし。若し暹羅折

明の援軍來る

を得て、還つて吾國を犯さば、誰か是を禁ぜんやと、理を盡して申しける。依つて、暹羅の儀は、終に止まりけり。此時、朝鮮の儀を司る者は、東明の司馬石星なり。朝鮮よりは、日々急を告ぐる事、絶間なし。俄に爲方なく、遼陽の巡撫李時孳と、同所の守道の荊州隲に申付け、遼東の祖承訓と、遊擊史儒を大將にて、精兵僅か三千餘騎を選び、萬曆十九年壬辰五月下旬に、鴨綠江を渡りつゝ、朝鮮へぞ向ひける。

朝鮮所々軍并平壤・安定館合戰、史遊擊手討死

祖承訓・史遊擊二將の士卒は、皆遼東の馬武者なり。兩大將何れも勇才ありと雖も、朝鮮の地形を知らず、又日本人と戰ふ軍法・手段を知らず。折節五月雨、絶間なく降り暮れ、山水天に漲り落ち、嶺に重る雨雲、晴るゝ間もなく引覆ひ、掻き暮れて、降雨は、篠を突くが如くなれば、甲冑も萎れ果て、駒の足泥土に泥み、士卒足裂け、膝緩み、進退心に任せず。所々の洪水・險難を凌ぎ、偶々平地に出づれども、絶ゆる間もなき雨、頻りに面を拍つが如くなれば、僅に細き田面の道、上は滑かなり。馬探り

日本の諸将諸所に砦を設く

踏へば、深泥腰に上り、蓑笠も怺へねば、肌迄濡れ通り、數日の旅に疲れ果て、一度彼の峯に登れば人馬跼蹐して働き得ず。さる程に、小西攝津守行長は、帝王を擒り得ず、手を空うして歸りければ、王城へは歸らず、平壤の舊都に止り、大明人の出づるを待ち、一戰を遂ぐべしとて、近邊を切り隨へ、猛威を振ひ給ふ。上杉輝虎の關東初入の勢に似たり。此由、秀吉公聞召し、深入して、越度を取るべからずと、再往制止し、然るべき地の利を見立て丶、數箇所に要害を架へ、永く相保つべきの手段、油斷あるべからずとの旨、追ひ〳〵に仰下されければ、小西に與力せし宗對馬守義智・有馬刑部卿鎭信法印・大村新八郎・五島若狹守・小西主殿助等、都合其勢二萬餘、行長が要害を大將陣と定め、山に傍ふ川に依りて、六箇所の砦を構へたり。此地より、王城迄九百餘里、六箇里絆の城なくて、通路難儀なるべしとて、古關城に、大友義統一萬五千、二箇所に要害を構へたり。箕山に黑田長政一萬、二箇所に塞を拵へたり。開城府には、小早川筑前侍從隆景を大將にて、高橋・久留米・筑紫・立花等、二萬五千にて在城す。開城に府川の末望海山に、戶田式部少輔吉繁・長曾我部元親、其南川に

沿うて、三里隔る、應星峡の砦に、戸田民部が兵眞鍋五郎右衛門尉眞成を大將にて、山中織部・三野見二郎兵衛を差添へ、四百餘にて籠め置き、川の西松濤村の砦に、同家人安見右近を大將にて、五百餘籠め置き、互に助合ふべしとの約を〔なしノ二字脱カ〕亦各久しく留るの謀をなせり。此節朝鮮人山々・浦々に打散じて、日本人の隙を窺ふ。戸田民部・長曾我部居城は、申すに及ばず、安見を籠め置きたる松濤城、眞鍋が應星峡の砦を普請、以下晝夜に急ぎつゝ、要害の架へ怠る間なし。義州におはす朝鮮帝王より、諸州の將官に勅を下し、小西行長、平壤にあり。大軍洛中にて應援を爲し、其間九日路、絆の城段々にありて、官軍身を置くに所あらず。如何にもして、絆の城を取つて、應援を遮らば、日本人獨り倒走すべしとて、朴弘長を大將にて、四萬八千餘にて、六月下旬に打つて出づる。元均も舟師千餘艘にて、開城府川を漕ぎ上り。朴弘長が兵馬四萬と揉合ひ、戸田民部少輔が城を襲ひ取らんとす。同廿三日の朝、兵糧以下取らん爲め、應星峡の城より、眞鍋五郎右衛門に家人深井甚右衛門、人數六七十付けて出しけるに、折節、朴弘長が大軍と寄合頭に、ひたと行遇ひたり。彼は

猛勢なり、駿馬に鞭を揚げ、引包んで討たんとす。 深井甚右衛門、一支も支へず、城を指して逃げ來る。 朝鮮人は、追立て〳〵、半弓を射懸け、追來る事、太だ急なり。 深井も矢二筋・三筋射付けられ、這々城へ逃げ籠る。 眞鍋大に驚き、打出で見れば、野山一面になりて、五六萬もあらんと覺えて、鬨を作りて追來る。 是は〳〵と見る所に、川筋よりも大船千艘計り押立てゝ漕ぎ上る。 大手・搦手採合ひ、雲霞の如く攻め懸る、城中には、眞鍋五郎右衛門廿五歳、若輩なりとて、山中織部を差添へられ、長曾我部より、加勢三野見二郎兵衛、彼是れ合せて四百餘の勢なれば、防ぐべき様もなし。 俄の事にてはあり、上を下へ周章て騒ぐ。 山中織部申しけるは、大軍の寄せ來るを、其儘城にて會釋せば、卽時に攻め入らるゝ者ぞ、一先突いて出で、最初の勢を拔かせば、大軍も左右なく懸り兼ぬる者なり。 先づ突いて出で、勢來る最初を追立てよと、下知をなす。 眞鍋が勢の中より、片山太郎助・田賀井七郎左衛門・眞鍋善右衛門・水橋右衛門只四人、木戸を開いて突いて出づる。 朴弘長が先手千餘人、眞先に懸りけるが、城より出たる四人の兵、逃ぐるを追うて進む所に、寄手左右より廻し、城の

眞鍋貞成の勇戰

間を取切たり。眞鍋が兵、今は遁れぬ所よと思ひ、高所へ四人一所に集りて、鑓を伏せ折敷く所に、敵は西方より、半弓を以て射懸くる事、雨の降る如し。城中より是を見て、魁の四人助けん爲め、眞鍋突いて出でんといふ。三野見二郎兵衛進み出で、御身は城主なり、吾は加勢なり、某出でんといふ。互に爭論する程に、鬮取にしたりければ、三野見取り當り、甲の緒を締め、鑓提げ、手の者引連れて、木戸を開いて切つて出づる。寄手是を見て、三方より差詰め引詰め、散々に射る。三野見左の頬より、右の頬へ射貫れ、木戸口三十間先より、這々城へ逃げ歸るも、早や叶ふまじ。眞成突いて出づべしとて、眞鍋五郎右衛門、手鑓おつ取り出でんとす。中山織部馳せ塞り、あの大軍に出でたらば、利あるべきか、目の前に犬死すべし。思ひ止れと止むれ共、眼前に討たるゝ郎等を捨て、殺すといふ法やある。そこ退き給へ山中殿とて、眞鍋五郎右衛門手勢引連れ、木戸を開き、喚いてこそは出でたりける。寄手朝鮮人、踏怺へ防ぎ戰ふ。五郎先衛門鑓を打入れ、押しつ押れつ攻め戰ふ。相從ふ郎等共も、面も振らす、身命を捨て、主を討せじと防ぎ戰ひ、なんなく追ひ崩し、山の陰より下の川へ、

小野木縫殿之助の智謀

朝鮮人を捲り落す事、砂を崩す如し。其間に眞鍋は、郎等四人を助けつゝ、城中へ引入りけり。されども、何れも戰ひ疲れし、大將眞鍋も鎧の右の綿嚙を箆深に射させ、郎等も廿六人深手負ひたり。山中・三野見が勢も、半死半生にて、城中念佛を唱へ、喚き叫ぶ。寄手又取つて返し攻め上るを、眞鍋は手負ひたれども、兵共を下知して、石を拋げ鐵炮を放ち、弱る所をば、門を開いて突いて出で、敵退れば城へ引入り、攻め來れば突いて出づる事、五六度に餘れり。されども敵は大軍なれば、荒手を入れ替へ入れ替へ攻め上る。川向の松濤城にも、傍叢安兒右近籠りたり。突いて出づる有樣、弓鐵炮・鬨聲、手に取る樣なれば、右近も足手を一所にためず。あれや眞鍋が攻殺さるるは、扨も不便やと思へども、大河中にあり。其上大敵雲霞の如くなれば、助け來る事も叶はず。却て自分の用心をなせり。斯かる所に、小野木縫殿之助五百餘の勢にて、將軍の御使に、平壤の小西方へ通りけるが、此有樣を見るよりも、軍勢を下知して、應星峽の山へ登り、侍より下々迄、上帶・鉢卷・下帶迄はづさせ、近邊の青竹を切り寄せ、假に旗小符の如く拵へ、深山の梢に立て置き、大勢の如く見せつゝ、緊(しめ)を片

朴弘長等敗軍

取り、備のふくらを隠し、鬨を噇と揚げて、山より一度に懸かりける。寄手の朝鮮人等、急度驚きて見れば、山々の梢に、旗小符充満ちたり。あはや都より、後巻出でたるはと、いふ程こそありけれ、色めき騒ぐ所を、城中よりは得たり賢しと、眞鍋五郎右衛門軍勢を引連れ、大山の崩るゝ如く、一度に突いて出でたりければ、寄手の大軍捲立てられ、山の阻より、下の川へ人雪頽をつかせてぞ逃げたりける。眞鍋に押續き、山中織部切つて出で、逃ぐる敵を追付け〳〵討ちければ、川へ流れ壓へ落ちて、死する敵數を知らず。元均も朴弘長も、捨鞭を打ちて落ち行き、命計り助りける。今日眞鍋は、不慮の後詰を得ずんば、討死疑ひなかりしを、天道に助けられ、會〻小野木が通り合せて、城中の上下、命を助かりけり。然る所へ、戸田民部少輔よりも、後巻として、神谷平右衛門・庵原助右衛門大將にて、人數を差越し、川向ふより、安見右近も來り。其夜は用心密にして、城中を警固しけり。此旨都へ聞えければ、安藝宰相輝元下知にて、鐵炮百挺加勢として、眞鍋が城へぞ入れられける。松濤城へも、安見右近小身なりとて、戸田與左衛門を入れ代へ、人數を加へられけり。其二十日計

り後に、元均・李統制出でて、松濤城へ俄に寄せ懸け、四方より攻め圍み、平攻に攻め入る。城中より、與左衛門、數度突いて出でしかども叶はず、終に討たれ、城は取られけり。斯様に殘黨後より起れども、小西行長は、平壤に陣取りつゝ、大明より加勢の兵共、今や出で來ると之を待つ。元均・李統制・李時言は、五萬餘にて耆南城に楯籠り、平壤の行長と、王城の間を取切り、彼を蒸し落さんと謀りけれども、耆南より、二里隔りたる樂山に、黑田長政陣取あれば、其勇力に恐れつゝ、卒爾には打つて出でず。長政も耆南を對陣に目當、日々夜々に取懸かり、互に寄しつ寄せられつ、合戰の絶間なし。斯かりける所、六月晦日の夜、耆南城より、李時言大將にて、二萬餘打つて出で、近道を經て、平壤の耦中館へ、夜討をぞしたりける。此城は、小西が組宗對馬守義智が籠りたれば、取合せ、弓・鐵炮にて防ぎ戰ふ、此旨大友義統より、註進ありければ、黑田甲斐守長政八千餘、聞くと均しく樂山を駈出し、揉みに揉んで、其夜丑の刻耦中館へ乘付けたり。長政は金の水牛の立物の甲にて、大鍬形出でたる赤母衣かけ、馬に白沫嚙ませ、大音揚げて下知をなす。頃は六月晦日の夜の事なれ

黒田長政の軍功

ば、闇さは闇し、敵も味方も見え分かず。菅和泉守政利、茜のふけりの指物にて、先に進みて戰ひけるが、軍兵に下知して、耦中館の町に火を懸けたり。闇に夜にて暗かりけれども、此火に照され、猛火天を焦しければ、只白晝に異ならず。長政が先手栗山備後守利安、大剛の兵なれば、其勢二千餘にて、李時言が後へ廻り、大敵の眞中へ、少も瘊まず馳入りたり。後藤又兵衛・黒田美作、なじかは怺ふべき、栗山を討せじと兩鐙を合せ、馳入り、煙塵を踏立て攻戰ふ。李時言が兵も四方八面に渡合ひ、爰を破られじと、身命を輕んじ、攻戰ひけれども、城中よりも宗對馬が兵柳川豐前守調信等突いて出で、揉合ひしかば、李時言終に打負けて、耆南指して引退く。夜明け日出でしかば、味方彌〻力を得、遁さじと追懸けたり。李時言も返し合せ〳〵防ぎ戰ふ、黒田長政は、敵の大將李時言を組みて討たんと志し、路を遮りて進まれけるが、敵數十騎返し合せ、長政を取籠め、餘さじとこそ揉うだりける。長政屈強の剛將なれば、少も瘊まず、大勢の眞中へ馳入り、敵三騎切つて落し、六騎に手負せければ、殘る敵は堪り兼ね、吾先々と落ちて行く。其中に、大將李時言が弟に、李應李と

いふ大剛の兵只一騎、池の堤を退き行きけるを、長時能き敵なりと目に懸け、兩鐙を合せて追ひ行く。李應季きつと振り返り、長政が追ふを見て、其勢尋常にあらざれば、叶はじと思ひけん、馬を早めて退く所を、長政、二町の内にて追付きたり。李應季が妻手に馳せ竝び、互に鎧の綿嚙摑みてむずと引組み、兩馬が間に落ち重り、上になり下になり組合ひけるが、李應季は大の男にて、動もすれば長政は組み敷かれ討たるべく見えけるが、如何はしたりけん、堤の上より轉び、池の中へだぶと落ち入る。所しも淵なりければ、二人ながら組合ひて、水の底に沈みけり。長政も李應季も、互に脇差を拔き、差違へけるに、長政が左の腕具足の引合二箇所迄突かれたり。されども長政、心早き人なれば、一尺一寸の脇差にて、李應季が脇壺を一刀突き込みしかば、今は彼も弱り、長政も息は切れたり、水の底なれば、胸迄水を呑みしかば、二人共に水底にて、空しくなりける所に、長政が馬取之を見付け、人々はおはさぬか、主の討死するを、助け給はざる不覺さよ、寄合へや馳付けよやと、呼はりける聲に付き、長政が軍兵共、分々の敵を追ひ捨て、池の堤へ馳集りしかども、早や

水底に沈み見えざれば、河水は血になり、水底も見えざれば、如何はせんと、呆れ迷ふ所に、水澄みける方より、日影に透し見れば、長政の甲の立物金の水牛の角、時々ひらり〱と見えければ、すはや此淵にこそ、長政は御坐けるはとて、水練の若侍共四五人、裸になり、水底へ入り見ければ、長政は敵を一刀突込みながら、組合ひたる手を放さず、空しくなりてぞ居たりける。頓て長政の死骸を引上げ、堤の上に置きつゝ、栗山備後守・後藤又兵衛・黒田美作守を始め、八千餘の軍兵共、堤近邊へ寄り集り、如何はせんと悲みけれども、二箇所手負ひての上、水に溺れ死したる長政なれば、息も絶え、足手も痿え、今は此世の人にはあらず。家老・物頭共、長政の死骸の前後に立圍み、泣き悲む事斜ならず。

長政溺る

爰に村上彦右衛門は、最前鞨中館へ駆付くる時、菅和泉守と共に一番に駆付け、逃ぐる敵を追ひ行き、此事を知らずしてありしが、後軍ありて、長政討たれ給ふといふ聲のしければ、取つて戻し、堤の上へ來たれば、長政の死骸の後枕に、家老・長臣寄り居つゝ、悲み居けるを見て、村上彦右衛門大勢の中へ分け入り、手は薄手なれば、大事になる疵にてなし、水に溺れ給ふ計りなれば、何

村上彦右衛門の奇智

とぞ爲すべき樣あるべしとて、長政の死骸の鎧を脱かせ、裸に爲し、腹の水を踏出さば宜かるべしといへども、誰も踏まんといふ人なし。村上彥右衞門、不覺なる人人かな。主を尊むも時にこそよれ、吾踏出さんとて、草鞋を脱ぎ、長政の腹を戴き、足を上げて踏みければ、長政の目・口・耳・鼻より、水の出づる事瀧の如く、悉く踏出し、

長政蘇生す

栗山備後鎧を脱ぎて、長政の足手を肩に著け暖め、臍に灸治し、藥を口へ注ぎ入れければ、冷え切つたる長政暖になり、吟り出し喚ぶ聲して、息を吹出し、終に蘇生し給ひけり。すはや能きぞと、諸軍悅び勇む事斜ならず。長政目を見開き、物いふ程になりければ、近邊より、遣戶一間取寄せ、之に舁き乘せ、軍兵前後に打圍みつゝ、樂山へぞ歸りける。危かりける次第なり。斯くて、色々養生し、疵も愈え、氣色本腹しければ、七月十日、長政八千餘にて、晉南城へ押寄せたり。李時言・李統制も町口を拘ありけるを、黑田が先手美作魁して、一時計り鐵炮軍して、鑓を入れ、散々相戰ひ、

晉南城合戰

城中へ敵を追ひ込みたり。後藤又兵衞・井上周防守は、大手の木戶に付き、村上彥右衞門・菅和泉守は石垣に付き、攻入らんと揉合ひけれども、城の架、一旦に攻落し難

しとて、城下を悉く放火し、軍勢を樂山へ打入れけり。之より日々に取合ひつゝ、今年六月より、明年正月九日迄、互に寄せつ寄られつ、軍の絶間なかりける。さる程に、小西攝津守行長は、大明人、今や來ると待懸けたる所に、七月十五日に、大明加勢の祖承訓・史遊擊、僅に三千餘騎にて、平壤の安定館へ著きたりける。小西、此由聞くよりも、天の與ふる所なりと悅び勇みつゝ、其日の暮前に、馬强なる兵百騎計り引勝りて、足輕に出立たせ、行長之を左右に從へ、大明人の陣取りたる、安定館へ押寄せたり。行長は小高き所に打登り、明兵の陣を見渡せば、思にも似ず小勢なり。小西旗の蔭に馬を立て、指揮を振り、下知しけるは、今日は日も早や暮れかゝりぬ、本の勝負は、明日決すべし。さり乍ら、異國の軍立、未だ知らざる事なれば、挑み駈引、其樣子を見よとて、足輕を懸けつゝ、明兵の手相をぞ見たりける。祖承訓・史遊擊等、元來小勢なりける上、長途の旅には疲れ果てたり、懸合はせもせず、騷ぎ亂れてぞ見えたりける、行長之を見て、莞爾と打笑み、思ひしにも似ず、手弱かりける者かな。今は大明の兵も恐るゝに足らずと、悅びつゝ、勝負は明日と極めて、先づ足輕をば颯

行長祖承訓等に挑戰

と擧げつゝ、本の陣へ引取り、其夜の明くるを、遲しとこそは待ちたりける程に、嶺に横雲引渡し、曉かけて野寺の鐘、明け行く空に響きしかば、時能くなりぬと、小西二萬餘を引率し、安定館へ押寄せたり。大明の祖承訓・史遊擊之を見て、僅三千餘騎を左右に立て、馬の鼻一面に並べ、差取り引詰め、散々に射る事、雨の降る如し。小西行長は、大荒目の鎧に、銀の抱澤瀉打ちたる甲の緒を締め、紅の母衣かけ、糟毛の馬の七寸には過ぎたるに、金の馬鎧懸けてぞ乘りたりける。安定館の東の小塚に打登り、背紅の扇開きつかひ、鐙踏ん張り弓杖つき、下知しけるは、傳へ聞く、大明の戰には、地鬪は稀にして、大略馬を入ると聞く、卒爾に下立ちて、馬に當て、十旗を切所に立てつゝ、弓・鐵炮は左右へ立て渡し、鑓・打物は折敷きて、馬武者に驅引させよ。大明と日本、初ての合戰ぞ。吾と思はん兵共、行長に續けやとて懸りければ、相從ふ兵二萬餘、弓・鐵炮を一同に放ち立て、曳々聲を揚げ、鞭を打ちて鞍の前輪に懸り、甲を傾け、互に力を合せつゝ、進めや人々、地形平なる合戰場に、思ふまゝに乘立つは、日本の都にて、賀茂の祭の競馬を乘るより、面白かるべし。すは懸れ人々と、喚

明軍敗北

いてこそは懸りける。大明の大將、兩人共に左右に目を配り、大音揚げて下知を爲し、一足も退くなと、士卒を勵し防ぎ戰ふ。されども、日本勢は、武者一騎毎に指物差し、馬も金銀の馬面鎧を懸け、眞黑鎧に立ちて懸れば、見馴ぬ氣色に驚きつゝ、大明の馬共恐狂ひ、後込みしてえ進まず。明兵之に恐れて、馬の鼻を引向け、鞭を打つて蹴立てけれども、日本人の鎧・指物・馬面懸りたる馬に恐懼し、狂ひ廻り、鼻嵐吹いて取つて戻す。祖承訓・史遊擊、指揮を振つて士卒を勵すとも、馬にては叶ふまじ、皆下立てと下知をなす。明の兵、大將の下知に依り、皆馬より下立ちたり。折節霖雨の後なれば、泥滑にして、腰迄も至り、重鎧をかけて駈引き自由になり難く、只一所にためらひて、涸魚の水に息吹く如く、泥の中にまろび倒れぬ。之を見て、小西が兵、得たり賢と、二萬餘騎大明の三千餘騎を眞中に押取り籠め、餘さじとこそ戰ひけれ。明の兵共、とても遁れぬ所ぞ、此所を枕とし戰へや兵共と、追亂し駈廻し、八方を拂つて、四維に遮り、火花を散し攻戰ふと雖も、元來小勢なる大明兵、長旅には草臥たり。馬強なる日本人に駈立てられ、心は猛く思へども、殘少なに討ちなさ

れける所に、大將史遊擊眼を嗔らし、一足も退くな、朝廷士卒を養ふ事、今日の爲めなり。爰を退きては、何の面目ありて、再び故郷へ歸らんやとて、前後左右混甲七八十人、眞丸になりて戰ひけるが、見る内に大方殘少なに打ちなされしかば、史遊擊踏止り、爰を通れじと防ぎ戰ひて、討死してんげり。祖承訓も危く見えし所に、帳〔幕カ〕下の勇士共押隔り／＼防ぎ戰ひ、討死せし其隙に、難なく切拔け落ち行きけるを、行長打見て、自身組んで討たんと、馳せ竝び／＼追懸けけれども、祖承訓能き馬に乘りたれば、雲霞の如くなる圍の中を、一文字に乘拔け、山へかこまり、只一騎にて落ちにけり。今度向ふ所の大明人三千餘騎、悉く討たれて、生きて明へ歸へる者、祖承訓共に只十四人、之も半死半生に切りなされ、片息になりて、遼東へぞ歸りける。此事大明の北京へ聞えければ、震旦四百餘州の貴賤・上下、俄に周章て騷ぎて、天地も只今打返す樣に、沙汰せぬ所はなかりける。

一　京都大政所殿御病惱に就いて秀吉公御上洛

大政所病中の物語

日本にては、秀吉公御母大政所殿、御年八十に過ぎさせ給ひしが、將軍、高麗へ御渡海ありけりと聞召し、御側近き人々に向ひ給ひ、情なき世に生れ、憂目に遇ふ事の悲しさよ。夫を如何にと申すに、妾元都の者なりしが、二歳の時、父罪ありて、尾張國村雲へ流され、配所にて世を早く去り給ひしかば、頼む方なき孤にて、十歳の時、所緣を尋ね都に上り、禁中にてさる局に宮仕せしかども、其頃は、都も大に亂れ、公方萬松院義晴公も朽木に落ちさせ給ひ、里内裏も夜晝騷がしければ、都の空も住み憂く、又尾張へ下り、程なく將軍誕生ありしかども、育つべき力もなく、十餘歳にて、桑山法印、未だ百姓にてありし時、賣り遣し、彼桑山が奴と爲し、吾身は、朝三暮四の營に存命ふる身の强顏（つれな）さを、起きぬ伏しぬ恨み侘び、あるにもあらぬ業を爲し、涙の乾く隙なかりしに、秀吉二十歳餘にて、信長公を主と頼み上げしに、如何なる深き緣（えにし）やありけん、又は佛神の御惠やありけん。信長公の御覺他に異にして、程なく國の主となり給ひぬ。其頃は、世の中大に亂れ、朝も夕も軍のみなりしかば、今日は何れの城を攻め給ひぬ、明日は何方の御陣と聞く時は、吾子の秀吉、今もや討れ

ぬらんと、片時も安き心なく、如何なる弓矢の守の佛神も、吾子を守り給へと、立てぬ願もなかりし故にや、天運目出度くして、日に增し月に隨ひて、威勢は水の出る如く、天下の主となり給ひぬ。されども、遠國未だ治らずして、去々年の夏、小田原の北條を攻め平げ給ひ、今は八島の内風治まり、四海浪靜まりぬらんと、世にも嬉しく思ひしに、思ひ寄らず高麗・唐土に渡り給ひ、例も聞かざる別れを爲し、明日をも知らぬ老の身を、何となれとて、捨置きしぞやとて、掻き口說き嘆き給ひけり。御側の上臈・女房達、いやとよ。上には筑紫名護屋と申す所にましく、高麗へは諸大名計り遣し給ふ由、様々慰め参らせしかども、夫を實と思ひ給はず、六月半ばより、例ならぬ御氣色見え給ひしが、日々に重ひて重らせ給ひ、當關白秀次公より、日々に此旨、告げさせ給ひ、御消息も重ゝ隙みなく聞えさせ給へば、秀吉公聞召し、黄泉・冥途の別は、再び逢ふ事なし。未だ息の通ひ給ふ内に、今一度見奉り、頓て歸り給ふべしとて、名護屋御留守の事は、家康・利家に仰せ置かれ、七月廿二日、押明方の出舩に、船にて上洛し給ひけり。

秀吉公御船狙瀨に於て沈水幷明石與次兵衛誅さる

將軍御出船の砌、船頭明石與次兵衛を召出され、仰付けられけるは、今度御上洛、夜を日に續いで、急ぎ馳召す間、涯分粉骨を盡し、水手以下油斷なき樣に申付くべき旨、直に仰付けられ、晝夜を分たず御急ぎなされけり。其頃、毛利元清の子右京大夫秀元は、從弟の右馬頭輝元の養子なり。父右馬頭は、朝鮮在陣なり。秀元は幼少故在國せしが、名護屋御見廻として參りければ、秀吉公御感ありて、即ち御上洛の御供に召連れられけり。秀元幼稚なりと雖も、御渡海の中、自然御大事も之あるべくやと、心を付け、我が乘りし船を急がせけるに、案の如く、豐前國内裏の沖狙瀨といふ大難所にて、岩の上へ將軍御座船を乘懸け、逆浪大に漲りて、御船已に破れんとす。あれや〱といふ内に、御船微塵に碎けしかば、船中の人々過半沈水し、已に難儀に及びけるに、秀吉公は若年より、武勇に身を焦し、心早き大將なれば、御船岩へ上り、あはやといふ言の下より、裸になり給ひ、長光の御刀・正宗の御脇差を自ら

毛利秀元秀吉を救ふ

持ち給ひ、岩の上に下立ちて、御著袴長迄海に浸し、御命已に危く見えさせ給ふと雖も、助け奉る人なし。面々に櫓櫂に取付き、浮きぬ沈みぬ見えければ、數百艘の御供船、周章て騒ぐ聲々、天地も動く計りなり。斯かりける所に、毛利右京大夫秀元、豫ねて心懸けたれば、吾身の刀・脇差はいふに及ばず、船中下々迄の刀脇差を一腰もなく、海へ投入れ、一番に船を乘付けて、秀吉公を吾船へ引上げ參らせ、御命を助け奉る。將軍裸にて御腰物を抱へながら、一紋に濡れ給ふ。秀元が船へ乘り給ひ、御機嫌大方ならず。今一浪・二浪にて、海底に沈むべかりしを、京兆が忠節にて、二つなき命を拾ひたり、即ち御口になされ、宰相に任ぜらるべき旨、直に御約束ありて、御感悦斜ならず。然る所に、御召替の御座船押切つて著きしかば、急ぎ召移り給ひ、秀元幼少なりと雖も、心懸深くして、吾を助くるのみならず、自身を始めて、船中にある所の刀・脇差を海へ入れ、吾が氣遣せざる樣に仕りたる働き哉と、御涙を流し感じ給ふ、秀元へは、御腰に差し給ふ長光・正宗の太刀を下され、又秀元船中の侍下々へも、刀・脇差を海へ入れ、事缺くべしとて、上作の御腰物箱・中作の刀箱取寄せ給ひ、

明石與次兵衛誅せらる

夫々に見計はせ、御引出物に下されける故、秀元の船中の者共、遙に得付きてぞ悦びける。扨、船頭明石與次兵衛を召出され、只今の次第言語道斷の至りなりと、御太刀拔懸けて、怒り給ふ所に、與次兵衛慄ひわなゝき、此難所豫ねて存じ候へば、向の地を傳ひ、御船を上せ申すべしと存じ候內に、承り候へば、中國悉く御敵になり候由に候へば、其遠慮仕り、御船をよけ候とて、斯くの如く御座候と、申上げしかば、將軍彌〻御腹立ありて、中國敵になるとは、何事を申すぞ。今日の難儀も中國殿の船に移り、一命を助りしは如何に、兎に角惡くき奴めかな。早々頭を刎ぬべしとて、與次兵衛を搦捕り、卽ち內裏の濱にて誅せられけり。斯くて晝夜を分たず、御上洛ありしかば、同晦日に、京都に著き給ひ、直に大政所へ到り、御病氣如何と問ひ給ひけるに、早や廿五日に世を去り給ひぬと、申上ぐる。秀吉公、驚嘆少なからず、御淚に咽び給ふ。遠侍へ御出ありて、出仕の人々に仰せられけるは、此度三韓征伐に就き、萱砌黃泉に入り、別れに逢はず、御最後の御暇乞申上げざる事、後悔殘念、言に述べ難し。此上は歎きても甲斐なければ、御葬送並に追善の事、古今の例を引き、結構なる作善仕るべき旨、

德善院玄以法印に仰付けられしかば、紫野大德寺玉仲和尚承り、善盡し美盡したる修善の追貴、誠に過去聖靈に導き、六種の雜類迄も三界の苦輪を出でて、円德の樂邦に到らんと、心ある者も心なきも、隨喜讚歎の涙を流し、歸依渇仰の頭を、傾けざるはなかりける。

將軍再び名護屋御下向

秀吉公は、大政所殿の御弔・七日毎の御追善、懇に執り行ひ給ひしかば、秋も半ば過ぎて、萩の上風身にしみ、隈にさやけき月の夜も、霜置く計りに冷しく、都の空も山里も、時雨を招く薄紅葉、遠山に懸る村雲の氣色、何となく物哀なれば、愁の上に秋の怨を添へ給ふ。紹巴・紹叱など召集められ、折に觸れたる詩歌の御慰にて、徒然を志し給ひ、九月にも入り、忌服事終りける所に、高麗より早打を以て、去る七月十五日、大明より、加勢祖承訓・史游擊詫出で候處を、小西行長一戰を遂げ、即時に追崩し、史游擊を討取候とて、游擊が首を酒に浸し、京都へ上せければ、

御陽成帝秀吉の下向を留めさせ給ふ

秀吉公大に悦び給ひ、急ぎ又名護屋御下向とぞ聞えける。主上叡聞ありて、大に歎き思召し、菊亭右大臣晴季を勅使にて、將軍西海下向の事、愍に留めさせ給ふ。秀吉衣冠にて、急ぎ勅使に對面し給ひ、頭を地に付け、勅語を承り、叡心淺からざる旨、忝き次第謝し奉るに、其言を知らずとて、感涙を押へ、勅答申上げられけるは、天氣叡心の深き旨、敬擧承り畢ぬ。然りと雖も、大軍を朝鮮國に渡し置き候間、合戰大利をば得候へども、若し大明より、大軍打つて出でば、勝負の段心許なく存じ奉候。さ候へば、勅諚に隨ひて、微臣京都に罷あり、萬里の異國を下知し候はん事、勇才の疎に似て候へば、先罷り下るべきにて候。是れ併し、綸命を忽諸にし參らするに非ず。只朝鮮・大明を切隨へ、吾朝の威光を三國に輝し、百王の功勳を四海に倫して、萬世の寶祚を仰ぎ奉るべき旨、奏聞し給ひしかば、主上も柳營の大膽を叡感ありて、種種の賜り物、其品々淺からねば、

秀吉參内

秀吉公も參内ありて、忝き次第、御暇乞申上げ、九月中旬に都を立ち、同廿九日、肥前國名護屋の城に著き給ひけり。

稷山水源所々軍并中川右衛門大夫秀政討死

日本勢數十萬にて、既に都より、釜山浦迄充ち滿ちつゝ、三里に一箇所宛城を架へ、往還の絆をなせり。然れども、日本の兵糧船は未だ來らず、兵糧につまり、難儀せしかば、絆の城々より打出で、刈田働して、山野を掠め領す。朝鮮の李時言・成允門等、軍兵を山谷に隱し置き、時々打出で、日本人の刈田する者を追散らし、日々夜々に討ちつ討れつ、勝負區々なり。中にも稷山城にありし福島左衛門大夫正則は、手勢を三番に分け、一備宛毎日押出し、五里・十里の間の稻を刈り、城中へ運び取る。敵も之を取らせじと、時々打出せり〔原字アルカ〕合軍の絶間なし。されども朝鮮人は多勢なれば、福島が兵共、度々追立てらるゝと聞きしかば、左衛門大夫、さらば吾打出でんとて、九月廿五日に正則六百餘にて打つて出づる。先手は加治田出雲守・松浦右衛門七・鎌田五左衛門、二の目は、正則旗本を立て、總人足を放ち入れ、思ひの儘に刈田をなす。向の山には、二町程隔てゝ、朝鮮兵馬使李福男五千餘にて、段々に立て、

備懸らん様の有様なり。されども正則、勇氣無雙の猛將なれば、銀の戻芭蕉の馬印を、きつと立てつゝ控へたり。朝鮮人もいつもの手並に違ひ、武者の立様、威儀嚴重なれば、正則なりと察して、卒爾には懸かり得ず。斯くて日已に夕陽に及び、刈田殘らず仕舞ひければ、今は早や、人數を打入るべしとぞ定めける。福島は先手の物頭を呼び、下知しけるは、正則は旗本を以て、先を押すべし。先組は、刈田人足を先へ立てつゝ、後を靜々と押すべし。今日殿の差引は、杉浦右衛門七仕るべしとありしに、右衛門七畏りて、御諚違背に似て候へども、互角なる加治田・鎌田が、何しに某下知に付き候はんや。若し物涯にて違亂も候へば、且は君の御大事なりと、辭退しけり。正則聞きも敢ず、吾が言付くる下知を、誰ありていなみ候はんや。去り乍ら、汝左樣に存ずるならば、其段、彼等にも下知すべしとて、正則只一騎にて、先手へ乘出し、今日の殿は、杉浦右衛門七に申付けたり。思ふ樣あれば、各〻も杉浦差引に隨ふべしと、申付けられしかば、加治田・鎌田も承り、畏りて背ひける。此旨杉浦にも申付けられしかば、右衛門七、領掌して立ちたり。扨又一番は正則旗本、二番は刈田の人

足、三番は杉浦・加治田・鎌田等、眞丸になりて引上ぐる。案の如く、朝鮮人五千餘、ひたひたと下立ち、眞黒になりて付き來り、半弓を揃へ、差取り引詰め射立つ事、雨の脚の如し。殿の大將杉浦右衛門七には、若き時分より、度々鎗を合せ、武名聲しき侍たれば、日本にても豫州來島の城を預り置きしが、毎度の働、軍功を立てずといふ事なし。今日も總殿を仕る事、面目なりと思ひければ、前後に目を配り、左右を勵まし、下知しけるに、組付の侍武藤修理・福島彌藤次・堀原藏人・清井主膳等鎗を伏せ、立返し返し足をも亂さず、徐々と引取りしかば、敵猛勢たりと雖も、乘崩す事叶はず、ひたと後に付きて、追ひ來り、散々に射立てしに、杉浦が勢手負多く出來ぬ。旗本より、使番小性共を追ひ追ひに遣し、何とて輕々と引取らず、しだるく仕る事、沙汰の限りなりと、追ひ追ひ申し來りしかども、右衛門七少しも動かず、後に御架なく、足早に御引取りなさるべく候。殿をば御捨あるべしと、返答しければ、正則怒り悶えて、殿の立様ふると見る時は、尻芭蕉の馬印を押立てば、止り給ふ事十餘度なり。爰に榎山へ引取り、道に福嶺といふ大切所あり。十町許りの間、両山左右に峙ち、中

は一騎打の細道なり。若し朝鮮人共、両の山へ嵩取して射立てば、味方敗軍疑ひあるまじと存ずれば、殿の杉浦並に加治田等、是を心許なく思ひつゝ、旗本の使の歸る度に、少しも早く御引取り候へと、申遣しけり。敵彌、引付けて懸來りしかば、杉浦加治田が兵下數き、鑓衾を作りしを見て、朝鮮人も日本人の思切つたるを見仰ぎ、夫より逆捨し引つ返しけり。味方之より心靜にして、件の切所をも打過ぎつゝ、廣き芝原にて兵糧仕らんとて、諸勢下り居、大將正則も床几に腰を懸け、腰付け取出しける所へ、殿の物頭を初、諸軍悉く押來り、鎧の綿嚢甲の鞆に、矢數多く打懸りたり。中にも杉浦右衛門七は、大將の前に參り申しけるは、今日君の御振舞、近頃不出來に候故、吾等手前も一入手廻遲れ候て、引上げ兼ね候といふ。正則聞きも敢す、吾等振舞不出來なる樣は、如何にと咎められければ、そこにて右衛門七申しけるは、總じて、大將軍たる人の能き郎等を持ち、能き兵を望み抱へ給ふ事、吾命に代へんとの事なり。今の樣なる手火疾き退口には、大將の御命をかばひ、犬死をさせ給はぬ事本意なれば、只殿をば捨て殺し、早く引取り給ふべきに、殿の吾等を御かばひ

正則の性質

候て、立返り〳〵待ち給ふ故、君を又かばひ奉る者々、手前上げ兼ね候ひき。相架へて此以後も能き侍を持ち給はゞ、御命に代らん爲めなれば、何時も御捨てなさるべく候。兵共五十・七十討たれ候ても、大將の御命さへ恙なく候へば、公私の大慶之に過ぎず。君の恩を戴き、妻子を養ふ者々なれば、御用に立ち、討死仕る事、武士の本望何事か是に勝り候はんや。架へて今日の樣なる御心入は、勿體なき事にて候と、眼を腫らし申しければ、之を聞きし兵も、其義忠の辭を感じ、舌を振はぬはなかりけり。正則熟と聞きて、涙を雙眼に浮べ、杉浦が申し條、理に當ると雖も、不便なる侍共を捨殺しては、左衞門大夫今生に存命へても、男はならざる間、何時も一枕に討死すべき志にて候と、宣ひければ、是を聞きける士卒共、感涙を流さぬはなかりけり。されば正則は、極めて短氣なる大將にて、歷々たる物頭をも、打擲・折檻しけれども、士卒を愛し、與ふる恩を惜まず、知行・金銀を配ちくれ、戰場に臨みて、士卒を惜んで、無理なる働きをせず、合戰の始終を考へしかば、兵共の恩付く事斜ならざりしとかや。斯かりしかば、毎日の雌雄精り、軍の是非牛角なりしかば、敵味方

毎日來福所々軍並中川右衞門大夫秀政討死

互に隙を窺ひて、之を討たんとす。水源城にありし中川右衛門大夫秀政は、長陣の鬱氣を晴さんとて、手廻十騎計りにて、近邊へ鷹狩に打出づる。家老共能出で、敵山々に充滿ち候處に、時分柄御鷹野は、如何候はんと諫めけるを、秀政今年廿八歳、氣早なる大將なれば、異見をも用ひず、打出でけり。されども、甲冑の上に狩裝束し、下々迄武具立てゝ、水源城より出でたりける。秀政、方々に鷹狩して、鴫・鳫・鵲等數多取りつゝ、彼方此方へ立渡しゝが、鳥の恐るべければとて、家の子・郎等共、皆馬より下り、五町計りも馬を押下し、吾後は乘馬只一足引かせたる程に、同勢は猶後へ下りける。斯かる所に、秀政の運や盡きたりけん、近邊へ草刈に出でし日本人深入して、朝鮮人五六百人驅出し行逢ふ。一刄も合せず追立てられ、足を亂して逃げ來る。右衛門大夫は、何心もなく、鷹を使ひ居給ひける所へ、日本の草刈二三百人、轉倒して崩れ來る。朝鮮人五六百、地煙を立て、追ひすがうて來りける。秀政之を見て、只今追立てらるゝは、日本の草刈共と見るは僻目か、彼等を敵に討たせては、人口の嘲となるべし。いで追ひ返して見せんとて、著たりける菅笠脱いで投捨て、

銀の如意半月打ちたる甲の緒を締め、蘆毛の馬に打乘り、二本尾花の指物にて、只一騎眞一文字に驅出し、五六百控へたる朝鮮人の眞中へ、面鎗を合せ駈入りける。相從ふ兵共、あはや殿の討れ給はんとて、續いて走りけれども、面々の乘馬は、遙に後に殘し置きたり。無雙なる早馬に、歩立の鎧武者追付くべき樣なかりければ、是は是はといふのみにて、轉倒して走行く。秀政は只一騎にて、大敵の中へ駈入り、親父瀨兵衛尉淸秀が、賤嶽にて、和田伊賀守惟政を討ちたる時、討取にしたる伯耆の安綱の二尺七寸の太刀を拔き、眞先に向ひたる七尺許りの大男を、弓手の方へなしつゝ、曳聲を出して、はたと切り、左の肩先より乳の下へ切下げ、馬より下へ切落し、二の目に向ひける金子寬といふ朝鮮人、大力なりければ、大手を廣げて馳せ懸り、秀政に組まんとす。秀政太刀を捨て、押並びてむずと組み、馬より下へ落重り、上になり下になり、組合ひけるが、如何したりけん、秀政上になり、金子寬を組伏せ、首を掻かんと脇差を探りけるに、弓手の方へ廻りつゝ、僅に柄先を握り、拔きけるに、鮫室にて口に當り、堅くしめて拔けやらず。曳や〳〵と二三度拔きけれども、

秀政討死

鞘口擢けて抜けざりけり。秀政、今は叶はじと思ひ、中川右衛門大夫敵に組みたり。續けや侍共、下合へや〳〵と、叫び呼びけれども、近邊に日本人は人夫・雜人なり、手の者共は未だ駈け付けず。秀政は下なる敵の刀を拔き二刀迄、柄も拳も通れ〳〵と、刺しける所へ、敵大勢下合ひて、疊み懸けて切りけるに、中にも半弓にて、秀政の左の脇壺を篦深に射させ、痛手なれば弱り給ふを、敵二人押伏せ、秀政を引起し、未だ息の通ひけるを、泣く〳〵鎧の上に搔き負ひて、水源城へぞ歸りける。今日秀政、只一騎にて大敵へ乘込み、不覺の働きせられける事は、此以前福島左衛門大夫と遺恨の事あり、此表にても、僅か三里を阻てゝ、在城せられければ、左衛門大夫と吟味合ひつゝ、何樣にも一手して見せんと思はれける故に、不慮の仕合にて、斯くの如くなりけるとかや。此旨稷山へも聞えければ、正則大に驚きて、長尾隼人を使にて、心許なき山中遣ししが、秀政の城へ歸らるゝ時行遇ひ、此旨申達しけれども、早性根亂れ、已に末期に及びければ、是非の返答にも及ばず、秀政生年廿八歲にて、其日の入相に死去せらる。哀なりける事共なり。父中川瀬兵衛尉淸秀は、先年志津嶽の

福島正則全義舘に向ふ

城にて討死しぬ。秀政も斯くの如くなれば、武家の本意とは申し乍ら、家人共歎き悲む事斜ならず。秀政には、男子なかりしかば、家督の儀、如何あらんと危みつつ、弟の小兵衛尉を大將に取立て、城を堅固に守りける。今度秀政、粗忽に鷹野に出でて、討死せし由を將軍へ申上げば、御咎深かるべしとて、日本へは、城地を見立に出で候て、不慮に討死仕候。實子はなく候へども、弟小兵衛に家督仰付けられ候へと、申上げければ、將軍聞召され、右衛門大夫討死仕る條、不便に思召され候。去り乍ら、跡目の事は、御分別なされ、仰付くべく候。其内は、小兵衛下知に付き申すべしと、御朱印到來しければ、水源城中、先悦びてぞ候ひける。秀政討死し、敵軍勝に乘ずべし。いでさらば打出すべしとて、十一月下旬に、福島左衛門大夫正則七百餘にて、稷山城より出で、全義舘を經て、打つて廻る。其日は豫ねてより、諸卒に觸れける樣は、打廻覽ひつゝ、晝過ぎには、打入り申すべき間、腰は小荷駄停止すべしとありしかば、諸軍も燒飯だに持たずして、打出でけり。全義舘近邊放火し、朝鮮人數十人討捨にして通る所に、建昌山といふ大山に、朝鮮の全應瑞・權應珠、二萬餘にて取上

り、海道の北なる尾崎に立ちて備へ、麓の道を通らば、嶽より落ち懸るべき有樣なり。福島が勢僅か八百餘、二段に立てゝ押しけるが、此有樣を見て、立留左衛門大夫乘廻し、敵猛勢にて候間、山より下立ち、駈引くべし。爰にて鑓を入れよ。此方より懸らば、嵩より追下さるべきぞ。卒爾に懸かるなと、怒り罵り下知をなす。正則が先手福島丹波守、大剛の兵なれば、御心安く思召し候へ、敵多勢にて候へども、一立も立てさせ候まじ、近々と引取り、一度に鑓を入れ、捲り付け候べしと、鑓の柄を二つ三つりう〳〵と打振り〳〵、首塚を築き候はんと、鑓玉を取り控へたり。されども、敵勢は、正則が勇氣に恐れて懸り得ず。味方は、今朝未明に兵糧仕りし迄なれば、上下飢え疲れ、早や日も中の刻に下りしかば、之より引かば、敵に慕はれなん。さあらば夜に入り、味方一人も助かるまじければ、今宵は此芝原に野陣して、夜明けて引取るべしと、正則下知して、其夜は其所に陣取り、露に打たれ夜を明す。敵大軍にて、近々と備ふれば、何時懸らんも計り難く、下々眠るべからずと、使番を廻し、夜もすがら觸れ明す。正則は近邊の枯木共切寄せ、大篝焚かせ、終夜用心呼ばせ夜

を明す。敵陣にも用心呼ぶ事いと喧し。今朝夜明に食ひたる計りにて、十里餘の道を押し、剰へ水だに呑まずして、其夜を明しける心の中こそ悲しけれ。されども、大將正則は、甲をだに脱がずして、少しも眠らず、夜を明しける。東も白みしかば、されば敵へ架ずして押通るべし。敵懸らば、後先より横を入れ、一度に鑓を入れよと評議して、二萬計りの大敵の前を押通るに、敵陣俄に色めき立ち、山の尾崎より北なる峯へ、吾先にと逃げ上る。正則案に相違して、是は如何にと見る所に、二萬餘の敵むらめいて先を爭ひ、山の峯二十町計りも引退き、今は道の近邊に敵といふ者一人もなし。正則が兵、之は佛神の御助なるべし。只事とは覺えずとて、上下悦び、山の麓を押廻り、大事の切所を打越えけり。すはや能きぞと、徐々と打つて廻る所へ、山の出口にて、勢の程千計り、馬煙を立てゝ備見えたり。正則が兵、すは〱敵よと能く見れば、旗の紋山道にて、下々の指物三羽子なり。是は如何にと見る所に、禝山城に殘し置きたる小國石見守・長尾隼人等にてぞ候ひける。昨日歸り給ふべき正則の今日延遲るは、如何樣敵に取卷かれ給ふならんとて、人數を三分一殘し置き、城を

守らせ、殘の勢は主の正則迎の爲に來りける。敵は山より見渡して、すはや日本の大軍の助來るはとて、上下殘らず逃上りけれども、味方は平地なれば見えざるに付、山の鼻にて行逢ひ、互に手を拍つて悦び合ふ事斜ならず。正則其勢を合せて、山の嶺筋に控へたる敵へ懸るべきなれども、味方以ての外草臥れたれば、少しも早く引取るべしとて、二里餘引取り、其所にて、迎の兵共の持せ來りたる兵糧共を渡しければ、昨日の朝食ひたる儘にて、只一椀の飯をば、合浦の珠も斯くやらんと、悦び勇みて食しける。谷川の水呑みつゝ、疲を休め、其日は昨日より大軍なれば、山口の穴小屋共亂妨し、思ふ儘に首取りて、噺めき渡りて稷山城へ打入りける。されば如何して聞きたりけん、朝鮮人共、福島正則を關白秀吉が伯父なり、是等さへ攻め落さば、日本人は負くるなりと沙汰して、餘の城近邊へは取懸らずとも、左衞門大夫居城へは、三度迄取懸りし故、福島兵共度々に働き、分捕高名せし者共多かりしとぞ聞えし。

小西行長と沈惟敬對面附大明・日本和談扱之起

李如松朝鮮に入る

沈惟敬

平壤の安定館にて、祖承訓・史遊擊等、日本の鋒將小西行長に討負け、史遊擊討死仕る旨、大明へ聞えければ、明帝大に怒り給ひ、律を失する者をば罪し、諸大臣を盡く集め、評議を擬し、大臣を遣し經略し、大將を立て兵を督し、朝鮮に入りて、日本人を追落さんと評議せり。此時總兵李如松、北方の寧夏を平げて、功を爲して歸る。之を提督の官に爲し、南北各鎭の兵を催し、其器に當る者を選びて副へらる。又侍郎宋應昌を以て經略使とす。之れ壬辰十月始めの口事なり。宋應昌才學初て顯れ、時の人信用せざれども、司馬薦擧たり。其故は、應昌は浙人にて、日本の事を能く聞き、沿海強要の圖説を知るを以の故なり。既に李如松等、勅命を受けて打立たんとする時に、司馬石星、沈惟敬が遊説を聞きて、和好封貢の儀、遂に起れり。抑是れ沈惟敬といふ者は、亡命無類の小人なりしが、相如の破壁風寒く、史雲が釜中魚生る有樣、見る目も更に堪へ難く、短褐に身を窶し、身の寄るべなきまゝに、近年は潛に日本へ渡り、小西攝津守行長に逢ひ、醫術など敎へしかば、行長之を悅び、恩遇甚だ厚かりき。其後惟敬、大明へ歸り、此處彼處漂泊してさまよひ歩き、北京の都に到りぬ。爰

に又呉の俠妓に、陳澹如といふ有り。年廿五になりしが、容顔甚だ美麗にして、芙蓉の眸・丹花の唇、楊貴妃・李夫人は見ねば知らず。人間中にも、斯かる美人のありけるかと、怪まれける程なれば、巫女廟の花の匂、照君村の柳の姿、畫すも筆も及び難く、歌舞の道、世に勝れしかば、世の人、貴となく賤となく、盡く此女に淫貴して、傾國の危を忘る。爰に浪人の沈惟敬、この澹如に馴れつゝ、比翼の床の上に、連理の枕絶間なし。今は早や穩に出初し花薄、招く袂も多けれど、餘所の情は秋風の、立つ名も恥ぢぬ身となれば、今は中々に彼方此方の信音も、筧の氷閉ぢ埋れ、通ふ使も絶え絶えなり。彼の澹如が僕に鄭皿といふ者あり。是より先數年の間、日本に擒はれて筑紫に居住せしが、今度北げ歸りて、能く日本の事を知りて語る。惟沈敬、其心慷慨にして、凌雲の氣あり。身は貧しと雖も、志附鳳に非ずといふ事なし。今大明干戈を動して日本と戰ふ、此兵亂に時を得て、大功を立て、名を朝廷に播き、運を一朝に開かん者をと思ひ、妻の澹如が僕、鄭皿、日本の事を能く聞きて、己獨り日本の事知たる樣に觸廻し、あはれ天子へ奏聞あれかし。日本退治の謀をなすべしと、人に逢

ふ度毎に語りけれども、未だ信ずる人なし。石司馬、朝鮮の事問れば、博く謀を取り、如何にして倭を拂はんと、先づ日本の案内者を尋ねける間、司馬が寵愛の妻袁茂といふ美人、彼の陳濟如と仲好くして、常に濟如が許に遊び、惟敬が日本の事を知りたる物語を聞き、其に惟敬が大膽を見て、司馬に薦む。司馬、袁茂が事を信じて、急ぎ沈惟敬に對面す。惟敬大に悦びつゝ、時到りぬと色めきて、司馬の館に參候し、日本の事、委細に語りければ、石星大に是を信じ、人得たりと、悦ぶ事斜めならず。即ち禁裏に奏聞して、沈惟敬に官職を授く。爰に司馬思案し、最前祖承訓、平壤軍に打負けし爲體を見るに、大軍を起さずば、倭と戰ひ難し、先づ沈惟敬を遣し、和談の扱を爲し、其内に勢を集め、大軍を以て、一擧に戰を決せんと分別し、惟敬を使とし、朝鮮へ遣し、和睦の策をなさしむ。惟敬は、思ふまゝに石司馬に近付き、金銀財寶を多く遣さるれば、之を以て、日本の諸大將に賂ひ、和好の扱を調へんと望みしかば、司馬許諾して、彼が望に隨ふ。惟敬悦びて、終に陳濟如を妻女として、司馬に預け置き、數千兩の金銀を請取り、蟒衣・玉帶・花幣を市ひて、土産と爲し、朝鮮にぞ入

りにける。卽ち日本の大將に謁(まみ)えんとす。此時、小西行長は平壤にあり、惟敬先づ人を遣して、心を通ぜしむ。行長も元來和好を好めば、朝鮮の僧玄蘇西・堂宗逸を遣し、和談の許諾をなす。惟敬大に悅びて、同年八月廿九日に、先づ金幣數々の進物を贈りて、行長と乾伏山の麓にて參會せり。先年行長とは、日本にて懇志ありし古情・舊緣あれば、互に隔心なく對面す。惟敬一々情を述べ、極めて和好の宜しき事を說く。

惟敬行長と乾伏山下に會す

行長七箇條の好を書立てて、此儀を相調へば、朝鮮を誅伐する事を免し、大明と和談の扱をなすべきとなり。通辭一々に演說す。第一に和議。之は大明・日本・朝鮮三國受通じて、隣旦の好を爲して、互に合戰を止むべし。第二に割地。之は今度、日本已に朝鮮の四箇道を攻取り、卽ち永代迄日本へ領地し、朝鮮へ還與すべからず。第三入貢。之は大明へ日本より、每年貢物を納め、又日本へも其報貢を得べし。第四に封號す。之は大明の天子より、秀吉を日本國王に封ずべし。其殘三箇條は、小西も惟敬も深く隱密する故に、人是を知らず。惟敬先づ一々に合點せり。是に依りて、行長も、和談の一左右次第に、平壤の戍を撤せんとて進まず。都に止りて、諸方の下

媾和の議

知をなす。石田・増田・大谷等の三奉行も此の議に同じ、和談の左右を待ちてあり。沈惟敬が寸謀に欺かれ、王城にある日本の兵共、方々の城をも攻めず、只闇然として日を送る。細川越中守忠興が家臣松井佐渡守・有吉武藏守、福島正則が家人福島丹波守・小關石見守、黒田が家人黒田美作・栗山備後・後藤又兵衞、木村が家人大崎玄蕃等差集ひ、今日本勢數度の大利を得、向ふ所勝ずたといふ事なし。是れ則ち勝に乘る所なり。然るに、沈惟敬に出拔かれ、此勢口を拔かす事、口惜しとも中々言語道斷なり。速に和談を破り、大軍一同に打つて出で、慶尙・全羅兩道の城を攻め落し、朝鮮一偏に攻め隨へば、明兵大軍たりと雖も、朝鮮へ入るべからず。然る時は、數度の大功一擧に全かるべしと、晝夜己々が主人を諫めしかども、諸大將も三奉行の下知に隨ふは、實もと思ひ乍ら、意に任せず。諸家中の家老・物頭の功者共は、あの三奉行衆は、何方にて武邊したる覺ありて、軍奉行はせらるゝぞ。疊の上公議辯口、又は算勘の沙汰とは、武者事は違ふ者なり。不案内なる道の差配、近頃をかしき次第、盲人の垣覗きとは、只此譬なるべし。大明より大軍を出すべし。其間のからくりに、和談

の謀をなすに、其を誠と心得、沈惟敬に出抜かれ、追付け大明より、大勢打つて出でて、生首抜れん者ぞと、口々につぶやけれども、爲すべき樣こそなかりけれ。此時行長、一通の書翰を沈惟敬に贈り、彌、和談の事を急ぐ、其詞に曰、

日本差來先鋒豐臣行馬〔長カ〕謹啓

大明遊擊將軍沈公閣下

日本絕二勘合船一者久矣。數年雖レ求下計二和議一於朝鮮上朝鮮不レ應。日本之不レ見故、秀吉勃然進二節旄雞林一矣。惟時閣下來二平壤一、實兩國復二舊規一之起本乎。抑閣下以二轉奏一遣二天使於日本一、以爲二和親之驗一則〔脫字アルカ〕莫焉。若見レ許二天使一、則相待者以二中間五十日一爲レ期、若又誤レ期者、則難レ留二日本諸將於朝鮮城中一、伏乞亮察。頓首謹言。

計閣

鎧一甲　鉾一挺　冑一著　弓一張　韝一肘付十矢　短刀一個

長劍一挺

元祿元年壬辰初三日

翌日惟敬が方より、日本の鐵炮を見す〔脱字ア〕此時小西文書翰を遣し、義州に朝鮮國王御坐せば、是へ告げ知らせ、逗留なしに大明へ歸り、和好の返事を五十日の内に報ずべしと、懇に書きて、吾姓名・官位迄具に書す。大將攝津州前司小西飛騨守豐臣行長・傍將對馬州前司宗拾遺侍中豐臣義智と書きて遣しけり。沈惟敬、此和議の書を請取り、十月の初に大明へ歸り、朝廷に奏聞申すと雖も、群臣の衆議を經ざる上は定め難し。其時、李如松を提督として、大軍を催し、日本退治の支度最中なれば、先づ師を出して、重ねて群臣評議すべしとて、司馬石星方に惟敬をば止置きけり。

大明加勢李提督朝鮮に入る

同十月、大明の皇城北京の禁中にて、公卿僉議ありて、朝鮮加勢の軍兵を遣されけり。經略〔脱カ〕宋應昌は遼陽へ行き、提督李如松は、大軍を率して北京を下立ち、兵を分けて三脇とす。中脇は楊元大將にて、左脇は李如松、右脇は張〔世カ〕なり。吳惟忠は三千の南兵を領して、右脇に屬す。都合其勢五萬餘騎、萬曆二十年壬辰十月廿七

日に山海關を出で、十二月廿五日に壇に登り、師に誓ひ、天地を祭りつゝ、諸軍同時に鴨綠江を渡り、朝鮮にぞ入りにける。

朝鮮征伐記第五終

將軍名護屋に於て御越年并秀吉公御能稽古附角之坊

文祿元年も早や立ち、新玉の年立歸り、同二年正月にもなりしかば、諸大名の面々、名護屋御城へ出仕あり。位階に從つて、衣冠・束帶・布衣・靑袍の人々登城あつて、元日を賀し申されしかば、名護屋繁昌、耳目を驚かせり。折節、京都八幡山の猿樂暮松新九郎、年頭の御禮として、名護屋へ下著せしかば、將軍、斜ならずに悅び給ひ、自ら能の御稽古あつて、御心を慰め、又在陣の軍勢をも、慰められんと思ひ立ち給ふ。近習の人々承り、御年も早や五十八なれば、願はくは、御能の稽古も止め給へかし。永々の在陣に草臥もし給はずして、氣根の强き人哉と、若き人々は嘲笑ひけり。將軍は、近習の人々・御伽衆計り召連れられ、山の里御數寄屋の勝手にて、猿樂

御稽古あり。仕舞の善惡を憚らず申すべき旨なれば、暮松が指南し參らする樣の、いみじくをさ〳〵しき體、言語の及ぶ所にあらず。御稽古怠なかりしかば、五十日計りに六番覺え給ふ。其内弓八幡は、天下を治むる能なれば、眞先に御稽古あり。高砂・老松・田村・芭蕉・實盛、御相傳あり。中にも芭蕉の、思へば鐘の聲、諸行無常の所、大事なりとて、暮松汗を流し、御心持を敎へ參らする。御伽衆山名禪高・木下半助・前波半入など罷出で、樣々御仕舞の批判申し上ぐる。つき〴〵しく腹をより、感を催す。三人の長老も御供にて、只今芭蕉の、諸行無常の所の御仕舞は、中々見事なり。偏に沒滋味の手段、有無忘却の大悟なりなんどと、譽め參らする。斯くて御稽古重り、早や舞臺にて遊ばし候樣にと、暮松申上げしかば、御機嫌斜ならず。御悅として、黃金百枚・銀子五百枚・御召の呉服など、夥しく暮松拜領しければ、家康・利家・景勝・氏鄕を始め、御悅の金銀・呉服、吾劣らじと、暮松に引出物せられければ、暮松が旅宿の門前、駒の立所もなかりける。去る程に金春八郞・觀世左近を召下され、御能御覽あるべしとて、飛脚遣されければ、二月下旬に兩太夫、名護屋に下著仕り、

其旨披露せしかば、翌日召出だされ、御目見仕り、下向程なきことゝ、油斷なき故とて、御機嫌なり。金春家の名物小面般若・小尉・三光の尉の面、觀世家の名物ふかい皺付・あふみの女・小べしなど、御寫しなされたきい旨、內意下りしかば、辭み申すに及ばず、卽ち面ども奉上。其頃宇治の醍醐に角之坊とて、細工の名人なるあり。卽ち早傳馬にて召下し、右の面ども寫し申すべき旨、木下半助奉行に仰付けられしかば、十日計りの內に、面五つ出來す。卽ち御覽あるに、何れか寫し、何れか本とも見分かず。御感淺からず。卽ち御褒美に金子など下され、殘る面ども出來し、差上げしかば、卽ち面の天下一號下さるべき旨、大老中へ如何あるべしと、御相談あり。家康・利家・景勝、何れも然るべく存じ奉る旨、申上げられしかば、其夜召出されて、銀子五十枚・小袖三十・天下一號の御朱印給ひ、歸洛の御暇下されければ、角の坊・其朱買臣が錦を著て、故鄉指して歸りけり。

水源稷山合戰

福島正則水源城を救ふ

朝鮮にては、新王の年來るとも、元三の儀式調ふ人もなく、晝夜の軍絶間なし。爰に兵馬使李福男・李應龍等は、舊冬不慮の軍にて、日本大將中川右衛門大夫秀政を討取りつゝ、其勝に誇つて、其居城水源城を取らんとて、正月四日の陵晨に、二萬五千餘を引率し、水源城へ取詰め、七重八重に取卷き、平攻して、乘り入りけるに、城主中川小兵衛尉秀虎、十八歳なりと雖も、名將の子なれば、少しも撓まず、矢の間配して、鐵炮密く打出しければ、先駈の敵數百人打たれつゝ、遠卷にして口を經たり。此旨稷山城へ聞えしかば、福島左衛門大夫下知して云く、水源城を取られては、日本の御弱、且は城中の士卒一人も助かるまじ。爰は他に讓らぬ所なりとて、早貝を吹かせ、旗指急げ。馬印出せや者共とて、先手・旗本只二段にて、水源の後卷に押寄す。されども、山々重り阻り、水源城の安否、未だ見屆けざれば、福島いらつて、城を落されて後は、臍を咀むとも益あるまじ。城内の兵共、主の秀政には後れ、さぞ力なくあらん。彼を討ち果さるれば、正則生きて何かせんとて、一里計りに近付き寄り、早武者を崩し、乘出せと怒りければ、先陣・後陣一同に行列を亂し、我先

我先と驅付くる。大將正則、兩鐙を合せ急ぎける體、如何なる天魔波旬も、面を向くべしとは見えざりけり。頃は睦月上旬の事なれば、風交りの雪霰れ、手皸れ凍えつつ、鐙を落す兵多かりける。去れども、主に先立たんと、乘拔け〳〵急ぎける。水源城の此方なる山の峯に乘り登れば、城の攻めらるゝ體、弓・鐵炮・鬨の聲、手の下に聞ゆれば、未だ城は落ちざりけるは、懸れや人々とて、福島丹波守、鳥毛馬藺の指物にて、鳥毛の馬に打乘り、指揮を振つて下知すれば、坂井信濃守、紫の鳥かけ、一番に山より乘り下りぬ。加治田出雲守・千石但馬守・杉浦右衛門七など進みける。城は未だ落ちず候間、御急ぎ候へと、先手より使を馳けさせければ、正則物もいはず、轉れたる計りにて、山を一息に押上げたり。水源城には、正則が銀の房芭蕉の馬印、嶺筋へ朝日の出る如く押上ぐと均しく、城主中川小兵衛尉紅の纏かけ、栗毛の馬の平首に、十文字の鑓引側め、大手の門を開き、手勢千餘鐵炮を放ち立て、一度に突いて出でたりける。寄手大軍たりと雖も、一支も支へず、一度に嘩と崩れけり。餘すな者共、進めや進めと呼んで、追付き〳〵突倒し斬伏せしかども、手向ふ敵の有

らばこそ、前の川へ追ひ浸し、浮きぬ沈みぬ流れ、死す者數を知らず。城の後の山へ上りし朝鮮人共、此體に驚きつゝ、谷へ飛び岨へ轉び、吾一々々と北ぐる事數を知らず。辛き命助かり、這々逃ぐる輩、只蜘の子を散らす如し。寄手殘らず追ひ散らせしかば、正則が先手は手に合はず、川原に控へたりし所へ、城主小兵衞次に家老三人、高名の首ども提げて、正則陣へ出で來る。福島も床几より下りて色代す。小兵衞申されけるは、御後卷早速なされ候故、萬死一生を得候事、報謝言に述べ盡し難し。城へ御入なされ、御休息なされ候へと、申されければ、正則は城中へは入り申すまじく候。只今の御振舞由々しく見え候。去り乍ら、早く御切出し候故、正則が家人共手に合はず、殘り多く候なり。是より歸り候とて、稷山へ歸られける。

中川秀虎秀政の家督を繼ぐ

此山を秀吉公聞召され、御感あつて、右衞門大夫家督を、此小兵衞にぞ下されける。

稷山城合戰

朝鮮之を口惜しくや思ひけん、重ねて三萬餘にて、正月八日の辰の刻に、稷山城へ押寄せたり。されども、正則が驍勇に恐れ、三分一は城近く取寄せ、殘の勢は、山取して控へたり。正則たまらぬ猛將なれば、彼奴原（きやつばら）に足を溜めさせては、無念の次第な

り。成るべく三方の木戸を開き、三筋になつて切懸くべしといふ言の下より、鎌田五左衛門・仙石但馬守は、東の門より驅け出で、西より福島丹波・長尾隼人・坂井信濃守等、眞黒に切つて出づる。大手は杉浦右衛門七魁にて、小關石見守ぞ突いて出でたりける。寄手大軍たりと雖も、福島が勢に切立てられ、黑雲の漲るゝ如く、むらめかいてぞ崩れ行く。鎌田・仙石等、逃ぐるを追うて進みける。丹波・隼人・信濃も、同じく追うて進み行く。大手筋は、敵大軍なれば、足を亂すこととなし。立堪へ／＼半弓二三千張にて、防矢射ること、雨の降る如し。此只右衛門七備にて懸りしが、鋼を傾け、徐々と追うて行く。敵の大軍、山へ引登り、一陸々々の間より、散々に射る。福島が勢射竦められ、右衛門七が組勢二十騎の兵も、進み兼ねて見えけるに、大將右衛門七並に組付の坂井與三右衛門・福島彌藤次・堀源藏・坂井主膳・武藤修理只六騎、一番に進んで山へ向つて追ひ登る。大將正則、遙に見及んで、只今六人拔け出でて、先陣に懸るは、右衛門七・與三右衛門・主膳・源藏・修理・彌藤次と見えたり。扨き見事なる振舞かな。あれ討たすな。助け行けと下知せられければ、家老小關石

見守、黑具足に白綾の羽織に、朱の丸書きたるを著るまゝに、黑の馬に乘り、鞭鐙を合せて、六人の魁より、先へ進まんと、眞黑に駈入りけるが、山の上り立の溝堀にて、馬を逆に乘倒し、吾身も馬に敷かれて、起き上るに及ばず。去れども敵合七八間なれば、助くるに及ばずして、進む所に、福島彌藤次も老馬に乘りたる故に、石見より上の段にて、馬を乘倒す。されども彌藤次、早業にて妻手の方へ下立ち、引立てんとすれども、溝へ落入りし故、引起すこと叶はず。彌藤次は、主膳に向つて、此馬乘り捨てんと思ふなりといふ。主膳尤なり。捨て候へといひしかば、彌藤次步立にて、鑓提げて進みける。敵は上の段々より、矢衾を作つて、散々に射立つること、雨の足の如くなれば、坂井主膳も馬の額と胸懸盡く箆深に射させ、愕れば下に下立ちたり。彌藤次一所に步立ちて、峯筋迄進み行く。右衞門七・與三右衞門・修理源藏は、馬恙なくして乘り上し所に、大將正則、鹿の角打ちたる椎の甲の緒を縮め、小性七八人計りにて、乘立て駈け來る。正則は後より、魁の者共の働を見及びつゝ、感じ思ひければ、坂井主膳・福島彌藤次に辭をかけ、汝等が手負馬共、あれに殘しあ

りしにより、歩者共に引きて歸れと下知したるぞ。心安く存せよと申されしかば、主膳今年十八歳なれば、主の正則の辭に懸かり、面目身に餘つて覺えける。敵も立怺へ見えければ、正則六人の者に下知しけるは、後の人數を引付けて、敵へ懸るべき間、其の分心得候へとありしかば、右衞門七以下六人の兵共、鑓提げて待ち懸けたり。敵の大軍も此勢に恐れつゝ、峯へ引き上げ、散々に引退きしかば、正則は少しも付くべからず。早々峯に候へとて、夫より城へ引入りけり。今日敵の矢に中り、手負死人多き中に、組頭鎌田五左衞門討死なり。左の胸板を射貫かれけるとぞ聞えし。此人は十二年先、天正十年六月二日、日本京二條城にて、織田三位中將信忠卿御自害の介錯し、其場を逃れたりしかば、其後臆病者にて歸りしを、正則千五百石の領地を與へ、呼出しける。其恩を感じ、且つ先度の恥を雪がんと、今日眞先に駈入り、火花を散らしたる働して、討死を遂げたりしかば、聞く人毎に押並べて、斯くこそあるべきことなれと、且つは感じ〔且是カ〕は惜しみつゝ、恥ある侍をも用ふべしと、張良が兵書の辭、今こそ思ひ知られたり。

小西行長、大明の提督李如松と合戰

大明提督李如松は、其勢五萬餘騎を率し、文祿二年癸巳正月三日に、平壤の安定館に著く。之を聞いて、朝鮮の軍兵共、彼方此方より、日々に馳け加はりければ、其勢旣に二十萬に餘れり。小西行長は、平壤の城にありしが、提督が勢長を見ん爲めに、小西與七郎を大將にて、足輕五百人を遣し、安定館へ差向け、驅引挑みつゝ、其手合をぞ見たりける。提督之を見て、最前、祖承訓に打勝ちしに倣つて、日本人、明兵を侮ると見えたり。近々と僞り引寄せ、あれ討取れと下知をなす。大同の驍將李寧承、屈强の馬武者二千計り、駿に鞭を上げ、大水の漲り來る如く、一散に乘り出し、兩方を圍み、引包まんとしければ、小西が兵共、案に相違して、一戰にも及ばず、捨鞭を打つてぞ逃げたりける。李寧追ひ懸けて、小西が足輕逃げ後れたる者を、僅か七人擒り、本の陣へ入りければ、小西與七郎命計り助かり、漸く足輕共を纏め、平壤の城へ取込みける。行長は此體たらくを見て、最前、祖承訓が軍立とは、天地間隔に

小西行長後詰を乞ふ

李如松平壤に押寄す

違ひ、侮りにくしと平懸して、急ぎ早馬を、絆の城々大友・黑田・久留米・小早川方へ遣し、大明人二十萬、已に安定館迄寄せ來り候、近日行長、城を攻め取るべしとの支度なり。各〻少しも遲滯なく、後卷し給ふべしといひ遣し、扱兵共を下知して、一人も外へ出さず、四方の木戸を下し、鐵炮に火繩を挾み、矢尻を汰ひ待ち懸けたり。去る程に、正月六日辰の一點に、李如松二十萬、平壤城へ押寄せたり。旗・小符十里が間に連り、野も山も一面に充ち滿ち、山嵐に吹かれて、龍蛇のごとく靡る甲の鉢を並べ、彌が上に打圍んで、尺寸の地も餘さず、雲霞の如く控へたり。人馬の喚き叫ぶ音は、大浪の汀に寄するが如く、劍戟の耀き渡る勢は、電光の激するに異ならず。追手・搦手近付きて、震ふ中には、山嶽是が爲めに傾き、鐵炮を放ち懸くる音、天地も須臾に摧けぬべし。此大軍に取卷かれ、僅か二萬に足らぬ小勢にて、誰を賴み、何を待つともなき小城の內、殊に異國の其中にて、怺へて防ぎ戰ひける、小西行長が心の內こそ哀れなれ。抑平壤城と申すは、東は大同江あり、西北は共に山坡なり。城外二里計りに牡丹臺あり。臺の廻りに柵を振り、之を本城として、城中の勢已上

行長の夜討

一萬五千に過ぎず。方々の矢倉・持口預り、塀・柵丈夫に附き、鐵炮矢間を切り、今や寄せ來ると待ち懸けたれども、大敵を引受けて、防ぐべき樣はなかりける。去れども、危きを見て命を致し、死を善道に守るは、侍の常なれば、此城を墓所と定め、靜まり返つて待ちたりける。提督が三脇の兵之を見て、先づ本城の牡丹臺を攻め取るべし。さなくば、表裏に敵を請けて、難儀たるべしとて、牡丹臺の攻め取らんと押寄せたり。內には大村・五島・松浦・宗對馬籠つて、鐵炮密く打ち出せば、寄手左右なく近付かず。城中には、大敵に恐れて出でず、互に勝負もなく、日暮る。寄手大軍なれば、同勢は西の門外に陣取り、獨り南兵三千餘にて、牡丹臺下を守らしむ。本陣と陣屋相竝びければ、小西思ふ樣、任他大敵に取卷かれ、居籠りにならんこと、口惜しき次第なり。晝牡丹臺の軍に疲れ、寄手は心の儘に眠りたらん。いざ一夜討して、追ひ散らさんといひければ、皆尤もとぞ同じける。去れば支度して、打立てとて、物馴れたる兵五千餘、犇々と出で立ちて、其夜子の刻に、提督が本陣へ忍び寄り、轅門の前へ駈け入り、同音に鬨を曈と上ぐる。李如松、其頃明朝第一の良將にて、智勇兼ね

行長長統の勇戰

備へたる兵なれば、陣々の堅め、日々の手當、其法宜しく守りぬれば、少しも騒ぐことなく、鳴を靜めて防ぎ戰ふ。射手は元來井樓にあれば、半弓を調へ、指取り引詰め散々に射る。短兵は搔楯を持ちて待ち懸け、登らば切り落し、越ゆれば切り伏せ、是を先途と防ぎ戰ふ。互に劣らぬ兵なれば、入り立てもせず込み入ることもならず、兩方搔楯を境ひ、勝負區々なり。行長、此有樣を見るよりも、云ふ甲斐なき者共が軍したる有樣や、いで〳〵行長、一合戰して見せんとて、甲の緒を締め直し、中間に持たせたる長刀を押取り、鹿垣切つて引破り、小西攝津守一番乘と名乘りつゝ、長刀を引側め、陣中へ飛び入りければ、小西主殿助長統兄を討たせじと、續いてこそは乘入りける。殘兵共五千餘、喚き叫んで續きつゝ、一度に嚏と込み入りける。兩軍楯を傾け、鎧の袖を搖合せ、天地を響く火を散らし、身命を捨てゝ攻戰ふ。李如松は、提督の旗の蔭に控へて、身を揉んで下知をなし、三方の井樓より、火箭を射懸け、其光明にて、敵・味方を見分け、雨の降る如く射立てける。提督大音揚げ、破る所は破らせつゝ、左右より勢を引廻し、引包んで討てとて、兩方より大軍にて引包み、

行長李如松に和を乞ふ

洩すなとてこそ鬪ひける。行長・長統兄弟勇を振ひ、李如松を組んで討たんと、志しけれども、味方過半討たれ、終に叶はずして、一方の柵を踏み破り、一度にぱつと引退く。提督が弟李如梅・李如柏等、勝つに乘つて附入にせんと、小西が後に引付きて、透間もなく追ひ來る。行長之を見て、取つて返し突き懸り、散々に防戰ふ。相從ふ勇士共、鑓・長刀にて、突き出し〳〵防ぎけれども、明兵少しも挫まず、攻め入りければ、行長只一人、立ち怺へ鑓を入れ、五六人突き伏せしかば、流石の提督が勢も、行長が勇氣に恐れつゝ、二町餘ぱつと引取りける。其隙に城門の閂漸く指合せ、城中へ取り込めば、寄手も本の陣へ引取りける。小西思ひけるは、今は八十梟に思ふとも叶ふべからず。所詮最前より、沈惟敬に便り和議を取結びし上は、此方より扱を入れ、互に人質を取替し、提督が圍を出づべしとて、通辭福景徽を遣し申しけるは、日本干戈を動して、朝鮮に入ること、全く天朝を仇とするに非ず、只入貢と封號との故なり。之を以て、沈惟敬に便り、朝廷の勅命を待つ所に、不慮に天兵二十萬騎、此城を圍まるゝ故、是非なく蟷臂を上げて官軍を防ぐこと、蚊蝱の大樹を動かさ

竹內吉兵衞人質に出づ

行長李如松に欺かる

んとするに似たり。今行長、兵窮まり力屈す。願くば將軍に質を委ねて、此戰を止めんことを。素願他にあらず、詳に使節の舌頭に附すと申しければ、提督大に悅びて、倭將行長、勢盡きて質を入れ、麾下に降らんことを乞ふ。是れ天兵の猛威輕からざるにあり、忽ち質を出すべしと約をなせり。使歸りて此をいふ。行長、誰をか遣はすべしと、案じ煩ふ氣色を見て、小性頭竹內吉兵衞進み出で、苦しからざることに候はゞ、吾等人質に罷り出づべし。御馬の先にて討死仕るも、亦此御大事に立つも、身命を捨つるは同じ事なり。主君の御爲、諸軍勢の爲、捨てゝ甲斐ある命なり。早や疾く罷り立つべしと進みければ、行長も是非に及ばず、淚を流し、去らば汝能り出づべし。今度の忠節は、生々世々に忘るまじきぞ、相構へて妻子の事心に懸くるな。去らば出でよとて、暇乞の盃取替し、提督が陣へ出しける。兎角せし內に、七日には、終に此の扱にて軍なし。只寄手も城中も唱筒打つて用心せり。扨大明方より、人質を出し給へと、行長方より責めたりけれども、提督更に承引せず。七日は空しく暮れにけり。行長、心許なく思ひける所に、明くれば八日の早天に、大明三

長沇の酋戰

脇の兵二十萬騎、一度に城へ乘り込まんと、三方より鬨を揚げて押寄せたり。互に放ち懸くる石火矢は、千雷の鳴り落ちしが如し。喚き叫ぶ音は、山も谷も傾くべしとぞ覺えける。小西怒つて涙を流し、大明人に出し拔かれ、人質を出しながら、斯くの如く攻めらるゝこと、吾人はいふに足らず、日本の越度たり。此上は是非に及ばず、死狂にせよ兵共とて、櫓の上矢間の內より、大筒・小筒を集めて、雨の降る如く打出しければ、寄手二千計り、塀下・堀涯に打倒され、大軍も引色に見えたりける。小西が兵之を見て、得たり賢しと、三方の木戸を開き、拔き連れて打つて出でたり。烟塵天を掠め、汗血地に溢れ、引き組んで首を取るもあり、射合せ打ち合せ、太刀討の働、先登を名乘る聲々、山を拔く計りなり。數刻攻め戰ひ、討つつ討たれつ揉み合ふ間、城中四方の勢共、大手三の木戸へ壥り集れば、城の西の方防ぐ兵なかりけるを見て、張世爵・吳惟忠等、右脇の南兵一萬餘騎、力を合せ、一度に乘込み、矢倉に火を懸けて、凱を揚ぐ。此口は、行長が弟小西主殿助固めたりしが、大敵に急に乘り込まれ、此手防ぐにも及ばず亂れければ、主殿助血眼になつて、こは口惜しき次第かな。

身命を捨てゝも、此所は破られじと、大音揚げて叱りつゝ、鯖尾出したる黒母衣をゆすり、懸穗長の鑓を提げ、自身突いて出で、鑓を合せ防ぎ戰ふ有樣、喩へていはん方なし。主殿助が兵混甲五十餘人、主の左右に立ち重なり、汗水に成り、防ぎ戰ふこと二時計りなり。然れども、寄手は猛勢なり、荒手を入れ替へ〳〵攻め懸る。主殿が弓手・妻手に相從ふ兵共、或は手負ひ、又は討たれ、算を亂したる如く、殘り少なになりければ、主殿助、聲も嗄れ息切れ、深手六七箇所負ひければ、心計りは矢竹に逸りけれども、今は世の中掻き暮れければ、味方の死骸の上に腰を掛け、餓鬼め、遂し返せや〳〵と、逃ぐる味方を叱しけれども、助けんとする兵もなし。然る所へ行長が茶童幽閑といふ坊主來りて、早や御除きなされよ。御手柄にて御座候といふ。主殿眼を瞋らかし、己が分別には似合ひたるぞ。此手巾を母の方へ、之は妻に渡せとて、內甲の鬢の髮を押し切つて、二色の信を茶童に渡し、鑓提げ又突いて出で、二三人突倒しける所に、漢南の范虎といふ者突懸り、散々に戰つて、主殿を突伏せしかば、主殿も伏しながら刀を拔き、范虎を薙伏にとはしたれども、數箇度の戰に疲

長統討死

れ、深手は數箇所負ひたり。念佛高聲に唱へて、生年廿八歳にて、終に首を取られけり。無慚といふも愚なり。三方の寄手氣を得て、同時に攻め上り、塀柵を引破り、幾重ともなく彌が上に攻め入りける。痛はしや小西は、籠鳥の思を焦し、萬死一生の身となりぬ。大明勢厚くして、屛風を立てたる如く、十重廿重に押し來りしを、小西が兵、弓・鐵炮を調へつゝ、浮矢な射そ。とても遁れざる所なり。心を一つにして、此城を枕にせよと、互に勵み防ぎ戰ふ。一人して五人・十人こそ切りも突きもせんずれ、何程討たるゝをも顧ず、岩を立て押懸くる樣に戰ひ來る。其上西の木戸にて、小西主殿討死せしかば、南兵雲霞の如く、塀をも柵をも踏み破り、乘り入りしかば、小西も外郭を持つべき樣なくして、皆本城牡丹臺へ窄みけり。寄手は城を乘取

行長の苦戰

つて、悦び勇むこと夥し。今朝卯の刻より、午の刻の下り迄戰ひ、味方討たるゝ者、小西主殿を始め一千六百餘人なり。大明勢も數を知らず討たるゝと雖も、猛勢なれば物ともせず。小西は本城を取られじと、矢間配し、鐵炮頻に打ち出せば、聚り集まる大明勢、浮矢一つもなく、片時の間に討たるゝ者數千人なり。日漸く西山に傾

行長援兵をこふ

けば、提督も行長が勇力容易く擢き難く、今日は本城を乘り取ることなるまじ。明日こそ寄せめとて、手負を助けて、各、本陣へぞ歸りける。今日南兵、力を合せて堅城を攻め破り、小西主殿已下數多討取り、祖承訓が恥を雪ぎ、史遊擊が仇を報いたりと、勝鬨を上げて悦ぶ。去れども、寄手も石に當り、壓に打たれ、矢・鐵炮に中り、石垣より落ちて死する者、五千七百餘人とぞ聞えける。小西は兼日よりの約束なれば、去る三日より、日々に飛脚を立て、大明人二十萬騎打つて出で、城を圍まんとす。急ぎ救はるべしと、吉岡城にある大友義統の方へ申し遣し、それより絆の城城竝に王城へも急を告ぐ。大友義統は、元來臆病第一の人なれば、救ふことは扨置き、二十萬の勢に聞恐れ、安き心も無かりしに、早や平壤城を圍む由、告げ來れば、小西は早や討たれつらんと震ひ懼れ、足腰も立たず。吾家老吉廣加兵衛も、五里先の通天府城に置きしも、使計りやり捨てにして、取る物も取りあへず、城を明けて、王城さして逃げて行く。吉廣加兵衛は、大剛の侍なれば踏み止まり、主の出では、先手して、平壤へ出でんと待ち懸けしに、大友は狼狽へ騷いで落ちしかば、加兵衛餘り

に腹を立て、斯かる云ひ甲斐なしの、譜代の郎等と生れ遇ひたる某が、前世の因果ぞ口惜しけれ。あはれ此人、谷へも落ち川へも流れて、死に給へかしと獨言して、静に拂し、主の明け除きし古嗣城迄引入り見れば、能く周章たりと覺えて、武具・馬具の捨てたること數を知らず。加兵衞下知して、一々に取り持たせ、大友が後を追うて落ちにけり。大友義統は、肝魂もなき體にて、樂山城下を通るとて、小西は大明人幾重ともなく取り圍み、打ち果たし候故、我々も引取り候。只々甲州も御退き候へと、罵り〳〵落ちてけり。黒田甲斐守長政も久留米侍從秀包も此說に聞き驚き、救はんと勇めども、小勢なれば、王城の同勢を待つ。王城の同勢も三奉行を初として、談合・評定迄にて、吾進まんと思ふ義勢もなかりける。八日路を隔て、大河中にあれば、兎や角やといふ内に日數を送りぬ。長政も秀包も身を揉んで、王城の勢を呼び越しけれども、如何せんとの事のみなり。

小西行長敗軍

行長不壞を落つ

小西行長は、八日に終日闘ひ暮し、城を乗り取られて、本城の櫓に登り、打圍みし敵の勢を見るに、四方三里が間は、十重二十重に取圍み、尺寸の地もなし。又城中を點見するに、始めは一萬五千ありし勢なれども、或は討たれ、或は落散りて、殘る勢五千に足らず。行長は五島・大村・有馬・松浦・宗對馬を呼び、大友加勢を待てども、終に加勢來らざるは、一定義統落ちたりと覺ゆ。其上、城中の勢五千に足らず。斯くては、明日は城を乘取らるべし。爰にて空しく死せんより、一先づ落ちて、後陣の味方と一所になり、本意を達すべしとて、正月八日の夜半時分に、忍びやかに城を出で王城さして引歸る。敵是をば知らずして、明くる九日卯の刻に、李如松が大軍、本城へ攻め入りけれども、一人も殘る兵なくて明城なれば、提督大に後悔し、行長を討ち洩らしぬることを無念に思ひ、逃ぐるを急に追ふべしとて、是より兵半分、追手に懸けけれども、夜半に退いて數刻隔は、雜兵少々討ち止めたる計りにて、さまでの働もなかりけり。小西行長・宗・大村・有馬・五島・松浦等は、僅かの勢に討ちなされ、正月九日の晩景に、大友が所の城に火を懸けつゝ、署本城迄落ち來る。此城には、

長政行長を勞る

黑田長政が家老小川傳左衛門尉在城せしかば、小西敗軍の旨、先立つて聞きければ、小川勇才ある兵にて、粥を調へ、飯を拵へ待ちし所へ、行長一組、僅かの勢にて、大方馬も人も跣にて、主も下人も飢に臨み、寒天に凍えつゝ、震ひ〳〵落ち著きたり。小川、先づ小西行長を城へ入れ、其外の大將達をも城中へ入らせ、色々と款待し、旅の勞れを休めさせ、扨此旨、樂山へ註進しければ、黑田長政急ぎ迎に出で、行長に對面し、最前大友、逃れ來る時、攝州御討死候間、長政にも早々除き候へとありしかども、貴殿の行方覺束なきに依つて、相待つ所に、恙なく退き來り給ふ條、祝著之に過ぎずとて、小西を始め、組衆をも引き具し、署本城には火を懸け、樂山迄引き歸る。行長を始め、馬具・物具・太刀捨てゝ見苦しかりしかば、小袖・鎧等引出物し、五日迄逗留し、足を休めける。行長申しけるは、甲州も早々王城へ引取り給ふべし。不日に提督が兵到るべしと、勸めけれども、長政は、敵の旗色も見ずして、城を明け退かんこと、後難遁れ難し。行長は手を碎き戰ひ給へば、急ぎ都へ入つて、士卒を休息せらるべし。吾は此城に踏み止まつて、王城の同勢の出づるを待つて、先手仕り、大

明人と戰を決すべしと、申し切られけり。小西も、其儀ならば、吾獨り都へ歸るべからず、此處にて長政と同じく討死せんとて、踏止まりし所に、都表三奉行より、早々引拂ひ、開城府迄引き入るべき旨、追ひ〳〵に申し來りければ、此上は是非に及ばずとて、長政・行長打連れ、不毛嶺の久留米秀包をも相伴ひ、開城府迄引き入りけり。

三奉行より使者を以て、開城府川大河にて、氷解け候ては、人數引取り候事成らず候間、兎角早々引取らるべしと、追ひ〳〵に申し來る。開城府の城に陣取つたる小早川從侍隆景、申しけるは、吾渡海せし時より、再び日本に歸る意なし。隆景苟くも弓馬の家に生れ、年既に五十六、未だ武勇の名を下さず、只常に恨なりしは、天下一統に歸し、徒に疊の上にて病み死すべし。某數代の武術を受け、屍を山野に曝すべからざる事、口惜しく思ひしに、願ふ所滿足して、今大明の猛勢と渡り合ひ、勝負を仕致さんこと、何の幸か之に如かんや。年罷り寄り、死して惜しからぬ身なれば、只今大敵と驅合ひ、鏃先に火花を散らし、鑓・長刀の中へ馬を乘込め、矢石を避けず、刃を除かず、思ふ儘に一戰して、討死せんこと、老後の思出なり。吾一人討死

大谷吉隆隆景を諫む

したりとも、日本の御弱りにも成るべからず。白髮に甲を戴き、戰場を墓所とせんこと、年來の本望なれば、此處を明けて引退く事、努々あるべからずと、申し放ちて勇みければ、使者も隆景の老後の勇氣を見て、感涙を流し都へ歸りて、此旨を云ふ。三奉行只忙然と呆れ果て、大河を越えて大敵と戰ふこと、上策に非ず。去ればとて、小早川を捨殺さんこと、猶以て難儀なり。如何せんと評定する所に、大谷刑部少輔進み出で、吉隆罷り向つて異見を申し、小早川を引き入るべし。皆御心安く思召せとて、其座より馬に打乘り、直に開城府に參著し、隆景を諫めけるは、今、大明人二十萬騎にて、寄せ來る所に、貴殿、之に御殘りあつて、一戰を遂げらるべき御志、恐れながら、流石元就の血脈を繼ぎ給ふと、感涙を流し奉りぬ。去りながら、小を以て大に敵せざる事、古の人々の名言なればとて、御討死あるべき命を、閑々と是にて死んより、都表へ引取り、總軍を同勢となし、一同の合戰を遂げ給へかし。然れば、忠孝二つながら全くして、毛利の御家名、萬世に傳はるべしと、理を盡して申しければ、心服せられ、尤至極仕り候間、去らば御異見に隨ふべし。去りながら、何時に

ても先手の儀は、隆景勿論たるべしと申されければ、大谷喜悦の眉を開き、仔細にや及び候べき。何にても御身ならで、誰か先手を仕るべきとて、隆景と同道して、大谷刑部も開城府を出でければ、黒田甲斐守長政も、小西行長・大友義統打ち連れて、正月十五日に王城へぞ歸りける。

碧蹄館軍提督李如松敗軍

提督李如松は、平壤を攻め破り、小西行長を追ひ落しければ、勝負を兩端に窺ひける朝鮮の兵共、吾も〳〵と、駈け付くること雲霞の如く、其勢已に三十萬騎なり。正月十六日に提督、三十萬を率ゐ、開城府に來る。開城府も日本人明退きたれば、此處に數日逗留し、王城の樣體を窺ひ聞きて、一戰を遂げんと、先づ物見を遣し窺ふ所に、張通事といふ者、提督に勸めて申しけるは、日本の勇士は皆、最前平壤にて討たれ、今王城を守る者、弱卒鎖甲にして、畏るゝに足らず。一戰にて、即時に追ひ散らさんと申しければ、李如松、之を信じて、南兵を止めて開城府を守らしめ、朝鮮の

李如松碧蹄館に來る

開城府合戰

十時傳右衛門討死

軍勢を後陣とし、高昇孫・守廉・祖承訓等屈強の兵十萬騎を率ゐ、正月二十日の曉、開城府川を渡り、碧蹄館に到る。小早川一組、後に引き入りければ、王城より二三里阻て、南大門に陣取り、一の手先にあり。此手筑紫侍從立花左近將監宗茂・久留米侍從秀包等、相交て二萬餘なり。提督三十萬、開城府に陣を張れば、何時襲ひ來らんことも測るべからず。夜廻りして、其手當をせよとて、筑紫大名隆景に組したる衆、一大將づつ夜廻りして、斥候の兵を備へ、用心堅くする所に、廿六日の曉、立花柳川侍從宗茂が當番にて、十時傳右衛門大將にて、五百餘出しける所に、李如松が先手の大軍と、闇紛れにひたと行き當る。出合頭の事なれば、闇の夜にて暗さは暗し、こは敵か味方かと騷ぐ中に、彼は猛勢なり、兩方より、立花が勢を引包んで戰ひければ、立花が先手小勢にてはあり、後陣は續かず。片時の間に數百人討たれ、本陣指して引退く。大將十時傳右衛門、無念にや思ひけん、此處を通れじと踏止つて、討死してんげり。殘る兵共散々に驅拔け、辛き命助かりつゝ、本陣へ引退く。味方の兵かと見し所に、敵こそ寄せ來り候へ、吾々も危き中を懸け延び候由、訇り呼びければ、陣

中俄に騒ぎ出し、此の旨王城へ註進しければ、總大將備前宰相秀家、直に三奉行増田・石田・大谷を初とし、追ひ〱に南大門口へ馳せ來ることと、雲霞の如く、甲の緒を締め、馬の腹帶を固め、犇めきける内に、夜もほの〲と明け行く。

日本諸將の評定

遙に見渡せば、一里計り隔てゝ、李如松が大軍數十萬騎、段々に備を立て、只今懸らんとする氣色なり。其勢手先二里餘りに詰り、滿々として獵團扇を立つる樣になり、後も先も一つになり、黒雲の如く進み來る。其體さながら、浙江の潮の漲り來る如くなり。すはや提督が寄するはとて、日本總陣中周章て騒動き、評定區々なり。或は王城に楯籠りて、重ねて日本の加勢を受けんといふ議もあり。いや〱、郡表に柵を振り、總鐵炮をかけ置き、打立てんといふ議もあり、其日樣々なり。

立花宗茂の意見

立花左近將監宗茂は、兎もあれ角もあれ、野際の一戰に非んば、あの大敵に向つて、勝利を得る事あるべからず。其上、大明人の心には、吾大軍を見るならば、都にある日本人は、定めて王城に楯籠るべし。然らば四方より附城を構へ、釜山浦への通路を止め、一人を洩さず討ち取るべしとの手段、鏡に映すが如し。其上、大軍の敵を會釋せば、彼に手を分けさす

る所と、又一所に成りて同時に戰ひ、一勝を以て、大利を得る所あり。今熟と考ふるに、今の體たらく、日を經る程、敵は味方を知り透し、四方に人數を廻しつゝ、取圍み、手を合すべし。左あらば難儀目前にあり。今大軍遠く來りて、彼等、吾情を知らず、其上猛勢一所に來るは、是天の與ふる所なり。大敵を切崩し、猛威を摧くこと今日なり。日を經て彼が手を合せば、一手切の一合戰にて、うまき勝はあるべからず。又明兵は大軍に誇り、平壤の勝軍に氣を得て、心中には、日本人を侮らずといふことあるべからず。其上、大明の大軍斯の如く寄する上は、日本人は一戰に及ぶべかず。定めて都に楯籠るべしと、侮り思ふ所を、するりと打ち向ふ者ならば、大利を得んこと疑ひなし。太公が六韜の語に、兵勝術、密察敵人機、而速乘其利、復疾擊其不意といへり。只軍は急にする所兵家の神略なり。籠城して巧の久しからんよりは、拙にして速ならんに如かず。兎角合戰に極められ宜しかるべし。大敵、手を分たば、事難しかるべし。只一同して來る所を、速に切崩すこと、軍法機變の行なり。以ての外に大明人多勢なれば、合戰に非ずば、大利あるまじきぞと、眼に

角を立つて、白沫咀んで罵りけれども、三奉行は如何あるべきと、危む氣色ありければ、小早川侍從進み出で、立花申さるゝ所、尤至極なり。僉議ばし長くして、手延にせば、見る内に居負になるべし。先は百萬騎もあれかし、隆景さばき申すべきぞ。一番合戰は吾々致し候はんと、大の眼を瞋らかし、声を放つて進まれければ、三奉行も諸大將も、合戰に極むべしとぞ同じられける。爰に至りて、若大將達、銘々先手を爭ひけるに、隆景申されけるは、某思ふ所あれば、先手は隆景に任せらるべし。元來思ひ設けし事なれば、他人に讓るべきに非ず。日本と大明、天下分目の晴軍、今日にあり。吾年老いたりと雖も思ふ所あり。大敵に駈合ひ、一戰して討死せんこと、老後の大慶之に如かず。實に煬之武が智用ふる所あり、趙充國が勇施す所ある者なり。枉げて吾々に任せ給へと、早や備を立て直せば、三奉行も諸大將も是に同じ、皆後詰をぞせられける。隆景大に悅び、立花・久留米・筑紫・高橋等を引率し駈け向ひ、兩鐙を合せ急がれける。其勢如何なる天魔鬼神も、面を向ふべしとは見えざりける。諸軍、南大門口に充ち滿ちて、隆景一組の衆の、碧蹄館を西へ折つて通られ

けるを見物す。先に出でたる聞次の者、追ひ〳〵に來りて、敵は碧蹄館より、開城府迄尺寸の透間なく、續きたる由註進す。見物の諸軍、口々に隆景の小勢にては、如何あるべきと氣を呑み、色を失ひたる眞中に、隆景馬上にて、自讃していはく、縱令大明人百萬騎候とも、思ふ所候へば、何條切崩にて候べき、相構へ後陣の人々、心安く思はれ候へ。此合戰打勝ち候はゞ、此度の手柄は、隆景一組の勝にて候間、皆々、證人たるべき由、罵りて通られけるを、後に思ひ合すれば、此合戰に切り勝つべき事を、豫ねて知られけると、隆景の武勇の刃金の程を、舌を振つて、恐れぬ者はなかりける。已に敵近く成りければ、小早川が二萬餘六備に分ちて段々に立てられける。隆景は、去る弘治元年十一月朔日、親父毛利元就と陶晴賢入道全薑と、安藝の宮島にて一戰の時、隆景二十歲にて、自身一番鑓を合せ、鑓下にて三浦越中守を討取り、大敵に切勝ち、陶全薑を討果しける時、公方光源院義輝公より、赤地の錦の直垂を、御感の餘に免し下されけるを、今日は最後と思はれければ、著られける直垂の上に、薰皮中に通り、黑糸にて緘したる皆破の具足に、銀の半月打ちたる星甲の緒を締め、

天月出したる白綾の小鎧かけ、宿月毛の馬に打乗り、先陣に進んで、馬に白沫かませ、軍勢の手分下知し給ふ體、白皙なる若武者なれば、天晴大將軍やとぞ見えたりける。一番備には、粟屋四郎兵衛尉氏春三千餘騎、二の切に、井上五郎兵衛尉景貞三千餘、三番備は、隆景旗本一萬餘、以上三段に備へたり。立花柳川侍從宗茂二千五百餘、毛利大藏少輔元康・羽柴久留米侍從秀包六千餘、先手の軍半ばならん時、横合に鑓を入れんと、小高き所へ打登り、大明の陣を見渡せば、幾千萬といふ數を知らず。甲冑を耀かし、弓射馳突の兵共二三里が間充ち滿ちたり、戟矛霜冷く、闇夜の星の如し。中陣は總大將李如松と覺えて、提督の大旗を龍蛇の如く動かし、雲霞の如く控へたり。四武の陣密くして、犄角の機光なれば、如何なる孫呉が術を得たりとも、此大軍に懸け合ひて、戰ふべしとは見えざりける。黒田甲斐守長政は、先手を望み思はれけれども、隆景一組請取つて、他の勢を交へざれば、力及ばずして、隆景旗本へ早歸として參られける。隆景打見て、甲州はいしくも御出で候者かな。先手を粟屋・井上に申付けて候へども、心許なく候間、貴殿御越し候て、能く〳〵計らひ

長政隆景に加勢

給ひ候へと、申されければ、長政は望む所の幸承り候とて、寒風を厭ひ、頭に冠り居られける綿帽子を脱いで、中間に持たせたる、金の水牛の角打ちたる甲を取つて、打著つゝ、先陣へ出でられける。長政、廿五歳、若輩なりと雖も、武勇人に免されければ、小早川が旗本勢、老いたるも若きも、長政先手へ御越あれば、今日の軍、勝ちたる者よと、思はぬ者はなかりける。隆景は前後の手分定まりつゝ、大馬印の鍮き進む其蔭に、鐙踏張り立上り、四方を急度見廻し、日本、大明と合戰を取組むこと、末代迄の名譽なり。進めや者共と下知して、參然として懸り給ふ。去る程に大明・日本の軍兵共、碧蹄館の東に打臨みて、太鼓を鳴らし、凱を作り、先手の軍始りて、李如

碧蹄館合戰

松が先鋒祖承訓・孫守廉・高昇・季寧等六十餘騎、眞黒に馬を乘込み、半弓を射立つること、平地に霞の降る如し。粟屋四郎兵衛三千餘、馬の頭鴈行に立並べ、聲を揚げ鞭を打ちて前輪に懸り、甲を傾けて、相懸りに駈入り、一擧に死を爭うて、煙塵を踏立て攻め戰ふ。汗馬の馳せ違ふ音、太刀の光天に耀き地に響き、喚き叫ぶ音、川を傾け、山も動く計りなり。二陣に控へたる井上五郎兵衛備より、佐世勘兵衛打ち見

て、大將井上に申しけるは、あれ見給へ、粟屋が勢、馬上にて懸るは、不覺の至りと存ずるなり。只今追立てられ崩るべし。此備は、皆々下立ちて懸り給へと、いふや均しく、粟屋が一備、半弓に射立てられ、手負・死人數を知らず。敵後より押立て來れば、討つとも突くとも物ともせず、乘越え〱攻め詰むれば、粟屋二千餘騎、過半討たれ、噇と押立てられ、五町餘り崩れ行く。敵の大軍引付けて追ひ來る所を、粟屋が組野島掃部・村上八郎右衛門・木梨半左衛門、返し合せては突き退け、取つて戻しては突き倒し、道筋を殿して引退く。二陣に控へたる井上五郎兵衛尉景貞三千餘、此有樣を見るよりも、鐵炮を雨の手先に進ませて、眞中を破るな。敵若し近く乘込まば、馬を切つて驛落させ、落つれば押して刺殺せ。敵引くとても、追ひ亂すな。只立寄つて一足も退くなと下知して、吾身も眞先に下立ちける。井上五郎兵衛是にありと名乘つて二尺七寸の荒身の大長刀を、水車に廻し待ち懸けたり。敵も二陣を先手に加へ、四隊の陣を一所に集げて、矢尻を洗ぎ半弓を射て、馬を乘入れ來れば、井上が備の兵共佐世・深野前後に目を配り、折敷き〱防ぎ戰ひ、互に卷きつ卷

かれつ、天地を響かし攻め戰へば、死骸に死骸を切り重ね、乘越え〳〵攻め立てつつ、黑煙を踏立て揉合へども、大明勢厚くして、馬を乘込み〳〵、半弓にて射立て、押し來れば、已に味方引色になりければ、井上五郎兵衞眼を嗔らかし。進めや兵共、爰を破られては、何處へか引くべきと、大長刀を押取り延べ、立怺へ防戰ふ。相從ふ兵共、轡を傾け、身命を捨てゝ防ぎ戰ひけれども、終に叶はず。多勢に押立てられ、井上が備、噇と崩れける所に、立花侍從宗茂二千餘騎、鬨を噇と揚ぐると均しく、面も振らず横鑓を入れ、會釋もなく、大敵の眞中を破り通り、李如松が旗本さして突いて懸れば、毛利大藏少輔元康・久留米侍從秀包・筑紫上野助高橋主膳六千餘、立花討たすな。續けや者共とて、喚いてこそは懸りける。初打負けて退きたる粟屋四郎兵衞二千餘、井上が備と一つに成り、立花を越えんと取つて戻す。大敵の眞中へ、一度に噇と鑓を入る。隆景之を見て、懸つて味方を助けんと、馬を進め、曳々聲を揚げられば、旗本一萬餘、鬨を作つて噇と懸る。隆景大音揚げ、皆々心を一にして、眞丸に固まれ、蓬き働して敵に笑はるゝな。日本の名折ぞ。晴なる討死して、名を三國

李如松敗軍

に揚げよ兵共、只今、李如松の首を取つて、軍門に曝さんと、團扇を振つて驅入りける。相從ふ兵共、眞黑に驅入り攻め戰ふ。李如松、斯様の軍に馴れて、度々勲功を彰せし大將なれば、隨ふる士卒を進め、荒手を入替へ、自ら旗を取つて防ぎ戰ふ。李如梅・李如栢・李寧・李有昇を始め、雲霞懸る軍兵共、返し合せ〱防戰ふ。隆景が兵共、李如松を見知つて、此處に驅合ひ、彼處に追詰め討たんとす。提督も踏止まり、討死せんと戰ひけるを、李有昇馳せ來り、李如松を討たせじと戰ふ所を、立花が兵共十時三彌・小野和泉守・立花吉左衛門・天野源右衛門、押立て〱切つて懸る。李有昇も鐵炮に中つて、終に支擇せられけり。李如松が旗本亂れければ、見る内に殘少に討ち成され、早や裏崩して退くもあり。總軍亂れ立ちけるを、粟屋・井上が兵共、隆景旗本の勢と先を爭ひ、押立て〱攻め戰へば、李如松が數十萬騎、捲り立てらるる程こそあれ。前陣・後陣一つになり、一度に瞳と崩れ立ち、人雪頽をついてぞ逃げたりける。立花又七、只一騎にて先へ攻め入れば、兄の侍從宗茂・毛利元康・久留米・高橋・筑紫等追うて行く。斯りける所に、左驍元二萬計にて、殿軍に助け來る。李如

松之に力を得、又眞黑になつて返し來りける。隆景・立花兄弟・元康・秀包等、一度に箕の手に押廻し、蜘手十文字に喚いて駈入り、電光の激する如く、五六度迄當りければ、李如松終に討負けて、落ち行く勢は散り〳〵に、開城府指して引退く。右往左往の有様、蜘の子を散らす如し。李如松も踏止まり、こは口惜しき次第かな。此處にて死んと怒りて、餘に進み戰ひつゝ、馬を打たれ眞倒に落ちけるを、井上五郎兵衞、大將なりと見てんげれば、組で勝負を決せんと走り懸る所に、提督が郎等共數十人、打圍んで馬を引立てければ、李如松是に打乘りて、十重二十重の圍を乘抜け、逃げ延びけり。井上は提督を討洩し、總大將とだに知りたらば、如何にもして討ち止むべき者をと、牙を咀んで、後悔すれども甲斐ぞなき。粟屋四郎兵衞も首二つ討取り、如何にもして、提督に組まんと駈廻りけれども、終に見逢はず。大明の數十萬騎、吾先々と逃げ崩れて、開城府川へ追はれ、浸し溺れて死する者數を知らず。後陣の日本勢、追々に馳せ付け、隆景・立花等を助けんと、口々に訇れども、増田・石田・大谷等の三奉行大音揚げ、必一人も出づべからず。將軍斯の如き御制止の御朱印、昨日到來せし

ぞと、馳せ集いで止めける故に力なし。かゝる所に、備前宰相秀家は、武者押八番目の次第たれども、目の前に隆景・立花等を見殺しなば、必定、日本の軍ははか〴〵しからじ、御法度を用ふるも破るも、軍に勝たん爲なり。只懸つて戰はんと宣へば、小西行長も尤なる仰なり。いざ懸り給へとて、備を崩し、一度に噇と突懸りしかば、小早川・立花は、先を先へ追ひ崩し、逃ぐるを追うて討つて行く。今日巳の刻より、午の刻迄二時計りの戰に、大明勢討たるゝ者三萬八千七百餘、開城府川へ流れ、死する者一萬餘とぞ聞えける。日本の諸大將、追ひ〳〵に馳付け、川を越えて、提督を追はんと勇みけるを、隆景固く制して、敵は多勢なり。長く追ふべからず。早や引取れと、追々に下知せられし、本の陣へ引き入りける。小早川・立花が手柄、筆端に盡し難し。誠に隆景・毛利元康・久留米秀包は兄弟にて、元就の子なり。立花柳川侍從・同又七も兄弟たり。毛利一家と立花一家と、皆汰たる勇士にて、今日の大功を致されし事、舜の弟象に似ず、堯の子堯の如くならずと、昔の喩を引替へて、父に似たる子供哉と、父祖の名迄もいひ出でて、日本は扨置き、大明・朝鮮迄も、隆景兄弟・立

花を稱歎せぬはなかりけり。

備前秀家名護屋使節

今日の軍に提督が兵、討たるゝ者三萬八千餘人川へ入り、溺れて死する者數を知らず。李如松も隆景が軍配・武術に鋒を折られ、已に平壤へ引退かんとせし所に、漢南、又鐵炮五百挺持つて加はり來れば、提督之に氣を直し、開城府を明けず持ち固め、大明の加勢を待つ體なり。南大門にては、石田・增田・大谷等、備前秀家軍法を破り、制止を用ひずして、合戰に赴きし事、奇怪に思ひければ、勝負の落著をも見屆けず、都を指して引入りけり。秀家は軍に打勝ち、小早川・立花と同道して本陣へ歸る。明石右近・木梨九右衛門が一番に討取りし高名を、三奉行に見せんと尋ねられけれども、皆早や都へ引取り給ひぬとて、跡方なし。夜に入り途方に暮れ、如何今夜は爰に陣取るべきかと、思はれけれども、三奉行より、日本へ何とか註進する事もあらんとて、亥の刻に南大門を立たれしかば、隆景並に一組衆は、暇乞して、本の

面々陣に、秀家は夜半過に都へ入りつゝ、右筆檜村監物を呼び、註進狀を書かせらる。其の詞に曰、

以二飛脚一致二言上一候。當月六日、漢南勢二十萬騎至二當表一、令二出張一採レ被二半壞城一、小西攝津守令二敗軍一、黑田甲斐守拘之城へ、同九日ニ落著仕候處ニ、三奉行爲二下知一、黑田・久留米・小西並ニ小早川隆景、皆持之城明都表へ引取候處ニ、今月廿六日早天、漢南勢數十萬騎、都表攻來候處ニ、輝元先勢隆景・元康・秀包並立花左近等挑二一戰一、勝負區々之所ニ、某可二相救一之旨申候へ共、三奉行御制止之旨難二相斷一、若不レ助者討死無レ疑候故、三奉行指圖ヲ不レ用相救、遂一得二大利一、三萬八千餘諸手へ首數討候、此旨宜レ預二御披露一候。恐惶謹言。

正月廿六日　　　備前宰相秀家

安威攝津守殿

斯の如く相認め、兩人の飛脚の者に、若し直に御尋あらば、是々申上ぐべしと、懇に云含め出しけり。此者共、殊の外達者にて、二月七日に、日本名護屋へ著きしかば、安

威攝津守披露申しけり。將軍輕からず御感あつて、通辯の者具して參れ。御對面ありて、直に御尋あるべしと、仰出されければ、安威、飛驒二人共に庭上へ召出しぬ。秀吉公御出であつて、汝等聞き及び見及びたる事共、靜に語れと仰せければ、飛驒兩人、畏つて申上げけるは、正月三日に、大明人平壤迄罷出で、小西攝津守殿城を、同六日より、取詰め攻め候事、中々烈しく候て、總手へ切懸り候。眞先にて、小西攝津守殿御弟小西若右衛門殿（主殿介初の名）討死にて御座候。其組の西國衆手を碎き働き候て、大方討死仕り候。已に攻落さるべき體にて候故、絆の城古鬪とやらん申す所に、豐後の大友殿御座候。是へ加勢御頼み候へば、加勢の事は思ひも寄らず、大友殿拘の城を御捨て、先樣黑田甲斐守殿御拘の署木城迄、御逃げ來候を、甲斐守殿散々御叱りなされ、開逃を致され候男は成るまじと御申し、あれにて大友殿を御留め候故、都迄は御逃なく候。扨正月六日より、小西殿籠城候へども相叶はず。八日の夜、平壤城を御明け候て、九日の晩に、黑田殿御拘の署木城迄御落著、二三日御休息候。十二三日の頃、開城府迄御引取なされ候。此時は、黑田甲斐守殿御警固にて、小西殿

大友殿御同道と承り候。開城府迄御著候處に、此所は小早川殿御居城にて候。都より小早川殿一組・小西殿・黒田殿・大友殿殘らず川を越え、都へ御引取あるべき由、十三日の晩より十四日・十五日迄、人橋を架け、追々に申し候へども、小早川殿御同心これなく、開城府にて大明人を請け止め、御合戰あるべき由御申し切り候故、都にては、上下共に手に汗を握り申し候處に、大谷刑部殿、只一騎にて御越し候て、小早川殿へ色々御異見候て、御引取り、皆々殘らず、都より三里近き南大門迄御引取なされ候。是れ卽ち正月十五日の晩の事にて候。其翌日十六日に、大明衆開城府迄參り候て陣取申候。十日計りの間候ひて、廿六日の夜の内に川を越え、大明人、都さして寄せ來り候。百萬騎と申し候が、左樣にもこれあるべく候。野も山も皆武者にて御座候ひき。都より、小早川殿居られ候南大門へ、三里これあるを、夜明に三本行竝に私の主備前宰相、其外殘らず馳付け罷出で候。皆々南大門口廣野へ御出候て、大將達馬を御立て候て、馬上にて御談合良久しく御座候處に、柳川の立花左近殿御申候は、大明勢以ての外多勢にて候間、合戰の上に非れば、大利はあるまじき由、達

つて申され候處に、小早川隆景尤なる旨、御同心にて候由承り候。已に合戰に臨み、敵へ取付き申候と、小早川殿先手小勢にて候故、危く見え候を、立花左近殿と後の櫻尾城主毛利七郎兵衞殿横鑓を御入れ、過半追ひ崩し候時、小早川殿旗本にて鑓を入れ、殘らず突き崩し追行き申候。去り乍ら、大明衆大軍なる故、度々返し來り、小早川殿・立花殿、火花を散らし揉み合ふに付、主の宰相駈付け、追ひ崩し、大利を〔脫字アルカ〕大明人を大河へ追ひ浸し〳〵討取り申候。此時三奉行衆、助け申すまじき由、色々御制し候を用ひず、宰相が者共駈け向ふを見て、勝負をば見屆けず、三奉行衆は捨鞭を打つて都へ御逃入なされ候。此外の事は、色々取沙汰御座候へども、下﨟の承り覺え候にてこれ無しと、段々に申上げければ、秀吉公躍り上り〳〵、扨も心地能き仕合かな。小早川・立花はいふに及ばず、備前宰相が仕方、大將の手本かな。哀れ秀吉が聟には似合ひたる秀家かなと、御機嫌大方ならず。御前へ參られたる家康・利家・景勝も一同にぞ感ぜられける。扨飛脚の者には銀二十枚づつ下され、五六日休息させ申すべし。其の返事をば、早道の者に遣さるべしとて、其儀に及べり。御

朱印に云、

正月廿六日の飛札、二月七日に到來。先以大明より、其國變亂を爲ㇾ救、大明人百萬騎を引率令ㇾ出張、去月八日ニ小西要害を採候、同月廿六日、都表へ近付、小早川隆景・立花柳川侍從・毛利大藏少輔等挑合戰、勝負區々成により、其方日利を以、軍法を破り、鑓を入れ、即時に追崩し、大明人三萬八千餘討取申由、其戰功不ㇾ可ㇾ勝計。誠不ㇾ相助ㇾば、隆景・立花討死し、都に到て押つ詰、籠城の體に成りなば、後卷の加勢、重ねて可ㇾ遣に、大切なる忠義莫大に覺候事。

一、三人の奉行共、今度合戰を留候儀、假令たる存分とは乍ㇾ云、不ㇾ及ㇾ是非ㇾ事に候。向後も左樣に臆病なる下知をば、被ㇾ用間敷事。

一、小早川隆景・立花侍從は、合戰に非んば、三十萬騎の多勢に大利を得る事有まじきと、無ㇾ憚ㇾ其段ㇾ强ひて申せし事、其所を得たる思慮、今に不ㇾ始儀と云ㇾ乍、舌を慄ひ感入候。殊隆景手前立花と揉合、大敵を突崩、大明人三萬八千餘討取、殘奴原を大河へ追浸候旨、中々心地能仕合に候。重て隆景竝に立花方へ感狀遣可ㇾ申間、

先々其方相心得、能々可ㇾ申候。隆景竝に元康・秀包兄弟三人の家來、又立花が兵共骨折候者共、銘々に可ㇾ申候へ共、急候間、是又其方相心得、不ㇾ殘可ㇾ申候。扨々唐人目に一鹽付候て、滿足難ㇾ盡ㇾ筆紙ㇾ候。已上。

二月八日　秀吉朱印

備前宰相殿

とぞ書かれける。秀家、此御書を皆々披露せられければ、隆景一組の衆は面目を施し、自餘の諸大將は、氣味惡しき體たらくなれば、皆々勇氣を震ひ、大明の兵今は恐るゝに足らざる間、開城府へ攻寄すべしと、申合はれけれども、大河中にあつて、明兵も猶二十萬、先日の恥を雪がんと憤る由聞えければ、味方も是に聞き恐れて、寄せんといふ者もなし。李如松が重ねて寄するを待ち居たり。

安南府將軍日本勢敗軍

大明提督李如松は、隆景が武勇に退縮し、今は早や王城へ寄すべしといふ心もなし。

安南府の地形

只謀策を巧にし、其動靜に乘ぜんと、謀を廻らすこと斜ならず。爰に朝鮮王城より、西南に當つて大河あり、此邊に御庫數百軒造り立て、數十萬石の兵糧を入れ置きけり。王城に居餘る日本勢も此兵糧を點檢し、扶持方に出し、當年中在陣すべしと、安堵の思を爲せり。卽ち近邊の林木を切り集め、薪の蓄をなし、假屋を打ちて積み置きけり。爰に又川向の安南府に山二つあり。南山の間に深き沼あり。後は山險岨にして、二方は是も沼にて、南の方は大河なり。西の方は山の尾續きて、開城府への道あり。此地を要害と見請けしかば、李如松此山に砦を拵へ、犄角の勢を爲し、王城を攻め取るべしとて、卽ち山城を構へ、皂莢殺を以て、外曲輪に柵を結び、其內に腰に石垣を築き、柵の透間より、寄手を射取らんとの支度なり。內にも一重柵を結んで、本城の如く拵へ、人數澤山に入れ、是を足溜にして、王城よりの道路を取切らんと謀りけり。李寧を大將にて、朝鮮の麻貴を指添へ籠置きぬ。其勢五萬五千餘、二月十一日の丑の刻に取上り、其夜の內に柵の手を合せ、石垣以下ひた〳〵と、其日の內に成就し、靜まり返つて見えたりける。取固めなば、手間も入るべき間、いざ

押寄せて、打破らんと相談しける中に、開城府川の軍に、手に合はざる若大將達、此砦を攻め取り、面目に備へんと思ひ、三奉行に相談すれば、三奉行尤なりと同心しければ、堀左衛門督秀治・加藤遠江守・木村常陸介・長谷川藤五郎秀一を先とし、增田右衛門尉長盛軍奉行として二萬餘、川の向の此方の山へ取登り、城中の體を見るに、兵糧の煙も立たず、人ありとも見えず。こは不思議なりとて、增田右衛門尉が前に備へたる加藤遠江守が手より、䌫のある十四五騎物見に遣しければ、同じく備を竝べたる長谷川藤五郎・木村常陸介等、吾も〳〵と、十騎計づゝ出し遣しぬ。此物見の武者も道にて口論し、先を競ひ、逸足を出し乗付け〳〵、馬を踏み放つて、吾劣らじと城の柵へひた〳〵と付く。城中よりは、寄手を誘ひ謀らん爲に、物音もせず。寄手は是を知らずして、城中に人なしと心得、吾先に高名せんと、下知をも待たず、物見の武者押續いて、同勢二萬餘、先を爭ひ押上げたり。城中には數萬の日本勢、柵涯に付くを見て、大石・大木を投げかけ、透間もなく射立つること、雨の足の如し。先陣に押詰めたる日本勢射立てられ、人雪頽をつかせて、山の崩るゝ如く、谷底へどうと

安南府合戰

日本勢敗軍

捲り落されたり。斯程攻め懸りたる城を、其儘引取るべきに非ずとて、木村・加藤・長谷川の大將達、自身眞先に進んで、懸れや者共とて、白旗を振つて下知せられば、士卒等是に氣を勵まされて、外曲輪の皂莢殺、柵一重引破りて押入りたり。城内人數澤山なれば、内の柵より射出す矢、雨の降る如く射立てければ、手負・死人數を知らず。いと狹き山城に、敵・味方數萬人揉合ひつゝ、火花を散らし相戰ふ。押つゝ押れつ、此處にては組討ちし、彼處にては追詰め、首を取るもあり、取らるゝもあり、黑煙を立て戰ふ所へ、李寧・麻貴二萬餘、三方の木戸を開き、一度に突いて出でたりける。寄手の日本勢、少時支へ戰ふとぞ見えしが、終に外郭へ追出だされたり。今一度荒手を入替へ、一揉み揉む程ならば、落つべき城なるを、日も早未の下りなり。勢盡き力屈しぬ。今日は城を乘取ることとなるまじ、引取れやといふ程こそあれ。吾先と堀沼ともいはず引退く。城中より之を見て、すはや日本人は逃ぐるはとて、大手三方を押開き、大山の崩るゝ如く、拔き連れて打つて出でたりけるに、引立てたる日本勢、なじかは堪ふべき、吾先々々と冑・小手・太刀・長刀・弓・鎗・指物をもぎ捨

大崎玄蕃再戰

て、子は親を捨て、郎等は主を知らず。道の狹きも橋の危をもいはず、馳せ重なり、彌が上になつて崩れ逃ぐる。大明人馬上は達者なり、案内は知りたり。前を遮り左右を廻り、半弓にて散々に射立つれば、手負討たれて、死骸は算を亂せる如くなり。木村常陸が兵大崎玄蕃只一騎踏み止り、堤の上にて、馬より下立ち、鑓を膝車にのせ、大音揚げ、遂しきたな日本人の名折ぞ、返せや〳〵、各見知りたり。後日に爭ふなと罵つゝ、下り居て鑓を合す。向ふ敵二三人突伏せし所に、長谷川藤五郎が兵兵島彌左衞門・宮木新太郎・玉井彥助是を見て、三節枝蔓に角取紙付けたる指物は、大崎玄蕃と見るは僻目か、あれ討たすな者共とて、道より取つて戾し、馬を踏み放ち〳〵、鑓押取り〳〵懸り來る。玄蕃彌〻力を得、石突迄血になりたる鑓を打振り〳〵、道筋を進みしかば、敵も流石白みつゝ、群り散つて控へたるに、大崎玄蕃・島彌左衞門・玉井彥助・宮本新太郎四人連れて、鑓先を竝べ、一度に突いて懸りければ、さしもの大軍二町餘捲り付けられ、兩方へさつと引退く。四人の者氣色ばうて、本の道を徐々と引取りけるに、敵又付けて追ひ來るを、四人の者立休へ、鑓を合せ、蛽々聲して、

突立て追ひ返し、又募ひ來れば、取つて戻して突散らしけるにより、木村常陸を始め、大將達命を助かり、先を先に落ち延びられけり。爰に王城に殘りける小早川隆景・小西攝津守行長・黑田甲斐守長政は、心許なく思ひければ、山涯迄五萬餘の勢にて、迎に出でられたる其備を見て、李寧も麻貴も、長追して惡かりなんとて、追ひ行く勢を制し止めしに、隆景の旗の紋を見付け、すはや碧蹄館の旗は來たるはと、恐懼きて、早々城へ引入りけり。味方の大將達も、背中に立ちたる矢共折懸けて、這々王城へぞ歸りける。明くる十三日の朝、伊賀の忍を遣し、城の體を見せたるに、一人も殘らず皆開城府へ夜の間に引取りけり。五萬に餘る大軍なれども、物音もせず掃除迄して除きければ、王城の日本勢、舌を震ひつゝ、大軍の進退其法の正しくして、歸りたる事を稱歎せり。昨十二日、外曲輪を攻め破る時、安南府城中にありし弱者共、過半逃げ崩れて、南の大河に溺れて死する者數を知らず。今一度強く攻め入りたらば、城は手もなく落つべきを、大將達心弱く、手負・死人なき樣にとばかりの覺悟にて、引取ることを急ぎ給ふ故、手の中の城を取り得ず、大崎玄蕃・玉井彥助など、

牙を嚙んで、殘多しと怒りけり。小早川隆景も、向はれし大將達に逢ひて、軍の始終を聞きつゝ、是を難じて、此城落つれば、提督開城府に怺へまじ。左あらば、不日に大功を立つべきものを、殘り多き事し給へりと、申されければ、木村常陸・增田右衞門尉も、赤面してぞ居られけり。今度正月上旬、平壤にて小西籠城の事、同廿六日、小早川一組碧蹄館合戰、七人の横目並に三奉行より、日本へ註進申し上げければ、大友義統平壤の城を救はざりし事、武家の本意を失ひ、日本の名折仕る。本朝恥辱是に過ぎずと、大に怒り給ふ。小早川隆景・立花柳川侍從は、今度の忠戰比類なしとて、自筆の感狀を遣され、隆景郞等粟屋四郞兵衞・井上五郞兵衞をも御褒美少からずして、何れも豐臣の御姓下され、諸大夫にぞ任せられける。

近衞信輔公名護屋御見舞

其の頃近衞左大臣信輔公は、名護屋御見舞として下り給ひ、如何思召立ちけん、朝鮮一見の爲め、御渡海あるべき旨なり。主上も朝廷輔佐の文臣として、其道に似合

はざる事哉と、宸襟穏ならずして、宸筆の勅書を秀吉に下され、申し止むべき旨綸言ありしかば、殿下も御宸筆を拝し奉り、冥加至極なる御事哉。此上は左府御渡海の事、思ひ止められ宜しかるべき旨、御申しありければ、信輔公も仔細に及ばず、是より歸洛し給ひけり。

朝鮮征伐記第六 終

朝鮮征伐記第七

加藤淸正大明勅使對面

主計頭淸正は、兀良哈に出張して、數度合戰致し、深入する事、八十日路、其道五千餘里、村庵里屋、悉く放火し、猛威を振ふ事、甚以て彩し。咸鏡道の內、十三日路が間を、領知に切取り、在々要害を構へ、手勢を分置き、文祿元年壬辰十一月中旬に、蝗乘といふ所迄、人數を打入れ、卽ち爰に居城を構へ、近邊の民百姓等、前々の如く、還住させ、越年の營みをなしけれども、百姓共朝三暮四の蓄もなく、淸正より恩賜の酒肴にて、纔に二年を越しぬ。淸正も思ひ寄らず、異國にて大敵の中に住居して、甲冑を離さず、鑓・長刀を枕とし、靜心なき年を越す所に、鍋島直茂領分にも、一揆起りしかば、直茂、馳向つて退治し、兎角して正月も立ち、如月にもなりけり。山々の雪

清正明の勅使と對面

も、村消ゑ霞立ち、備の色も長閑なれば、清正も時々四邊へ出で、鹿狩して心を慰めし所に、二月五日、斥候の者の方より、大明人、蜂重指して參り候間、其御心得あるべしと告げ來る。清正聞きて、朝鮮人ならば、能く見屆くべし。大明人必定に於ては、合戰すべきぞ。但しそれも小勢ならば、此方への使たるべし。其旨、重ねて申越すべしとありしに、重ねて註進しけるは、大明天子より勅使の官人なり。上下三十人馬上の上官二人劉子威・李廣山といふ者なりと、告げ來る。程なく勅使、城下に著き、通辭を以て申しけるは、大明天子の勅使なり。倭將清正に對面すべしといふに付、主計頭も、城中の掃除壯麗(きらびやか)に申付け、珍膳・美酒を調へ、明使を請入れにけり。明の兩使、威儀を爲し、廣間の座上に著坐せり。清正、其時の裝束には、緋縅の鎧に大袖附録の長烏帽子の甲の緒を締め、白猪の毛俵空穗(うつぼ)を、腰に附け、例の備前大金光の刀を、事々しく差しほこり、重籐の弓を持ち、郎等數十人、左右に從へ、明の兩使に對面し、先づ拜答の一禮あり。正使の侍中劉子威、卽ち天子の勅書を以て、清正に讀し、通辭を以て、勅語を述べて曰、日本は昔より、中華の屬國にて、七つの覇王の

其一なり。六十六島、悉く吾大明を、尊親せずといふ事なし。百王の約を爲し、王號を免し給ふ。每年、貢物を納來る。就中大明の太祖、忝くも書を、日本持明帝に賜ひ、其後、道彝僧一を使僧とし、錦繡竝に大統曆を、日本國王道儀に下され、爾來、日本代々、中國に親屬し、其禮、甚だ深かりき。然るに世宗皇帝の嘉靖二年に、日本細川京兆・千石高國が使者、宋素卿と、大內義興が使者宗設と、寧波府に著岸し、鋒栝に及びし後、吾國嘲憤りて、日本の市舶を止めしより、日本大友義鎭・大內義隆等、年年に賊船を來して、明の東洋を、侵掠亂逆、甚だ以て輕からず。剩へ今度日本の關白秀吉、小國の徵兵を憚らず、淸正・行長・長政・隆景等の將士を先鋒とし、朝鮮を屠殺す。之に依りて、皇帝、逆鱗之あり。李如松・楊元・張世爵を渡海し、四十萬騎朝鮮の平壤に到り、倭酋一戰にだも及ばず。小西行長・大友義統等、戈を投げ甲を捨てゝ奔遁す。天兵追躡する事、晝夜を分かず、王京に及んで宇喜多秀家・石曼子等を始め、悉く討殺す。釜山浦に到る迄、日本人跡を拂つて殘者なし。傳へ聞く、淸正、咸鏡道にありて、法度を下し、辜なきを殺さず、慈悲第一なりと聞く。天朝、之を憐愍し

て、殺伐する事を欲せず。又朝鮮兩王子、竝に孟良妃といふ朝鮮第一の美女を、清正手へ擒るの由、早々彼の俘人、天朝の勅使に相渡すべし。然るに於ては、北京より朝鮮王へ、勅語を下し、數千艘の船を、仰付けられ、清正恙なき樣に、日本へ返送るべし。若し勅命に隨はざれば、四十萬の天兵を差向くべし。朝鮮一州に、日本人とては、清正一人なれば、烏獲・孟賁が敢勇、項籍・樊噲が猛力あれども、天高くして上るべからず、地厚くして入るべからず。誠に瓶裏の鼠に似たり。誅伐掌にあるなり。勅命なりと、委細に申述べければ、清正、甲を脱ぎ膝行頓首して、其旨を承り、蕞爾たる倭國の秀吉が臣として、中華の天子の綸旨を、頂戴し奉る事、生前の大慶、何事か之に如かんとて、種々の肴調へて、兩使を饗し、日本の小袖一つづつ、引出物に出し、右に仰下され候。俘人朝鮮の兩王子竝に孟良妃といふ美人、長橋府に差置き候間、之へ呼越し候内は、御逗留あるべしとて、晝夜馳走し斜ならず。扨庄林隼人・飯田角兵衛を、長橋へ遣し、鍋島手へ擒へたる美人孟良妃を、差越すべしと申遣しけるに、加賀守直茂、清正の使に對面し、此美人の事は太閤へ差上ぐべしとの所存たれ

ども、何樣にも、清正下知に從ふべしとの上意なれば、即ち兩使に渡し申すべしとて、彼の孟良妃を、蝗乘へぞ差越しける。清正大に悅び、朝鮮兩王子竝に孟良妃を出して、大明の使に見する。明の兩使、朝鮮の通辭に見する。實正疑なければ、清正則ち明の兩使に向ひて、朝鮮の二王子は、日本關白に伺はずして、其方へ渡す事ならず候條、重ねて渡進すべし。美人孟良妃は、勅使に之を奉るとて、美濃部金太夫を呼び、勅答の書翰を書かしむ。其趣は、

日本國關白秀吉鋒將豐臣朝臣清正、謹奉レ答二大明國禁闕諸大臣膝下一。

天書遠賜二雞林僻陋元夷地一、綸命杳下二倭將暴露之蠅館一。臣清正、澤手稽顙而以拜二閱之一、辱二天恩一不レ少。且感二冥慮之加助一也。恭以二天朝忝垂二眷愛之深一、清正獨蒙二顧許一、詔佑二礙車輪一、而臣入二軍門一。清正謹不レ敢二乎覩勤一。彼僕人、恐悼嗚咽、以聞二出内之命一。今行也、關白動二干戈一、起二大兵一伐二朝鮮一、偏無二貪レ地之意一只有二責レ辜之儀一。嚮是關白、以レ書寄二朝鮮一。其趣、苦懇也。然彼遂無二一片之答書一越一。關白憤恚、颯々不レ得レ息也。大軍長驅而入二朝鮮一、兵鼓一鳴而踏二三道一、屠二洛陽一、擒二儲嫡一焚二丹墀一。其功不

違月而就矣。今聞天兵四十萬、平安小西行長・大友義統等、且恐境寄秀家、築釜山浦口、日本殘兵、無一人之有逆者云々。抑彼小西行長、日本堺之商賈、公座之賤輩也。使宗對州爪葛之因而走朝鮮先驅之道使、匪攻鋒將也。是只爲天兵所追者、理之當然也。實鋒將者、清正是也。如勅言遣天兵四十萬、而試誅清正也。是多年之願望也。蝗衆之爲地也、大山積官軍之債。是以、天兵雖來一日之中、適大山不過一萬人。清正張犄角之陣、待之於險隘。一萬人者、如指諸掌、一日殲天兵一萬、四十日盡四十萬、然何愁之有矣。清正牽數十萬、長驅中野、高旗懸雲、遊歷三韓、直入大明、屠盡皇都、生捕天子、辭日本國下者、猶如朝鮮而王子也。敢匪妄言。且如美人孟良妃者、礫於庭際、以備勅使之笑具。是則知綸言旨。天高不得上、地厚不得入。是以使美人孟良妃礫于中國者也。依附天使之日冀、以聞。恐惶頓首々々謹言。

と書認め、勅使に渡す。扨美人孟良妃をば、門外にて相渡すべしとて、大手の門前に、彼美人を礫に上置き、勅使を送りて、清正罷出で、自身懐より鏡を引抜きつゝ、彼孟

明人清正を懼る

良妃の乳の下を、芋刺に通しける。血の流るゝ事瀧の如し。返す鑓にて、脇壺を突抜きければ、痛はしや美人孟良妃廿一歳を一期とし、清正が手に懸り、空しくなりにけるこそ哀れなれ。勅使は、之を見るよりも、肝魂を失ひつゝ、舌を振ひ恐懼て、吾々は免し給へとて、手を合せ拜みつゝ、大明へ歸り、鬼神上官と名を呼び、清正を恐れざるはなかりける。今に至る迄、大明・朝鮮にては、天行の疾癘、時候の瘧の流行る時、貴賤上下、清正が形を書きて、門戸の札に押附くれば、疫癘も瘧も、其在所へは入得ず、護にかけさすれば、立所に平癒して、上下の守護神と尊びけるとぞ聞えし。

兀良哈人朝鮮人橘州城攻附加藤清正後巻

都表にては、李如松開城府に陣取る。其勢二十萬に餘り、其上在々所々の一揆蜂起して、釜山浦への通路を妨げ、又安南府の砦を重ねて、丈夫に構へつゝ、朝鮮の兵馬使麻貴を大將にて、入れ置き、洛中の日本勢迷惑せしかば、兎に角清正を呼戻し、然るべしとて、備前宰相秀家竝に三奉行連判にて、早々引返し、都を守護すべき旨、二月十

二日に飛脚、蝗乗へ到來せしかば、主計頭、書狀披見し、尤も早く引取るべき事なれども、橘州に籠め置き、人數を引取るべしとて、其旨、絆の城々より、次第に申遣しければ、橘州に籠め置きたる加藤清兵衛・片岡右馬助・加藤傳藏・永野三郎右衛門・原田五郎右衛門・天野助左衛門・山口與三右衛門方より、申越しけるは、朝鮮人・兀良哈人、一つになり、四五萬にて、攻圍み候間、中々城を明け、引取る事思も寄らず候。早々迎に、御人數下さるべしとぞ申來りける。清正さらば、自身迎に出づべく候間、皆々打立ち候へと觸廻し、二月廿一日、蝗乗を立ち、長橋府に着き、鍋島加賀守直茂に對面し、此旨告げければ、加賀守、頭を振つて、是は清正、御思案然るべからず候。橘州迄、飛脚を遣され、切拂ひ參るべしと、仰遣はされ尤なり。某領地も、三日路・四日路の間を阻て、同名家の子供、差置き候へども、若し斯樣の事、申來らば、捨て難く候はんづれども、切拂ひ參り候へと申遣し、自身迎には參るまじく候ぞ。其上、年頃・日頃、主の厚き恩愛斯程の所をさへ、切拔き得ざる者は、何の用にか惜むべき。ひらに思止り給へと、申されければ、主計頭、氣色を損じ、加州は心強き人なれば、左

清正鳳井坂著陣

樣にも仕給ふべし。清正に於ては、吾が人數を、敵に取卷かれ、攻殺さるゝを見ながら、吾が命惜しとて、捨殺す事に於ては、日本の神罰に懸り、以來ともに仕るまじきぞ。清正迎に参り、難儀に及び候はゞ、士卒共に、一つ枕に討死を遂ぐべし。是大將たる者の本望なり。されば今度は、討死に極め候間、擒の二王子・征東使泊寧を、貴殿へ相渡し候間、清正討死仕ると聞き給はゞ、早々此俘人共、都へ遣さるべしとて、一々に預け置きつゝ、齋藤立本・庄林隼人を大將にて、龍造寺又八郎政家勢の内を引分け二千五百、都合五千餘の勢を先手とし、橋州へ發向す。清正も二月廿四日、長橋を立ち、同廿七日に鳳井城に著く。爰には、吉村吉左衛門・堤權右衛門を、籠置きたる城に入りてけり。然れども士卒を殘し、雪深うして、手龜れ足裂け、晝夜の急に、雀目になり、眼も晴み候間、爰に四五日、御休息候へと、士卒等、訟ふるに付、主計頭も、心は飛立つ計りなれども、是非に及ばず、鳳井城に逗留せし内に、藏床籠置きたる近藤四郎左衛門・岡田善右衛門・佐々木平左衛門、五百餘、又銀山城より、加藤與左衛門・出田宮内少輔・井上大九郎、五百餘、律青より、小代下總守、大脇二郎右衛

門・長尾安右衛門等、都合千五百餘、面々の城を焼拂ひ、分々の敵を切拂ひ、清正が陣取りたる風井指して馳來り、先手の旗兵、五里計り續きたる松原を傳ひて見來り、此旨、遠見の者より、告來りければ、清正、旗本の士卒上下共に、皆親類緣者なれば、夫は誠か。扨も嬉しき事かなとて、馬に打乘り、迎に出で、互に手を取組み、悦びの涙を流しける有樣、晉の王質が、仙家より歸りしも、斯くやらん。清正、此旨、聞くよりも、大釜多く居ゑさせ、兵糧を調へ、清正前へ取寄せ、自身飯を束ねつゝ、近藤四郎右衛門・岡田・佐々參りたるか。兵左衛門・九鬼四郎兵衛是へ參れ。出田・井上・小代・大脇・長尾も參りたるか。扨々去年よりの苦勞、今度切拂ひし、武功兎角の禮も、申盡し難し。扨々再び逢ひたる事の嬉さよ。先づ之を給べ候へとて、干魚に飯を添へ、上下千五百計りの士卒に、一人も殘さず、自身之を配與へ、大樽より酒を移し、清正、自ら温めつゝ、上下々へ飲せける。再會の嬉しさと、清正の志を感じつゝ、涙を流さぬはなし。されば此勢を、一手にして、橋州城へ後卷きすべしとて、二月廿九日に、清正、風井を立ち、三月四日、橋州城に近付き見れば、兀良哈の蓮綿と、朝鮮の

鄭子白大將にて、五萬餘、幾重ともなく取圍み、弓・鐵炮を打入れ、攻めにけり。淸正、心は飽く迄猛けれども、敵の備嚴し、味方の勢は不足なり。兎やせし角やあらんと、案じ居しが、いやく期を延さば、却て居負になるべし。大將の陣を見定め、鐵炮を一度に放懸け、鑓を入れよと、指揮を振つて、下知をなす。庄林隼人・齋藤立本・鵜平次、先驅なれば、馬を控へ東尾崎の山に、五色の旗見え候。是大將の陣と覺え候間、あれへ驅け候へといひ遣る。庄林・齋藤・鵜も、手鑓押取り、手勢引連れ進行く。されども敵、高岸に便りて、陣を固めたれば、いかゞあるべしと、軍兵共ためらひしに、庄林隼人、只鐵炮にて打痿めかし、其勢に突懸れと、先に進んで下知を爲し、弓・鐵炮を揃へ、一同につるべかけ、鬼々聲を揚げ、噇と突懸けしかば、敵も鑓衾を作り待懸け、互に鑓を入合ひ、黑煙を立て攻戰ふ。庄林、大の眼を瞋かし、只突倒せ、首を取るな、攻めよ懸れよと訇りつゝ、吾身も鑓を入れつゝ、散々に戰ひしかば、敵怺へずして、半町計りしざりしを、透間なく引付け、鑓を打入れく、進み行く。城中より、妙法の旗を見て、すはや淸正後卷し給ふは、揉合へよや者共とて、門を開き、突いて

出で、喚き叫んで攻戰ふ。清正、之を見、馬廻の馬印を振はせつゝ、旗下崩し、喧と懸りしかば、兀良哈人も朝鮮人も、四方八面に切立てられ、蜘の子を散らす如く、己が樣々に落ちて行く。清正、勝つに乘つて、追懸けたり。敵大軍たりと雖も、橋より落ち、水に溺死する者、數を知らず。一時計りの戰に、城中・城外に討取る首數、三千廿三なり。庄林・齋藤等、馬を横切り、追行く勢を制止し、皆橘州城へ引歸す。扨山口與三右衛門は、如何にと問へば、敗軍の敵を深追して返り、敵に後を切られ、伊藤勘平・井出市左衛門、其外三十七人、一所にて討死仕候。存命ありて吾々萬死一生を出で、再び各へ相見え候と、城中の者共も、かこちの涙を流しける。扨も山口與三右衛門、殘り六人に勝りて長追し、討死を遂げし事を、如何と尋ぬるに、彼與三右衛門は、清正伯母壻にて、一二の老臣たり。先年、九州天草合戰にて、先手をせられ、本山彈正に追立てられ、清正前で敗軍して退きしを、清正呼ばはり懸け、卑怯至極なりと、罵りける故、主計頭、家中にて、與三右衛門を士卒惡くいひしを、常に無念に思ひ居りしに、今度も亦、山口が領分へ、越年の兵糧以下越し候へと、申送りけるに、百姓

共、然々下知に從はざる事、奇怪なりとて、與三右衛門が人數罷出で、彼領分を亂妨し、色々狼藉を振舞ひしを、百姓共起出づ。是は大上官淸正よりの掟とは違ひたりとて、數千人一揆を起し、與三右衛門が勢を、過半打果し、剩へ兀良哈人・朝鮮人一つになりて押寄せ、橘州籠城になりし故、與三右衛門旁之を口惜しく思ひつゝ、淸正への申譯に、目の前にて討死を遂ぐべしと、思詰めたる故なりしにより、六人の物主にも牒合せず、淸正の妙法の旗を見ると、均しく突いて出で、無理なる討死をぞ遂げしとかや。哀れなる事共なり。淸正手にも、討死の侍下々二百十八人なり。兀良哈の大將蓮綿が旗本三百餘り引退くを、淸正、自身馬を入れ、悉く乘崩しける時、淸正、鎧に、半弓の矢二筋迄中り、三箇所手負ひしかども、鳩胸の關東具足なれば、さのみ裏かゝず薄手にて、やがて平癒す。甲の長烏帽子にも、矢三筋射立てさせ、折懸けたり。腰の尻籠には、矢纔に二筋を殘しける。猛將の所は、人の知る所、世の免す所なれども、其氣色、殊に勇々しかりければ、手勢も龍造寺が勢も、稱美せずといふ事なし。庄林隼人・齋藤立本に下知して、討死の死骸、殘らず灰に爲し、加藤淸兵衛・片

岡右馬之助・永野二郎右衛門・加藤傳藏・原田五郎右衛門・天野助左衛門、六人が勢をも、一手になし、四日の晩景に、橋州より清正引拂ひ、風井迄人數を打入れ、吉村提をも召し連れ坂下に置きたる多田茂左衛門をも、一手になし、引入るべき所に、風井は、所がら富貴豐饒なる所にて、兵糧魚鳥、充滿たれば、爰に逗留し、人馬の息を休め、士卒此頃の勞を忘れけり。風井の地下人、事々しく馳走して、晝夜酒肴にて、饗しければ、上下悅ぶ事限なし。同十二日には、清正、風井を打立ちけるに、此間、地下人走廻り饗しける志深しとて、放火をも致さず、殘りたる兵糧以下、悉く配與へつつ、汗馬を早め打つ程に、十四日には、長橋迄引入り、卽ち鍋島に對面し、初の廣言に違はず、奥郡にて働き、偏に鬼神の所變なりと、加賀守も舌を捲ひけり。斯くて清正は、朝鮮南王子、竝に征東使以下の擒を、鍋島手より請取り、鍋島・相良と一手になり、長橋府近邊に、分置きたる鍋島手勢・龍造寺軍兵も、悉く呼集め、同十五日に、長橋城を自ら燒いて、悉く陣拂ひ引入りけり。夜通に押へつゝ、十七日の早天に、蝗乘の居城に著けば、保界に置きたる坂川忠兵衛・和田備中守・大木土佐守・小田原牟

助・木戸清助も、保界を陣拂して、蝗乗迄打入り、清正に馳加る。蝗乗にも、半日逗留し、城をば放火し、十七日の午刻、清正、爰を立ちければ、鍋島・相良、皆々一度に打立ちけり。去年十一月より、清正居住して、民百姓を懐け、色々情深かりければ、蝗乗の地下人、殘らず打送に出でけるを、清正對面し、去年よりの芳志、淺からざるの旨、懇に一禮を申述べ、夫々に引出物して返遣し、王城の合戰、心許なしと、都を指して夜を日に續ぎて急ぎける。

晉州城合戰日本勢敗軍

去程に、朝鮮王城に集まる日本軍、十萬餘ありと雖も、李如松二十萬、開城府にあれば、攻懸かるべき手段もなし。其頃、朝鮮國中にて、偏に取沙汰しけるは、日本關白秀吉、二十萬の軍兵を、兵船數千艘に乘せ、直に大明に渡海して、攻入るべき旨、雜說しければ、李如松安き心なく、日々に使を大明へ遣し、朝廷へ奏聞申しければ、天子、大に驚き給ひ、此旨、遼陽へ仰下され、經略の宋應昌、騷ぎ恐れて、劉綎に申付け、陸の固

めを爲し、陳璘に命じて、水軍を集めて、海邊を守らしむ。天子よりも詔下りて、黄金二十萬兩を出し、軍用の費となす。此に於て、李如松は、楊元に五萬餘付けて、平壤に軍立せしめ、弟の李如栢に、三千餘附けて、寶山に陣取らせ、李寧・祖承訓を大將にて開城府の定番となす。查大受二萬餘附けて、臨津を守らせ、互に應援の謀をなせり。此時、宇喜多秀家は、龍山に打つて出で、彼に砦を構へ、兵糧數十萬石取込みつゝ、洛中の資をなす所に、臨津に屯ひたる查大受、之を討たん爲めに、敗死の卒を偸びつゝ、道より遣龍山の兵糧庫を燒かせければ、秀家、大に騒ぎ、軍中兵糧を失ふ事を愁歎せり。斯樣に守合ひたる計りにても、事行くまじとて、大明人出でたるこそ幸なれ。急ぎ合戰を遂ぐべしと、攻激し給へば、三奉行並に諸大將、如何あるべしと、日々に談合を擬す。開城府には、提督二十萬なれば、容易く寄す事ならず。されば晋州を攻取るべしとて、後に渡海せし加藤遠江守・細川越中守忠興・長谷川侍從秀一・木村常陸介・小野木縫殿之助・牧村兵部大輔・糟谷内膳正・太田飛驒守・青山修理亮・岡本下野守、都合其勢一萬三千餘、二月四日に、都を打立ちけり。一日替り、先手を定

め、其日下知は、先手の大將次第に定り、又登萊城に續きたる高山に、敵一二萬山取して見るべし。〔脱字アルカ〕所にいざあれを追拂はんとて、同六日に、細川越中守を先として、高山へ上りける所に、彼の敵共戰に及ばずして引退きけり。追懸けしかば、敵も返合せ、防矢少々射懸けゝるを追崩し、首少々取りてけり。夫より昌原より晉州へは、四日路の行程なるを、急ぐ程に、同八日の暮れ前、晉州城に、李貞範、八千餘にて籠りけるに、直に取懸かりければ、一支もせず、城を明けて引退き、城の北方可嵩山といふ大山へ、打上り、晉州を見下したり。爰にて何れも打寄せ評定あり。各の家老共の功者を呼集め、評議宜しかるべしとて、諸大將の郎等・家の子の中より、勇士共をぞ呼集めける。細川越中守忠興手より、松井佐渡守・有吉武藏守・米田監物參りたり。長谷川侍從秀一手よりは、島彌左衞門・同又左衞門兄弟・宮木新太郎・玉井彥助なり。木村常陸介手よりは、大崎玄蕃・木村宗左衞門・奥村六平參りたり。牧村兵部大輔手よりは、下野長左衞門・岡本下野守手よりは、河木九之丞などぞ參りける。諸大將、彼の者共に向つて、此城には、近國・他國の勇士、二萬餘にて栖籠り、殊に地の利

全くして、朝鮮第一の名城たり。朝鮮王都を落ち給ふ時、箕子より傳來、朝鮮代々の寶物を、此城に納め置き、警固の軍將として、牧使王僧璉在城すれば、一旦に攻めん事叶ふべからず。其上、登萊・昌原より落集る殘黨も甚だ多し。如何あらんと、合戰の意見を問ふ。松井佐渡守・有吉武藏守・大崎玄蕃、申しけるは、先づ竹束にて仕寄せつゝ、井樓を上げ、弓・鐵炮にて打痿め、塀涯へ付かば、詰橋にて攻入りなば、宜しかるべきか。城に籠る大敵を、小勢にて攻めん事、吾朝にては思も寄らざる事に候へども、異國人なればこそ、攻めても見候はんとは申候へと、申しければ、諸大將、各、尤とぞ同じける。同九日には、先驅牧村兵部大輔にてありけるが、晋州より十町計り南に、豆江村といふ在家あり。晋州より屈強の兵五千餘出で、弓・鐵炮を放懸け、味方之を見て、いざあれを追拂へと、下知せられければ、牧村が小性澤田庄三郎・十七歳、朱の角引したる白四半の指物差し、河原毛の馬に打乘りて、只一騎驅出で、面も振らず、村中へ眞先に、喚いて驅入る。之を見て、澤田討たすな續けやとて、大崎玄蕃、白紙子の羽織に、糟毛の馬に乘り、澤田に續いて驅入れば、玉井彦助・岡角兵衞・

辻久三郎・下野長左衞門・同半左衞門、押續いて馳入り、澤田庄三郎は、能き敵と引組みて、馬より落ち、終に打勝つて、一番首を取つて差上げたり。大崎玄蕃も、馬を乘放ち、二尺七寸の太刀を、甲眞向に當てつゝ、渦卷きて控へたる敵の眞中へ、𢌞を傾け切つて入り、敵三人と渡合ひ、一人切伏せ、首を取り、二人は手負ひて追散らす。殘る五人も能き首取つて差上げたり。其外追討に、首百計り討取りけり。其日は豆江に陣取す。翌日城下へ取寄すべきに付、其夜、又軍評定あり。諸大將評議に、敵軍、城より張出し、町口を固めたる山なれば、まばらに懸けては、越度あるべし。細川越中守・木村常陸介・長谷川侍從・糟谷內膳・岡野下野守、五頭の先手、晉州城下の道筋取るべし。寄口三つあれば、手を分け押寄せ、諸大將は、高所に立ち、時刻を見合せ、相圖の貝を吹立つる時、三口より一同に、攻懸るべしとの約束なり。明くれば三月十日、未明に寄手三口より、押詰めたり。牧使が勢も、三口の道筋に張出して、弓・鐵炮を調へ、先手を張りて待懸けたり。細川越中守・木村常陸介を始め、諸大將本陣の山は、旗を擧げたれば、敵味方色めき立つ。すはや時分ぞとて、細川下知して、相圖

大崎長孝勇戰

の貝を吹立つる。三口の寄手、楯の板を敲きて、鬨を作り攻懸かる所を、牧使が三口の諸手の勢、矢尻を揃へ、散々に射る事、軒端を過ぐる夕立の雨より、猶は烈しければ、流石に進んだる日本勢、人馬共に、辟易して進み得ず。敵は勝つに乘つて、追縋うて散々に射る。細川・木村、高所より見下し、身を揉み牙を噛みて、馬印を振らせ、懸れ〳〵と侗れども、敵の射る矢に、顔向だにならざれば、互に人を楯になし、背をたゝみ、甲を傾け、是は〳〵といふ聲のみにて、手向ふべき義勢はなし。有吉武藏守・松井佐渡守・大崎玄蕃、眼を瞋らし、乘廻し〳〵、何とて懸兼ぬるぞ、臆病至極なる人々かな。命惜しくば、始めより武士を、何とて止め給はぬぞ。以來男はなるまじと、白沫を噛みて下知すれども、敵の射る矢烈しければ、爲方なく見えし所に、高所より諸大將見下しつゝ、追々使番を以て、何とて臆するぞ、懸れや〳〵と怒られけれども、牧使が兵、此處の田の畔、彼處の藪蔭・木蔭に立渡りて、差詰め引詰め、散散射惱しけるに、面に立つたる日本勢數百人、馬を射させ、吾身も手負ひ、色めき騷ぎければ、跡の同勢は、引足になりて進み得ず。大崎玄蕃長孝、之を見て、矢軍計

りにては叶ふまじきぞ。鑓を入れよと下知して、弓をば畠へからりと投捨て、十文字の鑓を、馬の平首に引き側め、敵の充満ちたる眞中へ、會釋もなく、駈入らんと、一段高き段の上へ、喚いて駈上りける所に、三方より鏃を汰へて、射立つる矢、馬の吹荒胸懸盡き、弓手の大腹鐙深に射させ、玄蕃も鎧に七所、内甲に二矢射込みける中に、大の平根の矢にて、鼻を二つに射裂かれ、矢先半射立てたれば、馬は屛風返に、どうと伏す。玄蕃は朱になりて、妻手の方へ餘されて、俯に落ちたりければ、細川越中守・木村常陸介、あはや玄蕃が討たれたるは。首を取らすな者共とて、馬引寄せ打乘らせ、下の畠へ乘下しければ、相從ふ兵共、是に勵され、一度に瞳と駈入りける。牧使が大軍も、防ぎ兼ねて、城中へ引入りければ、ひた／＼と竹束を付け、非樓を上げ、堀涯に仕寄り、城中を見下し、鐵炮にて打痿め。明くる十一日の早朝に、結橋を堀へ投入れ／＼、鬨を揚げ、堀中へ飛入りて、結橋を打懸け、吾劣らじと、込合ひ上りければ、結橋多くは折れて、堀へ落つる者、數を知らず。細川越中守弟長岡玄蕃計りは、結橋の左右に、多くの歩者を附置き、吾城中へ乘入る迄、一人も、此上

橋を上るべからず。若し上りたるに於ては、汝等が首を給はんぞと、堅く下知しつつ、只一人上りしかば、結橋折れずして、恙なく上りしかば、見る人、嗟と感じつゝ、扨も〳〵と、譽聲良久しく止まざりけり。やがて塀へ手を懸け、乘込まんとせられける所を、城中より鑓・長刀にて、突落しければ、流石の玄蕃も、堀へ突落されけるを、郎等走寄り、肩にかけて引退きけり。城中の勢共、寄手小勢にて、續く同勢もなく、攻樣のしどろなるを見澄し、門を開きて、切つて出で攻戰ふ。兎や角やする内に、日も早や未の下りなり。寄手の先勢、追立てられ、手負・死人過半なれども、入替へて戰ふべき勢はなし、互に救ふべき手段(たて)もなく見えければ、先づ手負共を先へ退けつゝ、虎口を避けよと騷ぎ立て、大將長岡玄蕃、深手負ひたれば、一番に引退き、大崎玄蕃・有吉武藏守・國角兵衞以下、刀手負を、先立て退きつゝ、總軍も引取る所へ、城中氣を得て、四方の口より、一度に打つて出で、追立てければ、寄手は本勢、爭でか堪ふべき。一返も返さず、案内知らぬ切所に行詰り、討たるゝ者數を知らず。細川越中守・山鳥尾の甲を猪首になし、銀の箔半月の指物にて、月毛の馬に乘り、後

日本勢敗軍

陣に引下り、返合せ〳〵戰はれければ、松井佐渡守・米田監物以下の郎等、主を討たせじと、返合せ〳〵、散々に戰ふ。されども大敵、雲霞の如く寄せ來れば、總敗軍になりて、子は親を知らず、郎等は主を失ひ、吾先々と落ちければ、谷へ落ち川へ溺死する者、勝げて計るべからず。幸にして逃げ延ぶる者も、弓矢・太刀・鑓・長刀迄、捨てぬ輩はなかりける。九人の大將達、辛き命助り、這々の體にて、三月十六日、王城へぞ歸られける。是より互に、軍はせざりける。斯くて空しく數日を送らば、秀吉公の御咎に逢ふべし。されば爰許の體を、使者を以て申上げ、御加勢を乞ひて、軍勢又渡海せば、其勢に、李如松を追落すか、慶尙・全羅兩道の城々を、殘らず攻落し、絆の城を構へ、心安く、釜山浦より、王城へ通路をするか。二の內を過すべからずとて、一つ書にて註進す。第一大明の軍兵二十萬、開城府を守り、日本勢十萬餘ありと雖も、彼は案內者なり、又川々に大明より、勢重れば、要害を構へたる大敵を、小勢にて攻むべき樣なし。第二に、王城の勢半分遣し、晉州を攻めけれども、朝鮮第一の名城に、敵二三萬籠り候へば、乘取るべき樣なし。又黃海道・忠淸道は、手に

入ると雖も、百姓共、皆々に隠れ居て、やゝもすれば往還の道を、亂妨をなす。全羅・慶尚兩道も、過半手に入れども、味方の勢、通過すれば、又後より起りて、却つて味方の勢を、遮り止めんとす。所々の要害に、城郭を構へ、味方を入置かずば、治めきかする事なるべからず。人數不足なれば、方々へ分遣す事なり難し。重ねて軍兵を渡されば、要害の城々は、入置きて、大明人と戰を遂げんに、何の怖畏もなく打勝つて、大明迄も攻入らん事、容易かるべしとぞ申上げたり。太閤、聞召し、色々御相談ありて、安藝の宰相輝元の猶子侍從秀元、二萬餘にて渡海仕るべき旨、仰出さる。是程取仰せたる事を、扱止むべきにあらずとて、江戸大納言家康・越後中納言景勝・加賀中納言利家・蒲生飛驒守氏郷・淺野彈正少弼長吉・黒田孝高入道如水を召集め、日々に談合評定をなし給ふ。されども、當地名護屋城在番の勢十萬餘は、朝鮮征伐の元締なれば、是ぞ引分くべきにあらず。京都を守護せん爲に、關白秀次公御坐すれども、天下を守らせ給ふは、此御勢を引分くべきにあらず。大坂在番の勢も、猶以て多からねば、重ねて遣すべき軍勢なし。如何すべきとの評定を開き給ふ。太閤、

涙をはら〳〵と流し、秀吉、過去の戒行拙くして、今小國の日本に生れ、人數不足に依りて、大明四百餘州を踏まず、頽るゝ事無念至極なりと、齒嚙をし給ひければ、聞く人、皆其大念を感じ、古今無雙の猛將かなと、家康・景勝・利家を始め、御前伺候の大名・小名、涙を流さぬはなかりける。斯くて名護屋在陣、年月を經ければ、諸大名を慰めん爲め、茶の湯の遊宴を催し、又四座の猿樂を召集めて、立合の能をさせ、諸大名も夫々の器用に任せ、狂言・大鼓・小鼓・笛・太鼓に至る迄、俄に習ひて、其役々を勤む。秀吉公も自ら能を仕り給ひ、軍中の勞を慰め給ふ。此折節、岐阜中納言秀信卿は、寺西筑後守・山田又右衛門尉・百々越前守・木造左衛門佐、以下三千餘召具し、御見舞として、名護屋に下著ましますす。此秀信卿は、古羽林信忠卿の御嫡子信長公には嫡孫にて御坐すれば、天下をも知召さるべき筋目なり。此故に、秀吉公も、尊敬一方ならずして、淺野左京大夫、高麗渡海の事なれば、彼幸長の館へ入れ申され、御馳走大方ならず。四五日過ぎて、丹波中納言秀勝卿も、五千餘にて、御見舞に下り給ふ。此人は、秀次公の御舍弟なれば、本丸の內へ入り給ふ。親しき御振舞一方

なかりき。南黄門の方へも、秀吉公御出ありて、御酒宴の興にて、月日を送り給ひけり。

清正朝鮮王城歸陣

傳奏館軍合戰

傳奏館合戰

朝鮮王城にては、日本へ加勢を乞ふと雖も、路遠ければ、早速の沙汰に及ばず。皆長陣に勞ありける所に、三月廿八日の夜に入り、加藤清正二萬餘を率し、咸鏡道より引拂ひ、都三里近き洛川迄打入り、其夜は、川際に陣取る。廿九日の未明に、朝鮮兩王子を始め、擒二百餘人を引連れ、清正、恙なくさゝめき渡りて、王城に入りければ、洛中の諸軍、悦び勇まずといふ事なし。秀家竝に三奉行より、恙なく歸洛目出度き由、使者あり。其外、諸大將の見舞祝儀の酒肴にて、清正、旅宿の門前、日々に市をなせり。斯かる所に秀家より、明石掃部を以て、永々在陣御草臥れ候はんなれども、朝鮮の溢者共、傳奏館に楯籠り、狼藉仕候間、かの表へ向ひ給ひ、早々退治然るべしと、申遣されければ、三月廿九日辰の刻に、清正二萬餘にて都を立ち、傳奏館に押寄せたり。東は大手なれば清正、南口は鍋島加賀守直茂、西の木戸へは相良宮内

少輔に、淸正家人吉村吉左衞門・加藤美作守を加へ押詰め、淸正は洗草の鎧に、銀の長烏帽子、甲を著け、馬印の銀の大馬簾を、自後に指し、口羽月毛と名付けたる沓入らずの名馬に乘り、先手の中へ乘入り、下知しける所に、傳奏館の中より、賈雪頂大將にて、逞兵三千餘半弓を射立て、突いて出づる。此方よりも、鐵炮を放懸け、一番に飯田角兵衞・赤星太郎兵衞・親美藤藏、只三人杉先になりて、鑓を入れ、散々に戰ふ所に、森本儀太夫・三宅角左衞門、二陣の中より、只二人駈出し、飯田・赤星・親美に劣らずと、敵の中へ駈入るを見て、先手・二の手の軍兵共、一度に突いて懸りければ、敵も鑓を打合ひ、突いつ突かれつ、黑煙を立てゝ攻戰ふ。南の木戸より、鍋島加賀守、一萬二千餘にて、塀をも柵をも引破り、押込みける。中にも伊早速豐前守・鍋島平五郎、一番に城中へ乘込む所に、西門より相良が兵、犬童兵部丞、眞先に懸り、塀を越えて乘入りければ、大將賈雪頂も、大手を捨てゝ引入りぬ。淸正が兵共、喚き叫んで追込みしに、早や鍋島手より、火を懸けしかば、折節、西南の風烈しくして、城中に籠る所の凶徒五千七百餘人、皆口の煙と立上り、又淸正手へ討取る首三百九十一、鍋島手へ

四百十二、相良手へ百七十六なり。討死は、清正手に屈強の侍廿一騎・雜兵七十一人、鍋島手へ、雜兵かけて六十三人、相良手に十八人とぞ聞えける。捐勝鬨を揚げつゝ、王城へ歸りけり。爰に又、擒の征東使伯寧將軍をば、去年十二月七日より、津田三四郎に預置きしが、當月廿九日、何とかしたりけん、取逃しけり。預の津田三四郎、周章て騷ぎて、方々へ追懸けしかども、終に見えざりけり。三四郎面目なき次第、死しても飽き足らずとて、腹を切らんとせしを、彼三四郎事、信長公御一族にて、清正も崇敬し、五千石の地を與へ置きしが、信長公御家門たる事を以て、清正、三四郎を呼寄せ、必ず切腹仕るべからず、言語道斷の所存たり。少しも苦しからずとて、恙なく赦免しければ、諸軍も其芳情を感じ、三四郎は、報謝に言なく、涙に咽ぶ。明日にも軍あらば、是非討死せんとぞかこちける。

安南府城加藤主計頭攻落并麻貴討死

傳奏館を攻平げて、清正、都へ歸りければ、大將備前宰相秀家、竝に三奉行・諸大將、

少輔に、清正家人吉村吉左衞門・加藤美作守を加へ押詰め、清正は洗草の鎧に、銀の長烏帽子、甲を著け、馬印の銀の大馬藺を、自後に指し、□羽月毛と名付けたる沓入らずの名馬に乘り、先手の中へ乘入り、下知しける所に、俥奏館の中より、賈雪頂大將にて、選兵三千餘半弓を射立て、突いて出づる。此方よりも、鐵炮を放懸け、一番に飯田角兵衞・赤星太郎兵衞・親美藤藏、只三人杉先になりて、鑓を入れ、散々に戰ふ所に、森本儀太夫・三宅角左衞門、二陣の中より、只二人駈出し、飯田・赤星・親美に劣らずと、敵の中へ駈入るを見て、先手・二の手の軍兵共、一度に突いて懸りければ、敵も鑓を打合ひ、突いつ突かれつ、黑煙を立てゝ攻戰ふ。南の木戸より、鍋島加賀守、一萬二千餘にて、塀をも柵をも引破り、押込みける。中にも伊早速豐前守・鍋島平五郎、一番に城中へ乘込む所に、西門より相良が兵、犬童兵部丞、眞先に懸り、塀を越えて乘入りければ、大將賈雪頂も、大手を捨てゝ引入りぬ。清正が兵共、喚き叫んで追込みしに、早や鍋島手より、火を懸けしかば、折節、西南の風烈しくして、城中に籠る所の凶徒五千七百餘人、皆□の煙と立上り、又清正手へ討取る首三百九十一、鍋島手へ

四百十二、相良手へ百七十六なり。討死は、清正手に屈強の侍廿一騎・雜兵七十一人、鍋島手へ、雜兵かけて六十三人、相良手に十八人とぞ聞えける。扨勝鬨を揚げつゝ、王城へ歸りけり。爰に又、擒の征東使伯寧將軍をば、去年十二月七日より、津田三四郎に預置きしが、當月廿九日、何とかしたりけん、取逃しけり。預の津田三四郎、周章て騒ぎて、方々へ追懸けしかども、終に見えざりけり。三四郎面目なき次第、死しても飽き足らずとて、腹を切らんとせしを、彼三四郎事、信長公御一族にて、清正も崇敬し、五千石の地を與へ置きしが、信長公御家門たる事を以て、清正、三四郎を呼寄せ、必ず切腹仕るべからず、言語道斷の所存たり。少しも苦しからずとて、恙なく赦免しければ、諸軍も其芳情を感じ、三四郎は、報謝に言なく、涙に咽ぶ。明日にも軍あらば、是非討死せんとぞかこちける。

安南府城加藤主計頭攻落并麻貴討死

傳奏館を攻平げて、清正、都へ歸りければ、大將備前宰相秀家、並に三奉行・諸大將、

殘らず主計頭陣所へ參會す。清正、急ぎ對面しければ、秀家を始め、今度咸鏡道表にて働き、兩王子を生擒し大功、兀良哈にての粉骨、昨日傳奏館にての手柄、一々襃美ありしかば、清正も顏色打解け、數盃の興に及びける。酒宴半に及びける時、石田治部少輔三成申しけるは、此都に、永々在陣すれば、人馬共に自由ならず、兵糧秣以下に至る迄、拂底の有樣なり。就中五里近き開城府に、提督二十萬にて、屯川の此方、安南府の山へ、敵より又取出を構へ、麻貴將軍に、十萬を附け、籠置きたれば、方方の道路塞ぎて、洛中の窮困いふに足らず。彼は案内者にて、廣く外を領知し、吾は不案内にて、纔に洛中を管領すれば、御藏の兵糧も大に盡き、追付饑渴に及ぶべし。只三成思案仕るに、兎角釜山浦迄引退き、日本より兵糧運送し、海邊に城郭を構へ、久留の謀をなさん、第一の謀たるべし。若し是を行ふなきに於ては、日本勢十萬餘、大明の爲に討たれ、空しく朝鮮王城の土とならん事、口惜き事共なり。皆々は、如何思ひ給ふといふ。清正、聞きも敢ず、治少の申さるゝ所、更に心得ず。去年の夏、味方粉骨を盡して、取抑へたる此都を、今更大明人と一戰もなく、捨退かん事、勇士

清正三成不和

の本意にあらず。將軍へ一左右を申上げ、其上の儀ならば、兎も角も、先づ清正は、其覺悟にてなし。就中太閤、是迄御馬を出され、異國の都御見物あるべしと、仰出さるゝ事も計り難し。只々是に陣を張りて、運を天に任すべきかと、申しければ、治部少輔、尤には候へども、兵糧盡くる上は、何事も爲方なし。急ぎ日本へ申上げ、御朱印を頂戴し、然るべしと申しければ、加藤遠江守、進出で、梅酸に渴を止め、兵場に屍を留むる事、勇士の本望なれば、某に於ては、清正同意たり。誠に兵糧切れば、砂を食ひ水を呑みても、此都を守るべしと、居長高になりて、申しければ、言下より、清正罷出で、遠州の所存、侍の本意たり。就中南兵十萬にて、安南府に出張したるに、此中何とて、追散しては見給はぬぞ。吾兀良哈へ打入り、此都より七十餘日路、其行程五千餘里、手勢僅に八千にて、數度の軍、大利を得たりき。心得難き治少かなと、嘲笑ひければ、三成大に腹を立て、十萬の大敵が、左樣に容易く攻落されんば、其方行きて追散し候へ。存外の申分、近頃口惜しと怒りけるに、清正たまらぬ短氣者、なじかは少しも遠慮すべき。眼に角を立て、大音揚げ、清正に、安南府城を攻落せ

[illegible]

清正安南府城を攻む

との御下知は、願ふ所の幸なり。軍神麻利支天も照覽し給へ。今夜攻落し、治部の御目に懸かるべしとて、家子郎等に觸廻し、吾身も頓て物具して、旗を出し弉きければ、秀家を始め、參會の大將達、皆々宿所へ歸られける。清正、親美藤藏・寺田笹之助を呼び、己等は、是に殘る俘人の王子を守護すべしとて、人數五百餘附置きつつ、早や都を打立ちけり。清正が軍兵共、謂なく口論し出し給ひ、吾々に犬死せさせ給ふ事、是非に及ばず、日本の總軍十萬餘騎、猶ほ提督が兵に當り難し。況んや吾等小勢にて、安南府を攻めん事、鰐の口に入るに均し。只清正は、物に狂ひ給ふ者よと、呟かぬ兵はなし。擒に付て跡に殘れる軍兵に暇乞し、日本の故郷に殘置く、老いたる親竝に妻子の方へ、筐共を相渡し、何れとも具足櫃より、經帷子を取り、血脈を首にかけ、今宵を最後と出立ちける、心の內こそ哀れなれ。清正、七千餘を、二千にむずと押分け、王城をば、三月晦日の酉の刻に出で、廿七里の道を、夜通に打ち、其夜の子の刻に、安南府城へ忍寄りて見れば、敵は吾大軍に誇りつゝ、油斷し用心もなし、士卒悉く油幕を垂れ、前後も知らず、此處も彼處も高放鼾の音のみなり。折節、小雨交り

の風吹きければ、清正、天の與へと悦びつゝ、轡をつゝみ、草摺をたゝみ、物音するな兵とて、吾身は、眞先に敵の本陣指して、馬を靜めて乘込み、清正は、銀の長烏帽子の甲を著け、大鎌光の太刀を佩き、三宅角左衛門に、長刀を持たせつゝ、本陣に忍入りたれば、燈明掲げ、障子の內に人音しけり。すはや能きぞと、陶して、緣の上へ上り、障子を颯と開きつゝ、內を急度見入りたるに、大將の麻貫は、物具差固め、兵共八九人並居つゝ、碁を打つて居たりしが、清正を見附つゝ、一度にわつとぞ罷れける。清正は、之を見て、大鎌光を拔打に切りける所に、麻貫もよかりける腰の劍を拔合せしかども、清正立懸り、難なく麻貫を切伏せたり。八九人の敵共、面々に道具を待、取合ひ切つて懸りけるを、清正請けつ開きつ、百手を碎き相戰ふ。五六人切伏せ、殘る奴原をば、三方へぱつと追散し、卽ち麻貫が首を取り、血になりたる刀を提げ、障子に火を吹付け、燒立つを待ちて、陣中へ躍出で、麻貫が首をば三宅に渡し、刀をば鞘に納め、持せたせる長刀を押取り、甲の緒を締直し、同音に閧を噇とぞ上げたりける。十萬餘の敵兵、是に驚きて、喚き叫び、訇る聲々、六種震動の如し。清正、大音揭

安南府城没落

げ、大將麻貴將軍を、日本上官清正が、自身討取りたるぞとて、叫び罵る。敵陣の通辭是を聞きて、今は叶はずと喚きつゝ、陣中を馳廻る。清正眼に角を立て、首を〔脱字アルカ〕鐵炮を放し懸け、火矢を射よと下知をなす。麻貴將軍が從事官、走散りて、大將軍麻貴をば、夜叉の如くなる大鬚の鬼が來て、只一刀にて切殺したり。彼鬼、頭上には白銀の長冠を著けたりしと、呼啼む。扨は倭將清正なるべしとて、城中、上を下へ騷動す。主計か勢、火矢を射込み燒立て、鐵炮にて痿め、亂入りしかば、十萬餘の敵共、不意の行に破られ、討たるゝ者、數千人、谷へ辷り川へ逃入り、溺死する者數を知らず。さる廿九日の夜、取逃したる生擒征東使伯寧をも、爰にて討取りけり。清正、悦ぶ事斜ならず。之を始めとして、城中・城外にて、討たるゝ者は、只算を亂る如し。清正が軍兵、爰に追詰め、彼處に追詰め、射伏せ突倒せしかば、一人して敵五人・七人討取らざるはなし。清正、則時に安南府城を攻取り。城中・城外に火を放ちて、雲井遙に燒上る。主計頭が手柄、筆端に書き難し。都にありける諸大將、寄集り、清正短氣なる曲者にて、只一備、大敵の陣へ赴きしかば、必定殘らず討たるべしとて、何れも

五百・七百の勢を遣し、清正が後卷せられけるに、清正は城を攻崩し、十萬餘の敵共を、大河の中へ追浸し、勝誇りたる所へ、王城よりの加勢共、追々に來りしかば、清正下知して、逃ぐる敵を成程追討たれ候へ。皆々高名せられば、清正が妙法の旗を見て、聚集れと、約束しけるに、加勢の軍兵共、相心得候とて、追立て〳〵喰付き、思ふ儘に首を取りけり。清正は、物書侍數十人に、證文を書かせ、判を捺ゑ、高名の兵共に、一枚宛取らせけり。扨今夜、清正手にて、粉骨を盡したる兵は、加藤美作守・小關平助竝に川金右衛門・長尾安右衛門・坂井忠兵衛・鵜平次・小代下總守・三宅角左衛門・飯田角兵衛・森本儀太夫・庄林隼人・阿波伊兵衛・大脇次郎左衛門・赤星太郎兵衛・榊原次右衛門・吉村吉左衛門・堤權右衛門・久保田吉藏・松下清藏・久保吉右衛門・井上大九郎・太田半左衛門・齋藤與三右衛門・齋田傳右衛門・大木土佐守・木村又藏、以上廿六人、城中へ早く乘込み、高名しければ、殘らず褒美を加へ、感悦斜ならざる旨、夫々に證文頒與しけり。扨安南府城外、兵糧庫數十間ありけるを、打破り、牛馬澤山にありければ、是に負はせつゝ、一人して五足・十足引かせ、清正七千餘にて、さゞめき渡りて王

城へぞ歸りける。最前加藤遠江守・木村常陸介・増田・長谷川、二萬餘にてさへ攻落さず、却て追立られ、北げ歸りしに、淸正、纔卒七千餘にて、十萬の大敵を、一時に攻落しければ、朝鮮・大明迄も、主計頭が驍勇を、甚だ以て恐れける。川向開城府には、李如松二十萬にてありけるが、安南府落城して、火の手上りたるを見て、如何樣城中に謀叛人ありて、王城の日本勢、殘らず押寄せ、攻落したりと覺ゆとて、川端迄押出しけれども、麻貴已に討死して殘黨、川を越えて、雲霞の如く逃げ來りしかば、今は助合うても益なしとて、李如松は、川端より歸りける。後に淸正、只一手寄せたりし事を聞き、哀れ其時知りたらば、二十萬にて、川を渡り、淸正を取卷き、一人も洩さず、討取るべき者をと、牙を咀み後悔しけれども、甲斐なし。李如松、良將たりと雖も、持重之に餘り、果敢足らざる故に、淸正を討洩したりと、提督が失計りを、難じけるとぞ聞えし。

大明・日本和談

沈惟敬和睦を謀る

提督李如松、二十萬にて開城府にありて、王城の日本勢と、對陣すと雖も、隆景・宗茂が勇略、清正・長政が剛氣、容易に拉き難しと存ずれば、只要害を固め、洛中の日本人を燕落さんと、謀りしかば、兩軍久しく相支へて、丁壯は軍旅に苦み、老弱は轉漕に罷む。去程に沈惟敬は、初より司馬石星に便り、和談の扱を司りしかば、天子の綸命を承り、三月十六日、大明より朝鮮の西江に著き、直に開城府に到り、李如松に對面し、朝廷の詔と、司馬石星が意を語りて曰く、大明、日本と干戈起す雖も、倭寇甚だ強うして、卒爾に追落し難し。只和議を事として、密策をなし、大敵を退け、戰はずして勝を待べしといふ。李如松思ふ樣、日本人の悍黠、方略の工を見るに、古の張儀・蘇秦は知らず、今惟敬が辯舌にて謀らん事、思ひも寄らず。是併石司馬が、女緣の愛に溺れ、惟敬が事を、信ずるより事起れり。敵を謀らんとて、却て敵に謀らるべき事、目前にありと思ひければ、さして和好に同心せず。沈惟敬、頻に和好を取持ちけれ共、李如松、曾て取合はず。只石司馬が淫亂に耽り、國家の大事を、女緣に任する事を惡み、天子の命をも請けず。誠に牝鷄晨を告ぐる時は家必ず亡び、大將内に顧

和議一時破る

る時は、士卒戰に負くといへり、是皆、往古の蹤、揭焉たれば、前事を誡めて、國家を誤らん者、石星にあらずば、誰とかせんとて、齒叫してぞ居たりける。沈惟敬は、小西行長方へ書翰を逍し、去年八月、平壤の乾伏山にて、約束せし如く、大明勅使謝用梓・徐一貫兩人、同道し、關白の內意を請け、和談致すべしとの旨なり。此時、小西行長は、龍山の營にありしが、通辭前聖・禰景徹・玄蘇・西堂以て、沈惟敬に對面させ、筆談あり。右よりの約束七箇條を述べたり。一には和好。二には割地。是は日本より、切取りたる朝鮮の四箇道を、其儘領知すべしとの事なり。三には入貢。是は前代の如く、毎年貢を大明に擧げんとの事なり。四には封王。大明より太閤を日本國王に封ずべきとの儀なり。小西・三奉行を始として、朝鮮の在陣辛勞なれば、如何樣にも和議を調へて、日本へ歸らん爲、此一箇條を閉損じ、大明より太閤を、大明皇帝に封ずべしと、日本へ申上げしにより、一往事なりと雖、和談終に破れて、再び朝鮮の戰起れり。殘り三箇は、初より祕して洩さゞれば、知る人更になし。其上、太閤秀吉を、大明皇帝の壻となすべしといひ送る。是は漢の高祖の時、匈奴の單于を、高祖の壻に

せんと、謀し事を引て、沈惟敬中途逃けるとぞ聞えし。日本より好みける七箇條調ひたる上は、清正が擒へし朝鮮の兩王子竝臣下共を、朝鮮王へ送還し、王城にある日本勢、先づ釜山浦迄引取つて、一人も殘らず日本へ歸朝すべし。提督李如松も、日本勢王城を出でば、同時に開城府を立ちて、人數を引取るべしと定めけり。小西行長、和談を司る張本たりと雖、去年平壤の軍の時、沈惟敬が言にて油斷し、不慮に提督二十萬にて寄せたりしかば、此度の事も亦謀ならんと思へば、行長、疑ひて事を定めず。是に依て、惟敬は、司馬が下知を以て、監生徐一貫と生員謝用梓とを、四月十八日に小西が所へ遣し、多くの金帛を遣し、又和議の眞實なる事を說きしかば、行長初て誠なりと心得、此旨備前中納言秀家、竝に三奉行と相談す。小西も三奉行も、加藤清正と中惡しければ、彼國王子を擒にせし、大功を空しうせん爲、惟敬が言に隨ひて、尤なりと同心せり。さり乍ら、都表引取る事、擒の王子を歸遣す事、名護屋へ伺に遣したれば、御一左右次第、釜山浦迄、引取るべしと待居たる所に、四月十九日に、秀吉公御返事到來せり。三奉行・諸大將集り拜見す。其詞曰、

四月二日之連狀、被レ加二御披見一候。今度大明より、沈惟敬・徐一貫・謝用梓三人を使として、其表へ指越、色々御詫言申上候旨、聞召屆候。朝鮮王の儀は、不屆千萬に思召候間、急度御誅伐可レ被二仰付一と、思召候へども、大明左樣に御詫言申上候はば、御用捨可レ被レ成事。

一、赤國牧使判官卒數萬騎、度々罷出、都より釜山浦への通路を妨候付、當二月、細川越中守・長谷川藤五郎・木村常陸介を初、大將九人、其勢二萬餘にて、赤國へ取詰候へども、牧使多勢なるに依、味方不レ達二本意一退散仕旨、不レ及二是非一候。左も可レ有ならば、兼て發向するべき筈なるを、淺慮の程、不二相屆一候。乍レ去不レ決二於勝敗一者、非二良將一と、古人の名言なれば、令二赦免一候事。

一、今度は、都表在陣の勢、殘らず引拂、釜山浦近邊迄打入、青赤國へ令二進發一悉攻平、牧使が首見せ可レ申事。

一、都表引拂事、并赤國可二攻平一事、黑田如水軒・淺野彈正少弼・今度令二渡海一候間、其下知次第、進退可レ有レ之事。

右の段々委曲、黒田如水・淺野彈正、可レ申者也
とぞ書かれける。

日本諸軍勢都表陣拂

三奉行並に小西行長は、將軍御返書を拜見し、悦ぶ事限なく、其上、御庫中の兵糧も盡、折節疫癘、一時に起つて、日本勢死する者數を知らず。是のみならず、去年の春よりの長陣に退屈し、先づ釜山浦迄引かばやと思はぬはなかりける。沈惟敬は、之を悟りて大に悦び、頻に小西に勸むれば、行長も諸大將に談合し、王子を還送る事は、秀吉公の御下知を伺はしめずば叶ふべからず。軍勢を釜山浦に退く事は、三奉行の次第と談合す。三奉行も、一刻も早く、歸朝仕度存ずれば、兎角の思案に及ばず。明後廿一日に、總軍勢、王城を引拂ふべきにぞ極めける。日本勢も去年五月より、王城に在陣せしかば、朝鮮の民百姓等、皆王城に歸りて、百姓は耕作し、町人は商賣を營む。其多き事、日本勢よりも勝れり。是に依りて、石田・増田等、相談しけ

るは、王城の町人・百姓共、吾軍勢の引取る事を聞けば、李如松に内通し、退行く後を塞ぐべし。先づ王城の町人・百姓等を、召出して、後心安く引取るべしといふ。大谷刑部少輔吉隆進出で、此議宜くも存ぜず候。一旦追出すと雖も、彼は所の案内者なれば、猶は能く要害の巷を知りつゝ、還來て攻討つべし。然れば追出したりとも、其詮なかるべし。只今、誘寄せて盡く殺して、引取るべしといふ。增田右衛門尉、聞きも敢ず、此議こそ然るべからず候へ。今日・明日引取るべき者として、數十萬の民百姓を斬盡すべきにあらず。其上、咎なき者を、誅殺さん事、末代の嘲之に過ぐべからず。只彼をも助置き、味方も恙なく引取りてこそといふ。諸人の異議問答、區區にて一決せず。其時、小早川侍從隆景は、上座の床傍に寄り、枕を高かめ、放鼾かきて眠りつゝ、宵より終に一言も出されざりければ、石田治部少輔、大聲を上げて、言を懸け、斯程の大事の談合に、一言も宣はず、脇に立ち除き、知らざる振にて、臥し給ふ事甚だ以て心得ず。今軍勢を引取る事、一大事の退口なれば、急ぎ起き給へ。異見を承らんと申しければ、隆景、枕を押除け起直り、皆々の御相談惡くもなけ

れば、中途もなく候へども、愚者の一得、古よりなきにあらず。先づ各の手前計を御覽候へ。軍勢の内、下々過半は朝鮮人なるべし。彼は能く吾を見知るとも、吾は彼を見知らねば、町人・百姓を攻出されんより、先づ此者共を出さるべし。去り乍ら是も亦、荷持の人夫たれば、之も出しては、都より釜山浦迄、數百里の間、荷物は誰に持たすべくや。今存じ當る一つ手段の候へば、誠に申出し候はん。明日、諸軍引取らば、洛中總陣に、一同に火を懸け、煙の紛に軍勢を引取るべし。火の手、夥しく揚らば、大明人、火に驚きて後を付くる事なるまじ。又引込まんとせし手段も、十方に暮れ、前後を忘るべし。其上、李如松良將なれば、日本人伏兵を置き、誘ひに火を懸けたるかと了簡し、必ず追來る事あるべからず。即ち彼が機を察し、吾利を示し謀るは、古諸葛武侯が、門を開きて伏あるかと疑はせ、仲達を退けし軍配なり。各は如何存ぜられ候やと、申されければ、秀家・三奉行・諸大將、皆一同に感じつゝ、此議宜しかるべしと、其夜の談合は果てにけり。扨夜中支度して、歸陣の次第は、一番に備前中納言秀家、其次三奉行、其次諸大將何れもなり。殿は小早川隆景二萬餘.

加藤主計頭淸正・黑田甲斐守長政・小西攝津守行長、替る〳〵勤め候はんとの事なり。漸く夜も白み合ひしかば、秀家を先づ退け申し、其次三奉行、是の如く段々に引拂ひ、廿一日の辰の刻には、日本勢十萬餘、王城を立拂ひ、豫て定めし如く、陣々に火を懸けたり。洛中にある朝鮮の商人・百姓共、是に驚きて、資財・雜具を負荷し、吾先に火を遁れんと、逃げ散じければ、火を消す者もなくして、四月より六月迄、燒けけるとぞ聞えし。古項羽が秦に入りて、咸陽宮を燒きけるに、三月迄燒けゝれば、咸陽三月の火を餘せりと書きたりしも、今こそ思ひ知られけれ。是の如くなれば、敢て日本勢に指さす者もなし。王城に火の手揚り猛火天に覆ひつゝ、日本勢の引取るを見て、開城府の大明人、すはや日本こそ引取るなれ。一人も洩さず討止めよと、走散じて騷動す。朝鮮の權膺珠といふ者、李如松が陣に來り、只今洛中の日本人引取ると、見え候。此引足を追討ち候はゞ、一人も洩さず討止むべく候間、御出候へ。追懸け申さんと勸めければ、李如松、少も動かずして、必定、日本人は、伏兵を要害に置き、吾を誘はん爲めにぞ、火を懸けたるならんと了簡し、孫子武が言に、歸陣を遏めずと

いへり、必ず追討つ事あるべからずとて、終に應珠が議に隨はず、日本人十萬餘、何の怖畏もなく都を出で、釜山浦指して引取りぬ。隆景が智謀の程、大明・朝鮮・日本三國に流布して、譽めぬ者はなし。日本人も初、王城へ入りし時と違ひ、宿々に野陣を懸け心缺しく見えければ、大明・朝鮮の兵共、迹を躡みて、追行くべき樣はなかりける。

淺野彈正・黑田如水朝鮮渡海

王城在陣の日本勢十萬餘、隆景の智謀により、恙なく都を引拂ひければ、諸軍悅び勇ますといふ事なし。之をば秀吉公知召さず、都表引取る事、如何あるべしと思召し、又晉州城にて、細川越中守等、敗軍せし事を、無念に思召し、總軍、都を引拂ひ、晉州表へ取詰むべしとて、淺野彈正少弼長吉・黑田孝高入道如水を御使にて、渡海せしめ給ひければ、兩人全義館迄參著し、都より引來る勢を待居たるに、一番に備前中納言秀家、押來り給ひければ、兩人對面し、御意の段申達し、次々の諸大將へも御意の

旨、申達すべしとて待居たり。三奉行方より、此旨、聞くと均しく、先立て使者を遣す。兩人渡海、御太儀の旨申入れしかば、彈正・如水よりも、返事の使者あるべしと存ずる所に、其沙汰に及ばず。如水・彈正鎧も脱かず、碁を打つ程に、夜の明るも知らずして、只醉ふが如し。さる程に、夜明けければ、三奉行打連れ、全義館に著き、彈正陣所へ行き御渡海苦勞の旨申盡し、扨上意の趣、承り度き旨申しけれども、昨夜より終夜、碁に打入りて、如水も彈正も、今樣を謠ひ、平家を連節に語りつゝ、三奉行に、然々目も懸けず、碁を以て、拍子を取りて、尾上の月の曙を、詠めて歸る人もありと、月見の卷を語澄し、御無事に候か、石田殿久しく候。右衞門殿と狂言のみいひつゝ、敢て會釋もなし。將軍の御意も有無の返答なき故に、三成は增田・大谷にきつと目配して、潛に立出で、釜山浦指して押通りぬ。如水・彈正、夫とは夢にも知らず、だめをも指し、勝負極めて、いざさらば、三奉行衆是へ御通り候へ。上意の趣申渡すべしといひければ、小性共承り、早や三奉行衆は、先へ御通り候。五六町も行延びさせ給ふべしと答へければ、如水・彈正、大に騷ぎ驚き、先々歸られ候と、追

追に使を立てけれども、三奉行耳にも聞入れず。先づ急ぎの非を打ち候へと返事して、登萊指して急ぎけり。如水・彈正は悶えつゝ、早馬にて追驅けさせ、是非々々歸られ候へと、使を立てければ、治部少・右衛門尉・刑部少等、彼使に向ひ、散々惡口して追突きつゝ、終に押通りぬ。後より追著かんと、如水も彈正も乘出しけれども、三奉行は、早や行延びて、旗だにも見えざりければ、後を追うて、登萊に到り、三奉行に對面し、上意の趣、申渡すべしといひ送りけれども、石田・大谷等、返事だにせず、しとやかなる對面だになかりければ、如水・彈正、面目を失ひ、三番備より後々に打入り來り、諸大將へのみ、漸く上意を申渡したる計りなれば、諸人の嘲となり、陣中の笑種となりにけり。御目附の人々、此旨日本へ註進申上げければ、秀吉公内々怒り給ふ事斜ならず。其後三奉行歸朝して、如水・彈正事を、をこがましくいひなし、様々讒言し、將軍へ支へつゝ、人に會ふ度には、朝鮮にて如水・彈正が仕形を語り、天下に披露し、物笑にせしかば、如水が子黑田甲斐守長政と、彈正が子左京大夫幸長と、之を心憂く、無念なる事に思込み、腹黑に心中に挾みつゝ、一度は胸を

散せんと、憤深ければ、秀吉公薨逝の後、石田治部少輔を失はん謀を運し、黑田甲斐守長政・淺野左京大夫幸長・細川越中守忠興・加藤主計頭淸正・福島左衞門大夫正則・加藤左馬之助嘉明、十餘人連署して、家康竝加賀守肥前守利長へ訴へしかば、此兩人も、幸の物初と思はれければ、治部少輔を、江州佐和山へ追籠まれ、奉行職を止め給ひけり。三成之を口惜く思ひ、閑暇の夜々、天下併呑の策を運す事、更に怠る間なく、奥には上杉中納言景勝の家老直江山城守兼續を引付け、佐竹義宣・相馬以下の大名を一味させ、信濃には、眞田安房守昌幸・木曾伊豫義政入道宗億を引付け、西國にては、備前中納言秀家・金吾中納言秀秋を始め、大方一味せしめ、終に關ヶ原の大亂とはなりにけり。是皆、朝鮮にての碁盤の上より出來し、天下の騷動となりにけり。濫觴も、末岐に到りては、九鯨に遮るとは、斯樣の事をや申すべし。淺ましかりし事共なり。君子無終食之間違仁と、夫子の敎へ給ひし明言、有難かりし事なりと、一入に思知られける。されば侍たる者は、諸藝に渡らざればあるべからず。さり乍ら一能に屈托する事勿れ。何事にても、泥溺する時は、國家の禍、一家の滅亡ともなる

者なり、愼むべし〳〵。

熊谷內藏助・水野理左衞門朝鮮渡海

王城在陣の日本勢十萬餘、善山府・登萊・釜山浦・熊川浦・梁山近邊に止り、大明よりの勅使を待つ所に、沈惟敬・謝用梓・徐一貫、釜山浦に到り、沈惟敬は、爰に止り、徐一貫・謝用梓は、小西行長同船にて、五月に渡海せんと支度しける所に、秀吉公より、熊谷內藏助・水野理左衞門御使として、渡海に御朱印を、三奉行竝に黑田如水に下さる。其詞に曰、

大明日本和平相定條々

一、天地不レ替間は、不レ可レ有二相違一と於二契約一は、大明皇帝の姫宮を、日本帝王の后に、可二相渡一由、可二申達一事。

一、勘合船の儀、可二申談一事。

一、大明・日本武官大臣誓紙、可二取替一事。

一、朝鮮國の儀、先勢能越、悉申付候條、此上は經年月、民百姓以下、靜謐の様、彌々人數を遣可被仰付候。今度、大明へ被仰遣候條、數於相極は、朝鮮の儀は、唯相不屆候。大明に命ぜられ、又は最前一禮をも申上候條、朝鮮都に付て、四箇道、是を可被遣候。右王子二人、竝に大臣可相渡事。

一、最前擒へし王子二人の儀、下々の者に、不有候條、無事に相構、四人として請取り。只今沈惟敬相添、朝鮮へ可返事。

一、朝鮮國家老の者、永代相違あるまじきとの誓紙の事、右の趣、大明勅使に可申渡事。

一、晉州牧使城取巻き仕寄、築山申付、手間無之様に令覺悟、如何にも丈夫に仕、一人も不殘可討果事。

一、於其上、赤國へ相働可致成破事。

一、赤國成破の上にて、右前々の城相拵依人數之多少、城の大小に隨、見計夫々に可被持事。

一、中國衆隆景・四國衆船手の者共の事、九州衆外にて候間、釜山浦・熊川浦其近邊に、可レ然事。

一、兵糧藏の事、其城持應二人數一相定可二入置一事。

一、鹽噌、右同前之事。

一、鐵炮・玉藥藏、可二同前一事。

一、自然大明國、必定御詫言申上候といへども、無二油斷一右の通可二申付一候。來年名護屋へ被レ成二在付一、可レ被二仰付一事。

一、仕置等、於レ被二相濟一上、備前宰相事、名護屋可レ爲二在城一事。附、壹岐・對馬には、御馬廻在番被二仰付一事。

一、猶以、拜禮委曲、熊谷内藏助・水野理左衛門兩人に被二仰含一事。

文祿二年五月朔日　秀吉公　御朱印

淺野彈正少弼殿

黑田勘解由入道如水殿

増田右衛門尉殿
石田治部少輔殿
大谷刑部少輔殿

とぞ書かれけける。秀家三奉行竝に諸大將評議し、兎角大明兩使渡海仕上にて、相極然るべきに付き、五月九日に小西攝津守同船にて、大明兩使謝用梓・徐一貫、打連れ釜山浦より船に乘り押出す。淺野彈正・石田治部少輔・大谷刑部少輔・黑田如水・増田右衞門尉も、同日に釜山浦より出船す。加藤淸正・黑田長政・小早川隆景以下の諸軍勢は、朝鮮に殘り、城郭を固め陣取りけり。

明使名護屋に來る

大明兩使名護屋著船

五月十三日に、大明の兩使、小西同船にて、日本名護屋に著岸す。黑田如水竝に三奉行も、同じく著きければ、卽ち名護屋の町屋を點し、宿札を打つて、明使の下々を置かれける。されども和議の事、眞實に思召されざりければ、秀吉公、不禮に會釋し

給へば、小西並三奉行、御前に列參し、大明より申遣らるゝ樣子、書翰數通取出し、御目に懸け、色々申上げければ、太閤、始めて御信用ありて、大明の使者旅館の事、家康・利家相計るべき旨、羽柴下總守雄親を以て、仰付けられけり。正使生員謝用梓は、江戸大納言家康館に入られ、副使監生徐一貫は、加賀利家館へ入られ、事々しき御馳走なり。五月十五日より同廿一日迄、兩所にて御馳走之あり。廿二日より、六月朔日迄、淺野彈正承りて、馳走仕り、二日より十二日迄、建部壽德、十三日より廿一日迄、小西如淸、廿二日より七月朔日迄、太田和泉守牛一、七月二日より十一日迄、江州觀音寺、承りて馳走す。大明使萬事の所用は、增田右衞門尉長盛內高田小左衞門・服部源藏、石田治部少輔三成內井口淸右衞門・大島甚右衞門、大谷刑部少輔吉隆內引壇傳右衞門・小岩內膳、小西攝津守行長內小西與七郎・結城孫平次、承りて之を相違せり。右の內、兩人づつ、明使旅館に附き居て、萬事用を承るべき旨、仰付けられけり。

秀吉公、明使御對面 附 明使名護浦詩賦 并 御船遊

大明兩使の趣、主上へ奏聞中さずして、私の返翰は、上を蔑如にするに似たりとて、關白秀次迄、早飛脚にて仰上げられ、其返事到來の內は、明使を留め給ふ故、朝鮮の沈惟敬方へ、此旨仰遣さる。

啓二大明將軍沈惟敬麾下一。大明・日本爲二和親一於二朝鮮一趨而入。予前驅二營中一切詢起レ兵故、實猛將也。長盛・吉隆・三成・行長四臣、具奏二達之一矣。急雖レ可レ裁二瓊報一、前年委二關白職於秀次一。秀次可レ達二之於天聽一也。任二予思慮一、雖レ可レ決二大事一、可レ案二大綱一者也。世禮也圖レ之。王京去二此地一、水雲遼遠也。依レ之大明使節停二台輿於此一、營中勿レ渉二猶豫一。不レ捨二晝夜一以レ命二侍臣馳一、羽檄々書待二相達一。可レ投二回報一。餘附二四臣舌頭一。不宣。

仲夏日　日本國前關白豐臣秀吉 朱印

達　沈惟敬秀才

是の如く書認め、銀子三千枚・金作の太刀一振添へ、朝鮮に贈り給ひけり。斯くて五

月廿三日に、大明の正使生員謝用梓・副使監生徐一貫に、御對面あるべしと仰出さる。謝用梓、字は龍岩、徐一貫、字は唯吾とぞ申しける。諸大臣、何れも衣冠にて、登城致すべき旨、當日御觸なりければ、内外に付て、其支度夥き次第なり。斯くて廿三日になりしかば、謝龍岩・徐唯吾出仕あり。將軍御對面の時、三獻の御祝あり。御配膳は、御前は羽柴河内侍從・八幡侍從、御酌は、中江式部大輔、御伽は、山崎右近進なり。同間伺候仕らるゝ面々は、江戸德川大納言家康・加賀前田大納言菅原利家・岐阜織田中納言平秀信・丹波羽柴中納言豐臣秀勝・大和羽柴中納言豐臣秀俊・越後上杉中納言藤原景勝、以上六人なり。御次間には、羽柴三吉侍從豐臣信秀・立野侍從豐臣勝俊・有馬中務法印・戸田武藏守・羽柴下總守・古田織部・正河尻肥前守・寺澤志摩守・富田左近將監・奥山佐渡守・上田主水正なり。御酌通の衆、尼子三郎左衞門・三上與三郎・新庄駿河守・長谷川右兵衞尉なり。斯くて金の數寄屋にて、明使に御茶を下さる。茶童は、久阿彌、通は尼子三郎左衞門・三上與三郎なり、移通には、公卿竝に諸大臣竝居たり。御書院の道具も、悉く金なり。床の内には、虚堂墨蹟、玉礀夜雨

晩鐘、馬闌が朝山青楓の御掛物なり。明の兩使拜見して、褒美甚だ以て重ず。明朝に、此の如き珍器は、稀なる旨感じ奉る。其體のいみじさ、日本人の恥づる計なり。晩の御饗應は、長谷川刑部卿法眼之を勗む。明の正使謝用梓には、御太刀一腰、長光作目貫・面指は、後藤なり。銀子三百枚・小袖二十重・帷子三十なり。副使徐一貫には、助光御太刀、目貫・面指は後藤なり。銀子・小袖・帷子、同前に下され、筆談の玄蘇・西堂には、銀子百枚下さる。明使の下僕共、銀子五百枚・帷子百・羽織百、下されけり。斯くて肥前國名護屋の浦は、巖峙ち浪湊うして、美景尤も勝れり。千峯競ひ秀でつゝ、萬谿急流たり。誠に松島の景、和歌の浦も及ぶべきにあらず。謝用梓・徐一貫も眺望し、明國の嘉陵、三百里の風景には、不足なりと雖も、浦湘十五里の景には、事足れりと、通辭玄蘇に申して感じけり。

題日本浪古耶（なごや）　正使謝用梓

重疊青山湖水長　無邊綠樹顯二新粧一　遠來二日本一傳二明詔一
遙出二大明一報二聖光一　水碧沙平迎二日影一　雨徵煙暗送二斜陽一

回頭千態皆湘景　不覺此身在異鄕

又　同

杳旋輜車來日東　聖君恩重配天公　遍朝萬國播恩化
悉撫四夷助義忠　名護風光驚旅眼　肥州絶境慰衰躬
洞庭何及此淸景　空使詩人吟策窮

又　副使徐一貫

一奉皇恩撫八紘　勿蒙聖諭九夷淸　晴光湧景靈蹤聚
山勢抱口煙浪輕　處境奇蹤難圖盡　楊州風物奪携爭
扶桑開說有僊島　斯處定知逢又瀛

秀吉公も、三首詩にて、彌御機嫌よく、さらば明使を慰めんと、船遊を興行し給ひ、數百艘の大船を集め、家々の紋附きたる船幕を走らし、旗・小符・金銀にて、仕立てたるを飾りつゝ、船歌夥しく歌ひ出で、さゞめき渡りしかば、實に心も空になりけり。將軍秀吉公は、臙脂染金絲入れたる御帷子に、緋縮緬の平袖の御羽織、銀熨斗附の御

太刀指添へ、事々しきを指ほらし、濃紅の括袴を召し給ふ。江戸大納言家康は、淺黄の帷子、金の村千鳥押したるに、紫の單羽織に、白き葵の紋付、短き太刀なり。加賀大納言利家は、紫の總目結の帷子、金にて水に鶯、縫殿したるに、花色子に淺黄絲を以て、梅鉢縫ひたる羽織なり。越後中納言景勝は、細美の帷子、柿の單羽織に、大太刀・小脇差なり。其外供奉の大名・小名、綺羅をみがき、綾羅を引きければ、言語の及ぶ所にあらず。將軍は、黑き御馬に、紅の大總かけて、乘り給ふ。虎の尾の投鞘の鑓二百本、鑰鑓・十文字長刀、金銀にて拵へたるを百本、一樣に、茜の羽織著たる中間三百人に持たせ、御馬の先に立ち給ひけり。去程に、將軍、船中へ入り給ひければ、明の兩使、並に日本の諸大臣、悉く御膳を給り、御酒宴の音融々たり。江山日晴れて、遠帆一片の霞を穿ち、海上浪靜にして、旅眼萬里の天を望めり。其外船中にて、猿樂ありて、觀世・金春を召されつゝ、御能始りけり。音曲、海上に響き渡り、龍神も感應し、天人も、爰に天降らんと、身にしみてぞ覺えける。明の兩使も、目馴れぬ風流に、感悦の掌を拍ち、味方の官軍勇士も、齊しく出塞の愁を忘れたり。今日は殊に天

氣穩に、海上いと靜なり。一番吳服、二番玉井、三番白樂天、四番弓八幡、五番金札、終りけり。斯くて數刻過ぎ行くに、夕陽已に傾きける。雲海茫々として、蒼天已に晩れぬ。霞、孤島に峙ちて、月海上に浮べり。隈なき光に風光いと閑かなり。誠に此良夜を爭でか空しうせんとて、又御酒宴始まり、夜も戌の刻に過ぎければ、去れば歸り給はんとて、數百艘の船共、一同に船唄を歌ひ、艫を連ね、拍子を踏法へ、湊を指して漕入れ給ひければ、明の兩使も、御供の人々も、皆喜悅の眉を開きける。

明使歸帆

明くれば六月十日の朝、山の里にて、大明兩使莚に玄蕃・西堂に、御茶を下すべしとて、何れも登城あり。御山の里と申すは、路次に色々の薬園有り、麓に茅屋二三間ある里なり。其儘、自ら物舊りて、諸木枝を連ねつゝ、巖聳え蒼苔露滑なり。岩間を傳ふ遣水の流もいと冷く、寂寞たる柴の扉に、蘿樺生ひ繁り、無人聲として答ふ人なし。誠に劉阮が天台山、費長坊が壺中の天地も、斯かりける所やと、與に入りけり。四疊

半の數寄屋は、萱葺なり。內の飾次第、玉澗歸帆の掛物、細口の花入、新田肩衝なり。棚の飾は、茄子の茶入、內赤の盆に、有臺・天目・釜ゑんたけの水指・水飜(みづこぼし)がうし・象牙の茶杓なり。庭には、夏草茂合ひ、舊苔道を塞ぎ、梢に鳴く蟬の聲、筧を傳ふ遣水の音、物さびしき體、晉の七賢が籠りし竹林寺の內、漢の四皓が住ひけん商山洞の有樣も、斯かりけるやと覺えたり。竹の椽・丸木柱、中々故ありてぞ覺えける。將軍是へ是へと賞し給へば、明の兩使玄蘇・西堂も、御坐簾に入りにけり。將軍床脇に坐し給へば、御茶をば、小督の御方と申す上﨟女房、年廿六になりけるが、眉目形(みめかたち)美麗に、膚殊に淸らかなるが、雪の如くなる生絹の帷子に、赤地の錦の腰卷し、藤色の褊裰を著、笋の如くなる手に、濃紫の幅紗を取持ちて、御茶を點じければ、御通をば年の程廿二三・二十計りの女房迄、七八人斜ならず美しきが、傍も耀く計りなる出立に、蘭麝の匂を散せしかば、夭々たる桃花の、雨に綻び、嫋々たる柳の、風に順へるが如し。一度笑む眸には、玄都千株の花、色を恥ぢて、枝を辭し、徐に步める姿には、洞庭萬里の月光を讓りて、雲に隱れつべし。錦繡の袂より、妙に散る匂は、曉の梅、紛々た

な氣を洩らすが如く、こぼれ懸りたる鬢の端れより、幽に見ゆる顏は、秋の雲、既望の月を吐出すに似たり。　毛嬙・西施も面を恥づる計りなれば、明の兩使も、えならぬ有樣に興を促し、水殿雲廊別添置と、陸氏が賦せし鄴宮の詩も思召れ、旅懷望鄉の念を、忘る計りに忝く存じ奉る由、何れも不言の唇にて、感じ合へり。　諸大臣を御勝手迄召集められ、種々の御菓を下され、茶童友阿彌予前にて、御茶を下されけり。其後、書院に御出ありて、御酒宴始まり、律歌の響、融々洩々たり。　さる程に、六月廿五日、大明の兩使謝用梓・徐一貫、歸朝致すべき旨申上げければ、翌日、名物の御酒・珍奇の御肴、種々調へつゝ、懇意なる上意にて、民部卿法印長束・大藏大輔正家・寺澤志摩守・友阿彌を遣されければ、明使も忝き次第、御請申しけり。　同廿八日、大明兩使歸帆致すべき旨、仰出さる。　卽ち秀吉公より、生絹・摺箔無上の帷子二重づつ、辻花帷子十重づつ、淺黃表紋上品の帷子二十づつ、船中慰の挽茶三壺、眞極上五十斤入一・切割の旗二本・白米五百俵・酒百樽・鷹・鷗二百羽・雞二百羽、明の兩使に下されければ、謝用梓・徐一貫御禮として、登城致しけるに、山の里にて、將軍御對面ありしか

ば、明使鵠立拱手して、種々恩賜過分至極の旨、誠を盡し能立ちし體、應對進退の體流石大國のしるし、大樣なる風儀、言語を絶ふる計りなり。秀吉公より大明へ、報酬の爲め、內藤飛驒如安をも、兩使に添へて遣さる。其上今度、加藤清正、擒へし朝鮮の兩王子、竝に從臣等を、赦し歸すべき旨、朝鮮在陣の增田・石田・大谷等・小西方へ御朱印到來せしかば、長盛・吉隆・三成・行長等、喜悅の眉を開き、清正が大功を空しくする念願、滿足せりと頭を上げ〱、笑壺に入りてぞ居たりける。卽ち御朱印を主計頭に見せければ、清正が憤りを押へながら、是非に及ばず。上意に隨ひ、俘へし臨海君・順和君兩王子、皆王城に歸入り給ふ。朝鮮王李昖も、義州を出でゝ、王城に還幸なりければ、いつしか兩年の間に、荒果てし故宮の體を見給ふに、日本の軍兵等入替りて、久しく住ひし事なれば、百官禮儀を守りし丹墀には、玉階の飾引破られ、美人脂粉を專とせし金屋には、鏡匳の器空しく殘れり。爰彼に隱居せし公卿大臣は、吾先々に來集り、方々に忍び給ひし后妃・官女は、車を促して歸參しければ、冠冕列二南殿臺一、粉黛滿二北闕砌一。階下も庭上もさゞめき渡りて、再び春に遇ふが如し。朝鮮

一州の萬民、掌を合せ、悦ばずといふ者なし。沈惟敬が業にて、國家無爲になりぬとて、朝鮮帝王より、勅使日々に重り、百官・諸侯之を貴びて、朝暮の音書隙なし。堂上には、賓客舞遊び、樽中に酒空しからず。只惟敬が門前、日々に市をなせり。惟敬大に悦びて、先づ使者を以て、此由、石司馬に申達す。司馬聞きて、喜悦の眉を開き、希代の大功を樹てたる事を、明帝聞召し、其才能を擧げて、遊擊職に任じ、大祿を授けしかば、惟敬が富貴、肩を並ぶる者なく、朝鮮にも大明にも、羨む人なければ、群徒輿馬、傍を耀てぞ見えたりける。

大友義統改易

豐後大友并波田等御改易

大明へ和談決定の爲め、内藤飛騨守如安を遣されければ、其返事到來なき間は、朝鮮の日本勢引取るべからざる旨、急度仰遣されければ、諸大將陣々を固め、大明の返事、内藤如安が歸參を待居ける。今度平壤表にて小西行長籠城の時、大友義統、之を助けず、直に王城へ逃入り候事、將軍大方ならず御腹立あり。御使福原右馬助・熊谷内

藏助を下され、朝鮮在陣の諸大將に、仰付けらるゝ趣に曰、

一、先手の城々に、有之者、及難儀の折節、爲可相助、絆の城々拵置、人數を入置候儀、其段何れも存の前なり。然に小西が急難、百死一生なりと雖も、不及助、剰へ平壤の樣子をも、不聞合、逃崩事、前代未聞の仕立、不及是非候事。

一、秀吉若年の合戰なれば、日本の爲、旁一涯可盡粉骨處に、武名にも不恥、忠義の心もなかりし事、爲武士上絕言語事也。向後之爲、一命を可被果儀なりと雖も、右大將賴朝公より、久しく傳へし高家を、可斷絕も、聊道理に違ふ樣に覺候。死罪を宥畢。能武士の上を以て吟味し、悔前非可申事。

一、天正半の頃、大友事、島津と挑合戰、勝負區々により、其方へ加勢を尤、更に可相救因もなく、年頃書狀を取替候事も雖無之、弓矢取身之習、否と申さんも、侍の道如何なれば、早速令出勢、彼凶徒等、爲可追散。卽令支度之處に、此方下知をも不相待、其使者仙石權兵衞を相伴、於戶淸水遂合戰、剰へ越度を取の仕合、且は淺智故、島津が謀に落入られ、及敗北。且は弱者故、戰ふまじき所を不

宥得して及一戰、大友先祖の恥を、後代に殘す事、其罪不可勝計。殊數年拵置候居城へも、不取入、妙見龍王へ北入事、古今稀なる臆病家の瑕瑾、世々に盡まじき事。

一、連々城を拵置候事は、大敵襲來之節、當座の患難を遁れんが爲、又は家老等、謀反仕時、暫相籠、其難儀を延くが爲也。斯樣の事をも不顧、居城の功を空せん事、尤恥しき事に候。雖然、國の事、無相違立置し條、其宥免にも不恥、一廉の働もせず、彼是罪科不輕事。

一、諸大名昇殿ありし刻、大友家は、右たる說々も有之由なれども、羽柴の名字を所望の間、卽應其旨候き。勿論加階の儀は、五三人を除候ては高候事。

一、其身の事は、安藝宰相輝元所に預候事。

一、彼子息事、父同前に被仰付候はんづれども、久々近習にありつると云、其身父に替り、驍者といふ、旁以令赦免候。武家を致候はヾ、父の恥頰しく可存の間、公家に被召加候樣に、伺天氣見可申條、長袖に成候て、尤に候。加藤主計

頭清正、預り置扶持方五百人分、可相渡事。

一、大友堪忍分重て、可被仰付事。

一、今度平壤表にて、小西攝津守、數度の合戰、其手柄莫大にして忠義不淺候事。

一、右之條々、其國在陣衆として、彼父子に可申渡候。若秀吉僻事於有之は、可承候。早速改吾過、其宜に可相隨事。

文祿二年五月朔日　秀　吉　在判

高麗在陣中

とぞ遊されける。島津久太郎事、總頭島津兵庫頭義弘、下知に隨はず、船著を好み、逃用意を仕候に付、小西攝津守に御預なされ、又波田參河守も、組の鍋島に、合屬致さず、熊川口に隱居、合戰に加らず。今度都より、總軍引取り候時、道迄出向ひ、其輩と合屬仕るべしと、致候に付、是又黑田甲斐守に、御預なされ、三人共に所帶を沒取せられけり。朝鮮在陣の軍兵共、恐れ慄はずといふ事なし。

朝鮮城郭日本勢之を守る

日本諸軍勢、初より洛中に陣取り、提督李如松、開城府に陣を固めし時、大明より七十萬騎の軍兵、不日に來る由、朝鮮の俘人共、日々に騷ぎしかば、王城より釜山迄、絆の城もなく、全羅・慶尙・兩道に、敵城多くして、一小勢にて往還する者をば、打つて出で討止むるに依りて、都表の日本勢も、疲れ苦しみて、歸鄕の念切なりける所に、小西行長謀にて、大明と日本和談になり、洛中の日本勢、釜山浦へ引取りぬ。然と雖も、朝鮮より人質を出し、御差圖の如く、仕らざるに於ては、又王城を攻取り、夫より大明迄も、押詰むべしとて、重ねて朝鮮國在陣の諸大將へ、一つ書を遣されけり。就中晉州城を最前攻損じたる事、遺恨なれば、釜山浦近邊に、城郭を架へ、暫し人馬を休息させ、諸手一同に、晉州へ取詰め、攻落すべしとの上意なり。即ち軍勢入置くべき城々、仰越さるゝ目錄に曰、

一、釜山浦三箇所の城、安藝宰相秀元一萬七千六十八人、次に熊浦本城小早川侍從

隆景、端城二箇所、久留米侍從秀包・立花柳川侍從宗茂・筑紫上野介・高橋主膳正、次廣島內一箇所、蜂須賀阿波守家政・生駒雅樂頭正俊、同所に一箇所、長曾我部土佐侍從元親・福島左衛門大夫正則・戶田民部少輔吉繁、次に加德島一箇所、九鬼大隅守嘉隆・加藤左馬之助嘉明・菅平右衛門尉・來島出雲守通泰・舍弟德井半右衛門・脇坂中務大輔安治を籠置くべしと、被二仰出一、藤堂佐渡守高虎・堀田安房守氏治・杉若傳三郎・桑山小藤太・同小傳次、二千七百卅二人、番替に被二仰付一、毛利壹岐守・高橋九郎・秋月三郎・島津又〔脫カ〕・伊藤民部等、三千九百八十二人にて、一箇所加藤主計頭清正、二箇所相良宮內少輔、一箇所島津薩摩侍從義弘、一箇所黑田甲斐守長政、一箇所鍋島加賀守直茂、二箇所宗對馬守義智、一箇所小西攝津守行長、一箇所杉浦刑部卿法印・大村新八。一箇所城數十八の內、本城十一・端城七、

右人數合せて七萬八千七百八。

一、右所付無レ之分ハ見計熊浦より西に付て、此書付次第見二計城一可二相定一事。

一、普請の刻、手間可レ入所を見計、人數割付可レ仕事。

一、唐島之儀、晋州の働に不和〔脱アルカ〕蜂須賀阿波守・生駒雅樂頭・長曾我部元親・福島左衛門大夫・戸田民部少輔、並船手之衆とぞ。總手の船を以、相越取固候はば、四國衆として普請仕、船手の者は、加德島へ如書付、可相越事。以上。

文祿二年癸巳五月廿日　御朱印

とぞ書かれける。在陣の諸大將、其用意仕りける所に、又淺野彈正・山中山城守、御使にて渡海し、右の城々、城米の事、仰付けらる。其言曰、

態被御遣候。先書に被仰付候。城々兵糧の奉行福島左衛門大夫・毛利民部大輔に、被仰付、早川主馬頭・毛利兵橘、州有之を兩奉行に引渡、並に鐵炮・同丸藥等、是又人手間の儀、可申付。猶淺野彈正・山中山城守可申也。

五月廿四日　御朱印

とぞ書かれける。諸大將寄合拜見し、御下知の趣、霜臺城州口上に承り、皆々晋州發向の油斷なくぞ急ぎける。

朝鮮征伐記第七　終

朝鮮征伐記第八

朝鮮兩王子書翰を加藤清正に賜ふ

朝鮮王子の書翰

朝鮮兩王子は、去年七月廿四日、法図谷にて、倭將清正に生捕られ給ひし所に、今年五月、大明・朝鮮・日本、三國和平になりつゝ、五月上旬に朝鮮李昖皇帝、義州を出でて、都に還御なり。同月下旬に、兩王子も均臺の囚を脫れ給ひ、二度、都に歸り給ふ。去り乍ら去年より、主計頭清正が情深く勞り奉りし芳心を、淺からず感じ給ひ、一行の御書を認め、清正が臣加藤右馬允に下されける。其詞に云、

朝鮮兩王子臨海君・順和君・兩府夫人・陪官長溪君・上洛君・行護軍大將南兵使等、自壬辰年七月廿四日被虜日本大將軍主計頭清正、入城相見、卽加禮遇、一行下人並給衣糧、撫恤頗至。又稟于

關白殿下到釜山浦、還許放還京城、其慈悲如佛。眞個日本中好人也。況素聞、關白殿下雄傑無比、四隣皆畏之。且善於分別、待隣國王子諸官、存舊意、懸其渡海、使復于京。其恩厚與北海俱深。一行之人、其敢或忘。後日若對日本及主計頭、復發雜談、少有背負之意、非人情也。天地鬼神共知之矣。修好通書寄情事。

萬曆二十年□巳六月初二日　　順和君　　行護軍

臨海君　　南兵使　　長溪君

加藤右馬殿

とぞ書かれける。又王子を預り、守護しける清正が兵九鬼四郎兵衛尉嘉隆にも、同じく御禮の御書を下されければ、主計頭が武勇といひ慈悲といひ、大明・朝鮮に傳へ聞き、稱歎せぬはなかりける。

瀬川采女正妻女艶書

爰に薩摩侍從島津義弘が兵に、小野攝津守といふ者あり。此攝津守に息女あり。

深閨の中に生立ちて、年二八にもなりしかば、容顔甚だ美麗にして、紅顔翠黛は、元來天に禀けし麗質なれば、晨粧を待たずして、其美なる事萬人に勝り、長と均しき髮は、垂柳の水に隨ふが如し。漢の王昭君・唐の楊貴妃は見ねば知らず。斯かる美人も、此世界にありしやと驚く計りなり。桃李の粧・芙蓉の眸いと氣高く、丹華の口付は愛々しくして、天人も斯くやらん。翠の簪・雪の膚、繪に書くとも筆も及び難し、さしも美しき女房の、心さへ情深く、意を暮春の花に隨ひ、詠を中秋の月に寄せしかば、歌の道に心を入れ、筆勢美しく書きなししかば、世の人、傳へ聞かぬはなかりけり。年十七歳の秋、肥前國龍造寺政家の家人瀨川采女正が妻となれり。元來眉目形よきのみならず、意ざま類なかりければ、夫婦の情いと深く、袖の中の珊瑚の珠、掌の上の芙蓉の如し。比翼の床には、鴛鴦の衾を重ね、連理の枕には、共枕樹の昔を慕ひしかば、偕老の契淺からずして、早や七年になりぬ。然るに去年の春、夫の采女正は、主の供して高麗に赴き、早や一年に餘りしかば、彼の妻女別を悲みつゝ、出でやらぬ閨の中に、獨片敷く床の上、胸の烟は富士の峯に靡き、袖の涙は、田子の

浦浪立添ひし思の餘りを、文に細々と書付け、便の船を求めて、朝鮮に遣しけるこそ哀なれ。折節難風吹出でて、彼船浪に摧かれ、積入れし荷博多の浦へ寄來るを、海士人拾上げ見るに、其中を見れば、蒔繪尋常にしたる文箱に、銀の金物に紅の打緒を付け、氣高く結びたりければ、海士共寄集り、吾等如きの賤者の見る物にはあらじと、急ぎ所の奉行に出しければ、代官所請取り、名護屋へ持參し、蒔田權之佐を頼み、差上げければ、將軍秀吉公は、山中山城守を召し、封を切らせ、御覽あるに、取る手も薫る計り匂懐しき薄用に、女の手蹟にて、筆勢美しく書連ねたり。便の船を悦び、思ひの烟を知らせ奉候。閨淋しく片敷く袖の露、床は海、枕は沖の石なれば、乾く間もなき御愛執さ、人目も今は恥こそ御入候へ。それに付けても其許は、明暮弓箭の事繁くて、此方の事をば、白菊のうつろふ色となり給ふらんと恨めしく、身を知る雨いとゞ降増り、何を限りのあだし身、消えやらぬ程も恨めしく候へ。去りながら、彼の小町が、生かまほしきは命なりけりと、詠み置く跡を思ひ合せ、誠に果敢無き命ながらへ、今一度御目に懸り、積る事も晴したく思ひ侍れば、あだなる玉の緒も長か

れとのみ祈る計りにて、御懷しさは中々にこそと、黒み過ぐる迄書續け、奥に一首歌あり。

斯くあるに行衞を知らで賴みつる我心をば誰にかこたん

五月九日、瀨川采女正殿にて、人々申し給へと書留めければ、秀吉公能く〳〵聞召し、文章のやさしさ、筆勢の美しさ、寔に貞女の心中、綣思の程哀れなる事共なり。然らば龍造寺政家方へ、此瀨川采女正を歸させ申すべき旨、御敎書到來せしかば、政家畏り承りて、急ぎ采女正を呼び、早々歸朝仕り、名護屋へ參るべしとの旨下知しければ、瀨川は人の讒言か。如何樣にも思なき事なれば、限なき憂目にか逢ふべきかと案じ煩ひ、名護屋へ參りければ、將軍聞召され、山中山城守を以て、彼文を下され、汝が妻女、戀ひ悲みし文の中を哀に思召すに付、彼妻に逢せ、思ひを晴らさせん爲に召したり。さるにても汝が妻は、優にやさしき女房なりけり。早々國元へ罷歸り、妻女に逢ふべき旨にて、御暇下されしかば、采女正赤面し、軍陣へ主の供仕り、大事の場合にて候へども、上意と申すに付き罷歸候。是は存じ寄らざる事共に

て、尼籠至極に奉存候。直に朝鮮へ渡海仕るべし。中々龍造寺へは罷歸るまじきと申しけるを、山城守承り、尤には候へども、左様に候へば、上意を無に仕候間、理を枉げて古郷へ歸られ候へと、色々異見しければ、采女正、公儀の事是非に及ばず、國本に歸りしかば、彼女房悦びつゝ、夫婦御禮申上候はんやと、夫に問ひしかば、采女正然る可き事にこそとて、夫婦打連れ名護屋に參著し、尼幸藏主を以て、其趣申上げしかば、秀吉公聞召し、奇特なる所存なり。夫婦共に御對面あるべしと、仰出されしかば、妻女如何あるべきとありしを、采女正、上意に任せ奉るべしとて、夫婦同道して、奥の御主殿廂の間迄參候す。采女は少し退りて、將軍の御出を待居たり。彼女房、肌には白き生絹の雪の如くなるに、上には色々の糸にて金絲を交へ、龍田川縫ひたる地燕脂の帷子、衣紋氣高く引繕ひ、打傾きて居たる有様、生年廿三歳、髮のかゝり匂ひやかにあてに、美顔は傍も耀く計りなるに、折節夕日うつろひて、いとゞ色こそ勝りけれ。秀吉公御出ありて、御對面なされ、御懇の仰厚かりけるに、彼女房は幸藏主に向ひ、忝き由靜に申盡し、憚り多く候へどもとて、袂の中より短

冊を取出し、幸藏主に渡す。幸藏主取次ぎ、御前に上げ奉りければ、秀吉公、御手に取らせ給へば、

采女の妻の詠歌

物毎の哀を惠む天津神の心に替る君の正しさ

と、書きたりければ、二三遍繰返し御詠吟ありて、御感少からず。御返歌など下し遊ばされ、其上瀨川にも妻女〔にもノ二字脫カ〕に金銀・小袖等、夥しく御引出物ありければ、忝き旨吳々申上げ、夫婦共に御前を退出し、古郷へ歸り、十日計り逗留し、采女は又朝鮮へぞ渡りける。彼の女房、貞心無二の夫を思ふ心まめやかなる故に、天津神も惠を垂れ給ひ、俄に惡風起り、船を覆し、彼文を將軍御覽に入れけると、情ある人々取沙汰しければ、傍なる若者共、さるにても彼女の爲には、大なる幸なれども、文を流さんとて、佛神の、惡風を起し船を覆し給へば、迷惑は船頭共なりといへば、又脇より、荒夷の指出神も色をば好まるゝにや、東北の諷に、色にぞ御神めでしと謠ひぬ。

下司の取沙汰

新古今には、待賢門院堀川、大和の方より熊野へ詣で侍りけるに、春日へ參るべき由の夢を見たりけれども、後に參らんと思ひて、罷過ぎにけるを、歸り侍りける

時、託宣し給ひて、歌に

人知れず今や〳〵と千早振神さぶる迄君を戀ふまで

と、書載せたるを見れば、兎角神佛も此道は嫌にてはなしといふ所に、上杉中納言家人蓼根日向守といふ兵、さればよ。神計りにも限らず、佛も好み給ふなりといふ。傍輩の三股九兵衞と家康家人の村越茂助と、其坐にありて、日向申す所證據如何にと問ふ。日向守其事なり。萬の經文にも、善男子・善女人とこそ說かれ候へといふ。三股九兵衞扨は形惡き者は佛にはならず、向後後世願ふ事、吾々は止むべしと笑ひければ、一座の人々噇と笑ひて立ちにけり。

晉州落城幷牧使王僧璘討死

小西は和議を主り、三奉行七人の目附一同に和議調ふる由申上げ、大明兩使、名護屋に參り、御和談相調ふと雖も、當春細川越中守・木村常陸介・長谷川藤五郎以下、牧使王僧璘に打負け、晉州より逃歸りし事を口惜く思召ししかば、兎に角に晉州城を踏

安藝秀元渡海

み穎し、牧使が頸を斬り、其上にて和議を調ふべしとて、大明兩使は名護屋に止め置きて、安藝宰相秀元、二萬餘騎にて渡海しつゝ、釜山浦に著き、上意の趣、諸大將に申渡さる。釜山浦の在城、あり付きなば、急ぎ晉州へ押寄すべしと、敷浪に仰付けられしかば、即ち梁山・熊浦に城を拵へ、人數を入置き、五月下旬に諸大將、梁山城に集りつゝ、軍評定して、攻口を定めて請取りつゝ、已に梁山を打立ちけり。晉州城主牧使王僧璘も此由を承り、今度は日本の剛兵、一所になりて寄來る由なれば、實否の大事なりと了簡し、搔楯・逆茂木を引廻し、屈強の手垂・弓・鐵炮を集めつゝ、寄手遲しとぞ待懸けたる。

日本軍諸將の持口

日本勢の先手は、加藤主計頭淸正、續く勢雲霞の如し。一方は毛利安藝宰相秀元を大將にて、小早川筑前侍從隆景・黑田甲斐守長政・淺野彈正少弼長吉・伊達侍從政宗・其外五百騎千騎の大將達、數を盡して向はれける。一方は宇喜多中納言秀家を大將にて、島津兵庫頭義弘・鍋島加賀守直茂・長曾我部土佐侍從元親・蜂須賀阿波守家政・立花左近將監宗茂なり。諸口の寄手都合六萬餘騎にて向はれける。此時大明より、朝鮮へ赴く援兵共引も切らず來り、殊更明の劉綎といふ名將、同

苗の兵五萬餘騎を率し、朝鮮に入り、大丘府に陣を固め、晉州の後巻として、犄角の援勢をなす、就中晉州城、前には大河流れつゝ、松栢影を浸し、碧潭藍に染めなして、青山常に動搖せり。三方は險岨にて、石壁・矢倉丈夫なり。内には牧使王僧擣を大將にて、朝鮮の古兵・屈強の精兵、濯汰たるを二萬餘騎にて、楯籠りたれば、容易く攻め近付くべき様なし。 去れども太閤御下知といひ、又先度の恥を雪がんと憤る諸大將、吾も〳〵と竹束・結橋・熊手・持楯を用意し、西の方は毛利秀元、東は宇喜多秀家、大手は淸正・長政・淺野彈正請取りたり。 中にも主計頭淸正は、小西行長が和談を調へつゝ、淸正が骨を折りて生捕し、朝鮮の兩王子を、本國に送還する事を易からず口惜く思ひければ、此晉州城を攻崩し、大明・日本の和談破らんと志し、士卒を勵し進みけり。 去る程に寄手諸口の圍の手を合せければ、諸軍一同に攻懸る。 放懸くる大鐵炮・石火矢には、如何なる金城湯池も摧けぬべく覺え、喚き叫ぶ聲々には、天地も打覆す様にぞ覺えける。 城中よりも、弓・鐵炮を調へつゝ、射立て打立て防ぎ戰ふ。寄手の兵も持楯・竹束をつき寄せ〳〵、甲の錣を傾け、鎧の袖を差翳し、手負・死人を

加藤清正力戰

乘越え〱、晝夜怠なく攻付けける程に、加藤清正が寄口は、已に堀涯へ六間に近付きたり。然る所に、淸正町場高みにて、大將陣に然るべき旨に付き、備前中納言殿へ渡し、然るべき由なりければ、其議に定めたり。諸大將、さらば仕寄りを助け申さんと申されけるを、淸正猛き大將なれば、否とよ。合力は入らず候。其手前の仕寄せ最前の如く寄候程は、各仕寄を相止められ候へと斷りつゝ、右手に付けて、次第繰に繰りて、黑田長政が町場を三分二程請取りつゝ、仕寄せける。折節炎天にて、暑氣甚だ熾にして、草もゆるがず照らす日なれば、中々堪へ難き砌なれども、是非此城を揉み崩し、小西が調へし和議を破らんと、根深く思詰めしかば、淸正自身、鎧の上に竹束を負荷ひ、黑汗を流し仕寄りければ、加藤淸兵衞・加藤與左衞門・大木土佐守以下の兵共、面も振らず命も惜まず、淸正と先を爭ひ仕寄せつゝ、濠涯へ付きたりける。すはや能きぞ。埋草を入れよやといふ程こそあれ、淸正が軍兵共、吾先々々と埋草を持ち運び、近邊より家共を毀寄せ、材木・竹・藁・土俵等投入れ〱濠を埋むる。淸正も自身鎧の上に土俵を背負ひ、士卒と同じく働きける。長陣に疲れ炎

天に瘦黑み、土煙と汗にまみれたる有樣を、諸人見及び、大將たる人は、斯くこそあるべけれと、心ある人々は、涙を流さぬはなかりけり。已に早や、晝夜三日には濠を埋め、平地になりしかば、早や龜甲を遣し、石垣に懸付く所を、城中より乾ける薪柴を投落し、焚炬に火を付け、算を散すが如く投げければ、猛火柴に燃付きて、煙地に充滿ち、龜の甲も竹束も、一同に燒立ちければ、火に燒かれ石に打たれ、弓・鐵炮に中りて、手負・討るゝ者數を知らず。清正が兵共惊へ兼ね、一度にばつとぞ引きたりける。清正熟と分別し、數千匹の牛を殺し、生皮を剝ぎ、大なる龜甲を作り、二三十人も內にて働く樣に拵へ、其上を數千枚の牛の生皮にて覆ひて、石に中り、火に遭ひても、燒けざる樣に拵へ、又石垣の下へ詰寄せつゝ、黑田長政手より金堀三人・清正手より挺子遣三人出し合ひ、櫓下の角石を拔きければ、上の櫓傾きけり。城中是に騷ぎて、火箭を射、地雷火を投げ、鐵を湧し酌懸けしかば、其日も乘る事叶はずして、空しく暮れにけり。清正口惜しく思ひつゝ、夜明を待兼ね、陵晨も明放れぬに、總軍鬨を作つて押寄せたり。清正・長政、下知しけるは、味方の者共、櫓下の石垣へ付、其儘石

晉州城一番乘

を拔くならば、上より櫓・石垣共に崩懸り、一人も殘らず、厭に打たれて助るまじ。拔くべき石の長さに較べ、支(つかへ)の柱を切つて、はしばみにかひ、角石を拔くべし。扨其支の柱に大綱を付け、味方は龜甲を二十間も退(しさ)らせ、彼綱を以て、支への柱を引拔かば、矢倉・石垣崩るとも、間隔ちたれば、厭に打たるゝ事あるまじ。其用意して向へとて、兩大將眞先に進めば、加藤與左衞門・加藤清兵衞・栗山備後・黑田美作、吾先々々と龜の甲を押立て、矢倉下の石垣へ詰寄せたり、城中より、指詰め引詰め射立つる事、平砂に霰の散るが如し。清正・長政眼を瞋からし、金堀共を敲廻し、石垣の角石を拔懸け、件の支(つかへ)の柱をかひ、石垣の石を刎落す、されども支の柱あれば、仔細なく見えし所を、加藤・黑田下知して、龜甲を二十間計り退(しさ)らせ、大將二人共に、自身綱に取付く。士共數百人、彌が上に取付きて、曳や〳〵と引く程に、支の柱拔かると均しく、石垣共二三重高き矢倉・塀かけて七八間、只一度にどうと崩れしかば、黑煙虛空に充滿ち、其音千雷の鳴落つが如く、天地を震動す。敵・味方一同に嚔と訇る聲々、山川に響渡り、大地を覆すかと夥し。矢倉・石垣崩れしかば、一番に庄林隼人佐が鶴の紋の旗、竝

森本儀太夫、二番に黒田長政が兵後藤又兵衛・堀久七郎・村上彦右衛門。三番に、清正内飯田角兵衛、主の妙法の旗を投入れつゝ、備を離れて乘入りぬ。總軍の人々之を見て、扨も見事なる見物かなと、聲々に感ずる音、良久しく止まらざりけり。清正之を見て、あれ討たすな兵共とて、高櫓の下へ走上り、爰にて後を屹と見れば、加藤清兵衛・柏原藤五郎・吉村吉左衛門・赤星太郎兵衛・小代下總守・三宅角左衛門六人、續いて馳上る。其後は伊達政宗・片倉小十郎・眞木野大藏丞主從三騎、馬を踏放し、鑓提げて馳來る。其後には清正が兵共、黒田長政が勢と入交り二百騎計り、堀塹ともいはず、我先き／＼と込入り來る。主計が馬簾、切岸の下迄著きたりけるを見て、清正走向ひて、自ら馬簾を押取りて、岸の上に突立ち、總手の一番乘り加藤主計頭なり。續けや／＼と、馬簾を振りて招きしかば、總軍我も／＼と、此口に進み、込入りける。牧使が兵共鬨を合せ、塞り／＼に下合ひて、押つ押れつ防戰ふ事、甚だ以て夥し。弓鐵炮の音・鬨の聲・鑓合・太刀打・攻鼓・喚き叫ぶ聲々、山を拔く計りなり。寄手彌が上に揉合ひ攻上りて、城中にも、爰を先途と防ぎ戰ふ有樣、喩へていはん。

方なし。度々に突いて出で、勝負區々なりしに、西の口毛利宰相秀元二萬餘騎、地形一段高き所なれば、此手の先手小早川隆景、下知せられけるは、大軍大手に付き、此口の軍急にして、城中の勢皆大手へ擧げ擧り、此方には防ぐ勢少しと見えたり。是攻其無備といふ孫子が謀なり。進めや人々とて、隆景六千餘騎、一度に嚾と乘入りける。毛利秀元は、此口の大將なれば、一萬七千餘騎、隆景に押續き、西門を打破り、急に乘入りしかば、三の丸・二の丸の敵共は、一支もせず。弓箭をかなぐり捨て、右往左往に逃迷ふ事、蛛の子を散らすが如し。去れども本丸は堅く持ちて、鐵炮きびしく打出せば、左右なく近付き得ざる所を、小早川が兵野島掃部、揚巢戸に付き、二番に粟屋四郎兵衞・深野平右衞門馳付けたるを、内より鑓・長刀を調へ、散々に突落し、二三間轉びし所へ、大將隆景自身走著き、此口の一番乘隆景にて候ぞ。皆々後の證人に立ち候へと、高らかに名乘り給ふ所へ、野島掃部・粟屋四郎兵衞、こは口惜し、越されけるよと罵りて、主の隆景の上を乘越え、巢戸に取付き、内より射る矢雨の如くなれば、景隆も甲の鞆・鎧にも半弓の矢二つ三つ射立てたれ共、少しも退かず

面も振らず、大音〔あげノ二字脱カ〕て、續け〳〵と、怒り下知せられける所へ、毛利が先手宍戸備前守・冷泉元光・阿曾沼豐前守、旗を投入れ〳〵、一番乘安藝宰相なりと聲々に呼はりけるに、隆景眼を瞋らし、揚巢戸を引破り、乘込めと下知し給ひけるに、隆景の兵佐世甚兵衞、巢戸を引破りしかば、是より隆景の勢は込入りける、大手の勝負は未だ決せざるに、後の高みより、隆景・秀元伯父甥一手になり、大軍にて乘入れば、拒ぐべき樣なくして、城中の兵共、前なる大河へ追落され、上下此川を渡り、向の地へ上らんと、數萬騎の朝鮮人、水に溺れて死する者、數を知らず。牧使王僧璘も前の河へ、落入り、浮きぬ沈みぬ流れしが、漸く取付き岸に上り、藪の中に匿臥したるを、宇喜多中納言秀家の兵岡本權之丞採出し、首を取てけり。大將分の首と覺えて、生捕共に見せければ、紛ふべくもなく、牧使が首なりと申しければ、諸大將の悦び斜ならず。小西攝津守行長は、和議を司る張本にて、近頃漸く日本より渡海せしが、今朝此表へ押付け、大手は清正・長政・淺野・伊達等攻懸りしかば、小西が勢も、石垣を乘りて城に入り、清正が勢と入合ひつゝ、先を爭ひしが、清正が勢、遂に一番乘に極り、又

清正の軍功

殊に清正が手より、櫓垣を崩し、城中へ攻入りしかば、主計頭が軍功を第一とせり。伊達政宗は、淺野彈正に屬し、名護屋在番の中より拙で、然も小勢にて渡海し、拔群の忠を盡しければ、其後別して、御感狀を下されたり。又西方隆景・秀元、大軍にて攻入れば、首數は諸手に勝れ多かりけり。總の首數二萬五千七百三十一の內、一萬二千三百餘は、隆景・秀元手へぞ討取りける。此晉州は、朝鮮第一の名城なれば、國王都を落ち給ふ時、代々の重寶、箕子より傳へ來りし璽符を納置き給ひしに、灰燼となるこそ、淺増しけれ。晉州を攻落し候旨、連判の註進狀を秀家陣にて相認めしに、黑田甲斐守長政進出でて、櫓を崩せしは清正なりと雖も、一番に城へ乘入しは、某が者後藤又兵衞・堀久七郎・村上彥右衞門にて候と申されければ、諸大將集り、僉議して、

黑田長政と清正の爭論

卽ち長政政手より一番乘仕る由、一つ書に書乘せ、何も判を居ゑられける所へ、加藤清正參り、此文言を讀み、氣色を損じ、此御文章にては、主計加判仕るまじ。仔細は、櫓崩せしも一番乘も、主計が兵共にて候へと、居長高になりいひければ、黑田長政眼に角を立て、いやとよ。櫓を崩せしは貴殿の兵共なり。城へ一番乘せしは吾

等が者後藤又兵衞・堀久七郞・村上彥右衞門なりと申されけるを、諸大將聞きも敢ず、口論は無益、只淸正・長政者共を呼集め、雙方對決然るべきに極りければ、淸正手より森本儀太夫・飯田角兵衞二人、長政手より後藤又兵衞・堀久七郞參りける。諸大將竝居つゝ、上座には、上の御名代備前中納言毛利宰相居給ひけるが、兩方の兵共を呼出し、此城の一番乘は、誰にて候と尋ね給ふ。森本儀太夫は痛手負ひて、戶板に乘せて舁居られ、膝をも立て得ずしてありけるが、手をつき、晉州城石垣はね崩し、一番に乘入候は、淸正內にては某にて候。然れども膝當を鐵炮にて打ちて、轉落ち候處へ、長政御內後藤又兵衞・堀久七郞・村上彥右衞門竝に私傍輩の飯田角兵衞も來候といふ。後藤・堀程りて、森本申上ぐる如く、儀太夫猩々緋の羽織に孔雀の尾腰差仕り、一番に乘り候處、紛れなく候。去り乍手負ひ轉落ち候處へ、拙者共竝に飯田角兵衞、出合頭に乘上り候といふ。飯田角兵衞申しけるは、何も申上ぐる如く、森本一番に乘上り、手負落ち候迄へ、後藤・堀・村上・拙者四人乘上候。但し後藤又兵衞は、吾等に二足早く乘上り候を、吾等續いて後藤が上帶取つて引居ゑ、妙法の旗を投入れ、加藤

朝鮮諸大將の首を日本に送る

主計頭内飯田角兵衞一番乘と名乘り候を、後藤又兵衞腹を立て、一番乘は甲斐守内後藤又兵衞・堀久七郎・村上彥右衞門ぞ。汝名乘り直せ。さらずば差違へんと怒候故、主計頭手にては、飯田角兵衞一番乘、長政御手にては、貴殿達なりと申候故、彼等返答もなく候に付、吾等は先へ乘込み、一番首取つて罷出候處へ、長政御乘込み、卽ち吾等高名を御目に懸け、名乘り申候へば、御褒美なされ候ひき。此段長政御覺なさるべしといふに付、諸大將皆一同に感ぜられける。森本儀太夫痛手負ひ、立居さへ不自由なれども、若し後藤又兵衞が申分惡くば、指違へんと志し、脇差に手を懸け、眼を瞋らし、後藤が右の膝近くにじり寄りたれば、諸大將は、あはやと見給ひけるに、又兵衞申分相違なければ、清正も喜悅の眉を開き、註進狀認直し、晉州一番乘、殊に石垣はね崩し、大功を抽で候は加藤主計頭、主計内の一番乘は森本儀太夫、二番乘は後藤又兵衞・堀久七郎・飯田角兵衞、其内一番首は飯田角兵衞、殊に妙法の旗を投入れ、一番乘りと名乘候由、書き認め、又牧使が首を始め、劉夢山・李山祖・光顏以下大將分の首十三、鹽漬に致し、日本へ渡し、太閤の御實檢に備へ、秀吉公大に感

悦し給ひ、此首共を都へ上せ、洛中を渡され、獄門に懸られけり。清正・長政も陣所へ歸り、今度一番に乘込みし兵共に加增を遣し、感狀を出し、石垣刎崩したる足輕共も、二百石宛所領を出し、侍にぞ召仕はれける。秀吉公は、晉州落城したるを、類なく喜び給ひ、諸大將へも銘々に御感狀下され、中にも加藤清正一番乘仕る旨、委細に聞召され、別して御感狀を下されけり。

今度牧使居城晉州、以二總軍勢一攻崩候處、其方事、名譽也奇功仕出、石垣刎落、一番乘仕段、粉骨の至被二思召一候。其上家來森本儀太夫・飯田角兵衛無二比類一働、不レ可二勝計一、義太夫の儀は、義理の義之字、角兵衛之角は、覺之覺字可レ爲候。總て主計頭事、冗良哈・兀高麗・傳奏館・安南府にて之働、無二油斷一精入候。卽爲二御褒美一、正宗の刀被レ遣候。猶淺野・長束可レ申者也。

七月三日　秀吉御朱印

加藤主計頭殿

とぞ書き給ひける。此後、諸大將歸朝して、晉州の功をぞ物語せしに、黑田甲斐守

進出でて、長政より先へ、城へ入る者あるまじといひけるを、清正さらぬ顔に持てなし、我が郎等の飯田角兵衞には、城のどこもとにて言を替し給ひたるや。角兵衞、一番に乘込み、首一つ取つて出づるとて、長政に行逢ひ、言を替しける證據あれば、何條長政を先登とすべきと、恥しめけるを、黑田取敢ず、大將分に、吾等より先あるまじと申されければ、清正打笑ひ、餘の手は知らず、大手より自身の先登は、自分たるべしと申しける。實も大將自身手を碎かざれば、名城を早速に乘落す事なるまじと、晉州の働をば、稱歎せぬはなかりける。

閑山島船軍并來島出雲守通泰討死

諸將釜山に引返す

晉州城、事故なく攻落し、日本勢六萬餘騎一手になり、三日路與迄相働き、方々の殘黨を攻崩し、悉く撫切にし、夫より釜山浦へ引返す。加藤清正は、西生浦に城を構へ、一の手先を固め、其次靖化城には、毛利壹岐守・高橋・秋月・伊東・島津を大將にて在城す。登萊には、美濃衆在城せり。之は釜山浦より、四日路東北の間なり。釜山浦よ

諸將の誓約

り西の手先は、小西攝津守、順天に城を構へ、釜山浦迄七日路が間、日本勢持續きたり。扨又、最前御下知の通り、船手の衆一手になり、唐島を取囲むべしとて、熊川浦の湊にて船揃あり。内々聞えけるは、朝鮮の元均大將にて、高麗中の溢者共數萬騎、彼島に陣取り、日本往還の妨をなす由、披露すれば、討手の兵共も、是が一大事の軍なるべし。彼島は、日本淡路の國の大さにて、松柏生繁りたる深山なり。船を左右なく寄せ難しと、口々に評定す。去り乍ら向の地形惡く、敵剛しとて戰はざれば、いつ勝負すべきぞ。運を天に任せて、只押渡して攻潰せと、戸田民部少輔・福島左衛門大夫頻に進めば、皆吾も〳〵と打立ちけり。頃は文祿二年六月廿三日の夜通に、押渡るべしと極め、互に助合ふべし。拔駈・出拔、仕るべからずと誓文・神下などして、諸大將血判相濟みけり。戸田民部少輔吉繁は、潜に家人眞鍋五郎右衛門尉貞成を呼寄せ、囁きけるは、今度唐島を取る事、初中後の一大事なれば、是非魁して、拔群の忠を抽んと思ひしかども、互に靈社の誓紙仕る上は、矢竹に思へども叶はず。其方は吾名代に、今宵潜に此湊を出で、唐島へ先を懸くべし。彼島には、元均大將にて、數

萬の溢者共陣取るなれば、沖には、さぞ番船多くあらん。若し沖中にて、礒と敵の船に行逢へば、火を二つ立てて、早々漕戻せ。さあらば、此方も押切つて後詰すべし。必ず〳〵不覺すなと、懇に囁きければ、眞鍋、畏り候とて、さらぬ體にて、己が船に歸り、碇を上げば類船に知らるべしと思ひ、引碇といふ物にして、船子二三人踞りながら艫を押し、廿三日の夜の戌の刻に、潛に熊川浦の湊を出でにけり。數萬騎陣取りたる敵地へ、眞鍋が船一艘にて押渡るとも、やはか利あるまじと思へば、偏に討死と志し、漕げや急げと罵りて、唐島指して漕渡る。是をば知らずして、諸大將は皆一同に纜を解き、廿三日の夜の亥の刻の終に、熊川浦の湊を押出す。福島左衞門大夫正則・戶田民部少輔吉繁・蜂須賀阿波守家政・長曾我部土佐侍從元親・生駒雅樂頭正俊・脇坂中務大輔安治・藤堂佐渡守高虎・九鬼大隅守嘉隆・鍋島加賀守直茂・同信濃守勝茂・來島出雲守通泰・德井半右衞門尉義通・加藤左馬助嘉明・島津薩摩侍從義弘、兵船數百船漕連れ、唐島指して押向ふ。眞鍋五郞右衞門は、主の民部少輔が下知に任せ、先陣に進みしが、沖中にては、敵の番船一艘も行逢はず、心安く唐島に著きけ

諸軍勢唐島に向ふ

眞鍋貞成の先登

れば、廿三夜の月、山の端に幽なれども、島は生繁り、濱涯船著暗くして、分明に見分定まらず。敵は大軍にて、矢筈を取り筒先を並べ、浪打涯に控へたるらん。左右なく船は近付け難しとて、沖一町程に船を浮べ、島の體を窺ひ居たりける。眞鍋が家人片山太郎助進出で、其船より下り、海を游ぎ、浪打涯迄參り、島の體を物見仕るべし。敵見付け、射立候はゞ、水中を潛り罷戻るべしといふ。眞鍋さらば游ぎて見來れ。不覺すなとて、船より下す。片山、裸にて海に飛入り、浪に紛れ陸に游著き、頭計り浪間に出し、陸の體を見れども、更に人音なし。さらばと思ひて、浪打涯へ這上り、手をつきて雲透に窺ひ見れども、敵一人もなし。只夜半の嵐に誘ひて、寄來る浪の音高く、木綿附鳥の音もせず、明行く鐘の響もなし。婆鳥の浮れ聲、渚の衝音信れて、磯の松風颯々たり。偖は能きぞと心得、立上り、裸にて濱より山へ上り、近所走廻れども、彌々人なし。急ぎ游戻り、主に斯くと告げければ、眞鍋悦びつゝ、甲の緒を締直し、馬共海へ追下し〳〵、船に引付け游がせ、皆々鎧・指物、指堅め、若しも敵の隱れ居る事もこそあれ、油斷すな兵共と下知して、馬の足立程にて、ひた〳〵

と乘移り、手勢百八十餘り、喚いて陸へ駈上りたり。されども彌〻敵もなければ、船をも押著け、悉く唐島へ打上る。磯近く小高き山ありければ、其山へ眞鍋取上り、陣取る所に、海上より船一艘押切りて來り、すはや敵よと見る所に、物言ふ聲日本人なれば、眞鍋人を遣し、誰人にて候ぞ。此島の先陣は、戸田民部少輔が内眞鍋五郎右衛門尉貞成仕りて、陣を固めて罷在るなりと、事々しく名乘らせければ、彼船より答へて云、蜂須賀阿波守が内森進頭にて候。眞鍋殿にて候か。それへ參りて御目に懸るべしとて、頓て彼島へ上りける。元來知人なれば、一所に陣取る。眞鍋は先陣せしを後陣の味方に知らせんとて、大旗三本小山の上に立て、其下にて大篝二三箇所焼かせ、火の光にて旗の紋見る樣にとて、近邊の木を切寄せ、山の如くに焼きたりける。諸大將の船共も押續きて著しかども、眞鍋が篝を敵の篝と心得、沖二三町に船を懸け置き、軍評議す。福島左衛門大夫正則、心きゝたる大將なれば、小船に乘り漕廻り、島山生繋り、船場暗くして見え分かず。敵如何樣の手段せしも知れず候間、夜明けて船を著けられ候へと、諸軍を觸廻りける所に、陸の小山にて焼く

篝火の明に、旗三本見えたり。能く〳〵見れば、矢筈の紋の旗なり。あはや戸田民部少輔が旗なるは、先陣遮されたる悔しさよとて、日本の兵船千二十餘艘、一同に唐島へ著きて、總軍一度に打上ぐる。明る廿四日より、總軍勢一手になり、鹿狩をする如くに、唐島を立切りて、北の端より南迄、山を探る程に、三日目には、唐島を殘らず南端迄押通す。されども敵といふ者は一人もなし。皆々逃げ騷ぐ鳥共射殺し、中々思懸けざる慰して、島の南へ押出し見れば、島先より沖へ著けて、閑山島の瀬戸口迄、千艘計りの敵船浮み見えたり。すはや敵よとて、島の山鼻に陣を居ゑ、日本の軍兵寄集り、番船と對陣せり。されども敵船は、事々しき大船にて、中々寄付くべき體もなければ、徒に見渡して、數日を送る。敵は大船を五艘・十艘宛、磯を漕廻り、陸の勢へ棒火矢・大筒などを打懸け、毎日々々矢軍をすり懸けけれども、此方より爲すべき樣なし。兎やせん角くやあらましと僉議して、二十日計り徒に睨合ひ、安然として居たりける。七月十三日に、又件の番船共十艘計り、磯を漕廻り、棒火矢など打懸けし中に、一艘持離になりて、後を漕ぎける番船ありけるを、加藤左馬助手

船四五艘にて、追懸けたり。彼の番船より、散々に防ぎけるを、左馬助痿まず、打鈎をかけ、已に乘込らんとす。陸の諸軍勢、あれや〳〵と罵る内に、打鈎の綱切れて、番船は漕ぎ延び、左馬助は本の陣へ歸る。扨も嘉明は、大膽なるかな。あの大船を乘取るべしと、心懸けける不敵さよと、嘲笑ふ聲、少時止ざりけり。さるにても此體にて、只差置くべきにあらず、如何せんと評議を擬す。七月十四日の夜に入り、諸大將、何も毛利豐前守陣所へ集り、番船を乘取るべしとの評議を極む、折節釜山浦城主毛利宰相秀元より、大樽二十荷・折肴など相調へ、淺口彥左衞門尉友俊を使者にて、見舞に差越し給ひしかば、卽ち豐前守所にて披露し、いみじき饗應、事濟みけり。されば、番船を乘取るべき、互の所存を仰せられ候へと、九鬼大隅守申出しければ、何も辭合うて、評議遲々なはりし所に、藤堂和泉守高虎・九鬼大隅守いひけるは、明日も先づ物見の疾船共を出し、番船の樣子聞屆け、大船を押寄せ〳〵、大筒・石火矢にて打痿め、其後乘捕りなば、宜しくあるべきかとなり。何も承り、此儀然るべく候はんや。さりとも御横目衆は、如何思召候ぞとありしかば、是れ又、同じ事に存ずる由

加藤嘉明敵船を乘取らんとす

諸將評定

藤堂高虎九鬼嘉隆の意見

嘉明の意見

脇坂安治の意見

申定めけり。然る所に、加藤左馬助進出で、各々一同して、右の趣然るべしと相定められ候を、斯く申せば、多分の評議に相從ふべしとの申定を、違背の樣に罷成れども、存じ寄りし事を申さねば、將軍の御爲疎なり。如何あらんといひし時、横目中聞屆けられ、いや〳〵豫ねて定も、宜を取爲すべきにこそあれ。兩人の存分に隨えて、宜しき事のなかるべきにもあらず。疾く〳〵御申候へしとなり。左馬助、さらば申しみんとて、瀨戸口に番船數千艘並居たるとも、大船を揃へ、大筒・石火矢を以て、鳴込まんとせば、又此浦をも逃去るべし。唯船軍を挑むとの事にてあらば、中船を以て會釋ひ、此方を弱氣に見せ、能き圖を計り、噇と乘取りなば、宜しくあるべしといふ。滿座の人々、是は猶も一理あり。何もさあるべしと思ふ體もあり。又吾いひ出したるよりは增したれども、あの小股のに中船にて會釋せなば、昨日の打綸懸けたる體にては、即時に乘取るべう覺え、九鬼・藤堂は、一向同心なき有樣なりしかば、脇坂中務大輔安治申して云、左樣に御相談各なにては、實のとも益なし。只多分に相極め然るべしとなり。此言に付きて、何も左馬助指圖を請けぬ氣色多かりしかば、

左馬助重ねて、されば候。陸の勢は去年より、當夏迄數十度の働ありけるに、船手の者はさもなく、敵船を見度す毎に、大筒・石火矢にて威しいなすると、將軍聞召されん事必定なり。若し御尋ある時は、評議の上にて、何も多分に隨ひ、番船を威いなせ候旨、各〻は御返答候とも、此嘉明に於ては、得こそ申すまじけれと、眼をいらゝげて謂はれし時、藤堂・脇坂、横目中に對し申されけるは、此評議は安く、大事にて候。此船軍仕損じなば、敵彌〻驕り、日本への通路不自由になるべし。然る間、大事の談合にて侍るとなり。横目中にも、此儀に同じたる氣色見えしかば、又、左馬助いひけるは、番船を見ては、追ひいなせ〳〵致す時は、大明界迄も追行く事にてあるべきなり。將軍の御下知にも、徒者唐島・閑山島にありて、日本通路を妨ぎ候間、一々狩出し、攻干せとこそ御座候ひつれ、若し順風に任せ、行方知らず落行く事もあらば、大事の敵を討遁し、千悔すとも益なかるべし。一度も二度も敵船に懲たる人は兎も角もあれ、軍の道は其期に臨んで、御下知を用ひざる事も所に依てある事なり。番船を威しいなせんとの談合には、一向同心すまじきと、眼に角を立て、理強に訇り

ければ、脇坂たまらぬ男にて、己一人が談合に乘らざれば、此軍はなるまじきか、大きな申分する忙者かな。多分に付けとの御定を、一人して申破らんとは、事なかしき次第なり。武勇といひ器量といひ、己に誰か劣るべきぞや。細頸打落してくれん者をといふ。左馬助聞も敢ず、首を落すか落さるゝか、手並を見せんといふまゝに、二尺七寸の正宗の太刀提げて、立つ所に、脇坂中書も太刀拔きかけ、懸つて見よとて、進みければ、諸大將各兩人の間に入り、之は勿體なし。先づ靜まり候へと、口々に意見をなす。加藤左馬助は知らぬ體に持てなし、人そばへなる事はすまじく候、御心安かれとて、其體穩かなり。毛利豐前守、亭主の事なれば、挨拶を申しける樣は、斯樣なる評議は、何時も損益を爭ふ事、必ずの事なり。今日のみに限らざる事に候。何ともあれかし、將軍は能き人を持ち給ひしぞかし。異國にて、斯く君の御爲を、命にかけて爭ひ給ふは、大切なる各なり。いざ酒出して、船軍の祝せんとて、又酒肴出し、彼方・此方と盃度々廻り、左馬助と中書と和談してけり。斯くて船軍の儀、大隅中出さる樣にと、滿座所望ありしかば、九鬼、さらば御理に任せ候はんとて、

相定めし如く、先づ明朝、早船二艘宛出し、瀬戸口の體を見切り、大船・中船の用捨は、其時に臨みて、相定められ然るべしとありければ、誰もいなむ形勢もなく、此儀に定まり、其夜の評定は果てにけり。各陣々へ立歸り、船拵し、明日の用意、兎せよ角せよと、口々に訇る內に夜も更け、鷄の聲々打しきりしかば、何れもいざゝし給へとて、船に取乘り、總軍勢押出しけり。程なく瀬戸口近き浦に著きけり。斯かりける所に、藤堂佐渡守高虎、心逸き者なれば、先を人にせられじ、番船を取らんと志し、夜半時分より、潛に船を乘出し、手勢二千餘、手船五十餘艘にて、唐島の磯に浮きたる敵の番船へ、ひた〳〵と乘移る。藤堂が運や强かりけん、見せ船の體にて、水子・梶取計りなれば、藤堂新七・山岡兵部少輔・藤堂仁右衞門尉押付け〳〵、番船百二十餘艘乘取り、此勢に瀬戸口の浦々放火し、首百計り取つて、手勢殘らず陸に上り、少時息を續ぐ、後に續きたる味方の兵船共、之を見て、吾劣らじと船を乘付け〳〵、逃ぐる番船を追懸け、百餘艘乘取る。七人の横目諸大將、殘りなく陸に上り、此由日本へ註進すべしとて、船手の大將達並に横目中集りて、今日の働き、藤堂一番に番船

百餘艘乘取り、諸手へも百餘艘乘取り候旨、一紙の狀に載せ、各連判し、早船を以て註進申上ぐべしと評議し、各連判せらる。此時加藤左馬助は、未だ遲かりければ、藤堂・脇坂、人を走らし、早々是へ參らるべし。番船見え候間、乘取るべしといひ遣る。其內早や、藤堂手並に諸手軍始て二百餘艘、番船を取り、註進の連判狀書く所へ、左馬助來り、是迄も未だ今朝番船を取りたるを知らざりけるが、註進狀の表にて見及ぶ、左馬助、藤堂以下の諸大將に出拔かれたると、口惜く無念類なければ、潜に座敷を立ち、用所調ふ體に持てなし、黑川七右衛門といふ者を呼び、言含めけるは、向に見ゆる番船を乘取るべき間、手船二十餘艘計り、急ぎ用意すべしと申遣し、本の座に歸り、さらぬ體にて居けるが、甥の河村權七・家老の佃次郎兵衛以下船に取乘り、押出すを見て、左馬助座を起ちて、船場へ進出でけるを、七人の御目附並に諸大將打見て、使を遣し、左馬助には拔駈をするか。日本を出しより、拔駈爲すべからずとの約束なり。先づ此方へ參られ、連判を加へ、書狀相認めての上にて、談合にて、番船へ又懸るべし。是非來り候へと申遣せども、左馬助は聞かぬ振にて歩行み、迹より追々

に人を走らし、卒爾に懸りて、事ばし仕損じ給ふな。先づ大船を寄せ、大筒を以て打褒めよ。先づ待ち給へと止めければ、左馬助申す樣、若者共吾にも聞かず、卒爾に乘出し、又嘉明自身參りて留申さずんば、中々止るまじ。船を押止めて、夫へ參るべしと言捨てゝ、兵船一艘に取乘り押出す。左馬助が一手の兵共、豫ねてより用意せし事なれば、吾劣らじと追縋うて、先船二十艘計りの船に押竝ぶ頃は、七月十五日辰の刻、殊に其日天氣晴れて、海上靜に白晝の事なれば、二里計りの沖に、朝鮮の李統制、大船四十餘艘飾立て、斥候の船とし、其後に一里計り隔てゝ、同勢の元均大將にて、大船數萬艘、幾重ともなく乘浮ぶれば、味方の小勢にて懸らん樣はなかりける。左馬助先船は、判園右衞門・藪與左衞門・東勘右衞門・宮川三郎左衞門・戶田三郎四郎・平野忠右衞門・河村權七・土方長兵衞・佃次郎兵衞・中島勝右衞門等なりけるが、脇坂中書が物見船二艘、番船より二十町も此方に浮びたりけるを、左馬助が先船共、いざあの早船は、脇坂殿母衣の衆と見えたりしぞ。一所になるべしとて、艣を早め、頓て押竝べたりける所へ、主の左馬助が船一艘、鳥の飛ぶ如く押切つて來り、跡に追縋う

閑山島沖の合戰

て、供の兵船共、や聲を出し、吾劣らじと押立て來り、左馬助は艪を早めしかば、漸く圍右衞門・宮川・佃・河村が二十艘の船、二三町もあらんと覺しき時、左馬助自身艪張に突立上り、馬印を以て、ひたと振りけるを、先手の船打見て、漕戻候へとの事か、又懸り候へとの事かと、區々なりしに、舛圍右衞門申す樣、くどき事を各はいふ者かな。戻れとならば馬印を振込み給ふべし。敵の方へ振出し給ふは、懸れとの事ぞ。先づ、艪を直せと眼を瞋らし、船子共に下知して犇きける。左馬助彌〻近くなるに隨ひて、大音聲を揚げ、北より三番目の船を乘取るべしと、其分心得候へとて、身を揉みて急ぎける。左馬助が船に押續き、家人佃次郎兵衞・舛圍右衞門・河村權七等、船を押浮べ〱、喚き叫んで進み行く。朝鮮の大船四十餘、船の内より、石適といふ者の船一船、左馬助が船に押向ふ。斯く見ると均しく、四十餘艘の番船共、眞手なりに左馬助が艪を押包んで、半弓を以て、押詰め引詰め射立つ事、車軸を流す雨の如し。左馬助は鎧も著ず、廣袖の朋衣染の帷子計りに、澁手巾にて鉢卷し、指揮を振ひて、敵船との物際五間・六間には過ぎざるぞ。心を靜めて、仇矢なき樣に鐵炮を打てと、自

沫を噛み、大音揚げて下知をなす。嘉明が小性共承り候とて、鐵炮を一同に放立て、鬨を噇と揚げたりける。見る内に敵船の弓者・船子共、將棊倒に二十八計り、𦨞々と打倒され、是に痿みて艣を引き、弓をも引かず遽てける時、左馬助大の眼に角を立て、やれ船を押付よ。やれ著けよと聲を怒らかし身を揉みて、透間もなく下知したりければ、水手共一涯精を出し、大肌脱になり、汗水を流し漕付けたれ共、猶遲かりければ、左馬助自身艣を取りて、曳々聲を出し押付くる。弓・鐵炮を調へ待懸けたる所へ、自身一番に乘移らんとするを、左馬助が船頭、あの中へ直肌にて甲も著けず乘入り給んには、やはか助り給ふべきかと存じつゝ、取外したる振にて、態と艣を押外し、船少廻りける内に、押續きたる佃二郎兵衛が船、敵船に押竝べ、一番乘り佃二郎兵衛と名乘りて、敵船へ乘上る所を、待受けたる敵共二三人、立懸つて拂ひければ、二郎兵衛雨の腕を小手ぐるみに強く打たれ、海中へ落入り沈みけるが、其儘浮上りけるを、船頭、佃が甲を抓みて引上げたり。左馬助眼を瞋らかし、身を揉みて、何と臆したるぞと、船を押付け、十文字の鑓にて、船を打懸け、引寄せつゝ、左馬助一番

乘と名乘りて、自身乘移らんとするを、加藤忠二郎といふ小性、十六歳になりけるが、主を討せじと、番船に取付き乘移る所を、敵三人下合ひて、疊み懸けて切りければ、忠二郎終に切落され、海中へ沈みけり。無慚といふも愚なり。左馬助、自身乘移れば、甥の川村權七・劍岡右衞門等飛入りて戰ふ。左馬助も氷の如くなる太刀引拔き、雷の樣に振りて、向ふ敵四五人切伏せしかば、殘る敵共、船を捨てゝ、海に飛入り〳〵、游ぎて遁ぐるもあり、海に沈むもあり。左馬助先立つて乘入る上は、士卒いかで臆すべき、吾先と敵の船共へ乘付け〳〵、思ひ〳〵に戰ひて乘込めば、番船、戰兼ねて、十艘計り取られ、殘三十艘は、押切つて同勢の番船へ北加りける。後に控へたる日本の諸大將、左馬助に出拔かれたるを無念に思ひ、面々手船へ乘移り、吾よ人よと句る聲々夥し。左馬助は、乘取る番船十艘計り、大綱付けて引かせつゝ、漕戻りけるを見て、諸大將の船共、彌〻怒をなし、會釋もなく、同勢に控へたる數萬艘の番船を乘取んと、吾先に船を早め、押浮べ〳〵出來る。中にも脇坂中務大輔安治・來島出雲守通泰・戸田民部・藤堂・蜂須賀の人々押切つて、同勢の番船數萬艘の中へ、眞一文

字にぞ懸りける。加藤左馬助は、さるにても今朝藤堂に先を懸けさせ、口惜く思ひ、憤猶止ざりければ、諸大將の眼前にて、今一軍して、己が武勇を見せんと志し、眞先に浮びたる第一の番船へ、又押立てゝ懸りける。朝鮮の兵共、先の負軍に憤りて、左馬助が船を乘取らんと、相懸りに漕廻り、弓・鐵炮にて射立つ事、甚だ以て夥し。左馬助怒り罵りて、船を押付けたるに、萩作右衛門、打鈎を以て番船へかけたりしを、敵切拂ひ〳〵、二三度したりしを、大將左馬助も鈎をかけて乘入らんとゝ、心は剛に勇みけれども、矢二つ三つ中りて、其身も叶はねば、船端に蹈汰り、海中へ陷入りけるが、元來早業にて、落ち樣に船の舳先に取付き、浮きぬ沈みぬ見えけるを、水手共下合ひて、左馬助が帶を抓みて引揚げ、船中へ投入れたり。萩作右衛門之を見て、一番乘は吾なりとて、眞先に乘入りけるを、左馬助も起上り、物々しやといふ儘に、續いて二番に乘入りければ、宮川三郎右衛門・戸田三郎四郎も續いて乘入りけり。河村權七・土方長兵衛も左馬助に續きて乘移る。佃次郎兵衛・東勘右衛門・藪與左衛門・中島勝右衛門も敵船三艘乘取りけり。左馬助が乘移し船には、敵一人も見えず。何方

安治の奮戰

へ散りたるらんと、踏板を上げ見れば、敵は船底に打入り、半弓をたぶ〳〵と引設けて、待懸けたり。何ともなすべき樣なくして、皆々ためらひけるを、大將左馬助眼を瞋らかし、そこ除け、吾入らんと進みけるを、土方長兵衞眞先に飛入りしかば、左馬助何れも皆飛入り、海へ切浸し、艫舳に廻りて切拂ひしかば、敵は弓を捨て海へ入り、或は沈み或は討たれ、大方盡しけり。左馬助は、左の股を裏表へ射貫かれ、血の流るゝ事瀧の如し。されども物ともせず、乘取りたる船共下知しける所へ、鍋島信濃守勝茂一番に乘付け、扨も命知らずかなと、高聲に譽めければ、左馬助朱になり乍ら、昨日の言に違はず、敵の大船共、嘉明自身乘取り候は、今日の働如何見給ひたるやと、自讃して立たる形勢、夜叉・羅刹の怒る如し。かゝる所へ、脇坂も乘付けしかば、左馬助大音揚げ、嘉明が乘取りたる空船澤山に候ぞ。急ぎ乘移りて、大の忠節に將軍へ註進候へ。油斷し給なと呼びければ、脇坂も物を言はず怒り悶え、討死して、左馬助に見せよ兵共とて、敵の番船の中へ破つて入り來る。來島出雲守通泰も、脇坂に先立たんと懸りける。朝鮮人、船軍には馴れたり。船自由にて、半弓は上手な

來島通泰討死

安治敗軍

り。差詰め引詰め射ける間、日本人手負・死人數を知らず。中々番船に寄付く事はならず、やたけに逸れども、味方の小船にて、敵の數萬艘の大船を、取るべき樣ぞなかりける。藤堂・蜂須賀・九鬼・長曾我部・戸田・生駒の諸大將の船共、引色に見えけるを、見て、朝鮮の兵共勝つに乘つて、日本の船へ乘移り、散々に攻めしかば、來島出雲守通泰討死せられければ、此手の船多く取られけり。脇坂中書も、今は最後と思切り、敵の眞中へ破入つて、火水になりて戰ふ。されども脇坂が小勢、敵の大勢に叶ふべき樣あらざれば、射伏せられて、働く事を得ざる體を見て、朝鮮人、脇坂が船へ乘移り乘移り攻戰ひ、味方の兵共過半手負ひて、面を向く者は少し。船端に近付く者をば、取つて海へ入れ、船底にある者をば押伏せ〳〵首を取りしかば、脇坂が兵共、散々に打負け、風に順ひて逃行く。脇坂中書も爰にて討死すべしと、思切つて防戰ふ有樣、喩へん方はなかりける。敵次第に馳加りしかば、叶ふべしとは見えず。脇坂船に搖られ、立得ざりければ、甲を脱捨て、船耳に腰を懸け、太刀を拔いて、面も振らず、命も惜まず戰ひ、こは口惜き次第かな。爰にて討死せよと訇れども、士卒過半討

れ、旣に危く見えし所へ、家老・家子引立て、爰にて討死なさゝれば、犬死同前たり。岸へ上せ給ひ、吾等殘りて討死すべしと諫めて、無理に抱止めて岸へ上げけり。脇坂乘移らんと齒嚙すれども、船次第に隔てば、士卒の討るゝを見乍ら、齒を嚙み淚を流し、是非なく止りけり。殘る船押切つて、左馬助が乘浮べ控へたる方へ北ぐもあり。又小島へ追ひ上げられ、船を取るもあり。跡より朝鮮船、棒・火矢を射懸け、逃ぐるを追ふ事甚だ急なり。脇坂が船大將眞鍋右馬允貞可は、今日の負軍我一人と、口惜く思ひければ、船を著け、小島へ飛上り、鎧脫捨て、腹十文字に搔切り、傍に伏したりければ、郎等の眞鍋伊之助介錯して、其刀にて腹搔切つて、同じ枕に伏したりける。哀なる事どもなり。村上彥右衞門尉義淸は、兒來島出雲守討死したるを見て、其敵の番船退きけるを、彥右衞門乘付けける。二番船より、差詰め引詰め射立て、彥右衞門甲の鍬鎧にも矢三つ四つ中り、家人・手負・死人數輩これ有り。已に討死せんと見えけるを、波淘しの三文字傍折敷に書きたる船印を、加藤左馬助見付け、來島雲州が一門たるべしとて、自船を乘付け、彥右衞門が船を打鈎にてかけ止めたれば、彥

島津義弘奮戰

諸將嘉明の功を賞す

嘉明高虎と爭論

右衛門無念ながら、涙を押へ止りけり。敵の番船、脇坂・來島が船を乘取り、勝つに乘れば、味方の船共、臆して進得ず。島津薩摩侍從義弘、此體を見て、手船共集めて、下知しけるは、番船を取る事なかれ。只番船の眞中を乘破りて、彼方へ通るべし。打つとも射るとも痿むべからず。敵に中をさせぬやうにと下知して、島津が船共、縱横に乘破りければ、朝鮮の番船も是に疲れて、閑山島へ引退く。日本勢も終日の船軍に草臥れて、漕戻し岸へ上る。七人御目附太閤へ註進すべしとて、今日の次第を書載せ、諸大將へ見せければ、此表の軍功、左馬助に如くはなしと、各心服しけり、藤堂佐渡守、今晩一番に唐島へ付け、番船を乘取ると雖も、敵さまで無かりければ、難儀なる事なし。左馬助は白晝に、敵の大船を揃へて待懸けたる所を乘取る條、比類なき働なりと、異口同音に申されけるに、藤堂佐渡守後に著坐し、任他今日の先陣一番の働は、論ずるに及ばず、高虎にて候間、左樣に御註進あるべしと、居長高になり申しける。加藤左馬助、深手負ひて鎧櫃に倚居たりけるが、此由を聞きも敢ず、座中へ進み出で、太刀を拔懸け、大の眼を瞋らし、藤堂をはつたと睨み、大音揚げ、

七人の御目附・諸大將一同に、嘉明が今日の働、一番とも先陣とも唱へ方なしとて、御註進の連判相調ふ所に、今曉各船を拾ひたる計にて、其方が一番の働とは、中々いはする事にてなし。今日の第一の戰功、此嘉明を除けて、當手の内に誰とかせん、重ねて論する者ならば、藤堂が首は只一太刀と、思切つたる形勢、頭の髮逆に上り、眼の光炬に向ふ如くなり。藤堂たまらぬ嗚呼の者にて、先陣か一番か、人々存知し給ふべし、あら事々しの左馬助が有樣かな。頭を刎ぬるか刎ねらるゝか、手並を見せんと立上る。左馬助も立上り、懸つて見よと進みけるを、鍋島信濃守は藤堂を抱止め、戶川肥後守・蜂須賀阿波守は、左馬助を抱止め、戶田民部・福島左門衞大夫等眞中に破入り、勿體なき次第なり。先づ靜り給ふべし、戰場の甲乙は、古より論する習ひ、無益の同士軍は不忠不義なりと、滿座の人々立騒ぎ、達つて諫めければ、其時兩方靜まり、互に後日の働にて、甲乙を極むべしとて、怒を押へ止りけり。兎に角に今日の手柄は、加藤左馬助に極りければ、日本への註進も、是を以第一とせり。

安治衆軍を諭す

脇坂中務大輔安治は、今度の不覺一身の恥辱と思極むる上に、片腕と賴切つたる家老共を

目前に討たせ、我身も半死半生に切りなされ、本陣に引返し、面目なき次第なり。腹を切らんと、頻に申されけるを、七人の御目附抱止め、太閤へ註進仕候間、御意の左右を相待たるべしとて、無理に押へて働かせねば、脇坂是非に及ばず。涙を流し切齒して居ける所に、大閤御直書到來し、左馬助が拔羣の働論ずるに及ばず。脇坂が振舞も實勇士の極なり。實異國を征伐するには、斯樣に粉骨せずんば、爭か勝利を得んや。勝敗交らずば良將にあらず、一度の敗軍を憤り、自害せんといふ事、全く中書が器量に似合はず。一度は勝ち一度は負くる事、兵家の習なり。強ちに憤るべからず。彌〻軍忠を抽づべしと、其感狀尤も深かりければ、脇坂上意を承り、忝と悦び、義を金石に比して、命を塵芥よりも輕くせり。左馬助が手柄、脇坂がが剛氣、何も劣らぬ猛將なりと、譽めぬ人こそなかりけれ。抑此唐島と申すは、朝鮮の東洋なり。昔日神功皇后、三韓御征伐の時、高麗王は吾日本の狗なりと、皇后自ら弓の弭にて、石壁に書付け給ひし所なり。今に至りて、其石壁に文字鮮に殘りければ、諸大將殘なく羣集して、宸筆の跡を拜み奉り、武運顯達をぞ祈念せられける。唐島事故なく

攻取りしかば、二箇所城郭を構へ、一箇所には蜂須賀阿波守家政・生駒雅樂頭正俊、六千九百にて在城す。一箇所は福島左衛門大夫正則・戸田民部少輔吉家・長曾我部元親、七千四百餘にて楯籠りける。之より日本往還の自由妨げなく、朝鮮在陣の味方、悦ぶ事斜ならず。

大明加勢諸大將王城を守護す

朝鮮船手の大將元均・李純信、舟師を統率して、閑山島の前洋にて、船戰は牛角にしたりと雖も、日本の兵船、雲霞の如く、後より襲來れば、元均防戰の術を失ひて、番船を押し入れしかば、唐島近邊は、日本勢ならずといふ事なし。朝鮮國王は、五月初、王城に還幸なりて、未だ兩月を經ずして、晉州落城し、閑山島船軍おりしかば、國王大に驚き給ひ、急を大明の諸大將に告げ、又明京へも使節を遣し、援兵を乞ひ給ふ時に、吳惟忠は善山府にあり、劉綎は大丘府に屯し、騎參將は南原を固め、李如松は猶開城府に陣しけるが、各兵を率して、王城を取られじと、都近邊の要害に陣を

固め、援勢をなす。日本勢は初より、王城に入るべき心あらざれば、全羅道を治めて釜山浦に歸る。提督之を見て、沈惟敬が和議の偽なる事を責問ひけれども、惟敬一言の返答に及ばず。又釜山浦に行き、小西攝津守に逢ひつゝ、約束の違ひたる事をかこちけるに、小西却て惟敬を責めて云、汝和議調ふと雖、大明の兵、日々に朝鮮に入る事引も切らず。是吾を欺くと怒り、小西飛驒守如安をも大明へ遣すべからずと留置き、兵糧を運び城郭を構へ、大明の軍兵盡く引去れば、如安を遣すべしと申しければ、惟敬宜と思ひ、又王城に來り、大明加勢の諸大將に向ひ、兵を引ひて歸れといふ。明の諸將は、君命を承りて出し日より、剽倭といふ事を聞いて、師を班つといふ事を聞かずと、申しければ、惟敬是非に及ばず、使者を以て、此旨石司馬が許に告げ、朝廷の勅詔を待ち居たり。

將軍名護屋に於て瓜畑御遊覽
附提督李如松、大明へ歸る

將軍さしも憤り思召ける晉州城、晝夜七日に攻落し、大將牧使が首、日本へ渡りしかば、秀吉公御感悅大方ならず。清正・長政・政宗等に御感狀下され、隆景・秀元・秀家へ御腰物・御馬に御直書を相添へ、御褒美少からず。朝鮮在陣の諸大將、喜悅の眉を開き、前度の恥を雪ぎたりと、勇誇る事夥し。斯くて名護屋にては、御陣年月を經て、諸大名苦勞少からずと、痛く思召し、御城近邊に瓜畑の山庄仰付けられ、異形の出立にて、諸大將と同じく、時の興を催し給ひ、方十二三町の畑に四邊に茶屋を立て、杉垣・蘆垣・苫葺に輕々と構へ、御馬廻の近習は、蒔田權之助・三上與三郎・尼子三郎左衞門・山崎右京進・中江式部少輔・上田主水・古田織部・羽柴下總守・富左近・山中山城守・戶田武藏守・新庄駿河守・長谷川右兵衞尉等二十人計り選出し、彼等を茶屋・旅籠屋の亭主となし、茶屋・旅籠屋の女房には、御簾中にて召仕はるゝ上﨟・女房達を三十餘人勝り出し、假粧美しく、髮氣高く結ひなし、傍も輝き、目も迷ふ計りに飾立て、何れも白生絹の帷子に、紅の襟裏打ち、大紋の緞子、赤地の錦の前掛・唐紅の打緒襷なり。年長けし者は、茶屋の妻女に爲し、廿二三歲計り十七八なるをば、人止

秀吉商人に假粧

女に作立て、門の邊に跰る往還の商人を、手を取りて呼入る體、さながら旅宿に異ならず。さらでだに絕に勝たる容色に、錦繡を裝ひ、薫香を散らし、華やかなる衣裳・衣紋、美く引繕ひ、匂なども移る計りに薫かしめ、四方の嵐の吹く度に、香を懷しく薫ひ來れば、心たど〳〵しく浮れ、媛に餘る計りの黑髮を、優に氣高く結ひなしたる髮の端より、玉の如くなる顏は、只時雨の雲間より、秋の月を吐出せるが如し。事に觸れ打あるさま、物言ひたる氣粧、此世の類とは見えず。只天人の天降りかとぞ覺えける。夭々たる桃花の曉の露を含み、嫋々たる柳の夕の嵐に隨ふが如し。巫山老神女、雲となりし夢の面影、玉妃の大眞院を出でし春の媚を殘せり。又御扈從衆の中より、容顏美麗なるを二十餘人選出し、墨筆・書物・短尺・色紙・香具等の商人に作立て、眞紅の連翦・蒔繪の笈箱、色々の小袖風流を盡し、其品々紛ふべくもなく見えたるに、錦の裏・紅の緖付きたる菅笠傾けたれば、金谷千樹の花を此處に移し、銀漢萬里の月、地に下るかと疑はる。吉野の櫻・龍田の紅葉、何れを分けていひ難し。將軍秀吉公は、商人になり給ひ、柿帷子を召され、藁の腰蓑・黑き布頭巾・破れたる菅笠

家康と魚屋

景勝と鮭賣

秀勝と讀瓜屋

常眞と禪僧

利家と高野聖

氏郷と茶屋

德善院と比丘尼

にて、名物の瓜を呼立て賣通り給ふ體、少しも違ふ所なき商人なり。江戸大納言家康は、魚商人になり給ひ、大樣に肴召候へと賣り給ふ體、よく商人に似たりける。越後中納言景勝は、鮭·鹽引鱒の魚賣に入れて賣り給ふ。國本の名物なれば、賣つきづきしく見えたりける。丹羽中納言秀勝は、讀瓜を荷ひて、かりもりの瓜召し候へと呼び給へども、年若人なれば、其樣似ざりけるも亦可笑しく見えける。尾張內府入道常眞は、遍參の禪僧になり、本包に書物入れ背負ひ給へども、蛇に衣を著せたる樣にて、殊勝氣には見えざりける。加賀大納言利家は、高野聖になり、笈を肩に懸け、宿々と聲を長く引き給ふ體、左もあるべくぞ見えける、蒲生飛驒守氏郷·煎茶屋になりつゝ、將軍へ極上の茶を立て進上し、代を强く乞ひ給ひしも、一興ありてぞ覺えける。津川三松は、赤き半帷子の上に、羽織り、弦召になり、織田有樂は修行者になり給ひ、有馬中務法印は、有馬の池坊になり、湯文を說き廻り、湯の功德を事々しく言立てしも、興ありて、げに能き作意かなと覺えたる。德善院玄以は、比丘尼になりしが、勢高く、肥りたる入道の惡體なる顏にて、只念佛を常に唱ふれば、必ず佛に

なる事疑なし。去り乍ら先づ此世を一番がけに大事に思ひ、來世の事は付たりに召れ候へ。餘りに後世を願ひ過ぐれば、極樂を行過ぎ、さいたら畠へ參り候ぞ。念佛もむつかしく候はゞ、思ふ樣書寐をして、氣を延ばし、只我等如きに、能き物を施與へれば、佛になる事は、鐵炮の丸より早く候といはれければ、茶屋の女郎衆・若き人々、聲を雙へて笑ふ事夥し。細川藤孝入道玄旨・中村式部少輔一氏・堀尾帶刀吉晴は、伊勢り神樂太鼓を荷はせ、宮島になり、笛は長命吉左衛門、小鼓は金春又次郎なり。其外鉢敲・猿引・普化僧・俄盲目・門說經、色々の出立ち、中々言に述べ難し。秀吉公、天才勇略の大器備へ給ひたれば、かゝるばさらの遊び迄も、士卒と共に仕り給ひしかば、日新の功を勵まんと、思はぬ人はなかりける。さる程に朝鮮より、沈惟敬が遣せし使者、大明に著き、天兵、朝鮮を引取らざる故に、和議調ふと雖も、關白兵を收めず、是に依て、晉州の城拔き、閑山島の軍あり。如何にもして、李如松以下の諸大將を勅命を以て引取らざれば、和議調ふまじき旨、石司馬に告げ送る。司馬石星和議の張本なれば、朝廷に申上ぐる。明帝叡信ありて、勅書を朝鮮に下され、諸大將に命じて、兵

を引取らしむ。是に依て、南兵一番に陣拂ひして、朝鮮を立ち明へ歸る。九月に提督の李如松、開城府を出で、王城守護の軍兵、漸々に引歸り、今は王城に殘る守禦の爲の大明勢、纔か三萬六千人なり。朝鮮は猶ほ大丘府に陣取しが、翌年午十月に引いて歸る。此時日本勢、猶釜山浦に充滿たるに、大明の兵盡く引歸りければ、朝鮮人危み恐れて、頻に是を止め、和議は必ず破るべし。二度軍を起し來るべしと歎きければも、李如松は、朝廷の命なれば是非に及ばずとて、九月中旬、城府を立ちければ、朝鮮の金侍郎といふ者、送るに詩を以てして云、

聞說將軍捲レ甲還　　定知伐和是非間　　朝廷若有レ班レ師命

不ニ獨脣盡一齒亦寒

と作れり。去る六月、晉州城落去したる事を、大明天子叡聞ありて、日本人は僞多し。和議調ふと雖も、封號は免すべし。入貢は免すべからずとぞ宣下なされけり。宋經略が惟敬が邪謀を聞いて僞を信ぜし事は、經略の才非るが故なりと、諸人難じければ、宋應昌終に任を止められて、薊遼巡撫の孫養謙を以て代へたり。此人文武

李如松沈惟敬を嘲る

の才智ありて、謀略多し。和議調ふ内に兵を召し、糧を運びて、一戰の上にて日本人を追拂はんと思へり。されども惟敬未だ歸らざれば、實否知れず相待つ所に、胡澤が方より、小西行長、玄蘇・西堂が手迹を送るに、其中に和親の二字あり。顧經略疑ひて、今度日本へ勅使に渡りたる徐一貫・謝用梓の兩人に問ふ。彼等も今度渡海し、關白より多くの賂を給りければ、夷語に爭を止むるを、和親といふと義を變じて申しける。經略、彼兩人を禁めて、入朝せば此二字を謂ふべからずと制しける。幾程なく顧經略、疏を奉りて、此事を論じけるに、朝廷の議と知らず、終に任を停めて去る。扨置くべきにあらざれば、侍郎孫鑛、字は文融といふ人を經略とす。此人文臣なれば、猶ほ惟敬が事を信せず。直に人を遣して、行長に問ひ、小西がいふ所、惟敬が口と少も違はず。扨は疑なしとて、石司馬に語る。石星も元來惟敬を信じたれば、日本使小西飛驒守藤原如安を入朝せしむ。如松が明へ歸陣する時に、惟敬が樣樣の贈物並に花布四十端を携へて行長に贈るに逢ひぬ。如松笑ひていふ。倭は正に寒を恐れ、今是を與ふるは、冠に兵を包ましめ、盜に賞を授くるなり。多くの貨物を

送るのみにあらず、日本人のほしがる書籍をも與へ、又營に日本の旗五本をうけて隱しけり。如松之を聞きて、惟敬を誅せんとす。されども石司馬が委用なれば、私に誅すべきにあらずとて、孫經略に告ぐ。孫鑛も惟敬が爲にだまされて、提督が言を信せず。終に惟敬が邪謀を信じ、誅戮せざりければ、李松も強ひて謂ふべきにあらずとて、明京へぞ歸りける。

朝鮮征伐記第八 終

朝鮮征伐記第九

將軍秀吉公、朝鮮在陣中御書を給ふ 附 薩摩國梅北謀叛

太閤は、肥前名護屋に御坐して、和議の左右を待ち給へども、御使小西飛驒守如安も、大明より歸らず。況んや明帝より兎角の勅答もなし。長陣に草臥れ、各〻油斷すべしと、やるせもなく思召し、八月より毎月、使節を遣し、宇喜多中納言・毛利宰相を先とし、銘々に御書を遣はされ、人々を勇み勵まし給ふ。其書に曰、

急被二仰遣一候。其地城々被レ爲二入置一候武具、竝兵糧、鹽噌雜紙以下、以二帳面一被レ遣候。增田右衞門尉・早川主馬頭手前より請取り、庫に可二入置一候。

一、右帳面の內、炭の事、其地山中にて、柴薪自由に候間、不レ被レ遣候。急度燒かせ候て、城中に積置き、上を土にて塗り候て可レ置候。猶以て、炭を多く燒き候て、冬

になり候はゞ、炬燵を差し候て、下々へ可レ遣候。冷え候て、不レ煩様に可二申付一候。

一、船子共の事、隙明き次第、國へ戻し候て令二休息一、來春可二召寄一候。若し其方に置き候船子、猶在レ之者、船にては冷え候はん間、小屋をさせ可二入置一候。

一、城普請出來候はゞ、其普請衆、一日薪をさせ牧木に仕り、にほの如く城中に積み候て、上を塗り可レ置候。大雪などにて、薪不レ成時の爲めに被二仰付一事也。

八月二日　秀吉御朱印

備前中納言殿

安藝宰相殿

大明和議の左右なかりければ、重ねて普請等、丈夫に仕るべしとの御書遣はさる。其詞に曰く、

其方達、手前居城普請等之儀、度々如レ被二御遣一、彌〻念入丈夫に可二申付一候。大明無事之儀、總別正儀に不二思召一候に付いて、城々被二仰付一各在番候。九州同前に令二覺悟一有付可レ有レ之候。東國北國之者令二在洛一、普請等仕儀に較べ候へば、其地は心

安き儀に候。重ねて諸勢渡海之儀、被二仰付一赤國を初、可レ被レ成二御成敗一候。猶其上、大明御詫言申上げ候はゞ、隨レ其可レ被二仰出一候條、彌々不レ可レ有二油斷一候。猶増田右衞門尉・石田治部少輔可レ申候也。

九月廿三日　秀吉御朱印

朝鮮國在陣衆中

朝鮮在陣の人々の下人、缺落(かけおち)仕るべしと思召し、其が爲め重ねて、御書を遣さる。其趣に曰く、

急度被二仰遣一候。其方家來の者共、自然逐電の族、於レ有レ之者、先々追つて可レ被レ加二御成敗一候條、其通可二申付一候。國本へ用於レ有レ之者、切手を出し可二相越一事、走り候族不レ寄二誰々一、一切不レ可レ拘旨、諸國へ被二仰出一候者也。

閏九月廿六日　秀吉御朱印

朝鮮國在陣衆中

とぞ書かれける。太閤秀吉公御年五十七歲、去年の春より、朝鮮征伐を主り、名護

黒田孝高秀次を諫む

屋にて歳月を送り給ふ。此時、御猶子當關白秀次公廿六歳、天下の讓を受け給ひ、晝夜遊宴を事とし、國家の政務を忘れ、日頃嗜みし武勇の道も、心になければ、六十に近き太閤の御名代に、替れ下らんと、一度も宜はぬこそ淺ましけれ。去年七月、大政所御遠行の時、太閤御上洛ありて、又九月御下向と申しける砌、黒田孝高入道如水、聚樂城へ參り、秀次公を諫めけるは、太閤已に汗馬の勞を積み給ひ、御歳若き時分より、夜は甲を枕とし、鎧の袖を片しき、晝は矢石を冒して馬上に歳月を送り給ひ、今六十に近づき給ふ迄、櫛風沐雨の艱難に身を任せ、名護屋に御馬を立てられ思を朝鮮・大明の事に焦し、工夫を本朝・異域の謀に盡さるゝ事、苦勞粉骨勝げて計るべからず。痛みても痛むべき御事に候はずや。唯恐らくは、日夜の工案肺肝を傷け、瀟灑の瘴氣御身を犯し、御命徒に軍務の勞に迫らん事を。抑御身秀次公は、元來匹夫の愚人にて御座候故、文にもあらず、武にもあらず、何の手柄も忠功もなきを、太閤鍋〔恐カ〕作ら家督に居ゑ、忝くも人臣の位を極め、博陸殿下に至りつゝ、天下の政道を盡にし給ふ事、太閤の御重恩雨山なり。何れの時か、此恩を報いんと思召し候

黒田の諫言痛切を極む

秀次黒田の諫言を用ひず

ぞや。明日にも太閤薨逝し給ひなば、其御家督を嗣ぎ給はん人は、君にあらずして誰ぞや。然るに今、秀吉公の御苦勞、御陣の難苦を餘所に見て、名代に筑紫に下り給はんと思召さゞる事は、恩を知らぬ盜賊なり。不忠といひ不孝といひ、勇氣智謀二つ乍らなし。今日にも思召立ち、御身名護屋に下り、太閤に代り給ひ、朝鮮の指揮を主り、諸軍を下知し給はゞ、天下の萬民、願望の志を遂し、渴仰の頭を傾けずといふ者あるべからず。何の御心もつき給はず、六十に近き太閤を、西戎の地に下し奉り、明暮弓馬の勞をさせ參らせ、御身は京都に樂々と寐ね、翠帳を擡げ紅閨に鼓腹し、數百人の女郎共を愛し、戲を以て常の事とし給ふ事、天道の嫉み人の嘲哢する所なりと、手強く諫め申しけれども、關白秀次公、少しも承引の色なし。武勇を知り給はぬ天子の御身としてだにも、勅使を下され、秀吉、老後の軍勞を勞り給ふに、秀次公少しも心付かず、孝をも忠をも忘れ、淫樂をのみ事とせらるゝは、滅亡の前徵かなとぞ見えし。太閤、名護屋に旗を立て、歲月を送り、朝鮮の儀に心を苦め給ひ、彼の國八箇道の內、三箇道は手に入れ、王城迄押入りしかども、道遠くして

秀吉家康事とゝ謀を議す

兵糧も續かず、大明加勢の兵、日々に重り來れば、諸軍一先づ、釜山浦迄引取り、各士卒を要害に架へ置き、此間の苦勞を休息し、太閤の御下知を待ち、大軍晴然として年月を送り、太閤も、家康・景勝・利家と日々評定を凝し給ひけれども、小を以て大を討つ謀は、敵に向つてはさもありぬべし。萬里の外に大敵を請けて、海上を隔てたる下知は、覺束なき事なれば、奇畫を奉る人もなかりける。黒田如水、垣越に聞いて申しけるは、最前朝鮮入の時、家康・利家兩將の內、一人遣され、萬事一人の下知より出でなば事行るべし。若し兩將を遣さるゝ事、如何に思召さば、軍の道を知りたる此如水を、遣さるれば、謀を以て朝鮮人を懷服すべきに、加藤清正・小西行長猛く勇める若大將にて、其道を知らず、殊に兩人、中惡しければ、行長、法度を出せば清正破り、清正が制札をば、行長用ひざれば、朝鮮の人民賴みなく思ひ、山中へ逃げ隱れ、常に萍梗の思ありて土著の情なし。上下安堵せざれば、日本人の通る忠清・慶尙・黃海の三道は只赤土のみにて、靑草一本もなし。其外、人持の大名に、文武の才幹ある人なし。朝鮮一州亡國となりぬれば、矢長に思ふとも、國弊え民勞れ

て、其功なり難かるべしと、難じ申しければ、將軍實にもと思召し、師羸れ勢屈せば、恐らくは內方の訌出來るべしとて、家康・景勝・利家・氏鄉・淺野彈正を召集めて宣ひけるは、釜山浦に陣取りたる諸大將、長陣に草臥れ、故鄉へ歸りたき意のみにて、兵を進むる氣象なし。然れば、秀吉自身、大軍を率し、朝鮮へ攻め入るべし。船手陸路の人數支度せよと、觸廻すべし。日本の政道は、旣に家康に渡し置けば、秀吉少しも苦勞に思はず、秀吉自身、中陣十萬餘騎を主り、左備十萬は、利家大將とし、右備十萬は氏鄉に司らしめ、旗の手千里に靡かし、大浪を打たせ、朝鮮を眞直に平押に押通り、大明を攻め穎し、秀吉北京の皇帝になるべし。急ぎ陣觸せよと、勇み給ひければ、家康卿、大に氣色を損じ、眼に角を立て、大音揚げて、御諚とも覺えぬ事を、承り候ものかな。家康、若年の昔より、武道を事とし、弓馬を業として、只今に至る迄、數十度の戰に、終に不覺の名を取らず。然るに、太閤御馬を朝鮮に出され、家康日本の御留守仕るべき事、存じも寄らず候ものなり。縱ひ上意、數度下り候とも、本朝に殘り留まるべからず。弓矢八幡も御照覽候へ。大明への先駈は、家康仕

るべしと、血眼になりて申されければ、淺野彈正進み出で、狐の人に取り付く事、珍しからず候へども、未だ目に見たる事なし。去り乍ら、只今將軍、御氣の違ひ候を以て、初て信を取つて候へ。某熟と考へ候に、狐の精將軍の御心に入代り、色々物に狂はせ候ものなり。家康、腹を立て給ふべからず。何れにても直事は候はずと、苦々しく申しければ、將軍、大に御氣色替り、無禮の申分、諫言と雖も無道なり。罷立つと宣ひも敢へず、義廣卿の御太刀を叩き、御座を立つて飛び懸り給ふ所を、利家・氏郷抱き止め奉り、こは物體なき御事かな。先づ御靜まりなされ候へ。彈正をば、吾々成敗仕るべし。君の御太刀を汚され候はん事、中々思ひも寄らざる事なりと、頻に諫め參らせけるに、彈正は、家康・景勝に向つて、少しも懼氣色なく、吾等如き者をば、百人御手討になされ候ても、國家の憂にはならず。抑々去年より日本の軍兵、大半朝鮮に渡り候故、兵糧以下轉漕の費、勝げて計るべからず。貴賤の歎き、上下の傷み、其幾といふ事、中々言には盡し難し。然る上に、將軍亦御進發あらば、上下悲憤し、今日御出船あらば、明日心必ず日本國中一揆の徒黨群り起り、四海

の亂れん事疑ふべからず。誠に武を煩し兵を煩し、古今の禍目前に照然たり。此時、家康智謀を運らし、奇策を勵まされ候とも、一旦の力を以て、俄に四海の亂を平げんや。彼を以て之を思ふに、只無用の征伐を好み給はんよりは、只速に、朝鮮在陣の軍兵を引取り、文道を修し、武を偃むる政をなし給はゞ、國家の泰平、爰に興り、貴賤の歡抃、勝げて計るべからず。然る時は、萬民堂々の化に誇り、四海枕床の所を安んずべし。さあらば、邑富み人樂みて、寔に夏の禹三苗を討ち給ひし古の善政にも、近かるべく候はんか。若し猶、思召止め給はずば、唯長吉が首を刎ねられ、諫爭の道を塞がれ候へと、諫も敢ず、涙をはら〳〵と流しければ、秀吉公、彌〻怒り給ふ事甚しく、鬚髮直に上り、御眼、朱を洒ぎたる如くにて、是非御手討になされんと、頻に大音揚げて罵り給ひけるを、利家・氏卿、將軍の御前に居塞り、彈正をはつたと睨み、何を申上げ候ぞ。罷り立てと怒りければ、其時彈正も御前を退出し、吾が屋敷に歸り、定めて切腹仕るべしとの、上使あるべしと存じ、行水など沙汰し、經帷子を著し、御使あり次第に、切腹せんと待ち居たり。將軍御腹立大方ならざりけるを、

利家・氏郷迄て諫め止め參らせける所に、肥後國より飛脚到來し、薩州住人梅北宮内左衞門、謀叛を起し、一揆共を驅り催し、加藤清正が家老加藤與左衞門が居城佐敷城を攻め、城中難儀に及ぶに付き、梅北に與力する徒黨、雲霞の如く集り候間、御退治下され候へとぞ、注進申し上げける。秀吉公聞召し、家康を召し、急ぎ淺野彈正を連れ、出仕あるべしと仰付けらる。家康、即ち彈正を召具し參られける。將軍御覽なされ、汝が罪科輕からずと雖も、今度梅北が叛逆に付き思當れり。是故に、御赦免を加へられ候間、汝が嫡子左京大夫幸長を大將にて、急ぎ梅北を追討仕るべしと、仰出されければ、彈正喜の涙に咽び、只謹んでぞ候ひける。將軍は家康に向ひ給ひ、左京大夫若年にて、始めて大將承る條、合戰の道不調練たるべし。其方家老本多中務大輔忠勝を、差添へられ遣すべし。即ち是へ本多を召せとて召されける。中務參りければ、將軍御覽なされ、家康へ揖し、中務に仰付けられけるは、今度梅北謀叛に付き、淺野幸長追討の御使に、仰付けられ候へども、若輩、軍道を習はず候間、其方を差添へられ候。其方半八郎といひし昔より、度々の勇功重累し、大剛の譽あれば、

軍中の事、大となく小となく、皆々指圖仕り、幸長を取り飼ふべしと、仰付けられければ、忠勝畏つて、御前を退出し、幸長を相伴ひ、肥後國をさしてぞ急ぎける。

梅北宮内左衛門最後附薩州勢敗る

抑梅北宮内左衛門といふは、薩摩國侍にて、代々和泉・高城二郡にて、名高き士なり。去る天正十五年四月、將軍秀吉公、御發向ありて、島津義久父子降參し、薩州二郡差上げしかば、卽ち和泉・高城二郡、御倉入として、所の侍たれば、此梅北を代官に付け置き給ひけり。其以後、肥後國南郡を、加藤主計頭淸正に下されけるに、彼の梅北が代官所と、國境たるにより、時々、梅北が侍共、地下人と共に、肥後國へ討つて出で、釘野・市の瀨・佐敷・湯津・名木邊を討つて廻り、亂妨狼藉する事、年々に絶間なし。肥後國の百姓共も、往昔より武勇を嗜み、甚だ剛强なる奴原なれば、防ぎ戰ひ、勝負を決し、互に討ちつ討たれつ、迫合へども、終に肥後國の內、一鄕一村も、薩州へ取らるゝ事なし。昔より斯くの如くなる旨、傳へ聞きつゝ、淸正入部の砌より、彼の表

の押として、加藤與左衛門を、佐敷城に入れ置き、専ら薩摩口を押へさせける。されば清正が勇にや恐れけん。近年はさのみ、此方へ討つて出でざりしが、今度朝鮮表に、長々、清正在陣したる隙を窺ひ、薩州の凶徒等、日々夜々討つて出で、湯浦・名本・市の浦・釘野邊犯し奪ひ、放火亂妨甚しきにより、肥後の百姓共、取合ひ防ぎ戰つて、手負死人數十人に餘り、已に難儀せしかば、即ち此旨を、佐敷城へ註進す。佐敷にも、城主加藤與左衛門父子共に、清正に隨ひ、高麗在陣たるにより、留守には、與力の侍安田彌右衛門重定・酒中善左衛門・井上勘兵衛・井上喜左衛門とて、馬乗四騎・歩侍十六人、合せて侍分二十人に過ぎず。足輕百人も、半分は高麗に渡海して、五十人殘り居たる計りなれば、薩摩衆より出づと雖も、防ぐべき術なし。されども、義を見てせざるは勇なきなりとて、四人の與力、代る〲討つて出で、薩州より出づる凶徒等を追散らし、防戰つて、數日を送ると雖も、味方手負・死人、日々に重る故、此由、清正居城熊本留守居の侍共方へ註進し、加勢をぞ乞ひたりける。然りと雖も、佐敷と熊本の間、其路十八里隔てたれば、早速、後詰する事叶はず、兎や角やと日を經た

りける。然るに、和泉・高城二郡の代官、梅北宮内左衛門といふ者、素性剛强にして、大なる志あり。富貴豐饒〔脫アラン〕二の有德なる事、勝げて計るべからず。此故に、俄に謀叛を思立ち、天下を覆さん行を運し。其頃、秀吉公、肥前名護屋に在城なれば、彼の地へ押寄せ、將軍を討ち奉れとて、己が代官下、在々所々に觸れけるに、彼の薩摩國といふは、險阻狹隘にして、山中の固、甚だ宜しく、人の心兇悍にして、死する事を苦まず。此故に、梅北が催促に隨つて、馳集まる事、八千餘人なり。扨は時到りぬと悅び、七月七日、早天に薩州和泉の湊にて船揃して、兵船數百艘に乘せ連ね、押出し、肥後國佐敷の城を取らんと押寄する、佐敷城には、之をば夢にも知らざりける。城代安田彌右衛門下知にて、本城は高山にて、其固、丈夫なればとて、足輕計り差置き、城主與左衛門妻子をば、城の麓へ下し置き、彌右衛門之を守護して、酒井善左衛門と共に、大手口の兩脇にぞ居住したりける。斯かりける所に、七月八日の朝、本丸に置きたる足輕共方より申しけるは、城より西の海手、計石の浦より、小船數百艘沖に浮び、只今計石の濱へ押付け候と告げ來る。安田彌右衛門・井上勘兵衛・酒井善左

衛門・井上彦左衛門、此由を聞き驚きつゝ、本丸へ上り見渡せば、數百艘の小船、雲霞の如く漕ぎ來る。定めて是は此間の註進により、熊本より加勢の來るにてぞあるらんとて、いと騷がす。斯かる中に、件の船共、計石の浦へ著きて、大勢皆打上りしかば、熊本勢にてぞあらん。迎に人を出せとて、四人の與力の方より、人を走らかし見するに、使立ち歸つて、味方にては之なく、薩摩の敵共と見え候と、告げ來る所へ、梅北、使者を以て申しけるは、薩州の和泉・高城に二郡の主梅北宮内左衛門といふ者、天下を切り隨へんと、全大軍にて、此表へ出張する所なり。其城、明け渡すべきなり。亦一戰に及ぶべきなり。兩條、急度返答せしむべしとぞいはせける。酒井・井上等、大に驚き怒り、此上は是非に及ばず、一戰して討死を遂ぐべし。何ぞ此城を明け渡すべきや。此城を枕として、討果つべしと怒りける。爰に城代安田彌右衛門といふは、清和源氏の末孫、甲斐國安田三郎義定が苗胤、代々弓矢の譽ありと雖も、榮落は自ら天の自運なれば、次第に衰へつゝ、本國は江州たりと雖も、牢籠の身となり、此彌右衛門に至つて、僅に二百石の地を領し、加藤與左衛門與力にて

梅北佐敷城に入る

ぞ候ひける。然るに、此人度々、若き時分走り廻り、其戰功隱なし。其頃は年も盛(さかり)すぎけれども、才智甚だ逞しく、勇氣無雙の勇士たり。殘る三人の若共を、はつたと睨み、何をいふぞ。人々味方上下七八十人計りにて、此大敵を防がんに、やはか一時も怺ふべきや。某つくづくと工夫を運すに、一旦、彼に城を渡し、本城へ誘き入れ、そこにて討つべき謀あり。只枉げて吾に任せ置けと、怒りければ、酒井・井上は二十歳内外の若輩故に、老兵の指圖に任せ、如何樣とも宜しき樣にとぞ同じける。安田、大に悅びつゝ、家人を使にて、梅北方へ申しけるは、天下反覆の義兵を揚げられ、當表御著陣の旨、其意を得奉り候。但し當城の儀、第一小軍、第二に侍は立つを先とす。所詮御手に屬し、忠義を抽んで、大身に罷りなるべき覺悟無二に候間、即ち本丸を開渡し參らせ候。急ぎ御入城なさるべく候。此忠節には、御本望達せらるゝの砌、一廉の御加恩仰せられ候へと、申遣しければ、梅北大に悅び、門出よしと獨笑し、されば城を請取り候はんと申しければ、安田彌右衛門承り候とて、城を渡しけり。梅北、本丸へ入りしかば、士卒は城下の町中に官札を打つて、滿ち〳〵たり。斯かりし

かども、梅北、少しも油斷せず、安田以下に對面する事なし。用心嚴しく仕りければ、如何せんと思案しけれ共、爲方なく、酒井善左衞門・井上彦左衞門は、態に暇をして、城をば取られぬる口惜さやと、呟きける。四五日過ぎて、安田彌右衞門、佐敷近邊の百姓の庄屋共を召集め、牛王の裏に、起請文を書かせ、密に囑けるは、梅北が心を和らげん爲に、在々所々の人質を入れ、夫を土産にて、日見を乞ふべし。されば、各を始め、下女にても何にても、妻女・娘に仕立て、吾等方へ差越すべし。さて彼の梅北を討ち濟ましたらば、早鐘を撞き、早太鼓を打つべし。在々一度に起り合ひて、町屋々々に入り込み居たる梅北勢を、手柄次第に討つべし。相構へて漏すべからずと、神水吞ませて歸しけり。之をば知らずして、酒井善左衞門・井上彌兵衞は、如何にもして、梅北を討ち果し、此恥を雪がんというてけるを、安田は、少しも騒がず、左様に各早まるべからず。此奴を討たずば、吾々男はなるまじ。今少し相待つべし。梅北が首を見ん事、十日に過ぐべからずとぞ勇みける。在々所々より、人質も皆集まりしかば、之を安田が家へ入れ置き、扱本丸へ申しけるは、當城御入部

の上は、城付の在々・所々の人質を取り固め、差上げ候はんと存じ、皆私宅へ召集め候間、彌〻御心安く思召し候へ。隨つて吾々、斯樣に忠義を存じ候へども、未だ御目見仕らざる事、所存の外に候間、何とぞ御氣色を伺ひ、御目見仕りたしと、頻に申しければ、梅北も彼等が此間の振舞に、二なき心と悅びつゝ、對面あるべき間、本丸へ出仕然るべしとぞ免しける。安田、大に悅びつゝ、樽肴を用意致し、目見の支度相調へ、扨潛かに、十五六人の步侍・五十人の足輕を手分して、砦々に分け配り、梅北を討ち濟まし、相圖の太鼓次第に、門々を打つて、本丸へ入りたる薩摩者を、片端に討ち果すべしと、色々合圖相極め、其日の暮を待ちたりける。去る程に、入合の鐘響き渡りしかば、安田彌右衛門・井上勘兵衛・酒井善左衛門・井上彥左衛門四人、今宵を最後と出で立ちて、妻子共と盃取り替はし、心細くも本丸へ入る道にて、安田囁きけるは、吾等、盃を傾けて、梅北方へ返しつゝ、今一獻と强ひて、肴を以て立寄るべし。梅北、肴を取る所を、酒井善左衛門初太刀を打つべし。二の太刀は、井上勘兵衛打ち候へ。相構へて遽つべからずとしめし合せ、出仕の威儀を制し、本丸へ入

りにける。安田、豫ねて支度せし事なれば、吾が組下の歩侍の娘に、容顏美麗なる女郎あり。歳廿二になりけるを、美しく作り立て、傍も耀く計りに裝束させ、之を遊女と名付けて、本丸へ召連れたり。扨事の仔細、一々に述べ、酒肴捧げければ、梅北大に悅びつゝ、安田以下四人を、緣側迄召寄せ、一間所を隔てつゝ、奏者にて對面す。四人の輩、皆頭を地に付けつゝ、當城御著陣の段、某等が大悅是に過ぎず。定めて御本望達せらるべき事、程あるまじく存じ奉る旨、一同に一禮せり。梅北、莞爾と打笑ひ、夫々とありしかば、彼の女房の酌にて、頓て酒宴始まりける。梅北が家老物頭は、次の座に伺候し、盃樣々取散らし、亂舞音曲の音融々たり。されども、安田等四人をば、遙の座に置きつゝ、少しも心を弛めざりける故、如何せんと案じ煩ふ內に、夜更け月冷えて、酒宴次第に盛にして、梅北も家人共も、彼の女房の盃にて、彼方此方と呑む程に、前後も知らず醉ひたりける。安田彌右衛門、きつと三人に目加して、さて謹んで申しけるに、御目見仕り、主從の御禮申上ぐるよりは、向後隔心なく、奉公忠勤仕る爲に、君の御盃、四人に下され候へかし。何れも頂戴仕りた

き由、申し上げ候といふ。梅北悦び、さらば、是へとありしかば、彼の女房、盃取り上げ呑みて梅北にさす。梅北は、大酒といひ好色といひ、此盃にめでつゝ、三盃傾けて、安田にさす。安田、席を去つて謹んで之を頂き、一盃呑みて、恐多く候へども、此盃差上げ候間、今一獻召上られ候へとて、梅北に戻しければ、女房、盃取次ぎて、梅北が前に置く。梅北、皆々に色代して、目出度候とて、一つうけ傾けゝる時、安田彌右衛門、さらば御肴上げ候はんとて、青磁の鉢に肴を入れ、脇差扇も拔き置きつゝ丸腰になりて進み出で、今樣の歌、一節かなでて、肴を挾みければ、梅北は大に笑ひつゝ、其肴を取る所を、遙の末座にありける酒非善左衛門、關の兼常一尺八寸の脇差を拔き、走り懸りて梅北が右の顔より腕へかけ、拜打に礑と切る。梅北、是はと驚く所を、透間もなく、非上彌兵衛えたりやおうと走り懸り、左の肩より乳の下迄、切先深く切付くを、梅北、大力の剛の者、物々しやと立上る。安田彌右衛門、つゝと入り、梅北が髻を取り、引寄せて膝の下へ伏せ、懐より七寸の妻手差の匕首を拔き、梅北が直中を前へ、つゝと突拔き二くり三くり繰る中に、非上彥左衛門も居合せて、高

股かけて切落し、終に首を取りたりける。梅北が侍共、之を見ると雖も、飽く迄酒に酔ひたれば、是は〳〵とばかりにて、立ちては轉び、倒れては迯り、周章て騒ぎけるを、安田・井上・酒井等、爰へ追詰め、彼處へ追詰め、三十餘人の侍共、一人も漏さず討ちてけり。合圖の太鼓を鳴しければ、手當せし手共、此處彼處より出合ひて、本丸へ入込みたる梅北が勢八十餘人、一人も漏さず討果し、早鐘を撞き、早太鼓を打立てければ、在々所々の百姓共、雲霞の如く起合ひ、あはや、安田殿の梅北を討ち給ひたるは、是は目出たし。馳け付けよ者共とて、二三萬馳來り、町中に宿陣したる梅北が侍共、八千餘ありけれ共、俄の事にてありければ、具足よ甲よと犇く内に、城の門は閉ぢたり。百姓共は、雲霞の如く寄せ來りしかば、少時防ぎ戰ふと雖も、叶ふべしと見えざる所に、城中より呼びけるは、薩摩の奴原承れ、梅北を討取りたり。之を見よやといふ儘に、宮内左衛門が首を、門櫓より下へ落しければ、薩摩勢、扱は叶はじとて、右往左往に逃げ落つる。百姓共、十重二十重になりて、追懸け〳〵討ちければ、梅北が士卒等疲れ果て、蘆の中・茄子畑なんどへ隠れ居るを、百姓共、

射殺し搶殺し切殺し、後には薪を荷ふ山男なんどを突き殺しける程に、薩摩勢を討取る首、三千七百二十餘なり。殘る勢五千計り、這々薩摩路指して落ちて行く。味方の手柄、申すも中々疎なり。相良郡へも、右の旨聞えければ、佐敷後卷として、加藤與左衞門が留守を助けんとて、侍少々、足輕四百餘人にて、揉みに揉んで駈け付くる所へ、打節薩摩勢の落足へ、出合頭に行逢うたり。互に敵よと、目を懸けて、徐徐と近づく時、相良勢より使を立て、其方は大軍、此方は小勢なり。對揚せん事、思ひも寄らず候間、互に長道具・弓・鐵炮を停止して〔太脫カ〕刀打に參會すべし。其勢多勢にて、必ず長道具・弓・鐵炮を以て勝負せば、無下に侍にあらずといはせければ、薩摩勢承り、尤なり、されば太刀打にて參會せんといふ儘に、互に太刀を拔き、喚き叫んで渡合ふ。元來思切つたる荒夷共、死生知らずに入亂れ、二時計りが間、互に引くなと恥ぢしめて、火炎を出し切合ふ程に、薩州勢討たるゝ事六百八十二人なり。相良勢も、四百人の者共、悉く討たれて、只八人ぞ助かりける。薩州勢は、事の外草臥れしかば、手負を助け、這々故鄕へぞ逃げ入りける。さても今度、安田彌

右衛門が、尺寸の勇略を以て、凶徒を早速退治せし事、古今例少き名譽なりと、稱美の昔、近國に滿ち〳〵たり。さてまた梅北が首をば、酒井善左衛門・井上勘兵衛に持たせ、名護屋御城へ遣すとて、安田申しけるは、兩人何事も、ありの儘に申上ぐべし。謀の調議せしは、安田彌右衛門と申す者、初太刀は酒井善左衛門、二の太刀は井上勘兵衛と申す者にて候と、慥に申上ぐべし。必ず飾り僞り申さば、以來男を立てさすまじ。吾等參るべき事なれども、當城猶大事なれば、殘り居るなりとて、善左衛門・勘兵衛をば出しけり。此旨先立つて聞えければ、將軍より差下されし淺野左京大夫幸長・本多中務忠勝も、熊本城より引返し、名護屋へぞ歸られける。斯かる所へ、酒井善左衛門・井上勘兵衛、梅北が首を差上げしかば、秀吉公、御機嫌斜ならず、家康・利家・景勝・輝元以下の人々を召集め、御主殿にて召出され御對面あり。酒井も井上も、年二十に餘る迄、佐敷といふ片山家にて生立ち、主にも頭にも、加藤與左衛門より外は、見たる事さへなき若輩者共が、將軍の御前へ出でたれば、なじかは動顚せざるべき。今集の御屏風引廻し、大名・小名居並びたる形勢に、怯懼さて、慄ひわ

なゝく事斜ならず。將軍、今度の次第、一々に尋ね仰せられけれども、酒井善左衛門は寒澁なり。井上勘兵衛は、赤面して漸く有増(あらまし)計り申上げけれども、田舍の辭にて其分明ならず。されども、將軍、甚だ感じ給ひ、當座に御加增の知行を、下さるべき所を、家康進み出で給ひ、彼等は清正が家人にて候間、直の御加恩如何候はんや、兎角主計頭歸朝致候はゞ、定めて御恩賞あるべし。其時、清正所存に隨つて、御加恩然るべきかと、申上げられしかば、將軍尤もなり。去れば先づ感狀下さるべしとて、奇代の名譽、武家の龜鑑たる御文言にて、御判居ゑられ、酒井善左衛門・井上勘兵衛・井上彥左衛門・安田彌右衛門と、連狀一紙の御感狀を下されける。酒井・井上物馴れたらましかば、先づ老中又は奉行所へ參り、内々を申合せ、扨御前へ出でたらば、猶以て宜しかるべきを、公儀不案内の夷共なれば、直に御前へ能出でし故、安田が謀略、酒井が勇力、皆言舌の内に隱れ、具に上聞に達せざりけるこそ本意なけれ。御感狀は、四人の内、誰が手に止むべしとありしか共、止め安田彌右衛門なれば、彼が許にぞ止まりける。清正歸朝の後、聞届け大に悅びつゝ、安田彌右衛

門には三百石の加增、本知合せて五百石なり。酒井喜左衛門には、本知二百五十石の上、加增として二千石遣て行はる。是は右太刀仕りたる故なり。二の太刀井上勘兵衛には、本知二百石の上へ、六百石の加增、井上玄左衛門には、三百石の加增、本知合せて五百石充行はれ、四人共に、目錄には、上意として之を加へ下さる、由、清正書かれけるなり。其外、歩侍・足輕共にも、夫々に穿鑿吟味ありて、分々に加增の賞を行はれけり。さてまた梅北亂入るに付き、肥後中にも、逆心の色を立てたる在々所々、數箇所ありけるを、清正穿鑿を遂げ、皆罪科にぞ行はれける。扨も今度梅北が叛逆、大なる志を與し、將軍御在陣近邊にて、不慮に干戈を動かし、邊境を掠奪する事、近年未聞の出來事なり。されば、安田彌右衛門、其身微少なりと雖も、若年より勇士に馴れ昵び、常々謀略の道を尋ね聞き、其上數度の戰場にて駈引き、挑み戰つて、其累功自然に長じける故に、剽悍猛烈の梅北を、半時の間に討亡し、忝くも將軍の御感賞を給はり、名を一天四海に傳へ、譽を千載萬世の後に殘しける事、有難かりし事なりと、譽めぬ人はなかりける。

將軍御歸洛附諸大名上洛

斯かりしかば、將軍秀吉も、久しく邊鄙に在陣する故に、四邊此陣に乘じて、叛逆を企つべき事必定なり。あはれ上洛し、秀次を名代にも下さんと思召し、歸洛の御志萠しけり。然る所に、京都より早打を以て、將軍御寵愛淺からざりし淀の局の御腹に、若君安々と御誕生の旨、申し來りければ、是に氣を得て、大に悅ばせ給ひ、朝鮮の儀は、遊擊、和議を調ふれば、別條あらず。兵糧運送、軍勢の進退、軍國の用は、家康・利家に任せ候間、然るべき樣に裁斷あるべしと、仰せ置かれ、文祿二年八月十四日、秀吉公、名護屋を御立なされ、早船にて御歸洛ありしかば、上杉景勝・蒲生氏鄕を始め、東國大名は一人も殘らず、御供にて上洛しければ、上下の悅斜ならず。同廿五日に、將軍大坂城へ入らせ給ふ。御女中京極松の丸殿、何れも廿七日に御著にて、何方も斜ならず、目出たき聲々、巷に滿ち、京・大坂の往來市の如し。禁中より歸城の儀、叡感に思召され候旨にて、勅使菊亭右大臣晴季御下向、其外、攝家・淸華・諸門跡・卿

若君誕生

東國の諸大名上洛

相雲客の御見廻り諸寺諸山より御悦儀の巻數、方々の捧物、門前に群集せり。

安康府合戰

清正安康府城を攻む

去る八月、將軍名護屋を御立、大坂へ御歸城なされ、九月には、朝鮮在陣の大明勢提督李如松を初、皆大明へ引歸す。日本勢も、沈惟敬が和議を調ふるに成り、皆軍を止めて、釜山浦近邊に城郭を架へ、士卒を休息す。去る七月、秀吉公御使小西飛驒守藤原如安、大明へ入りしかども、兎角の左右もなく、死生の境も知れざりしかば、西生浦に陣取りたる加藤主計頭清正は、内々和議を破りたく思ふ中に、如安が一左右、四箇月迄なかりしかば、扨は殺されたりと思ひ、いつまで斯くて相待つべき。いざや金應瑞が楯籠りたる安康府を、攻め取るべしとて、十一月三日の曙に、清正八千餘騎、安康府城へ押寄す。金應瑞は妙法の旗を見知つて、城外へ出で得ず、矢間配して散々に射る。清正が兵加藤與左衛門・同清兵衛・出田宮内少輔・鶴平次などいふ一騎當千の兵共、胴を傾け鐵の袖を翳し、平攻に攻め入りける所に、其頃大

劉綎安康城を援ふ

明勢悉く引還り、殘りたる兵とては、劉綎計りなるが、其勢二萬餘にて、慶州にあり、此由を聞くと均しく馳付けたり。清正之をば思も寄らず、先勢旗本殘らず城を攻めさせ、吾が身は、安康の町端に、小性四五人、母衣の者三人、馬弓十騎計り、上下百四五十に過ぎざる勢にて控へたるが、此旨見るよりも、城を攻むる勢を呼還さば、其間手延にして叶ふまじ。是に見えたる深田を、備の牢に當て、皆々馬より下り立ちて、折敷鑓衾を作つて待ち請くるを、迚も逃れぬ所なりとて、彼の深田を右になし、眞丸になりて備へたり。劉綎が二萬餘騎、清正を小勢と見てんげれば、なじかはさも躢ぶべき。眞黑になりて馳り來る。清正下知して曰く、五間・十間に引受け、鐵炮を放し立て、其勢に乘じて鑓を入るべし。母衣三騎・小性五人は、吾と一度に突いて懸れ。馬弓十人は、敵の右へ横合に懸り、一矢射ると、弓を捨て、皆太刀にて切り込むべし。一足も退くな。迚も遁れぬ所なりとて、清正竝に母衣・小性とも、僅二十人計り、眞丸になりて、一度に鑓を入れ突いて懸る。馬弓十人得たりや應と鬨を上げ、敵の妻手に廻りつゝ、一矢射ると均しく太刀を引拔き〳〵、喚いて斬つて入る。清

正、眞先に進んで、爰にて討死せんと、脇をも見ず、眞一文字に突き懸り、四武の衝陣座を推き、百戰の勇力爰に應じて、揉み立てしかば、劉綎が大軍、足を立て兼ね、西の深田の中へ、一度にどうと捲り入れられ、馬を倒し友共足に中り、上を下へ持返す。清正、大音聲を揚げ、透間もなく突懸り、押立て〳〵切伏せしかば、劉綎が軍兵共、深田に落入つて、討たるゝ者數を知らず。城を攻め居たる兵共、あはや、旗本に軍始まりたるはとて、城を捲きほぐし、我れ先にと助け來る。加藤與左衞門下知して、安康の町に火をかけたり。頃は仲冬上旬の事なれば、霰交(あられまじり)に吹く〳〵風帶しければ、一同に燒き立て、深田の方へ吹き懸け、闇の如くなりしかば、劉綎が兵、途方にくれ、只一足も助からんと、我れ〳〵に逃げ延びしかば、偶〻返し合する兵の討たれざるはなし。大將劉綎は、堤の上にて返合せ、馬上に鐵炮を持ち控へたる所を、清正、是も馬上に鐵砲を持ち、左に弓手に[illegible]、相[illegible]に放さるゝに、清正が鐵炮早くして、劉綎が左の脇を打貫き、馬より眞逆さまにどうと落つる。清正、之を見て太刀を拔きて、馬より[illegible]けるに、劉綎が[illegible]を見て、[illegible]是、[illegible]

長一長計り隔もて飛びければ、其目影に餘れて、清正眞逆さまに落ちたりける。劉綎が兵二人、透間もなく續き、起しも立てず切りけるを、清正俯に伏しながら、物物しやといふ儘に、なぐり拂ひに拂ひければ、劉綎が兵二人ながら、足を切られ、のつけに返して倒れける。其内に、劉綎をば彼手の郎等數十人返來り、眞丸に打圍んで引取りけり。清正、哀れ大將と思しき者なりしを、打漏らしける事の無念さよと、牙を嚙んで怒りけれども、遙に逃げ延びければ爲方なし。討取る首三千餘懸け並べ、勝鬨を揚げたりける。安康府城も之を見て、搦手指して落行きしも、追討に首三百餘討取り、城中城外盡く燒拂ひ、清正は人數を引率し、松壑山を押通し、西生浦へ打入りける。劉綎は、險地に落入りて數輩の剛兵を討たせ、吾が身も深手を負ひ、慶州へ逃げ歸りて働かず。日本人も、釜山浦に居て、和議の左右を待つのみなり。

清正西生浦に入る

日本の使小西如安、大明禁中に入りて筆談

去る程に、日本よりの御使小西飛驒守如安は、山海萬里の險難を凌ぎ、鴨綠江を渡

り、遼東に入りしかども、日本人は僞誕のみにて、情實測り難しとて、徒に遼東に留め罪かれしが、司馬石星色々奏聞し、游擊・沈惟敬、辯口を以て日本人僞なき旨、詳に情素を述べしかば、十一月十五日、孫經略、人を遣はして、日本の使小西飛驒守如安を招きて入朝せしむ。十二月七日に、如安大明の帝都に入る。石司馬禮待甚だ厚し。日本使禁中に入りて、禮法穩ならぬ使は惡かりなんとて、先づ別館に入れて、如王公待成しけり。同十一日、鴻臚寺に詣で禮を習ひ、十四日に朝見し終り、又文武の臣を會同して、東闕に起つて面譯して、筵禮を給はり、親しく三事を書かしむ。一には、釜山の倭衆、封を請けて後、一人も朝鮮に止り住まず、亦對馬にも住まずして、速に國に還るべし。一には、封の外、別に入貢・互市を求むべからず。一には、朝鮮と好を通じ、倶に屬國となり、再び侵すべからず。此三箇條、小西飛驒、一々合點して自ら書いて差出す。同十七日、司禮監太監張誠傳へて聖諭を承る。天子猶も、倭使小西が言を懇に質して、其情を盡すべしとて之を諭す。秀吉何の爲に朝鮮を侵し掠めたるや、今に釜山にありて退かず、亦徒を率して表を奉りて封を請ふ。其經々

しく與ふべけんや、誠に謨を許し極め、封の名を許すべし。先づ、一官を遣して發聞
くべし。一には行長に諭し、釜山に止住まず、盡く本國に歸らば、釜山の城郭、一字
も殘らず燒拂ふべし。一には朝鮮に諭す、日本人盡く歸國せば、此由奏つて奏聞す
べしとぞ仰せける。小西□東關に於て、文武（の臣脱カ）を會同し、及び科道等の
官を集めて、通辭を以て覿面に問答し、情僞を詳にし、長く他の變なからしむ。是に
依つて、誠に兵を發すの故を問ひ、封を求むるか、侵掠の爲めか、行長が惟敬に與ふる
書を證とすべし。既に釜山に退いて、亦封を乞ふか。屈する故か將いて力屈するに
あらざるか。是は、晋州・唐島・安康の警を證とすべしと、亦問ふ。封を免す後、倭盡
く退かんか、殘り止らんか。今釜山の倭皆あらんか。斯樣の事、一々問詰めて眞僞を
知るべし。倭使の口を以て、郡國を過すべからず。同二十日、石司馬、亦内閣の大學
士趙志皐と、定國公徐文璧と、吏部尙書孫場及び科道官を會集して、左闕に於て、小
西飛驒守が封の始末の情由を詳に極め、逐一に問答す。十一箇條あり。

十一箇條の問答

一、問うて曰く、朝鮮は、是れ天朝恭順の屬國なり。然るに、日本關白、何の故に侵し

破るか。

飛騨守答へて曰く、日本より大明の封を求むるに、朝鮮をして代つて出さしむ。朝鮮不信にして、背じながら大明へ申さず、三年の間、謀詐のみにて、申達せず。剰さへ、日本の僧〔脱アン〕殺し取り候。是に依つて、兵を擧げたり。

一、問うて曰く、朝鮮急を告ぐるに依つて、大明援兵を借す。然らば歸順すべきに、如何ぞ防ぎ拒んで、平壌・開城府・碧蹄の戰あるか。

飛騨守答へて曰く、日本の兵、平壌に往きて封を求めんと欲すれど、云ひ依るべき便なし。少時陣を取つて便を待つ所に、去年の七月寄せ給ふに依つて、思はずに戰を挑む。同八月の末に、行長、沈遊撃と會して、和議を調へしより、平壌に退いて敢へて出でず。然るに、當年、天兵數萬騎にて攻め給ふに、行長拒むに及はず、平壌を開き退く。碧蹄の戰も亦、天兵追ひ來るに依つて之を拒ぐ、其後、王城へ退き歸る。

一、問うて曰く、後來何に依つて、王城を退き還り、王子・陪臣を送り還すか。

飛驒守答へて曰く、一には封の事を調ふるに依つてなり。又は天兵七十萬、既に到るの由を聞く。依つて是に王子を送り還し、亦四道をも天朝へ贈り返し候。

一、問うて曰く、既に王子を送り還し、和議を以て封を求む。如何ぞ亦晉州を侵すか。飛驒守答て曰く、晉州に朝鮮の勢、數多栖籠りて、日本勢の釜山に引く時、討つて出で、清正行長が兵馬を多く殺せり。此仇を報いんが爲めに、晉州を攻め候へども、天兵の到るを見て、即ち釜山に退去す。

一、問うて曰く、再、是入貢を求むる本祟か。汝が亦晉州を侵すに、情形知り難し。故に封を免して貢を免さず。既に封を免す。和議の調をば、國に歸つて命を待つべきに、如何ぞ糧を運び城を搆へ、久しく釜山に屯して去らざるや。飛驒守答へて曰く、最初に封貢倂せ求む。天朝同心なきに依つて、封のみを求めて止みぬ。糧を運び城を搆ふる事は、天朝の使者を守護せん爲めなり。別に求むるなし。使者既に通じて、和議調はゞ、釜山の要害を燃き拂ふべし。

一、問うて曰く、初の和議に三事を（以て脱カ）す。今封を求むる計りなり。汝行長に傳

へて、堅く此旨を守り、釜山の倭戸盡く去り、房屋盡く燒きて、亦朝鮮を侵すべからず。亦別に貢市を求むべからず。汝能く關白・行長が意を知つて、此旨を伺はんか。

飛驒守答へて曰く、行長が孫總督に奉る書ありといふ。一々に命を聞かん。敢て違ふ事有るべからずといへり。此大事行長關白に能く聞いて申せし所なり。反覆する事有るべからず。

一、問うて曰く、汝一時に順納すと雖も、向後能く保つて變易なかるべきか。然らば誓言を立つべし。其上は、速に請ふ所の封を與へん。

飛驒守誓つて曰く、天朝の問ふ所の事、飛驒守藤原如安が答ふる所の説、若し一字の虚言あらば、關白秀吉・行長・飛驒守共に終を能くする事を得ず、子孫盤〔昌殿カ〕する事を得ず。蒼天之を鑒みるあり。眞實誓言の書に載せたり。

一、問うて曰く、爾前にいふ、朝鮮に賴みて封を乞はんと、今既に封を免しつ。敢て亦朝鮮を侵さざれ。但し關白、如を信長に請うて、猶且つ其位を簒へり。矧んや朝

鮮は一時の代奏なれば、必ず亦再び侵すべし。

飛驒守答へて曰く、信長は國王を簒つて立つ。不好の主なり。此故に、明智が爲めに殺さる。今の關白秀吉、信長の仇を報いん爲め、行長等の諸士を引いて、義兵を擧げ明智を誅し、六十六州を合せ持つ。秀吉諸州を平定せずんば、日本の人民、今に至る迄安からんや。

一、問うて曰く、秀吉既に六十六島を平ぐ。八郎自ら王たるべし。如何ぞ來つて亦封を求めんや。

飛驒守答へて曰く、秀吉、目のあたり國王を見、亦明智が如くなる逆臣あるを見て、日本も、朝鮮の如く、天朝の封號あらば、人の心安服して、國家太平なるべしと思ひ殊に來つて封を乞ふといへり。

一、問うて曰く、汝が國、既に天皇と稱し、亦國王と稱す。知らず、天皇、是國王なるや否やを。

飛驒守答へて曰く、天皇は卽ち國王なり。既に信長の爲めに殺さるといへり。

一、問うて曰く、汝既に斯くの如く說く上は、差開して汝が封を發すべし。其事を寫して、倭國へ遣し行長に報じて、關白に申さしめ、冊使の船並に館舍を建て、禮儀を調ふべし。若し無禮の儀あらば封を發すべからず。

飛驒守答へて曰く、此儀を待つ事既に久し。件の儀輕々しくして、天朝の命に踏ふべからずといへり。

以上の問答、石司馬問ひて、飛驒守答ふる所なり。斯くて飛驒守をば、珍膳・美酒・妙藥を調へて、之を持成す事甚だ懇なり。此次に、北京の洛中を見物させよと、勅詔ありしかば、案内者・馳走人群れ隨ひて、洛中洛外を遊覽す。華麗の結構、言語に及ばず、市廛の商賈、七珍萬寶を飾立てしかば、さながら七寶の莊嚴を見るが如し。金殿・紫閣・玉樓・丹墀、檐を交へ、大廈高塔光耀目を奪へり。城外に水銀の池あり。方十八里の花園あり。其經營言語に及ぶべからず。去る程に、封號の一議相調ひしかば、倭使小西飛驒守並に史遊擊同道して、北京を出で日を經て、朝鮮に入り、釜山浦に到る。此旨披露ありければ、日本の兵馬、過半歸朝せり。上下の歡斜ならず。

小西行長一手は、天使守護の爲め釜山浦に止まる。去り乍ら、二十餘箇所の城々は、人數を入置き持固めたり。大明にては、石司馬と、飛驒守が目のあたりに問答し、親書する應對情辭を以て、共に封じて、朝廷に奏問せしかば、天子叡覽ありて、日本國王の冊命、仰付けられけるとぞ聞えし。

伏見城取立御普請

家康大坂に上る

和州 門城普請

朝鮮は、沈惟敬が和議を調ふるに依つて、日本人も、軍を止めて、釜山浦近邊に、城郭を架へ士卒を休息す。朝鮮人は、數年の大亂に疲れ、要害を架へて動かず。大明人も引入りければ、別に御下知を加へらるゝにも及ばず。是に依つて、今年文祿三年甲午の春、肥前國名護屋在番の大名家康・利家を始め、悉く大阪へ上られけり。太閤は、秀賴に天下を讓らんと思召しけれども、關白秀次公、曾て御心付かず、謙讓の沙汰なかりければ、大坂を讓り秀賴を居ゑ、太閤は、和州多門城を取立て、隱居所と定め、普請を始めらる。然れども、此所片脇にて、京・大坂の便に宜しからずと思

召し、木幡伏見に城を架へ、東國・北國の大名、森石垣を請取つて築き立つる、普請奉行は、佐久間河内守・瀧川豐前守・佐藤駿河守・水野龜之助・石尾石見守・竹中貞右衞門尉なり。役人廿五萬人の帳を請取り、普請晝夜を分たず急ぎけり。醍醐の奥・山科・比叡山雲母坂より、大石を引き出す事夥し。東國・北國の大名、森と石垣を割付して請取り、油斷なかりしかば、石垣二重三重出來し、御臺所・長屋・多門矢倉を組立て、ひたく\と造り出す事、怠りなき間、山下の河邊に山を築上げ、諸木を植並べ、枝を爭ふ深山の如し。松栢生茂る中に、御書院の見附に、堂塔伽藍を立並べ、學問所と名づけ、常に御伽衆を召集めらる。珠光・古市播磨守・宗珠・宗悟・紹鷗が風と、千休・北向道珍が茶の湯の流と引合せ、其中の可否を御吟味あり。山里には沈香の長木にて、四疊半の御數寄屋を立てられ、圍爐裏緣は、伽羅・沈香にてありしかば、炭火に當つて、異香衣を染めずといふ事なし。或時は、玉澗夜雨の御掛物に、蕪なしの御花入、せめ紐の釜に、湛水の水指を飾り、或時は、虛堂遺跡の御掛物に、細口の花入、小霰の釜に、新田肩付樂桶の水指を以て、此道好ける大名・小名に、御茶を下され、長

陣の苦勞を休め給ふ。御城より見渡せば、前は宇治川漲り流れ、宇治の里軒を連ね山ともいはず旣にの空の雲間破れ、月はこぼれかゝる樣に差出でしかば、川邊も、一涯潔く、千鳥彼此に音信れ、平等院の島・山吹の瀨・宇治・をちかたうちの藏松・眞木之鉤月・伏見の指月、何れに多き名所なり。巽より引廻し、靑山峨々と聳え、徑に松柏枝を垂れ、其洞に醍醐寺甍を現し、遠寺の晩鐘に心を澄ませり。其嶺に續き、喜撰が嶽竝に三室戶といふ高山峙ち、老松琴を吟じ、夜渡る猿の聲いと侘し。麓なる寺院は、順禮の札打つ觀音堂あり。西は八幡・山崎・狐淀一口より初て、江口・橋本・平瀉邊に到る迄、悠々として、船の上下夕陽に映じて見え渡り、遠浦の歸帆、漁村の夕照、一方ならぬ詠なり。、北は洛中に續き、檐を軋り甍を竝べたる家々、幾重ともなく引廻し、大名・小名の京・伏見への通ひ、誠に巷に充ち滿てり。東は町に添ひつゝ川流れしかば、船著の便目出たく、所柄誠によき御城地なりと、いひあへる聲のみ多かりけり。扨亦、朝鮮表にては、大明よりの冊使延引なる上、朝鮮の凶徒等、城々を圍み、互に寄せつ寄られつ、軍の絕ゆる間もなし。日本勢、長陣に草臥れ、病死する

者多かりける。士卒は擧置きぬ。岐阜中納言秀勝も、疫癘にて逝去し給ひ、東郷侍従秀一・加藤遠江守も病死しぬ。中川右衛門大夫秀政は、卒爾の軍にして、朝鮮人に出拔かれ討死したりける。初百騎にて赴きし者は、五十騎三十騎は、病死する體なれば、相殘る兵共も、いつの日のいつ時か、軍に死ぬか病死するかと、心細く思ひ連らね、氣疲れ心屈しぬれば、彼の松浦さよ姫が、玉津島山に領巾摩りたる體にて、明し暮し歎き悲めり。例もしらぬ異國の住居、いつを限と定めなき行衛の程も、白浪の寄せ來る千鳥の音、枕に近く聞ゆれば、空閨に月入りて、夜の霖靄蒼々たり。何れの日か病付き、魂浮かれ骨空しく、天涯異郷の鬼とならんずらんと、明日の命をも賴まれねば、故郷の空を詠めやり、□思はぬ人もなかりけり。此段將軍聞召され、不便なる次第なりとて、釜山浦城々在番の衆の外は、悉く歸朝すべしとて、書立を遣さる。各渡海して、此旨を申聞かせければ、朝鮮在陣の上下、悦ぶ事大方ならず。釜山浦への通路の爲め、對馬國豐崎城に毛利民部大輔、五千餘騎にて入れ置かれ、九州警固の爲め、名護屋御城し、寺澤志摩守正成、同勢共に八千餘にて入れ置き給

ふ。朝鮮在陣の兵悉く歸朝し、皆々打連れ、大坂・伏見へ上り集りければ、貴賤男女悅ぶ事斜ならず。皆伏見御城へ集り、諸大名夫々に屋敷を取り、殿閣を架へしかば、木幡・伏見の富貴繁昌目を驚さずといふ事なし。王城榮耀、時を得たりとぞ見えたりける。

將軍秀吉公吉野の花御遊覽

文祿三年甲午二月廿五日、將軍秀吉公、吉野の花、御覽あるべきにて、大坂より御立あり。供奉の人々には、菊亭右大臣時季・日野大納言輝資・中山大納言親綱・藤右衛門督永孝・飛鳥井中納言雅枝、武家には、當關白秀次公・大和中納言秀保・金吾中納言秀俊・尾張内府信雄入道常眞・江戸大納言家康・加賀宰相利家・備前中納言秀家・伊達侍從政宗、其外、紹巴・昌叱・由己法眼等御供なり。廿七日に紀州六田の橋を打渡り、市之坂に到つて上らせ給へば、大和中納言秀保、御茶屋を立て置き給ふ。將軍、立寄らせ給ひ、御膳召上られ、夫より千本の櫻・花園櫻・田ぬたの山隱家の松御見物な

され、御伽衆細川玄旨・山名禪高・山岡以下召連れられ、御步にて上らせ給ふ。金の鳥居・仁王門通りつゝ、藏王堂へ御參詣なされけり。秀保卿より、旅館並に御舞臺立置かれけるに依つて、立寄らせ給ひけり。されども御能はなし。是より櫻が嶽後醍醐天皇の皇居、御歴覽ありて、今熊野達天山・聖天山・辨財天山御通り過ぎ、源九郎義經の暫く籠り給ひし吉水城へ入給ひ、兩日御逗留、此間、路次中の御詠歌並に人々の詠歌等、御褒貶の沙汰あり。諸大名御馬廻へは、酒肴下され、自分の花見仕るべき由仰付けられ、三月三日には、將軍高野山へ御登山なされ、青巖寺に御寄宿ましまして、先考並に大政所尊靈の御燒香をなし、如何にも懇に沙汰し給へり。斯くて一山八千人の僧徒召寄せられ、御母堂の御志として、八木以下下し給ひにけり。夫より奥の院へ參詣し給ふに、莓苔、履に痕を埋め、松柏日脚を支ふべし。院々・谷々をかけ廻り給ふに、聞きしより猶ほ殊勝に、身に染みてぞ思召しける。八乘の峯は、胎藏の曼陀羅を表し、千佛の座雲に捲り、無漏法性の扉鮮むし、三會下生の曉かと疑はる。念佛三昧の砌、說法衆會の場、菩提にあらずといふ所なし。五障の女人躋

絶えて、三業の雲常に晴れたり。道の左右の塔婆、朽つるもあれば亦、新しく立添へ、諸行無常の有様、目前に現れ、老少不定の習、塵垢も消え、眞如實相の松風に、六識の煩惱も清むべし。奥の院に參詣ありて、大師御廟の扉を伏しをがみ給ふに、瑜伽上乘の嶺、赤闕中臺の相、彼といひ是といひ、信心を促さずといふ事なし。前佛の化縁既に過ぎぬれば、五時の説耳にあり。慈尊の出世遙なれども、三會の粧、眼に遮るが如し。夫より下向ありて、塔金堂を拜み給ふに、落花爲雪笠無重、深樹謬昏日未傾。金堂大塔の扉を開き給へば、五佛の寶冠、兩界の諸尊、さながら都率の内院かと疑はる。されば、六大無礙の月晴れ、四曼相卽の花開けり。供奉の公卿・殿上人・大名御馬廻りの人々迄も、歸依渇仰の心を傾けざるはなかりける。金堂大破に及びたれば、再興仕るべしとて、八木一萬石、木食上人方迄相渡さる。扨亦、御一門の藍塔を建立致すべき旨、石田治部少輔三成に仰付けられ、大工・番匠數百人召集め、其沙汰に及びけり。其時、治部少輔、潛に申上げけるは、木にて藍塔仰付けられ候事、早速出來仕るには、能く候はんずれども、程なく朽ち申すべく候間、後々末

代の爲め、石にて申付くべく候やと伺ひ申しければ、將軍聞召し、三成程の者が、是程の事を辨へず候や。不覺なる申し樣、近頃、愚にこそ覺ゆれ。汝能く案じて見候へ。秀吉が子孫相續いで、天下を治め四海を掌に握らば、此山の藍塔は、一門の遺跡たる間、朽壞に於ては、一年に幾度も作り直す事、いと安かりなん。若し不幸にして跡絶えば、譬ひ鐵にて延べ、石にて劉ね立てたりとも、一香を捧ぐる人もなく、十年を過ぎずして、知る人だになくなれば、寺の爲には屋敷をふさぎ、亦僻人の立つる藍塔の妨となり、取除くるとも、手間を費し山の苦勞となるべし。木にて立て置く時は、寺より取除け、捨つるも安く、亦吾が子孫、恙なく世を保つて、年々に再興せば、山の賑ひ諸職の爲めならずや。誠に保元の春の花と榮えたりし平家の一門も、二十年に及ばざるに、壽永の秋の紅葉と散る。遠く異朝の古を聞けば、萬里の長城を立て、函谷の固をなせし秦の始皇も、二世に至つて亡び果て、咸陽三月の煙となりぬ。誰か生を稟けたる類、盛者必衰の理に洩れんや。天に懸る日月も、長短盈虧の數をしめし、古今不易の天地も、四時盛衰の序あり。されば、十年を過

ぐる間には、華やかなりし傍も、人住まぬ野となり、かはらぬ樓は住む人改れり。さあれ、萬萬の事に、見ざらん世の末、子々孫々までの事を思ひ置くは、愚なる人の分別なり。只枉げて、秀吉が旨に隨つて、木を以て造り候へと宣ひければ、治部少輔も、道理至極の上意につめられ、感涙に咽び罷立ち、此旨を申付けしかば、傳聞く末々迄も、舌を懐ひ感ぜざるはなし。夫より將軍は、御下向ありて、大坂御城へ入らせひ、同十五日に、本丸にて新作の謠、柴田・北條・明智・高野詣・吉野詣五番を、金春八郎に仰付けられ、諸人に御見せなされつゝ、同月下旬に伏見へ御歸城なされけり。文祿三年も、事故なく暮れ、同じく四年になりしかば、伏見御城、彌、作り畢へ、早繁昌の有様、日頃に百倍せり。

美濃部四郎三郎・山城小才次朝鮮渡海

文祿四年乙未五月、將軍は、伏見御城にて、元日の朝禮御うけなされ、大名・小名出仕ありて、夫より聚樂城へ何れも參列し、當關白秀次公へ、年頭の禮申上げ、何方もさ

ざめき渡つて、千秋萬歳の聲のみなり。斯くて、將軍は大明の册使延引に付き、釜山浦近邊二十餘箇所の砦どもに、大勢の日本勢、徒然として年月を送るに依つて、將軍より長束大藏大輔正家・木下大膳大夫を遣され、諸大將を諫め下知を加へられ、亦重ねて両使を渡海せしめ、釜山近邊の城々、清正・行長等の諸大將へ、御書を遣はさる。其詞に曰く、

其許爲二見廻一美濃部四郎三郎・山城小才次被二差遣一候。永々在番辛勞不レ被二是非一候。殊普請以下丈夫に申付け、番等無二油斷一の趣、被二聞召屆一候。就レ其人數兵糧等、相改可二申越一候。猶以、兵糧當春纔數相揃、追々渡海の儀、被二仰出一候條、可レ成二其意一候。將亦小袖二被レ遣候。猶兩人可レ申也。

正月廿八日　秀吉御朱印

朝鮮表在城衆中

將軍、斯樣に仰遣されても、明暮、彼の表の事、心許なく思召されけるにより、家康・利家・景勝・隆景を召集め、御相談絶間なし。此時にも、當關白秀次公評議し給ひ、名

秀次の放縱

護屋へ下り給ひ、朝鮮の樣子を聞いて渡海し、日來養ひ置きし、勇士の譽ある者共を先立て、長陣の者に氣を付け、大明勢の朝鮮に殘る者共を盡く引取らせ、兩國會盟の上は、朝鮮の士民を安堵させ、國王・大臣に牒し合せ、商賈往還の煩なく、永く國家の隣盟を仕給はゞ、太閤の御意に合ふべきを、文武の道二つながら忘れ、晝は西郊の鷹狩、夜は北山の鹿狩、侍女數百人を愛し、酒宴遊興に溺れ、忠義の御心なかりけるは、諫むる臣下のなき故と、後にぞ思ひ知られける。秀次公も、伏見に屋敷を取り、太閤を御成り申さんと拵へ給ふ所に、日來の惡業身に積り、天罸にや依りけん。文祿四年七月三日、御謀叛の企ある由、將軍御耳に達し、宮部善禪坊・增田右衞門尉・石田治部少輔・富田左近大夫・前田德善院玄以・堀尾茂助・中村式部小輔一氏・山內對馬守一豐を御使として、仔細を尋ねらる。秀次公、是に驚き給ひて、樣々陳じ給ふと雖も、諸大名に誓紙を書かせ、太閤百歲の後は、萬事吾が下知に隨ふべしと、案文を出し、亦近習の侍大小に寄らず、是等にも誓文を書かせ、何事を申付くるとも、是非をいはず、秀次下知に隨ふべしと、仰付けられし事、仰分けられ相叶はず、

秀次高野山に登る

秀次自害

其上、人々誓紙の草案を差上ぐれば、陳じ給ふに叶はず、太閤薨去あらば、秀頼を蔑如にし給はんと、思詰めたる所存明白なればとて、既に事極まりぬ。木下大膳は、秀次公取次なれば、伏見へ御出ありて、吾が屋敷に入らせ給ひ、御氣色を伺ひ、直に仰披かるべきやと申す。秀次公、實にも然るべしとて、伏見へ御越ありて、御氣色を伺はれけれども、彌增に御憤深ければ、是非に及ばず、小性馬廻り二十騎計りにて、七月四日に、伏見を御出ありて、高野山へ上り給ふ。御供の人々は、武藤左京亮・生田右京亮・雀部淡路守・津田雅樂頭・山岡主計頭・前田主計助・不破萬作・雜賀虎之助・山田三十郎・山本主殿助・志永善三郎竝に東福寺の僧南昌院玄隆・西堂虎岩のみとぞ聞えし。同十五日に、福島左衛門大夫正則・福原右馬助・池田伊豫守三人を檢使として、高野山青巖寺にて、秀次公切腹し給ひけり。竝に寵愛の上臈・女房達二十餘人は、八月二日に三條河原にて、二十間四方に堀を掘り、鹿垣を結廻し、橋の下南二三間に塚を築き、秀次公御首を西向にすゑ置き、寵愛二十餘人の女郎達に拜ませ、其場にて悉く誅戮し給ひけり。謀叛與黨の旨にて、木村常陸介は、攝州五箇庄大門寺にて切

腹す。白井備後守は、四條の貞安にて自害す。熊谷大膳亮は、嵯峨二尊院にて切腹す。阿波木工之助は、粟田口吉水鳥の小路にて自害す。日比野下野守・山口少雲は、北野にて切腹してけり。一柳右近將監は、江戸大納言家康へ預け給ひ、服部采女正は、上杉中納言景勝へ御預け、渡瀨左衛門佐をば、佐竹義宣に御預け、明石左近將監をば、小早川隆景へ預けられ、前野但馬守長康をば、中村式部少輔一氏に御預け、其以後、切腹仰付けられけり。延壽院玄朔・紹巴法眼・荒木安志・木下大膳は、遠流に處せられける。秀頼生れ給ひしより、天下を讓らんと思召す御心ありて、秀次隱居し、聚樂を渡し給はゞ、隱居分にも美濃・尾張・伊勢・參州・遠江五箇所、進ぜらるべき由、巷說あれども、耳に入らざるか。木村常陸介・阿波木工之助・熊谷大膳などいふ無分別なる溢者共、謀叛を勸め申すに依つて、辭退する事を忘れ給ふか。五箇所を領し、秀頼の後見として、天下を守り給はゞ、誰か其下知を背くべき。忠孝二つながら全うして、功名末代に耀くべきを、心の儘に奢を極め、幾程なく白刄に貫かれ、失せ給ひけるこそ悲しけれ。爲不善于顯明之中者、人得誅之。爲不善于幽晴之中者、思

得レ討レ之といふ事、實にもと思ひ知られけり。

朝鮮征伐記第九終

大正五年十二月廿五日印刷
大正五年十二月廿八日發行

國史叢書
朝鮮征伐記 一

定價金一圓

編者 黒川眞道

發行者 小瀧淳
東京市本郷區駒込林町一八三番地

印刷者 楢山定吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所 友文社
東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所 國史研究會
東京市本郷區駒込林町百八十三番地
振替貯金口座東京二七〇二四番